宮本武蔵（四）

吉川英治文庫

昭和50年7月1日　第1刷発行
昭和59年1月20日　第22刷発行

吉川英治文庫51
宮本武蔵㈣
定価480円

著　者　吉　川　英　治
編　集　株式会社 六興出版内
吉川英治文庫刊行会
発行者　加　藤　勝　久
発行所　株式会社 講 談 社
東京都文京区音羽2—12—21
振替東京8—3930
電話東京03(945)1111(大代表)
印刷所
製本所　凸版印刷株式会社

Printed in Japan

(文2)

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替えします。

ISBN4-06-142051-8(1)

治文庫

51

宮本武蔵（四）

目次

さしえ　矢野橋村

宮本武蔵（四）

風の巻（つづき）

悲母悲心

一

滝の音がする——水かさが増すわけでもないが夜は大きく耳へひびく。

「地主権現というのは確かこれじゃろが。……地主桜と、この樹の立札にも書いてある」

清水寺のわきの山道をかなり登って来たのである。しかし婆は、息が喘れたともいわない。

「——伜、伜」

そこの堂の前に立つと、すぐ闇へこう呼ぶ。

顔つきにも、声にも、真実の愛情がふるえていた。後ろに立っているお通には、べつな老婆のように思えた。

「お通、提燈を消すなよ」

「はい……」

「いない、いない」

婆は、口のうちで呟きながら、そこらを繞り歩いて、

「手紙には、地主権現まで来てくれとあったが」

「今夜と書いてございましたか」

「きょうとも明日ともしてないのじゃ、幾歳になってもあの子ときては子供じゃでのう。……それより自分で旅宿へ来ればよいに、住吉のこともあるので、間がわるいのじゃろ」

お通は袂を引っぱって、

「お婆様、又八さんではありませんか。――誰か下から登って来るようです」

「エ、いたか」

崖の道をさし覗いて、

「伜――」

やがて登って来た者は、そういうお杉婆には目もくれないで、地主権現の裏へ廻り、またそこへ戻って来ると、立ちどまって、提燈の明りの上に浮いているお通の白い顔を、不遠慮な眼でじっと見る。

――お通は、はっと思ったが、先は何も感じない顔つきである。この元旦、五条大橋のそばでお互いに見かけているはずであるが、佐々木小次郎のほうには、覚えがなかったであろう。

「女子、そこのおばば。お前たちは今ここへ登って来たのか」

「…………」

訊ね方が唐突なので、お通もお杉婆も、ただ小次郎の派手派手しいすがたへ眼をみはってい

た。
するとお小次郎は、いきなりお通の顔を指さして、
「ちょうど、これくらいな年ごろの女だ。名は朱実といって、もちっと丸顔、がらはこの女子より小つぶだが、茶屋そだちの都会娘、どこかもそっと大人びている風がある。見かけないか、……この辺りで」
「…………」
黙って、二人が顔を振ると、
「おかしいな？　三年坂の辺りで、見た者があると訊いたのだが、さすれば、この辺りの御堂で夜を明かすつもりにちがいないし……」
初めは相手を置いていた言葉であったが、途中から独り言のようになって、それ以上は問いようもなく、なにかまだ、ふたことみこと呟きながら、小次郎はどこともなく立ち去ってしまった。
婆は、舌打ちして、
「なんじゃあの若者は、刀を負うているところを見れば、あれでも侍じゃろが、これ見よがしの伊達姿して、夜まで女のしりを追うていくさる。……ええ、こちらはそれどころじゃない」
お通は、お通でまた、
（そうだ、さっき旅籠へ迷って来たあの女――あの女に違いない）
武蔵と――朱実と――小次郎と――そう三人の関係を、いくら考えても解せない想像の中にのぼせて、ぼんやり見送っていた。

たのに、又八は来ないし、滝の音の寒さは毛穴をよだたせる。
婆は、がっかりしたように、諦めの言葉を投げて歩き出した。たしかに地主権現と書いてあっ
「……もどろう」

二

すこし道を降りてゆくと、本願堂の門前で、また、さっきの小次郎に二人は出会った。
「…………」
顔を見あわせただけで、どっちも黙って通りすぎた。お杉が振向いて見ていると、小次郎の影
は子安堂から三年坂のほうへ、まっ直に降りてゆく様子――
「険しい眼づかいをするよのう。……武蔵のようじゃ」
つぶやいているうちに、婆の視線がなにへ触れたのか、ぎくと、背のまるい体に衝動を見せ
て、
「……ほう！」
梟の啼くような声を出した。
巨きな杉の樹の蔭だ。――たれかその蔭に立って、手まねきしている。
婆の目にだけは、闇でもわかる人影だった。又八にちがいない。
（――来てくれ、こっち）
手で物をいっているのはその意味らしい。なにか、憚ることがあるとみえる。おお、いじらし
い奴――というように婆のひとみはすぐ子の心持を読んだ。

「お通よ」
うしろを見ると、お通は十間ほど先に立って、婆を待っていた。
「——そなた、ひと足先へ行かっしゃれ。そうかというて、あまり遠くへ去んでもならぬぞよ、あの塵間塚のそばに立っていやい。すぐ後から行くほどに」
お通が、素直にうなずいて先へ行きかけると、
「これこれ、他へ去んだり、そのままどこぞへ走ろうとしても、婆の目がここから光っていることを知って置きゃい。よいか」
そして、すぐその体は、杉の樹蔭へ走り寄っていた。
「又八ではないか」
「おばばっ」
暗がりから、待ちかねていたような手が出て、婆の手を固くつかんだ。
「なんじゃわれは、そんところへ竦みこんで。……オ、まあ、この子は、氷のようなつめたい手をして」
もうすぐ、そんな些細ないたわり心が、婆の目を意気地なくうるませてしまう。
そう叱られても、又八は悩々した眼で、
「……でもなおばば、今も、たった今もここを通ったろうが」
「誰がじゃ？」
「太刀を背中に負った、眼のするどい若衆だ」
「知っていやるのか」

「知らいでか、あいつが佐々木小次郎といって、つい先頃、六条の松原で、小っぴどい目にあわされた」

「——なに、佐々木小次郎？　……佐々木小次郎というのは、わがみのことではないのか」

「ど、どうして」

「いつであったか、大坂表でわがみが、わしに見せてくれた中条流の許し書の巻物に、そう書いてあったじゃろうが。その時、わがみは佐々木小次郎というのは自分の別名じゃというたではないか」

「嘘だ、あれは嘘なんだ。——その悪戯がバレてしまい、本物の佐々木小次郎奴にひどい懲らしめに遭わされたのだぞ。——実は、おばばのところへ手紙をたのんでから、約束の場所へ出向こうとすると、またもここで彼奴のすがたを見かけたので、眼にとまっては大変と、あっちこっちに隠れ廻って、様子をながめていたというわけ。——もう大丈夫かしら、またやって来ると面倒だが」

「…………」

呆れてものがいえないように、お杉は黙ってしまったが、ひと頃よりはまた窶れて、正直に自分の無力と小胆を顔にあらわしている挙動を見ると、婆は、よけいにこの子が愛しくなってならないような様子だった。

三

「そんなことはどうなとよい」

婆はもう、わが子の弱音を、それ以上聞きたくもないという顔して、首を振った。
「それよりは又八、おぬしは、権叔父の死んだことを知っていやるか」
「えっ、叔父御が？　……ほんとですか」
「たれがそのような嘘をいおうぞ。住吉の浜で、おぬしと別れるとすぐあの浜で亡くなったのじゃ」
「知らなかった……」
「叔父御の敢ない死も、この婆がこの年して、こうした憂い旅にさまようているのも、いったいなんのためか、おぬしは分っていやろうがの」
「いつか、大坂で会った折、凍てた大地にひきすえられ、おばばに存分叱られたことは、胆に銘じて忘れてはいない」
「そうか……あの言葉を覚えているか。では、おぬしに欣んでもらうことがあるぞよ」
「なんだ、おばば」
「お通のことよ」
「……あっ！　じゃあ、おばばの側に添って、今彼方へ行った女子は」
「これっ——」
たしなめるように、又八の前へ立ちふさがって、
「汝が身は、どこへおじゃるつもりじゃ」
「お通ならば……おばば……会わしてくれ、会わしてくれ」
うなずいて——

「会わしてやろうと思えばこそ連れて来たのじゃ。——したが又八、おぬし、お通に会ってどういう気か」
「悪かった——済まなかった——ゆるしてくれといって、おれは謝るつもりだ」
「……そして」
「……そしてなあ、おばば……おばばからも、おれの一時の心得ちがいを宥めてくれ」
「……そして」
「元のように」
「なんじゃあ？　……」
「——元のように仲をもどして、お通と夫婦になりたいんだ。おばば、お通はおれを今でも思っていてくれてるだろうか」
皆までいわせず、
「——ばッ、ばかっ」
お杉は、又八の横顔を、ぴしゃりと打った。
「アッ……な、なにするんだ、おばば」
蹌めきながら又八は顔をかかえた。そして乳を離れてから今日まで見たことのない怖ろしい母の顔を彼は見た。
「たった今、おぬしはなんというたぞ。わしがいつかいうて聞かせた言葉は、胆に銘じているというたであろう」
「…………」

「いつ、このおばばが、お通のような不埒な女子へ、汝が身が手をついて謝れと教えたか。——本位田家の名に泥を塗って、あまつさえ、七生までの仇ぞと思うている武蔵と逃げた女子じゃぞよ」

「…………」

「許嫁であった汝が身を捨てて、汝が身とは、家名の仇の武蔵へ身をも心をもまかせている犬畜生のようなあのお通に、汝れは、手をついて謝る所存か。……謝る所存かよ！　これっ——」

又八の襟がみを諸手につかんで、婆は振りうごかすのであった。

又八は、首をがくがく動かしながら、眼を閉じて、母の叱言を甘受していた。閉じている眼からは涙がとまらなかった。

婆は、いよいよ歯がゆそうに、

「なにを泣くのじゃ。泣くほど犬畜生に未練があるのかっ。——ええ、もうおぬしという子はいのう！」

力まかせに、わが子を大地へ突き仆した。そして自分も諸仆れに腰をついて、一緒になって泣き出した。

四

「これ」

厳しい母に返って、お杉は大地に坐り直した。

「今が、汝が身にとっても、性根のすえ時。——この婆とても、もう十年二十年先までは寿命も

知れぬ。こういう声も、わしが死んでしもうた後は、二度と聞きたいと思うても聞けはせぬぞ」
——分りきったことを——というように、又八は横を向いたままなのである。
お杉は、わが子の機嫌を損じてもならないと、心の隅ではまた、気がねするように、
「のう、これ。お通ばかりが女子ではなし、あのような者に未練をのこしゃるな。もしこの先、おぬしが、ほしいと望む女子があれば、この婆がその女子の家へお百度踏んで通うても——いや わしが生命を結納に進上してでも、きっと貰うてやりまするがの」
「…………」
「——だがの、お通だけは、金輪際、本位田家の面目として、持たすことは相成らぬ。おぬしが、なんといおうが、まかりならぬ」
「…………」
「もし、飽くまでおぬしがお通と添う気なら、この婆が首打ってそれからどうなとしやるがよい。わしの生きているうちは——」
「おばば！」
突っかかって来たわが子の権まくにお杉はまた、膝に角を立てて、
「なんじゃ、そのいいざまは」
「じゃあ訊くが……いったいおれの女房にする女は、おばばが持つのか、おれが持つのか」
「知れたことをいやる、わが身のもつ妻でのうてなんとする」
「……な、ならば、お、おれが選ぶのが、あたりまえじゃないか。それを」
「まだそのように聞きわけのないことばかり……。汝が身はいったい幾歳になるのか」

「だって……い、いくら親だってあんまりだっ、勝手すぎる」
この息子とこの母親とは、どっちも余り隔てを知らないために、ややともすると感情と感情ばかりが先に立って、感情を出した後から言語が出るという始末だった。そのためにかえって、お互いが理解をはぐらかし、すぐ角突きあいになるくせがあった。それはたまたまの場合だけではなく、家庭にあったむかしから、そういう家風であったが、まだ習性となっているのだった。
「勝手とはなんじゃ、汝が身は抑々、たれの子か、たれの腹から、この世には生れて来たか」
「そんなことといったってむりだ。おばば……おれはどうしても、お通と添いたい。――お通が好きなんだっ」
さすがに、青ざめている母の顔へ向ってはいえずに、又八は、空へ向いてうめいた。
お杉の尖っている肩のほねが鳴るようにふるえ出した、――と思うと、やにわに、
「又八、本性か」
と、いって、いきなり自分の脇差を抜いて喉へ突きたてようとした。
「あッ、おばばなにするっ――」
「ええもう、止めだてしやるな。それよりはなぜ、介錯するといわぬか」
「ば、ばかなことを。……おばばが死ぬのを、おれが……子が見ていられるか」
「では、お通をあきらめて、性根を持ち直してたもるか」
「じゃあ、おばばは一体、なんのために、お通をこんなところへ連れて来たのだ。おれにお通のすがたを見せびらかすのだ。――おれには、おばばのその肚がわからぬ」
「わしの手で殺すは易いことじゃが、元々、汝が身を裏切った不貞な女、汝が身の手で成敗させ

てやりたいと思う親ごころのそれも一つ、有難いとはなぜ思わぬか」

五

「それじゃあ、おばばは、おれの手でお通を斬れというのか」
「……嫌か！」
鬼のことばのようである。
又八は、自分の母の中に、こんな声を出す性質があったろうかと疑った。
「嫌なら嫌といいえ。猶予はならぬことじゃ」
「だ……だって、おばば」
「まだ未練をいいおるか。エエ、もうおのれのような奴、子でない、母でない！……。女の首は斬れまいが、母の首なら斬れるであろう。介錯しやい」
元より脅しに違いないが、脇差を取り直して、婆は自害のていを見せた。
子の我儘もずいぶん親をてこずらすが、親の駄々も随分子どもをてこずらす場合がある。お杉のもその一例に過ぎないが、この年寄は下手をすると、ほんとにやりかねまじき血相なのだ。息子の眼から見ても、ただの仕ぐさとは見えないのである。
又八はふるえ上がって、
「おばば！　……そ、そんな短気なことをしなくっても。……いいよ、わかった、おれは諦める」
「それだけか」

「成敗してみせる。おれの手で……おれの手でお通を」
「殺るかよ?」
「ム。殺ってみせる」
婆は、うれし泣きに泣いて、脇差を捨てた手で、子の手を押しいただいた。
「よういやった、それでこそ本位田家の世継ぎ息子、あっぱれ者と御先祖さまも仰っしゃろう」
「……そうかなあ?」
「討って来い。お通は、すぐこの下の塵間塚の前に待たせてある」
「ウム……今行くよ」
「お通を首にして、添状付けて、先に七宝寺へ送りとどけてやろうぞ。村の者のうわさだけでも、わしらの面目が半分は立つ。——さて次には武蔵めじゃが、これも、お通を討たれたと聞けば、意地でもわしら母子の前へ出て来るじゃろう。……又八、はよう行って来い」
「おばばは、ここで待っているか」
「いや、わしも尾いて行くが、わしが姿を見せると、それでは話がちがうのなんのと、お通めがわめいてうるさかろう。わしは少し離れた物蔭から見ております」
「……女ひとりだ」
よろりと又八は立って——
「おばば、きっとお通は首にして来るから、ここで待っていたらいいじゃないか。……女ひとりだ、大丈夫、逃がしゃあしない」
「でも、油断をしやるなよ、あれでも刃物を見れば、相当に手抗いはするぞ」

「いいよ……なにくそ」
自分をこう叱咤しながら、又八は歩きだした。不安そうにお杉婆もその後に尾いて、
「よいか、油断するなよ」
「なんだおばば、尾いて来るのか。待っていろ」
「よいわ、塵間塚は、まだその下――」
「いいといったら!」
又八は、癇を破って、
「二人でゆくくらいなら、おばば一人で行って来い。おれはここで待っている」
「なにを渋っていやるのじゃ、おぬしはまだ本心からお通を斬る気になっておらぬの」
「……あれだって人間だ、猫の子を斬るような気持じゃ斬れない」
「無理もない……たといどのように不貞の女でも、元はおぬしの許嫁であったげな。……よいわ、ばばはここにいましょう、おぬし一人で行って見事にして来やれ」
又八は返辞もせず、腕組みをしたまま、ゆるい崖の道を降りて行った。

六

さっきからお通は、塵間塚のまえに佇んでお杉婆の来るのを待っていた。
(いっそ、こんな時に)
と逃げる隙を考えないでもなかったが、それでは二十日あまり怺えてきた忍苦がなんの意味もなさなくなってしまう。

（もう少しの辛抱）
お通は、武蔵を想い、城太郎のことを考え――そしてぼんやり星を見ていた。
武蔵を胸に描いていると、彼女の胸には無数の星が輝いた。
（今に。今に……）
夢みるように、将来の希望をかぞえてみる。また国境の山でいった彼のことばを――花田橋のたもとでいった彼の誓いを――胸のうちで繰返してみるのだった。
たとい年月が経っても、それを裏切る武蔵ではないことを、彼女はかたく信じていた。
――ただ朱実という女性を思いうかべると、ふと厭な気持がして、希望に暗いかげを映してくるが、それとても、武蔵に対する強固な信頼にくらべれば物の数でもない、不安というほどな憂いでもない。
（花田橋で別れたきり、会えもしない、話せもしない……。それでも自分はなにかしら楽しい。沢庵さんは可哀そうなというけれど、こんな幸福でいるわたしが、どうして沢庵さんの眼には、不幸に見えるのかしら……）
針のむしろに坐って針の目を運んでいる間も――待ちたくない人を待って暗い淋しい中に佇んでいる間も――彼女はひとりで楽しむことに楽しんでいるのだった。そして他人には空虚に見える時が、いちばん彼女の生命の充実している時だった。
「……お通」
婆の声ではない。――誰かこう暗がりから呼ぶ者があった。お通はわれに返ったように、
「……え。どなたです」

「おれだよ」
「おれとは」
「本位田又八だ」
「えっ？」
跳び退いて――
「又八さんですって」
「もう声まで忘れたかい」
「ほんに……ほんに又八さんの声ですね。婆様に会いましたか」
「お婆は、彼方に待たせておいた。……お通、おまえは変らないなあ。七宝寺にいた時分と――ちっとも変っていない」
「又八さん、あなたはどこにいるんですか。暗くてあなたの姿はわかりません」
「そばへ行ってもいいかい。……おれは面目ない気がして、先刻からここへ来ていたが、しばらく後ろの闇にかくれて、おまえの姿を見ていたんだ。……おまえはそこで今、なにを考えていたのか」
「べつに……なにも」
「おれのことを考えていてくれたのじゃないのか。おれは一日だって、おまえのことを思い出さない日はなかったぜ」
そろそろ歩み寄って来る又八の姿がお通の眼に映った。お通は婆がいてくれないので、不安に襲われた。

「又八さん、お婆様から、なにか話を聞きましたか」
「ア、今この上で」
「じゃあ、私のことを」
「うむ」
お通は、ほっとした。
かねて婆も約束してくれた通りに、自分の意思は、婆の口から又八へ通じてくれたものと思った。そして又八はその承諾を与えてくれるために、ここへ一人で来たのであろうと解釈していた。
「婆様からお聞きならば、私の気持はもう分ってくれたはずですが、私からもお願いいたします、又八さん、どうぞ以前のことは、縁のなかったものと思って、今夜かぎり忘れてくださいましね」

七

老母とお通との間に、どんな約束が交わされていたのだろうか。元よりお婆のいい加減な子ども騙しには違いない。そう考えられるので又八は、お通が今いったことばにも、
「いや、まあ、お待ち」
顔を先に振って、そのことばの底にある彼女の意思を問おうとしなかった。
「――以前のことなんかいわれると、おれは辛い。まったくおれが悪いのだ。今更、おまえにあわせる顔もない次第で――おまえのいう通り、これが忘れられるものならば、忘れてしまいたいと山々思う。だが思うだけで、なんの因果か、おれはおまえを諦めきれない」

お通は、当惑して、

「又八さん、二人の心と心のあいだには、もう通うもののない深い谷間ができました」

「その谷間に、五年の年月が流れて行ったのだ」

「そうです、年月が返らぬように、私たちのむかしの心も、もう呼びもどすことは出来ません」

「で、できないことはないよ！　お通、お通っ」

「いいえ。――できません」

お通のそういう冷やかな語尾と顔いろに驚いて、今更のように眸をすえてしまう又八であった。

情熱が表にあらわれる時は、真紅の花と太陽の狂いあう夏の日を思わせるような性質のあるお通の一面に――こんな冷やかな――まるで白い蠟石を撫でるような感じのする――そして指を触れれば切れそうな厳しい性格が、どこに潜んでいただろうか。

そういう冷たい面の彼女を見ていると、又八の頭にはふと、七宝寺の縁側が思い出された。

――あの山寺の縁側で、なにか考えごとをしながら、うるみのある眼で、半日でも一日でも、空を見て黙っている時の孤児のすがたを。

母も雲――父も雲――兄弟も友達も雲よりしかないと思っているような――孤児の生い立ちの中に、いつのまにか、育くまれていた、この冷たさに違いない。――又八はそう思った。

そう考えたので、彼は彼女のそばへそっと寄って、棘のある白薔薇へ触るように、

「……やり直そう」

頰へささやいた。

「……ね、お通。——返らない年月を呼んでみたって始まらないじゃないか。これから二人して、やり直そう」

「又八さん、あなたはどこまで考え違いをしているのですか。私のいっているのは、年月のことではありません、心のことです」

「だからさ、その心を、おれはこれから持ち直すよ。自分でいいわけしても変だけれど、おれがやった過ちぐらいは、若いうちは誰にだってあり勝ちな話じゃないか」

「どう仰っしゃっても、私の心はもうあなたの言葉を本気で聞こうといたしません」

「……わるかったよ！　こんなに男が謝っているのじゃないか……え、お通」

「およしなさい、又八さん、貴方もこれから男のなかへ生きてゆく男でしょう。こんなことに……」

「でも、おれには、生涯の重大事だ。手をつけというなら手をつく。おまえが、誓いを立てろというなら、どんな誓いでもきっと立てる」

「知りません！」

「そう……怒らないでさあ……ね、お通、ここじゃあ、しんみり話ができないから、どこか、ほかへ行こう」

「嫌です」

「おばばが来るとまずい。……早く行こう。おれには、とてもおまえを殺せない。どうして、おまえを殺せるものか」

手を取ると、その手は、又八の指をつよく振り切って、

「嫌ですッ。殺されても、あなたと一つの道を歩くのは嫌ですっ」

八

「嫌だと？」
「ええ」
「どうしても」
「ええ」
「お通、それではおまえは、今まで武蔵を思っていたのだな」
「お慕いしています――二世まで誓うお人はあのお方と心に決めて」
「ウウム……」
又八は身をふるわして、
「いったな、お通」
「そのことは、婆様の耳へも入れてあります。そして、婆様からあなたに告げ、この際、はっきりと話をつけた方がよいと仰っしゃるので、こういう折を今日まで待っていたのです」
「わかった……おれに会ってそういえと――それも武蔵の指図だろう。いいやそうに違いねえ」
「いいえ、いいえ。自分の生涯を決めること、武蔵様のお指図はうけません」
「おれも意地だ。――お通、男には意地があるぞ。てめえがそういう量見ならば……」
「なにするんですッ」
「おれも男だっ。おれの生涯を賭けても、武蔵と添わせてたまるものか。――許さぬっ！　たれ

が許す！」
「許すの、許さぬのと、それは誰に向ってなんのことを仰っしゃるのですか」
「てめえにだ！　また武蔵にだ！　お通、貴様は武蔵と許嫁ではなかったはずだぞ」
「そうです……、けれども、あなたがそう仰っしゃる筋はございますまい」
「いや、ある！　お通というものは、元々本位田又八の許嫁だ。又八がうんといわねえうちは、誰の妻になることも出来ないはずだ。ましてや……武……武蔵ずれに！」
「卑怯です、未練です、今さらそんなことがよういえたもの。私はあなたとお甲という人との二人名前で、ずっと前に、縁切状をいただいてありました」
「知らないっ、そんな物をおれは出した覚えがない。お甲が勝手に出したのだろう」
「いいえ、その状には貴方が立派にない縁とあきらめて、他家へ嫁いてくれと書いてありました」
「み、見せろ、それを」
「沢庵さんが見て、笑いながら鼻をかんで捨ててしまいました」
「証拠のないことをいっても世間へは通るまい。おれとお通とが許嫁だということは、故郷へ行けば知らない者はない。こっちには幾らでも証人が立てられるが、そっちには証拠のない話だ。……なあお通、世間を狭くしてまで、無理に武蔵と添ってみたって、倖せに暮せるはずはないぜ。おまえは、お甲のことをまだ疑っているかも知れねえが、あんな女とは、もうきれいに手を切っているのだ」
「伺ってもむだなこと、そんな話、お通の存じたことではありません」

「……じゃあこれ程に、おれが頭を下げても」

「又八さん、あなたは今、おれも男だと仰っしゃったではありませんか。恥を知らない男などへ、どうして女の心がうごきましょう。女の求めている男は、女々しくない男です」

「なんだと」

「お離しなさい、袂が切れますから」

「ち、ちくしょうっ」

「どうするんですっ——なにをなさるのです」

「もう……これまでいっても分らねえなら、破れかぶれだ」

「えっ……」

「生命が惜しいと思ったら、武蔵のことなど思いませんと、ここで誓え、さあ誓え」

袂を離したのは、刀を抜くためであった。刃を手に抜くと、刃が人間を持ったように、又八の人相はまるで変ってしまった。

九

刃物を持った人間はそう怖いものではないが——しかし、刃物に持たれている人間は怖い。

お通がとたんに、

ひいっ——と声をあげたのも、刃物の先よりも、又八の顔にあらわれたその恐さだった

「よくも。——この阿女」

又八の刀は、お通の帯の結び目をかすめていた。

（逃がしては）
と、焦心って来て、又八は、
「おばば、おばばっ」
と、お通を追いかけながら、一方へは呼び立てる。
声が届いたとみえる、お杉婆は彼方で、
「おう」
といった。
跫音を目あてに走って来ながら婆は、
「仕損じたか」
自分も小脇差を抜いて、うろうろ慌てまわる。
又八が彼方から、
「そっちだ、おばば、捕まえろっ」
呶鳴りながら駈けて来るのを見て、婆は眼を皿のようにし、
「ど、どこへ」
と、道を塞いでいた。
しかし、お通の影は見えないで、又八のからだが打つかるように眼の前へ来た。
「斬ったかよ」
「逃がした」
「阿呆っ」

「──下だ。あれがそうだ」
崖へ臨んで駈け降りていたお通は、崖の下の樹の枝に袂をとられて踠いていた。
滝つぼに近いところとみえ、水音が闇を走ってゆく。足もとなどは見ようともしないのだ。お通は綻びた袂をかかえ、転ぶようにまた駈け出した。
母子の跫音はすぐ迫って来た。婆の声で、
「しめたぞよ」
というのが耳の後ろから聞える。お通はもう逃げても無駄な気がしてしまった。それに、前も横も壁で囲まれているように暗いそこは崖の低地でもある。
「又八っ、はよう斬れ。──それ、お通めが倒れくさったぞ」
婆に叱咤されて、今は完全に刃物に躍らされている人間の又八は、豹のように前へ跳んで、
「──畜生っ」
と、萱の枯れ穂や灌木の間へ転びこんだお通を目がけて、刀を振りおろした。
木の枝の折れる響きがしたと思うと、その下から──きゃっと、生きたものの絶命と血しおが刎ねあがった。
「この阿女、この阿女」
三太刀、四太刀、まるで血に酔ったように眼をつりあげた又八は、灌木の枝や萱の穂もろとも、刀も折れよとばかり、幾度もそこを撲りつづけた。
「…………」
撲りくたびれると、又八は血刀をさげたまま、茫然と、血の酔いから醒めかけた。

——掌を見ると掌にも血。——顔を撫でると顔にも血。温い、粘りのある液体が、燐のように体じゅうへ刎ねているのである。

その一滴一滴が、お通の生命の分解されたものかと思うと、彼はふらふらと眩いを感じ、見る間に、顔が青ざめてきた。

「……ふ、ふ、ふ。……伜よ、とうとう斬りおったのう」

お杉婆は、茫然としている息子の後ろから、そっと顔を突き出して、滅茶滅茶に薙ぎ伏せられている灌木と草むらの底をじっと見入った。

「よい気味！　……もうびくともせぬわ。——出来したぞよ伜。やれやれこれで胸のつかえが半分はさがったというもの。故郷の衆へ幾分か面目が立つわいのう。……又八、これ、どうしたぞよ。はよう首を斬れ、お通の首を揚げい」

十

婆は、息子の小胆をわらいながら、

「ホ、ホ、ホ」

「——意気地ないやつ。人間ひとり斬った位で、肩で息をつくようなことでどうするぞ。汝が身に首が掻けぬなら、婆が首を揚げてくれる。——そこを退きゃい」

前へ出ようとすると、白失したように棒立ちになっていた又八の手が、握っている刀の柄頭で、いきなり老母の肩をどんと突いた。

「——わっ、な、なにしやる」

あぶなく、婆も底のわからない灌木の中へ腰をつこうとしたが、辛くも足元を支え止めた。
「又八、汝が身は、気でもちごうたのか。老母に向って――なんたることをしやる」
「おふくろ！」
「……なんじゃア？」
「…………」
異様な声を、鼻と喉の境に呑みころしながら、又八は、血のついている手の甲で眼をこすった。
「……おら……おらあ……お通を斬った！　お通を斬った」
「賞めてやっているではないかよ。――それをなんで汝が身は哭くか」
「哭かずにいられるかっ。……馬鹿、馬鹿っ、馬鹿婆アめ！」
「かなしいのか」
「あたりまえだ！　おばばのようなくたばり損いが生きていなければ、おれは、どんなことをしても、もいちど、お通の気持を取りもどして見せたんだ。くそっ、家名がなんだ、故郷の奴らへの面目がなんだ。……だが、もう駄目だ……」
「知れた愚痴をいやる。それほど未練があるのなら、なぜ婆の首を打って、お通を助けなかったのじゃ」
「それが出来る位なら、おれは哭いたり愚痴をいったりしやしねえ。世の中に、分らずやの老よりを持ったくらい、不倖せなことはねえ」
「よしたがよい、なんのざまじゃ、それは……。折角、出来しおったと賞めているのに」

「勝手にしろ。……おれはもう一生涯、やりたい放題のことをやって、出たら目に送ってやるぞ」
「それが汝が身の悪い気質じゃ。たんと駄々をいうて、この年老った母を困らせるがよいわ」
「困らしてやるとも、くそったれ婆め、鬼婆め！」
「オオ、オオ。なんとでもいうがよいわい。さあさあ、そこを退きなされ。今、お通の首を掻き切って、それからとっくりと話して進ぜる」
「た、たれが、薄情婆の談義などを聞くかっ」
「そうでない、胴を離れたお通の首を見てからじっと考えてみるがよいわさ。美貌がなんじゃあ……美しい女子も死ねば白骨……色即是空を目に見せて進ぜよう」
「うるせえッ、うるせえッ」
又八は、狂わしげに、強くかぶりを振って、
「……アーア。考えてみると、おれの望みはやっぱりお通だった。時々、これじゃいけないと思って、なにか立身の途を捜そう、なにか一つ励みを出そうと、真面目な奮発が起るのも、その時には、お通と添うことを考えているからだった。——家名でもねえし、こんなくそ婆アのためでもねえ。——お通が望みにあったればこそ」
「よしないことをいつまで嘆いておじゃるぞ。その口で念仏でもいうてやったがまだましじゃぞ。……なむあみだぶつ」
いつの間にか、婆は又八の前へ出て、血を撒き散らしたような灌木や枯草を掻き分けていた。
……その底に、黒い仏体が俯つ伏している。

婆は、草や枝を折り敷いて、いんぎんにその前へ坐った。

「……お通、わしを恨むな、仏となれば、わしもそなたに恨みはない、すべては約束ごと。頓証菩提」

手で探り寄りながら――探り当てた黒髪らしいものをぎゅっと摑んだ。

「――お通さん！」

その時、音羽の滝のうえの辺りで、こう誰か呼んだ声が、樹の声か、星の声かのように、暗い風の中をまわって、この低地へも聞えて来た。

鍬

一

どう巡りあわせて、こんな所へ、宗彭沢庵が今頃やって来たわけか。

元より、偶然であろうはずはないが、いかにも唐突に似て、いつも自然である彼の姿が、今夜ばかりは不自然に思える。まずその事情がらを先に糺してみたいが、今はその由来因縁を彼に問うている遑もなさそうなのである。

――なにしろ、あの何時も、のほほんの沢庵坊にしては、めずらしいほど慌てていて、

「おオい、どうじゃい、宿屋さん、見つかったかい？」

彼とは、べつな方角を捜しまわって来た旅籠の手代が、彼の方へ駈けて来て、
「見当りませんよ、どこにも――」
と、あぐねたようにいって額の汗を拭く。
「変だね」
「おかしゅうございますな」
「おまえの聞き違いじゃないのか」
「いいえ、確かに、夕方清水堂のお使いが見えてから、急に、地主権現まで行ってくると仰っしゃって、手前どもの提燈をお持ちになったのですから――」
「その地主権現というのが、おかしいじゃないか。この夜中に、なにしに行ったのだい」
「どなたか其処で待ち合っていらっしゃるようなお話でしたが」
「ならばまだいそうなものだが……」
「誰もいませんな」
「さあて？」
沢庵が、腕を拱むと旅籠の手代も共に頭をかかえて、独り言に、
「子安堂のそばの燈明番に聞いたら、あの御隠居と若い女子が、提燈を持って、登って行くすがたは見たといいましたね。……それから三年坂のほうへ降りたという者も誰もいないし」
「だから、心配になるんだよ。ひょっとすると、もっと山の奥か、もっと道のないような場所かも知れぬ」
「なぜでございます」

「どうやら、お通さんは、おばばのうまい口に乗せられて、愈〻、あの世の門口まで、攫われて行ったらしい……アア、こうしている間も心配になる」
「あの御隠居は、そんな恐ろしいお方ですか」
「なあに、いい人間だよ」
「でも、あなたのお話を伺うと……思い当ることがございますんで」
「どんなこと」
「きょうも、お通さんと仰っしゃる女子が、泣いておりました」
「あれはまた、泣虫でな、泣虫のお通さんというくらいなんだよ。……だが、この正月の一日から側に引き寄せられていたといえば、だいぶチクチク虐められたろうな。かあいそうに」
「息子の嫁じゃ嫁じゃと仰っしゃっておいででしたから、お姑なれば、仕方がないと思っていましたが、……じゃあなにか恨み事があって、一寸だめし五分試しに虐めていたわけでございますね」
「さだめしお婆はたんのうしたろうが、夜陰、山の中へ連れ込んだところを見ると、最後の思いをはらそうというつもりだろう。恐いのう女は」
「あの隠居様などは、女の部類へははいりませんよ。ほかの女子たちが大迷惑をしまさあ」
「そうではないな、どんな女たちにも、ちょっぴりずつはあるものらしい。お婆のは、それがつよいだけだ」
「お坊さんだから、やはり女子はきらいとみえますな、そのくせ先刻は、あの隠居様のことを、いい人間だといったりしたが」

「いい人間であることにまちがいはないのだよ。あのおばばでも、清水堂へ日参するというじゃあないか。観音さまへ数珠をさげている間は、観音さまに近いおばばになっているわけだからの」
「よくお念仏もいっておりますぜ」
「そうだろう、そういう信仰家という者は世間にたくさんあるものだよ。外では悪いことを仕て来ながら、家へはいるとすぐお念仏。眼では悪魔のすることを捜しながら、お寺へ来ればすぐお念仏。人を撲っても、後でお念仏さえいえば、罪障消滅、極楽往生、うたがいなしと信じている信心家だ。こまるね、ああいうのは」
　といって、沢庵はまたすぐ、そこらの闇をあるき出して、滝つぼのある山の沢へ、
「おーいっ、お通さあん」

二

　又八は、ギョッとして、
「やっ？　おばば！」
　と、注意した。
　お杉も、気づいていた。鏡のような眼を宙へ上げて、
「なんじゃろ？　あの声は」
　と、つぶやいた。
　しかし、掴んでいる死骸の黒髪と——その死骸から首を斬り離そうとして持っている脇差は、

びくとも手からゆるめていない。
「お通の名を呼んだようだぞ。オオ、また呼んでいる」
「いぶかしいことよの。――ここへお通をさがしに来る者があるとすれば、城太郎小僧よりほかにないが」
「大人の声だ……」
「どこかで聞いたような」
「あっ、いけねえ！　……おばば、もう首など斬って持ってゆくのは止せ。提燈を持って、誰かこっちへ降りてくる」
「なに、降りてくると」
「二人づれだ。見つかるといけない、おばば、おばば！」
危急を感じると、啀み合っていたこの母子は、忽ち一体となって、又八は急々と、老母の落着いているのを案じた。
「ええ、待ったがいい」
と、婆は、死骸の魅力にひきつけられていた。
「ここまで仕て、かんじんな首級を取らずに行ってよいものか。なにを証拠に、故郷の衆へ、お通を成敗したと証拠だてることができよう。……待て、今わしが」
「あ」
又八は、眼を掩った。
お杉は木の小枝を膝で踏み敷いて、死骸の首へ刃を当てようとするのだった。又八には、見て

いられなかった。
――と、突然、婆の口から意味のわからない言葉が走った。よほど驚いたものらしかった。持ち上げていた死骸の首を手から離して、後ろへ蹌めくと共に腰をついて、
「ちごうた！　ちごうた！」
手を振って、起とうとするのであったが、起てないのである。
又八も、顔を寄せて、
「何が？　何が？」
と、吃った。
「これを見い」
「え」
「お通ではないわ！　この死骸は乞食か、病人か、男であろが」
「あっ、牢人者だ」
じっと、死骸の横顔や風体をながめて、又八はなおさら驚きを加えた。
「変だな、この人間をおれは知っているが」
「なんじゃ、知人じゃと」
「赤壁八十馬といって、おれはこいつに騙されて、持金を巻き上げられたことがある。生き馬の眼を抜くような彼の八十馬が、どうしてこんなところにへたばっていたのだろうか」
これはいくら考えてみても、又八には考え当らないはずである。ここから程近い小松谷の阿弥陀堂に住んでいる虚無僧の青木丹左衛門がいるか、でなければ、八十馬の毒牙にかかろうとして

救われたことのある朱実(あけみ)でもおればだが——他(ほか)にその説明をする者としては、宇宙あるのみであるが、こんな成れの果てを見るに至った虫けら同様な人間一個の解説を求めるには、宇宙は余りに大き過ぎて、また森厳(しんげん)であり過ぎる。

「——誰だっ。お通さんじゃないのか、そこにいるのは」

突然、二人の後ろへ、沢庵坊の声と提燈(あかり)の影がさした。

「——あッ」

逃げるだんになれば、又八の若い跳躍は、当然、お杉が腰をあげてから走るよりも遥かに迅(はや)かった。

沢庵は、駈け寄りざま、

「おばばだな」

むずと、襟(えり)がみを摑んだ。

三

「そこへ、逃げてゆくのは又八ではないかっ。——これっ、老母(はは)をおいて、どこへ行くぞっ、卑怯者、不孝者、待たんかっ」

お杉の襟首を捻じ抑えながら、沢庵は闇へ向って、なおこういっていた。

婆は、沢庵の膝の下に苦しげにもがきながら、

「たれじゃ、何奴(どやつ)じゃ」

と、なお虚勢を失わない。

又八が引っ返してくる様子もないので、沢庵は手をゆるめて、
「わからぬか、おばば。やはりおぬしもどこか耄碌したのう」
「オーッ、沢庵坊主じゃの」
「おどろいたか」
「なんの！」
猛々しく婆は白髪の光る首を横に振ってさけんだ。
「どこ暗くのう世間をうろついている物乞い坊主、今はこの京都に流れておじゃったか」
「そうそう」
沢庵はにこりと酬いて、
「ばばのいう通り、さきごろまでは柳生谷や泉州の辺りをうろついていたが、ついゆうべ、ぶらりと都へやって来てな、さるお方のお館で、ちらと腑に落ちぬ沙汰を耳にしたので、これはいかん――捨ておけぬ大事と思い、黄昏からおぬし達を捜しあるいていたのじゃよ」
「何の用で？」
「お通にも会おうと思って」
「ふーム」
「おばば」
「なにかや」
「お通はどこへ行った」
「知らん」

「知らんことはあるまい」

「このばばは、お通に紐をつけて歩いてはおりませぬぞよ」

提燈を持って後ろに立っている旅籠の手代が、

「……ヤ。お坊さま、血がこぼれております、生々しい血しおが」

明りへ俯向いた沢庵の顔が、さすがに少し硬ばってみえた。

——隙を見て、お杉婆は突然起ちあがって逃げだした。

振向いて、沢庵はそのまま、

「待たっしゃれ！　おばば！　おぬしは家名の泥をすすぐとて故郷を出て、家名に泥をなすって帰るのかっ。子が可愛ゆうて家を出ながら、その子を不幸にして戻るのかっ」

実に大きな声なのだ。

沢庵の口から出ているようには聞えないのである。宇宙が喊鳴ったようにそれは婆の全身をつつんで聞えた。

ぎくと、婆は足をとめた。顔の皺がみな負けん気を顔に描いて、

「なんじゃと、わしが家名に泥のうわ塗りをし、又八をよけいに不幸にするとおいいやるか」

「そうだ」

「阿呆な」

せせら笑って——しかしなにをいわれたよりも真剣になって、

「布施飯くうて他人の寺に宿借して、野に糞してばかり歩く人間に、家名じゃとか、子の愛じゃとかいう、世間のほんとの苦しみがわかって堪るものかいの。人なみな口をたたくなら、人なみ

に働いて食う米を食わッしゃれ」
「痛いことをいう。そういってやりたい坊主も世間にはあるから、わしにも少し痛い。七宝寺にいた頃から、口ではおばばに敵わないと思っていたが、相変らずその口が達者だのう」
「オオさ、まだまだこの婆にはこの世に大望がある、達者は口ばかりと思うてか」
「まあいい。――済んだことは仕方がないとして話そうじゃないか」
「なにを」
「おばば、おぬしはここで、又八にお通を斬らしたな。母子でお通を殺めたであろうが」
そういうだろうと待っていたように、婆はとたんに首を突き伸ばして笑った。
「沢庵坊、提燈持ってあるいても、眼を持って歩かにゃ世の中は暗やみじゃぞ。おぬしの眼は、飾り物か、ふし穴か」

四

この婆に翻弄されることには、沢庵もどうしようがないらしい。
無智はいつでも、有智よりも優越する。相手の知識を、恬として無視し去ってしまう場合に、無智が絶対につよい。生半可な有智は誇る無智へ向って、施すに術がないという恰好になってしまう。
ふし穴か、飾り物かと、婆に罵られた眼をもって、沢庵がその場をよくよく検めると、なるほど、死骸はお通ではなかった。
で――ほっとした顔を彼がするとすぐ、

ほどにの」

「沢庵坊、ほっとしたであろうが。おぬしは、抑々、武蔵とお通とをくッつけた不義の媒人じゃ

と、多分に遺恨をふくんだ口ぶりでいう。

沢庵は、逆らわずに、

「そう考えているなら、そうしておくもよい。――だがおばば、おぬしの信心ぶかいことをわしは知っているが、この死骸をすててゆく法はあるまい」

「死に損のうていた行き仆れ、斬ったは又八じゃが、又八のせいじゃない。抛っておいても死ぬ人間であったじゃろ」

するとは旅籠の手代が、

「そういえば、この牢人者は、すこし頭脳もおかしいようなあんばいで、先頃から涎を垂らして町をふらふらしておりましてな、なにかでひどく打たれたような大疵を頭のてっぺんに持っておりましたよ」

と話す。

そんなことは、どうでもいいように、婆はもう先へ歩いて道を捜していた。沢庵は、死骸の始末を旅籠の手代にたのんで、婆の後から尾いて行く。

気になるとみえ、婆は振り顧って、また毒口でも放ちたいような顔をしたが、

「――おばば、おばば」

樹蔭から小声でよぶ者の影を見て、欣しそうにそこへ走り寄った。

又八だった。

さすがに子である、逃げたのかと思っていたら、やはり老母の身を案じて様子を見ていたのかと、婆はたまらないほど、わが子の気持を欣しく買う。

沢庵の影を振向いて、母子は何かささやき合っていたが、やはり沢庵のどこかを恐れるもののように、二人は急に足を早め出し、麓のほうへ行くほど迅く走っていた。

「だめだ……あの様子では、まだなにをいって聞かせても受けつけまい。世の中から、思い違いというものだけ除いたら、ずいぶん人間の苦労は少なくなるがなあ」

母子の影を見送りながら、沢庵はつぶやいていた。彼の足は、急ごうともしないのだ。――お通を捜すことを急務としているから。

だがいったい、お通はどうしてしまったものだろう。

あの母子の刃から、どうした機みかで逃げ終おせたことは確実と見ていい。沢庵はこころの裡で、先刻から大きな欣びを胸へ拾っていた。

けれど血を見たせいか、お通の生きている無事な顔を見ないうちは、なんとなく気が落着かない。夜が明けるまで、もひとつ捜してみようと思う。

そう決心していると、さっき崖を上って行った旅籠の提燈が、そこらの堂守たちでも狩りあつめて来たらしく、七つ八つの灯の数に殖えて、ふたたび崖を降りて来た。

行き仆れ牢人の赤壁八十馬の死骸を、そのまま崖の下に埋葬してしまうつもりらしく、早速かついで来た鍬や鋤を振るって、ドスッ、ドスッ、と夜陰の底へ不気味なひびきを震わせる。

その穴があらかた掘れたかと思える頃、

「や、ここにも一人死んでるぞ、ここのは美れいな女子だ」

誰かが喚いた。
穴を掘っている場所からものの五間と離れていない場所なのだ。滝水の流れが岐れて来て、小さな沼が木や草に掩われているその淵だった。
「これは、死んでない」
「死んでいるものか」
「気を失っているだけだ」
集まった提燈が、がやがや騒いでいるのを見て、沢庵が駈けもどって来るのと同時に、旅籠の手代が、大声で沢庵を呼び返していた。

町人

一

ここの家ほど「水」というものの性能を巧みに生活の中へ活かして使っている家は少ないだろう。
――家を繞るその水音の快いせせらぎを、ふと耳にとめながら、武蔵はそう思った。
本阿弥光悦の家である。
所は、武蔵にとって記憶のふかい蓮台寺野からそう遠くない――上京の実相院址の東南にあた

る辻の角。

その辻を、本阿弥の辻と町の者が呼ぶ所以は、光悦の一軒があるのみでなく、彼の住む素朴な長屋門に隣りして、彼の甥とか、同業の職人たちとか、一族の者がみなこの辻の表や裏に、仲よく、その昔の土豪時代の大家族制度のように軒をならべて穏やかに町家暮らしの営みをしているからだった。

（なる程、こういうものか）

武蔵には、もの珍らかに見える世間なのである。下層部の町人たちの生活には、自分の生活も打ち混じって見て来ているが、この京都で誰それといわれるような大町人というものには、まったく縁のなかった彼である。

本阿弥家は、由緒のある足利家の武臣の末であるし、現在でも前田大納言家から年禄二百石が来ているし　宮家にも知遇をたまわっているし、伏見の徳川家康も眼をかけたがっているし、――というわけで、職業こそ、刀剣の研ぎ拭いをして、純粋な職人にちがいないが、ではその光悦は侍か町人かというと、ちょっとどっちともいえないような家がらである。しかし、やはり職人であり、町人であろう。いったい「職人」という名称が、このごろひどく下落して来たが、それは職人が自分で品性を落して来たからで、上代の世には、百姓は、天皇のおおみたから、とさえいわれて職業の上級なものであったのが、世の下るにつれて、「この百姓めが」といえば侮蔑の代名詞になるように変ってしまったのと同じで、職人という名称も、元は決して、下賤の業の呼び名ではなかったのである。

また大町人の根を洗うと角倉素庵でも、茶屋四郎次郎でも、灰屋紹由でも、みな武家出である

ことも一致している。つまり室町幕府の臣下が、初めは商業方面の一役所としてやっていた実務が、いつのまにか幕府の手を離れ、幕府から禄をもらう必要もなくなって、個人の経営になり、経営の才や社交の必要が、武士という特権をも不必要にさせて、親から子へ孫へと身代のうつるうちに、いつとなく町人という者になり変ってしまったのが、今の京都の大町人であり、また金力の所有者なのであった。

だから、武家と武家との権力の争覇が起っても、そういう大町人の門は、両方から保護されて、続くことも代々永く続いて来ているが、また御用立てを仰せつかることも、兵火で焼かれない税金のようになっているらしい。

実相院址の一廓は、水落寺の隣り地で、有栖川の流れと、上小川の流れと、ふた筋の水脈に挟まれていて、応仁の乱の折には、一帯に焼野原となったところで、今でも庭木を植えなどする時は、赤い刀の折れや兜の鉢が出てくるといわれているが、本阿弥家の住居がここにできたのは、勿論応仁以後で、それ以後の家としては古いほうであった。

水落寺の境内を通って、上小川へ落ちてゆく有栖川のきれいな水は、中途から光悦の宅地をせんかんと通過してゆくのである。――その水はまず、三百坪ほどな菜園の間を走り、一叢の林にすがたを隠すと、次には玄関の噴井戸へ、千尺の地の底から出て来たような顔をして現われ、一部は台所へ走って、炊ぎを手伝い、一部は風呂場へ入って垢を持ち去り、また閑素な茶室のどこかに、岩清水のような滴々な音をさせているかと思うと、ここの家族がみな「御研小屋」と敬称して、常に入口には注連縄の張ってある仕事場へ奔入して――そこでは職人たちの手によって、諸侯からひきうけている正宗や村正や長船や――世に名だたる銘刀を始め、あらゆる刃が研ぎぬ

かれている。

武蔵は、この家へ来て、この一間に旅装を解いて、今日でちょうど四日目か五日目になる。

二

此家の主の光悦と妙秀母子に、いつか野辺の茶の席で会ってから武蔵は、折もあらば、もいちど親しくしてみたいが――とは心のうちで思っていたことだった。

ところが、よくよく縁があったというものか、再会の機が、あれから幾日も経たないうちにまたあった。

――というのは、この上小川から下小川の東寄りに、羅漢寺という寺がある。その隣地はむかし、赤松氏の一族がいた館の址なので室町将軍家の没落とともに、そういった旧大名の宅址も、今はあとかたもなく変ってはいるが、とにかく一度そこを捜してみたい気持がして、武蔵は或る日、その辺を歩いてみたのであった。

武蔵は幼少の時、よく父の口から、

(わしは今でこそ、こんな山家の郷士で朽ちているが、祖先の平田将監は、播州の豪族赤松の支族で、おまえの血の中には正しく、建武の英傑の血もながれているのだ。それをおまえは自覚して、もっと自分を大事にしなければいかぬ)

といったようなことを常に聞かされていた。下小川の羅漢寺は、その赤松氏の宅地と隣り合っていた菩提寺なので、そこを訪ねてみたら、祖先の平田氏の過去帳などもあるかも知れない。父の無二斎も、京都へ出た折は、一度訪ねて、祖先の供養を営んだことがある、とか聞いていてもいた

し——またそんな古いことが知れないまでも、そういう有縁の地に立って、時には、自分の血液につながる遠い過去の人々を偲んでみることも無意味ではなかろうと——武蔵はしきりとその日、その羅漢寺をさがしていたのである。

下小川の流れに「らかん橋」というのが架かっていた。しかし、羅漢寺というのは、尋ねても知れなかった。

「変ったのかなあ、この辺りも」

武蔵は、らかん橋の欄干に立ちながら——父と自分とのわずか人間一代のうちにも、激しく推移している都会のすがたというものを考えていた。

らかん橋の下を流れてゆく浅いきれいな水が、時々、粘土でも溶かすように白く濁って、しばらくすると、また、それがきれいに澄んでいた。

見ると、その橋から見える左がわの岸の草むらから、チョロチョロと濁り水が吐き出されて、それが川へ注ぎ込まれる度ごとに、白いささ濁りが拡がってゆくのであった。

(ははあ、刀を研いでいる家があるナ)

武蔵はそう思ったが、その家の客となって、それから四日も五日も泊ろうなどとは夢にも思っていなかった。

(武蔵どのじゃないか)

どこかへ出た戻りらしい妙秀尼に、こう呼びとめられて、そこが本阿弥の辻の近所だったということも、後から初めて気がついたほどなのである。

(よう訪ねて来てくだされたのう——光悦もきょうはいる程に、まあまあ、そう遠慮などせい

で……）」

と妙秀尼は、彼を路傍で見つけたことの偶然を欣んで、武蔵がわざわざ自分の家へ来てくれたもののように思いこみ、長屋門の内へ連れて入って、下男をやってすぐ、光悦を呼んで来させる。

光悦といい、妙秀といい、いつぞや外で会った時も、こうして家庭で会う時も、少しも変らないよい人たちだった。

（私はただ今、大事な御研物を仕かけておりますので、しばらく母と話していて下さい。仕事をすませば、いくらでも悠りと話しますから）

光悦がいうので、武蔵は妙秀尼を相手にくつろいでいたが、その晩がつい遅くなってしまうと、まあ今夜はということになり、翌る日になるとまた武蔵のほうから光悦に、刀の研や扱いについて教えを乞うと、光悦は自分の「御研小屋」へ彼を案内して、実際の上からいろいろ説いて聞かせるといったようなわけになって——いつか三晩も四晩もこの家の布団に武蔵は身を馴じませてしまったような次第であった。

三

——しかし、人の好意に甘えるのも程度がある。武蔵は、きょうはもう暇を乞おうと考えていたが、それをいい出さない矢先に、今朝もまた、光悦のほうから、

「碌にかまいもしないで、引き留めるのも異なものですが、あなたさえ飽きなかったら、幾日でも泊って行ってください。私の書斎には少々ばかり、古書やつまらない愛玩品もありますから、

何を引っ張り出してご覧くださるとも差しつかえございません。そのうちにまた、庭の隅にある竈で、茶碗や皿を焼いてお目にかけましょう。刀剣も刀剣ですが、陶器もなかなか興のあるものですから、あなたもなにか一つ、土を捏ねて試みてごらんなさい」

などといわれ、武蔵はまた、つい彼の落ちついた生活の中に、自分の落ちつきを許してしまった。

「お飽きになるか、急にまた御用事でも思い立たれた節は、見らるる通りな無人の家、ご挨拶などには及びませぬから、いつでも気持の向いたまま、御出立なされればよいではございませんか」

とも光悦はいってくれるのであった。

武蔵は、飽きるどころではなかった。彼の書斎をながめても、そこには和漢の書籍から、鎌倉期の絵巻だの、舶載の古法帖だの、そのうちの一つを繰りひろげても、思わず一日は暮れてしまうものが沢山ある。

わけても、武蔵が心を引かれたものの一つに、宋の梁楷の描いたという「栗の図」が床の間にあった。

たて二尺、横二尺四、五寸くらい、横幅で紙質も分らないほど古びた懸物であったが、それを見ていると、武蔵はふしぎに半日でも飽くということを覚えない。

「御主人のお描きになるような絵は、とても素人には及びもないという気がしますが、これを見ていると、これくらいなものなら素人の私にも描けるというような気がしますな」

武蔵が、ある時いうと、

「それは、あべこべでしょう」

と光悦が答えて、
「わたしの絵くらいな程度までは、誰にでも行き得る境地といってもかまいませんが、この辺になると、道高く、山深く、非凡過ぎて、ただ学べば行けるという境地ではありません」
といった。
「ははあ、そうでしょうか」
――そういうものかと、武蔵はこれから折あるごとにこの絵を眺めていたのであったが、光悦にいわれて見てから、成程、それは一見単純な墨一色の粗画に過ぎないが、その中に持っている「単純なる複雑」に、彼もようやく少しずつ眼をひらいて来た。
二個の落栗がざっと描いてあって、一個は殻を破っており、一個はまだイガの針を立てて固く殻を閉じている。それへ栗鼠が飛びついているだけの構図である。
栗鼠の生態は、いかにも自由性に富んでいて、人間の若さと、若さの持つ欲望とを、そのまま、この小動物の姿態にあらわしている。――しかし、栗鼠の意欲のままに、その栗を食らおうとすれば、イガに鼻を刺され、イガを怖れていれば、殻の中の実は食うことができない。
作者は、そんな意図はなく描いたのかもしれないが、武蔵はそうした意味にもこれを眺めてみるのだった。絵画を見るのに、絵画以外の諷意とか、暗示とか、そんな考え方をして煩うのはよけいなことかも知れないが――と思いつつも、その絵は「単純なる複雑」のうちに、墨の美感や画面の音階のほかに、人をして思わず黙想に遊ばしめる無機的な作用を種々に備えているのだから仕方がない。
「武蔵どの、また梁楷と睨めっこですか。よほど気に入ったとみえますな。何ならば、御出立の

時に巻いてお持ちなさい、差上げましょう」

無造作に、彼の姿を見ていいながら、光悦は今、何か用ありげに彼のそばへ坐った。

四

武蔵は、意外な顔して、

「え、拙者にこの梁楷の幅を下さるというのですか。もっての外のことです、数日御厄介に甘えた上こんな御家宝を戴いてよいものではありませぬ」

と固く辞退した。

「でも、お気に召したのでしょうが……」

と、光悦は彼の律義に恥らう態を見やりながら、笑っていう。

「――かまいません、お気に召されたら、外してお持ちくださるがよい。総じて、絵画などというものは、真にその作品を愛して、作中の真味を汲んでくれる人に持たれれば、その絵は倖せであり、地下の作者も満足だろうと思われます。ですから、どうぞ」

「そう伺っては、なおのこと、私にはこの絵を頂戴する資格がございませぬ。――こうして拝見していると、頻りと、所有欲のようなものが動いて、自分も一つ、こんな名幅を持ってみたいという気持はして来ますが――持ったところで、家もなし、席も定まらぬ流寓の武者修行」

「なる程、旅ばかりしているお体では、かえってお邪魔ですな。お若いから、まだそんなこころ持におなりになるまいが、人間、どんなに小さくともよいが、我が家というものを持たない人は、いかに寂しかろうぞと、私は思いやられるのじゃが。――どうです、ひとつこの京都の隅あ

たりへ、ざっとした丸木で一庵をお拵えになっておいては」
「まだ家がほしいと思ったことはありません。それよりも、九州の果て、長崎の文明、また新しい都府と聞く東の江戸、陸奥の大山大川など――遠い方にばかり遊心が動いています。生れながら私には、放浪癖があるのかもわかりません」
「いや、あなたばかりでなく、誰でもでしょう、四畳半の茶室より、蒼空を好むのが若い人の当り前です。同時に、自分の希望の達成が、自分の身近にはない気がして、常に遠くにばかり道があると思ってしまう弊もある。大事な若い日の空費はたいがい、その遠くにあこがれて居所に希望を誓わない――つまり境遇への不平に暮れてしまうのじゃないでしょうかな」
といって、ふと、
「ハハハハ、私のような閑人が、若いお人へ、教訓めいて、こんなことをいうのはおかしい。……そうそう、ここへ来たのはそんなことではなく、あなたを今夜連れ出そうと思って来たのですが、どうですか武蔵殿、あなたは遊廓を見たことがありますか」
「遊廓というと……遊女のいる廓のことですか」
「そうです。私の友達に、灰屋紹由というて、気心のおけない人がいる。その紹由から、今誘い文が来たのですが、六条の遊び町を見にゆく気はありませんか」
武蔵は、彼の言葉の下に、
「よしましょう」
といった。
光悦は、強いてすすめず、

「そうですか。お気持がすすまなければ、お誘いしても仕方がありませんが、時には、ああいう世界に浸ってみるのもおもしろいものですよ」

すると――音もなく――いつのまにかそこへ来て、両人の話を興ありげに聞いていた母の妙秀尼が、

「武蔵どの、よい折ではないか、一緒に行かれてはどうかの。灰屋の主人とても、なんの気がねも要らぬお人、せがれも折角、お連れしたいのであろう。さあ、行って来なされ、行って来なされ」

と、これはまた、光悦の気分まかせと違って、いそいそと衣裳簞笥から小袖など出して来て、武蔵にもすすめ、わが子へも、遊びに出るのを励ましていう。

五

およそ、親と名のつく者なら、わが子が遊廓へ行くなどと聞けば、それがたとい客の前であろうと、友達の前であろうと、苦り切って、

(また、極道か)

と、嘯いているか、もっと厳ましい親の場合は、

(もってのほかな!)

と、親子のあいだに一揉めくらいはあるのが世間の通例なのに、この母子はそうでない。

妙秀尼は、衣裳簞笥のそばへ寄って、

「帯はこれでよいか。小袖はどちらにしやるか?」

る。
と、遊廓へ行くという息子の身支度を、自分が遊山にでも出向くように、いそいそと気をくば
衣裳のみでなく、紙入れ、印籠、脇差なども派手やかなのを選って揃え、わけても紙入れの中へは、男の中へ交わって恥かしい思いをせぬように、女の世界にはいって汚ない仕方をせぬように、そっとべつな金簞笥の内から、金子の音をしのばせて、心づかいをずッしりと入れておく。
「さあさあ、行て来なされ、遊廓は灯ともし頃の宵がよく、もそっとよいのは、黄昏れ刻の通い路というげな。武蔵どのも、行ておざれ」
そして、いつの間にか、武蔵の前にも、綿服ではあるが、肌着から上着まで、垢のつかない一襲ねがそろえてある。
初めは、腑に落ちぬことと怪しまれたが、この母御がこれ程すすめるところなら、悪所通いと世間でいうほど、行って悪い場所でもなさそうに思われる。
武蔵は考え直して、
「では、お言葉に甘えて、光悦どのに連れて行ってもらいます」
「オオ、そうなされ。——さ、衣裳も更えて」
「いや、拙者には、美服はかえって似合いませぬ。野に伏しても、どこへまいっても、この袷一枚が、やはり自分らしくて気儘ですから」
「それはいけません」
妙秀尼は、変なところで、厳格になって、武蔵をこうたしなめた。
「貴方はそれでよいじゃろが、汚い身装をしていては、綺羅やかな遊廓の席に、雑巾が置いてあ

るように見ゆるではないかの。世事の憂いこと醜いこと、すべてを忘れて、一刻でも半夜でも、綺麗事につつまれて、さらりと屈託を捨てて来るのがあの遊廓でござりまするがの。――そう思うてみれば、わが身の化粧や伊達も、廓景色の一つ、わが身だけの見得と思うが間違いであろが。……ホ、ホ、ホ、ホ、そういうたとて、名古屋山三や政宗どの程な晴れ着でもない、ただ垢がついていぬというだけの衣、さあ世話をやかせずに袖を通してみなされ」

「は、……それでは」

武蔵が素直に分って、着更えを済ますと、

「おお、よう似合う」

と妙秀尼は二人のさばさばした身姿をながめて、わけもなく喜ぶ。

光悦は、ちょっと仏間へはいって、そこへ小さい夕方の燈明を捧げていた。この母子は日頃から厚い日蓮宗の信者であった。

そこから出て来て、待っている武蔵へ向い、

「さ、お供いたしましょう」

連れ立って、玄関まで歩いて来ると、母の妙秀尼は、もう先に出て二人の穿く新しい緒の草履を沓石へ揃え、その後で、長屋門を閉めかけていた下男と、門の蔭でなにか小声で立ち話をしていた。

「おそれ入ります」

光悦は、草履へ向って頭を下げながら、足を下ろした。

「では母者人、行って参ります」

すると、妙秀尼は振り顧って、
「光悦や、ちょっとお待ち」
あわてて手を振って、二人の足を止め、自分は潜り門から外へ顔を出して、何事なのか、往来を見まわしているふうだった。

六

「――なんですか？」
光悦が、不審がると、妙秀尼は門の潜りをそっと閉めて、戻って来た。
「光悦や、今のう、強いかたちをした侍衆が、三名づれで、ここの門前へ来て、不作法な言葉を吐いて行ったというが。……大事はあるまいかの」
まだ空は明るいが、黄昏れに向って出るわが子と客の身を、ふと案じるらしく、眉をひそめてそういった。
「……？」
光悦は、武蔵の顔を見た。
武蔵はすぐ、侍たちが、どういう者かを察したらしく、
「お案じなされますな、拙者へ危害を加えても、光悦どのへ害意のある者ではないと存じます」
「おとといも、そんなことがあったと誰かいうたの。おとといの侍は、一人であったらしいが、するどい眼ざしして、門内まで案内ものうはいり込み、茶室の路地にかがみ込んで、武蔵どののいる奥の部屋を頻りとのぞいて立ち去ったそうな」

「吉岡の者でしょう」
　武蔵がいうと、
「私もそう思う」
　と、光悦もうなずいた。
　そして下男へ、
「きょうの三人連れは、なんというて来たのか」
　と、訊ねた。
　それに答えて、わなわな顫えながら、下男がいうには、
「はい……今し方、お職人衆もみなお帰りになりましたので、ここの門を閉めようといたしますると、どこにいたのか、三人連れのお侍方が、いきなり手前を囲んで、中の一人が、懐中から書状のような物を取出し——これを当家の客へ渡せ——と恐ろしい顔して申しまする」
「うむ……客といって、武蔵どのとはいわなかったのか」
「いいや、その後で申しました——宮本武蔵と申す者が、数日前から泊っているはずだと——」
「そしてお前はなんといった」
「わしは、かねて旦那様から口止めされてありましたで——どこまでも、そのようなお客様はおらぬと首を振りますと、いちどは怒って、偽りを申すな——と高声を張りかけましたが少し年老った侍がそのお人を宥めて、皮肉な笑い方をしながら、それではよい、べつな仕方で、当人に会って渡すから——と、そういって彼方の辻へ行ってしまいましたが」
　武蔵はそれを側で聞いて、

「光悦どの、それではこうして戴きましょう。万一のことでもあって、あなたへお怪我でもさせたり、累を及ぼしては、申し訳がありませぬゆえ、一足先におひとりで」

「いや、何」

光悦は一笑に附して、

「そんなご斟酌は要りません。吉岡の侍と分っていればなおさらのことです、私が怖がる意味は少しもありません。……さあまいりましょう」

武蔵を促して、門の外へ出たが、光悦はまた、ふと、潜りの内へ顔を見せて、

「母御様、母御様」

「忘れ物か」

「いいえ、今のことですが、もしあなた様が気がかりに思召すなら、灰屋どのへ使いをやって、今夜のお誘いは断りまするが、……」

「なんの、わしが案じたのは、そなたの身より、武蔵どのに万一のことでもないかと懸念したのじゃ。――その武蔵どのがもう先へ出て待っているものを、止めてもかいはあるまいし、折角、灰屋様のお誘いでもある。機嫌よう、遊んで来なされ」

光悦は、母の閉めた潜り戸に、もうなんの心がかりもなかった。待っていた武蔵と肩を並べて、川添いの片側町を歩きながら、

「灰屋殿の住居は、この先の一条堀川なので、ちょうど途中、支度して待っているそうですから、ちょっと立ち寄って行きましょう」

と、断った。

七

まだ夕空は明るかった。水に添って歩くのはなんとなく心の暢びるものである。人の忙しがる黄昏れを、用もなげな顔をして歩くのはなおさらいい。

「灰屋紹由どの――お名前はよく耳にするお方のようですが」

武蔵がいう。

ぶらりぶらり足をあわせながら、それに答えて、光悦がいう。

「聞いているでしょうとも、連歌のほうでは紹巴の門で、もう一家を成している人ですから」

「ハハア、連歌師ですか」

「いえ、紹巴や貞徳のように、連歌で生活を立てている人ではありません。――また私と同じような家がらで、この京都の古い町人です」

「灰屋という姓は」

「屋号ですよ」

「何を売る店なので」

「灰を売るのです」

「灰を？　――何の灰をですか」

「紺屋が紺染めに使う灰なので、紺灰といっております。諸国の染座へ卸すので、なかなか大きな商売です」

「アア成程、あの灰汁水を作る原料ですな」

「それは莫大な金額にのぼる取引なので、室町の世の初期ごろには、御所の直轄で、紺灰座奉行をやっておりましたが、中期頃から民営になりまして、紺灰座問屋というのが、この京都に三軒とか許されていたものだそうです。その一軒が、灰屋紹由の先祖でした。――けれど今の紹由殿の代になってからは、もうその家業はやめて、この堀川で余生を穏やかに送っているわけですが」

と、光悦はそこで彼方を指さして――

「見えましょう、此処から。――あの見るからに閑雅な門のある一構えが、灰屋どののお住居です」

「…………」

武蔵はうなずきながらふと、左の袂の先を、袂の外から握っていた。

(……はてな？)

と光悦の話を聞きながら考えているのであった。

――何が入っているのだろうか、右の袂は夕風がふいても軽くうごくが、左の袂がすこし重い。

懐紙はふところにある。莨入れは持たないし――他にべつに何も入れてある覚えはないが――とそっと手を落して、袖口に出してみると、よく鞣してある菖蒲色の革紐が、いつでも解けるように、蝶むすびに束ねて入れてあったのである。

(……おお？)

光悦の母の妙秀尼が入れておいてくれた物にちがいない。これを革襷にと。

「…………」
袂の中の革襷をにぎりながら、武蔵は振向いて、思わず頬へのぼってくる微笑を後ろの者へ見せた。
——その前からとく気がついていた事ではあるが、本阿弥の辻を出るとすぐ、自分の後から一定の距離を措いて、のそのそと後を尾行て来る三人連れがあったのである。
それが、武蔵の微笑を見ると、はっとしたように一致して足を止め、なにか顔と顔を突き合せて囁いていたが、やがて遠方から身がまえを作って、遽かに大股を踏んでこっちへ近づいて来る様子——
光悦はその時から、灰屋の門の前に立って、そこの鳴子に訪れを通じ、箒を持って出て来た下僕に案内されて、前栽の中へ入っていた。
ふと、後ろに見えない武蔵に気がつくと、光悦は又もどって来て、
「武蔵どの、さあ、お入りください。遠慮はいらぬ家ですから」
と、何事もないつもりで門の外へいった。

八

いかつい大太刀の柄がしらを反胸に突出して、肱を張っている三名の侍が一人の武蔵を囲むように押し並んで、傲岸に何かいい渡している様子を——光悦は門の外に見出した。
(先刻のだな)
光悦はすぐ思い当った。

「すぐ後から参りますゆえ——どうぞお先に」
光悦は、静かな眸で、彼の眸を読むように、顎を内へ引いて、
「では、奥で待っておりますから、御用がおすみになりましたらば」
光悦が門のうちへ隠れると、待っていたように、三名の中の一人が、口を開いて、
「逃げ隠れしたの、いや逃げ隠れはせんのと、もうここでの論議は止そう。そんな用事で参ったのではない。——それがしは今もいったが、吉岡門下の身内で十剣の一人太田黒兵助という者だが」
袂を払って内懐中へ両手を突っこみ、一通の書付を取り出すと、それを武蔵の眼さきへ突きつけた。
「御舎弟伝七郎どのから其許への手翰、たしかに渡し申すぞ。——ここで一読いたして、すぐ返辞を承りたい」
「ははあ……」
無造作に武蔵は披いて読み下してからすぐ、
「承知した」
と、一言で答えた。
だがまだ、太田黒兵助は、猜疑ぶかい眼の光を消さないで、
「確乎と？」
念を押して、武蔵の顔いろを糺すと、武蔵はさらにうなずいて、

「確乎と承知」
やっと三名は合点したらしく、
「異約あるにおいては、天下へ向って、嘲笑い申すぞ」
「…………」
武蔵は黙って、三名の硬ばっている体つきに眼を遊ばせていた。「笑而不答」で済ましているのであった。
その態度がまた太田黒兵助には怪しまれてきたものか、
「よろしいか、武蔵」
と、執こく――
「時刻とても、これから間のない事だぞ。場所は心得たか。支度はよいか」
と、釘を打つ。
くどいという顔つきはしなかったが、武蔵のことばは至って短い。
「よい」
ぽつりといって、
「――では後刻」
灰屋の門内へ入りかけると、兵助はまた追いかけにいい浴びせた。
「武蔵、それまでは、この灰屋にいるのだな」
「いや、宵には、六条の遊廓を案内して下さるそうな。いずれかにいる」
「六条？　よし。――六条かこの家かどっちかにいるのだな。刻限が遅れたら迎えをよこすぞ。

よもや卑怯な振舞はなかろうが」
背中で聞きながら、武蔵は灰屋の前栽へはいって、すぐ門を閉めていた。一歩そこへはいると騒音の世間は百里も後になったように、いとも静かな生活の天地をこの家の見えない塀が囲んでいた。
低い根笹と筆の軸ほどな細竹とが、自然の小道のように配られてある石から石への通路を程よく湿らせている。歩むにつれて見えて来る母屋、表、離室、亭、すべてが旧家の燻みと大まかな深さを持っていて、それを繞る松はみな背が高く、屋を越してこの家の富貴を奏ではいるが、下へかかって来る客へ対して、決して尊傲なふうは見えない。

九

どこかで蹴鞠を蹴る音がしていた。公卿屋敷だとよくその音を塀の外からも聞くが、町人の家にはめずらしいと武蔵は思った。
「すぐお支度してみえますが、どうぞしばらくここで」
と、茶や菓子を運んで来て、庭向きの座敷へ席をすすめた二人の小間使の起居もしとやかで、家風のしつけを思わせる。
「陽が蔭ってきたせいか、急に寒くなって来た」
光悦はつぶやいて、開いている障子を閉めるように小間使へいいつけようとしたが、武蔵が、鞠の音に聞き入りながら、庭の彼方に一段低くなっている梅林の花を見ているらしいので、自分も外へ眼をやって、

「叡山のうえが、曇って来ましたな。あの上にかかる雲は、北国から来る北雲です。――お寒くはありませんか」

「いやべつに」

武蔵は正直にそういったまでで、ちっとも光悦がそこを閉めたいと思っている気持などは考えなかった。

彼の皮膚は気候に対して革のように強靱だった。光悦のきめのこまかな皮膚とは、それだけ感度が違っていた。あながち気候に対してであるばかりでなく、すべての感触にも鑑賞にも、そのくらいな差が二人にはあった。ひと口にいえば、野人と都会人の差であった。

小間使いが燭台を持って来たのを機に――外もつるべ落しに暗くなっても来たし――光悦がそこを閉めかけると、

「小父さま、来ていたの」

鞠を蹴っていた息子たちであろう、十四、五歳のが二、三人縁側からのぞいて、蹴鞠をそこへ抛り出したが、武蔵のすがたを見ると、急におとなしくなって、

「おじい様、呼んで来てあげようか」

光悦がいいといっても肯かないのである。先を争って奥へ駈けて行った。

障子を閉め、灯りがともると、この家のもつ和やかなものが、初めて坐った客にもよけいによくわかる。家族たちの遠い笑い声がかすかに洩れて来るのも居心地がいい。

もっともっと、武蔵が客として感じよく思えたことは、どこを眺めても、少しも金持くさくないことであった。むしろあらゆる素朴なもので、有る金のにおいを消そうとしているかのように

すら見える。どこか大きな田舎家の客間にいるような気持だった。
「いや、どうも、えろうお待たせして済まなんだ」
そこへ唐突に磊落な声がして、主の灰屋紹由がすがたを見せた。
光悦とはあべこべに、この人は鶴のように痩せていたが、声は、低声の光悦よりも、ずっと若若しくて大きくひびく。年も光悦よりは一まわりくらい上かも知れない。とにかく、気さくな性分といったふうで、光悦が武蔵を紹介わせると、
「あ、そうか。そうでおざるか。近衛家の御用人松尾殿の甥御であらっしゃるか。松尾殿は、わしもよう存じ上げておる」
ここでも、叔父の名が出たので武蔵は、こういう大町人たちと、堂上の近衛家あたりとの関係をなんとはなくうっすら察することができた。
「さっそく行きましょうぞや。明るいうちに出て、そぞろ歩きと思うたが、もう暗うなったゆえ、駕を呼ぼう。……武蔵どのも、もちろん交際ってくださるじゃろうな」
年に似あわずせかせかしている紹由と、おっとり構えこむと遊廓へ行くことも忘れているような光悦と、それも変っている対照であった。
その二人を乗せてゆく町駕の後から、武蔵も生れて初めて、駕という物に乗って、堀川のふちを揺られて行った。

春の雪

一

「ウウ、寒」
「風が撲ぐって来よった」
「鼻が捥げそうだの」
「なにか降るぞ、今夜は」
「――春だというのに」
駕かき同士の高声だった。白い息をふいて柳の馬場へかかっていた。
三つの提燈はしきりに揺れ、しきりに明滅する。夕方、比叡のうえに見えた笠雲はもういっぱいに洛内の天へ黒々とひろがって、夜半には何に変じるか、怖ろしい形相を兆している夜空だった。
――だがそのかわりに、この広い馬場の彼方に見える一かたまりの地上の灯の美しさといったらない。空に星一つない晩だけに地上の灯がよけいに燦めくのである。ちょうど螢のかたまりを風が磨いでいるように。
「武蔵どの」

と、真ん中の駕のうちから後ろを振顧って光悦がいう——
「あそこです。あれが六条の柳町で——この頃町家が殖えてから、三筋町とも称んでいますが」
「アア、あれですか」
「町中を出離れてから、またこんな広い馬場だの空地だのを通って、その彼方に忽然と、あんな灯の聚落が現れるのもおもしろいでしょう」
「意外でした」
「遊廓も以前には、二条にあったものですが、大内裏に近うて、夜半などには、民歌や俗曲が、御苑のほとりに立つとかすかに耳にさわるというので、所司代の板倉勝重どのが、急にここへ移転させたものです。——それからまだやっと三年しか経ちませんのに、どうです。もうあの通りな町になって、なお拡がって行こうとしている」
「では、三年前には、まだこの辺は」
「ええ、もう夜などは、どっちを見ても真っ暗で、つくづく戦国の火の禍いが歎じられるばかりであったものです。——けれど今では、新しい流行は皆、あの灯の中から出ているし、大げさにいえば、一つの文化をさえ生むところとなっているので……」
といいかけて、しばらく、耳を澄ましてからまた——
「かすかに聞えて来たでしょう……遊廓の絃歌が」
「なるほど、聞えます」
「あの音曲などにしても、新しく琉球から渡来ってきた三味線を工夫したり、またその三味線を基礎にして今様の歌謡ができて来たり、その派生から隆達ぶしだの上方唄だのが作られたり、そ

ういったものは、すべてあそこが母胎といってよい。あそこで興ったものを後から一般の民衆が受けとるのですから、そういう文化のほうでは、一般の町と遊廓とも、ふかい因果関係があるわけですな。だから、遊廓だから、町の隔離してあるところだからといって、あそこがどんなに穢らしくてもよいということはいえません」

駕がその時、急に道を曲ったので、武蔵と光悦の話も、それなり打ち切られてしまった。二条の遊廓も柳町とよび、六条の遊廓も柳町と称ぶ。柳と遊廓とは、いつの頃からそう付き物のようになったものか、その柳並木に綴られた無数の灯が、もう近々と武蔵の眼に映ってきていた。

二

光悦も灰屋紹由も、ここの青楼は馴染みとみえ、門の柳へ、駕が下りると、
「船ばし様」
「水落様も」
と、林屋与次兵衛の店では、下へも置かないという迎えよう。

船ばし様というのは、堀川船橋に住居があるところから、紹由の遊里名。また水落様というのも、同じく、光悦のここだけの遊び名前。

武蔵だけには、一定の住所もないし、従って隠し名もない。

名前の詮索ばかりするようであるが、この林屋与次兵衛というのも、楼主の表名前であって、遊女屋としての暖簾名は、扇屋というのであった。

扇屋といえば、今この、六条柳町に嬌名のたかい初代吉野太夫の名がすぐ思い出されるし、桔梗屋といえば、室君太夫の名をもってひびいている。
一流とゆるされる青楼は、その二軒に限っていた。光悦、紹由、武蔵の三人が客となって坐ったのは扇屋のほうなのである。
(――これは、絢爛な、城郭のようなものだな)
武蔵は、なるべく眼をうごかすまいとしても、つい、格天井や、橋架の欄干や、庭面の様や、欄間の彫刻など、歩くたびに、眼を奪われてしまう気がする。
「おや、どこへ行かれてしもうたのか」
杉戸の絵に見恍れているうちに、光悦や紹由を見失ってしまい、武蔵が廊下を迷っていると、
「こちらじゃ」
と、光悦が招いている。
遠州風の石組に、白砂を掃きならして、赤壁の景でも模した庭造り師のこころであろうか、北苑の画にでもありそうなその庭を抱いて、大きな二間の銀ぶすまが灯に濡れている。
「冷えるわい」
紹由は、猫背になって、ちょこなんと、もうその広い部屋の、一つの敷物に乗っかっている。
光悦も、先に坐り、
「さあ、武蔵どの」
と、真ん中に空いている敷物をすすめるのだった。
「いや、それは――」

と控えて、武蔵は下座に着いたまま、かたくなっていた。二人がすすめる座布団は、床の間の正面である。この物々しい建築と睨めッこして、そんな上座へ、殿様みたいに坐るのは、遠慮というよりも、武蔵はどうも嫌だった。しかし相手は、遠慮と取る。

「でも、こよいは、あなたがお客じゃから……」

紹由はすすめて、

「わしと、光悦どのとは、いつもいつも、まあ、こんなあんばいに、飽きもせで、飽かれもせで、日をつぶしている古友達。あなたとは初対面、まず、まず」

と、扱ってしまおうとする。

武蔵は、辞して、

「いや、それでは恐縮。わたくしのような若い者が」

すると紹由が、

「遊廓で年をいうやつがあるか」

と、突然くだけた調子でいって、ワハハハハと猫背の肩をゆすぶって笑った。

もう茶や菓子を持った女たちがうしろへ来ていた。席のきまるのを待っているのである。光悦は、武蔵の気持を救うつもりで、

「では、わしが」

と床の間へ直った。

武蔵は、光悦のあとへ坐って、幾分かいる所を得た気もちがしたが、なにかしら、大事な時間を、つまらなく費しているような気もしていた。

三

次の間の隅には、ふたりの禿が仲よく炉のそばに並んで、
「――これ、なあに？」
「――禽」
「じゃあ、これは」
「うさぎ」
「――こんどは？」
「……笠の人」
指と指を組みあわせて、屏風へ影絵を映しながら、うしろ向きに遊んでいた。
炉はもちろん茶式のもの、釜口から昇る湯気は、部屋を暖めるに役立っている。いつのまにか隣には人が殖え、酒のかおりや人肌も、外の寒さを忘れさせていた。
いやそれよりは、そこにいる人たちの血管に、ほどよく酒がめぐって来たのが、この部屋が暖かくなったと感じられてきたなによりの原因であろう。
「わしはなあ、こういうと、息子どもへ意見ができぬことになるが、世の中に、酒ほどよいものはないと思うておる。酒――はよくないものと、極道の毒水みたいにいうのは、あれや酒のせいじゃあるまいて。酒はよいものじゃが、飲み人がわるいのじゃ。何でも、人のせいにするのが人間のくせでな、気狂い水などといわるる酒こそよい迷惑よ」
この中で、誰の声より大きいのが、この中で誰よりもいちばん痩せている灰屋紹由の声だっ

た。

武蔵が、一、二献飲んだだけで後は辞退しているところから、紹由老人の——これは度々発表している持論らしい酒談義がはじまったのである。

いつ聞いても、それがいっこう「新説」でない蒸し返しである証拠には、席に侍している唐琴太夫も墨菊太夫も小菩薩太夫も、またほかの酌人や、物運びする女たちまでが、

(船ばし様が、また始まった)

といわないばかりに、皆同じ表情のものを唇に持って、くすぐッたそうに聞いている顔つきを見ても分るのである。

だが、船ばし様の紹由は、そんなことにはすこしも頓着なく、

「酒がわるいものなら、神様はお嫌いなはずだが、酒は悪魔よりも神様のほうがお好きじゃった。だから、酒ほど清浄なものはない。神代には、酒を造る時、純清の処女子たちの白珠のような歯で米を嚙ませて酒を醸したという。それほど清らかなものだった」

「ホホホ、まあ、きたない」

誰か笑うと、

「なにが、きたないか」

「お米を歯で嚙んだりして造ったお酒が、なんできれいなことがあるものですか」

「ばかをいえ。おまえ達の歯で嚙みつぶしたら、それや汚いどころじゃない、誰も飲み人はありはせぬが、まだ、春も芽ばえのなんの穢れにもそまぬ、処女が嚙むのじゃ。花が蜜を吐くように嚙んでは壺に溜めて醸す酒。……ああわしはそのような酒に酔ってみたいがのう」

と、すでに酔っている船ばし様は、そばにいた十三、四の禿の首へいきなり抱きついて、その唇へ肉の痩せた自分の頬を押しつける。

「——きゃアッ、いやあッ」

禿は悲鳴をあげて立つ。

すると、船ばし様は、にやにやと眼を右側へ転じて、

「ハハハ、怒るなよ、うちの女房——」

と、墨菊太夫の手をとって自分の膝の上に重ねて置く。それだけならよいが、顔と顔をつけて、一つ杯を、半分ずつ飲んだり、しどけなく凭れ合ったり、傍らに人間はいないようなまねをする。

光悦は、時折、杯に笑いをふくんで、女たちとも紹由とも、静かに戯れたり話したりして同化しているが、ひとり武蔵は、ぽつねんとこの雰囲気から遊離していた。べつに自分だけが、厳めしくなどしているつもりでは決してないが、恐いのか、女たちが第一彼のそばへ寄って来なかった。

四

光悦は強いないが、紹由は思い出したように時々、

「武蔵どの、飲まないか」

とすすめ、またしばらくすると、武蔵のまえにつめたくなっている杯が気になってならないように、

「どうじゃ武蔵どの、それを空けて、熱いのを一献ゆきましょう」
と、飲ませたがる。
それが、度重なってくると、だんだん言葉もぞんざいになって、
「小菩薩太夫、その息子に一つ飲ませてやってくれ。これ飲まぬか息子」
「いただいています」
と、武蔵は、そんな時に返辞でもするのでなければ、口をきく折が見出せなかった。
「すこしも杯があかないではないか。はてはて意気地のない」
「弱いのです」
「弱いのは、剣術じゃろう」
と、ひどい皮肉をいう。
武蔵は、笑って、
「そうかもしれません」
「酒をのむと、修行の妨げになる。酒をのむと、常の修養が乱れる。酒をのむと、意思が弱くなる。酒をのむと、立身がおぼつかない。——などと考えてござるなら、お前さんは、大したものになれない」
「そんなことは考えておりませぬが、ただ一つ、困ることがあるのです」
「なんじゃな、それは」
「眠くなってしまうことです」
「眠くなったら、ここでも、どこへでも、寝てしまうたがよいではないか。そんな義理を立てる

すじは毛頭いらん沙汰じゃ」
　といって、
「太夫」
　と墨菊太夫へいった。
「この息子、飲むと眠くなるのが怖いというておる。それでもわしは飲ませてしまうから、眠くなったら、寝かせてやってくだされよ」
「はい」
　と、太夫たちは皆、笹色に光る唇を小さくして笑う。
「寝かせてやってくれるか」
「ようござります」
「ところで、介抱役はこの中の誰だな。のう光悦どの、誰がよいか、武蔵どのに、気に入りそうなのは」
「さあ？」
「墨菊太夫は、わが家の女房――小菩薩太夫は、光悦どのが苦々しかろう。――唐琴太夫も……いけないな、ちと、さしあいが悪い」
「船ばし様、今に、吉野太夫がおみえなさりましょうが」
「それよ」
　と、すっかり興に入っている紹由は、膝を打って、
「吉野太夫、あの太夫なら、お客にもご不足はあるまい。……だがその吉野太夫は、まだ見えぬ

ではないか。はやく、この息子どのに見せて上げてほしいなあ」
　すると、墨菊太夫が、
「わたくし達とちがって、あの太夫様は、それはもう、引く手数多なお方、はやくと仰っしゃってもそうまいりませぬ」
「いいや、いいや、わしが来ていると告げれば、どんなお客も袖にして来るはずじゃ。誰か使い、使い」
　のびあがって、紹由は次の間の炉のそばに遊んでいる禿を見つけ、
「りん弥がおるの」
「おりまする」
「りん弥、ちょっとおいで、そなたは、吉野太夫つきの禿であろうが、なぜ太夫をつれて来ぬのじゃ。船ばし様が、待ちわびているというて、吉野をこれへ連れて来ておくりゃれ。――つれてきたら褒美をやるぞよ」

五

　その、りん弥という禿は、まだ十か十一ぐらいだったが、もう人の目につく天麗の質を持っていて、やがての二代目吉野に擬せられている童女だった。
「よいか、分ったか」
　紹由のいうことばを、分ったような分らないような顔をして聞いていたが、
「はい」

素直に、つぶらな眼でうなずいて、廊下へ出て行った。
後ろの障子を閉めて、廊下へ立つと、りん弥はすぐ大きな声を弾ませて、手をたたいた。
「采女さん、珠水さん、糸之助さん。——ちょっと、ちょっと！」
部屋の中の禿はみな、
「なアに？」
——明るい障子明りをうしろにして、そこに立ち並ぶと、禿たちは、りん弥といっしょに皆手を打ちたたいて、
「あら、あら」
「あら！」
「まあ！」
余りに部屋の外で、歓呼の足踏みが鳴るので、部屋の中で酒をのんでいる大人たちも、なにごとかと羨望に似た気持をおこして、
「なにを、はしゃいでいるのじゃ——開けてみなさい」
紹由のことばに、
「お開けいたしますか」
女たちが、そこの障子を左右へひろく開け放った。
「——あ、雪」
と皆、知らなかったように呟いた。
「寒いはず……」

と光悦は、もう白く見える自分の息へ杯を含ませ、武蔵も、

「オオ」

と、眼をそこへ移した。

廂から外のふかい闇を、春にはめずらしい牡丹雪が、ぼとぼとと音を立てて降りしきっている。その黒繻子のような闇に光る雪の縞の中に、禿たちの姿が四つ、帯のうしろを見せて並んでいた。

「お退きなさい」

太夫が叱っても、

「うれしい」

と、禿たちはお客などを忘れて、不意に訪れた恋人のように、沁々、雪に見惚れていた。

「つもるかしら?」

「つもるでしょう」

「あしたの朝は、どんなかしら?」

「ひがし山が、真っ白になって——」

「東寺は」

「東寺の塔だって」

「金閣寺は」

「金閣寺も」

「鴉は」

「鴉も——」
「嘘ばかり！」
袂で打つまねをすると、ひとりの禿は、廊下から下へ転げた。
いつもなら、わっと泣き出して度々ある禿同士の喧嘩が始まったであろうに、思いがけなく、降りしきる雪を浴びたので、落ちた禿は、偶然な喜びでも拾ったように、起きあがると、もっと雪の身にあたる外へ出て行って、

大雪、小雪
法然さんは見えぬ
何してござろ
経誦んでおざった
雪食べておざった

突然、こう大声に歌いだして、口の中へ雪を吸いこむように身を反らしながら、両つの袂で、舞い始めた。
その禿が、りん弥だった。
怪我でもしたのではないかと驚いて起ちかけた部屋の中の人々も、その勇壮活潑な舞を見て、
「もういい、もういい」
「上がれ上がれ」
笑いながらいたわった。
その代りに、りん弥はもう、紹由にいいつけられて、吉野太夫を連れてくる使いをわすれてい

た。足がよごれたので、下部の女にかかえられて、嬰ン坊みたいに、どこかへ持って行かれてしまった。

六

かんじんなお使者がそんなことになってしまったので、船ばし様のご機嫌をそんじてはと、誰かが気転をきかして、吉野太夫の都合をうかがいに行ったとみえて、
「ご返辞を受けて参りました」
と、その女が、紹由のほうへ囁いた。
紹由はもう忘れていて、
「ご返辞？」
と、いぶかる。
「はい、吉野太夫様の」
「ああそうか、来るか」
「お越しになることは、どんなことをしてもお越しになると仰っしゃいましたが……」
「……ましたが……。なんじゃ」
「どうしても、今すぐとは、ただ今お見え遊ばしているお客様がご承知してくださいませぬ」
「――不見識な」
と紹由は、機嫌がわるくなった。
「ほかの太夫ならば、そういう挨拶も通るが、扇屋の吉野太夫ともある傾城が、買手どもの我儘

にまかせて、振り切って来られぬというのはどうしたものじゃ、吉野もいよいよ金で買われるようになったかな」
「いえ、そうではござりませぬが、こよいのお客様は、わけても、片意地で、太夫様が去ぬと仰っしゃれば、よけいに離してくれないのでござります」
「すべて、買手どもの心理は、みなそうしたものじゃろが。——いったいその意地のわるいお客とは誰じゃ」
「寒巌さまでございまする」
「寒巌さま？」
苦笑して、紹由が光悦のほうを見ると、光悦も苦笑して、
「かんがん様は、おひとりでお見えか」
「いいえ、あの」
「いつものお連れと？……」
「ええ」
紹由は、膝をたたいて、
「いや、おもしろうなったぞ。雪はよし、酒はよし、これで吉野太夫が見えれば申し分のないところ。光悦どの、使いをやんなされ。——これ、これ女、そこの硯宮、硯宮」
と、取り寄せて、光悦の前へ、懐紙とそれを突きつけた。
「何を書きますか」
「歌でもよいし……文でもよいが……歌がよいな、先がなんせい当代の歌人じゃから」

「こまりましたな。……つまり吉野太夫をこちらへくれという歌でしょう」
「そうじゃ、その通り」
「名歌でなければ先の意をうごかすことはできません。名歌などがそう即吟でできるものではございません。あなた様が一つ、連歌を遊ばして」
「逃げたの。……よろしい面倒じゃから、こう書いてやろう」
紹由は筆を執って――
　わが庵へ
　うつせ吉野の
ひと本を
それを見ると、光悦の吟興も、気が楽になったとみえて、
「じゃあ私が、下の句を書き添えてやりましょう」
　花は高嶺の
　雲さむからめ
紹由はのぞき込んで、すっかり欣しがってしまい――
「よしよし。花は高嶺の雲さむからめ……か。これはいい、雲の上人も、ぎゃふんであろう」
と、結び封にして、墨菊太夫の手へわたした。そしてしかつめらしく、
「禿や、ほかの女どもでは、なんとのう権威がない。太夫、ご足労じゃが、かんがん様のところまで使者に行っておくれぬか」
といった。

かんがん様とは、前大納言の子烏丸参議光広のしのび名。いつものお連れというのは、おおかた徳大寺実久、花山院忠長、大炊御門頼国、飛鳥井雅賢などというようなところの顔ぶれであろう。

七

墨菊太夫はやがて、先方から返辞をもろうて来て、ふたたびそこへ坐り、
「かんがん様からお返し」
といって、紹由と光悦の前へ、うやうやしく文箱をさしおいた。
こちらからは、軽い気もちで、戯れの結び文でやったのに、作法振った文箱の返し方に、
「改まったな」
と、紹由はまず苦笑する。
そして光悦と顔を見あわせ、
「まさかこよい、わしどもが来ておろうとは思わなかったろうから、連中も、きっと驚いたに違いないわさ」
と、遊戯的に何かこう、してやったりというような気持で、さて、文箱のふたを開き、返辞の手紙をひろげてみると、それはなにも書いてないただの白紙ではないか。
「……？　おや」
紹由はほかにこぼれた紙でもあるかと、自分の膝をながめ、念のため、文箱の中をもういっぺん覗いてみたりしたが、その白紙一枚のほか、何物もはいっていない。

「墨菊太夫」
「はい」
「これはなんじゃ」
「なんですかわたくしには分りませぬ。ただ、返辞を持ってゆけと仰っしゃって、これを、かんがん様から渡されたので持って来ただけでござりまする」
「ひとを、小馬鹿に召されたな。……それともこちらの名歌に、すぐ筆をとってよこすほどの返歌もうかばで、あやまったという降参状かな」
　なんでも自己のよいように解釈して、やたらに興がるのが紹由のもちまえらしい。だが、その独りぎめに何も自信があるわけではないから、すぐ光悦へそれを示して、
「のう、いったい、その返しは、どういう量見じゃろう」
「やはりなにか、読めという意（こころ）でございましょうな」
「何も書いてない白紙を、どう読みようもなかろうではないか」
「いえ、読めば読めないことはありません」
「では光悦どのは、これをどう読む？」
「——雪。……いちめんの白雪（しらゆき）とは読めましょう」
「ム、ウム、雪か。いやなるほど」
「吉野の花をこちらへ移してほしいという手紙の返しですから、これは、眺めて酒を酌（く）むならば、花ならずとも——という意味でしょう。つまり折からよいは雪のながめにも恵まれているのだからそんなに多情を起さずに、障子でも開け放して、雪だけでまあ飲んでいるがよろしい

──と、こういう返辞と私は思いますが」
「ヤ、小憎いことを」と、紹由はくやしがって、
「そんな寒い飲み方をしていられるものではない。先様がそう出てござれば、こちらも黙ってひっこんではおられぬ。なんとしてでも、吉野太夫は、こちらの座敷に植えてながめねば納まらぬぞ」
紹由老人は、躍起になって、唇の乾きを舐め始めた。光悦よりはずっともう年とっていてこのくらいだから、若い時分にはずいぶんトラになって人に世話をやかせたものだろうと思われる。
光悦が、まあそのうちに、と宥めるほうに努めると、紹由は是が非でも吉野太夫をつれて来いと女たちを手こずらせる、それがまた、吉野太夫そのものよりは、酒の興をたすけるものとなって禿たちも笑い転げ、遊びの座敷はようやく、外の降りしきる雪とともに今が酣の景色と見えた。
武蔵は、そっと席を立った。
機がよかったので、誰も彼の席が空いたのを気がつかなかった。

雪響き

一

何を思って、黙って酒席を抜けて来たのか、武蔵は廊下へ出ることは出たが、扇屋の奥の広さに、勝手がわからないで、独りでまごついていた。

明るい表座敷のほうには、遊客の声や音曲が賑わいたっているので、そこを避けると、当然、うす暗い母屋の布団部屋だの、道具部屋だのが目にふれて来る。台所に近いのであろう、厨の持つ特有なにおいが暗い壁や柱からむしむし湧いていた。

「――あら、お客さま。こんなほうへ来てはいけません」

そこらの暗い部屋からひょいと出て来て、出合頭に手をひろげ、こう、通せンぼをして立ちふさがった禿がある。

座敷のあかりで見る時のあどけなさや可愛さはどこへかやって、ひどく自分たちの権利でも侵されたように、眼を咎め立てて、

「いやなお人。こんなとこ、お客さまの来る所ではありません。はよう、あっちへ行ってください」

叱るように追い立てる。

美しく見せている自分たちの穢い生活の裏を、ちょっとでも他人に覗かれたのが、こんな小さい禿にも腹立たしかったのであろう。同時に、お客のたしなみを知らないお客と、武蔵を蔑んでそういったのであろう。

「ア、……こっちへ来てはいけなかったのか」

武蔵がいうと、

「いけません、いけません」

禿は、武蔵の腰を押して、自分も歩く。
武蔵はその禿を見て、
「お、そなたは、さっき縁がわから雪の中へ転げた、りん弥という子だな」
「え、そうです。お客さまは、お後架へ行こうと思って迷子になったんでしょう。わたしが連れて行ってあげましょう」
と、りん弥は、彼の手と自分の手をつないで先へ引っ張った。
「いやいや、わしは酔っているのじゃない。すまないが、そこらの開いている座敷で、茶漬を一わん喰べさせてくれないか」
「御飯？」
眼をまるくして、
「御飯なら、お座敷へ持って行ってあげますのに」
「でも、せっかく皆が、ああやって愉快に酒を飲んでいるところだから――」
武蔵のことばに、りん弥も首をかしげて、
「それもそうですね。では、ここへ持って来てあげましょう。ご馳走は、何がいいんです」
「なにもいらない、握り飯を二つほど――」
「おにぎりでいいんですか」
りん弥は、奥へ駈けて行った。武蔵の望んだものはすぐそこへ来た。明りもない空部屋で、武蔵はそれを喰べ終ってしまうと、
「そこの裏庭から、外へ出られるだろうな」

と、訊く。

そしてすぐ、武蔵が立って縁の降り口へ歩み出したので、りん弥は驚いて、

「お客さま、どこへ行くのですか」

「すぐ戻って来る」

「すぐ戻って来るといっても、そんなところから……」

「表口から出るのも億劫。それに、光悦どのや紹由どのが気づくと、また、なにかとあの人たちの遊興を妨げるし、うるさくもあるからな」

「じゃあ、そこの木戸を開けてあげますから、すぐ帰っていらっしゃいね。もし帰って来ないと、わたしが叱られるかもしれません」

「よしよし、すぐ戻って来るよ。……もし光悦どのが訊ねたら、蓮華王院の近所まで、知人に会うために中座しましたが、間もなく帰ってくるつもりですといって出たと伝えてくれ」

「つもりではいけません、きっと帰って来てください。あなたのおあいての太夫様は、わたしの付いている吉野太夫様ですからね」

雪の柴折戸を開けて、禿のりん弥は、彼を外へ送り出した。

二

遊廓の総門のすぐ外に、編笠茶屋というのがある。武蔵はそこを覗き、わらじはないかと訊ねたが、遊廓へ入る浮かれ男が、顔隠しの笠を求める店なので、元よりわらじを鬻いでいるはずはない。

「すまないが、どこかで購うて来てくれまいか」

そこの娘にたのみ、その間、武蔵は床几の端をかりて、帯、腰紐を締め直していた。

羽織を脱いで、ていねいに畳みつけ、筆と紙をかりうけて、なにか一筆しるした物を、結び文にして、その袂の中へしのばせ、

「ご亭主」

と、奥の炬燵にうずくまっている年寄りへ、それを頼んだ。

「おそれいるがこの羽織を預かっておいてくれまいか。――もし拙者が、亥の下刻(十一時)までにここへ帰らなかったら、この羽織と添えてある一通とを、扇屋におられる光悦どのまで、お届けしてもらいたいが」

「はいはい、おやすい事でございます。たしかにお預かりしておきまする」

「時に、時刻は今、酉の下刻(七時)か、戌の刻(八時)ごろか」

「まだ、そうなりますまい。きょうは雪もようで、暗くなるのが早うござりましたからの」

「今、扇屋を出てくる前に、あそこの土圭が鳴っていたが」

「ならば、それがおおかた、今、柝を打って廻っていた酉の下刻でござりましょう」

「まだ、そんなものかのう」

「暮れたばかりでござりますもの。――往来の人通りを見ても知れまする」

そこへ娘が、わらじを買って来てくれた。武蔵は入念に、わらじの緒の縒を調べて、革足袋のうえに穿いた。

彼の境遇としては多すぎる茶代をおいて、編笠を一つもらい、それはただ手に持って、頭のう

えに翳しながら、散る花よりもやわらかな雪を払いながら雪の道をどこともなく立ち去った。
四条の河原近くには人家の灯もまばらに見えるが、祇園の樹立ちへ一歩入ると、そこらは雪も斑で、足もとも暗かった。
たまたま見える微かな明りは、祇園林に包まれた燈籠や神燈だった。神社の拝殿も社家の中も、人間はいないようにしんとしていて、ただ雪の音が、時折、樹々のこずえに響いて、その後をさらにしんとさせていた。
「さ、行こうか」
祇園神社の前に額ずいて、なにか祈念していた一群の者が、今、どやどやと社殿の前から立ち上がった。
今し方、花頂山の寺々から、ちょうど戌の刻――五ツの鐘がなりわたった。雪の夜のせいか今夜に限って、鐘の音は腸に沁みるほど冴えて聞えた。
「御舎弟さま。わらじの緒はだいじょうぶでござるか。こう寒い――凍るような晩には、きつい緒も、ぷつりと切れ易うござりますぞ」
「心配するな」
吉岡伝七郎だった。
親族の者や、門弟中の重なる者、十七、八人が彼を取り巻いて、寒いせいもあろうが皆、そそけ立った顔つきを揃えていた。彼のまわりを取り囲みながら、蓮華王院のほうへ歩いてゆくのである。

今、起って来た祇園神社の拝殿のまえで、伝七郎はもう全身一点のすきもなく決闘の身支度を済まして来ていた。鉢巻、革だすき、いうまでもない事である。
「わらじ？　……わらじは、こういう折には布緒とかぎっているものだ。おまえ達も覚えておけ」
伝七郎は雪を踏みしめながら、白い息を大きく吐き捨てて、一同の中に歩いていた。

三

日暮れまえに、太田黒兵助たち三名の使いの者から、武蔵の手へ、確乎とわたして承諾を取った果し合いの出合い状には、
　場所　蓮華王院裏地
　時刻　戌の下刻（九時）
と、してあったのである。
明日をも待たないで――今夜の戌の刻という遽かな指定をしてやったのは、伝七郎もそれがよいと考えたし、親族や門下の者も、
（猶予を与えて、もし逃げ出されては、ふたたび京都で彼をつかまえることは出来ないから）
という想定の下に一致した作戦であって、その使いに行った太田黒兵助が、この群の中に見えないところをみると、彼だけは、あのまま堀川船橋の灰屋紹由の家の附近にうろついていて、その後の武蔵を、ひそかに尾行しているのかもしれない。
「……誰だ？　誰か先へ来ているようだな」

伝七郎はそういって、蓮華王院の裏の廂の下に、赤々と、雪の中に火を焚いている者を、遠くから見つめた。

「御池十郎左と、植田良平でしょう」

「なに、御池や植田良平まで来ているのか」

伝七郎は、むしろ、うるさいといいたげな顔をして、

「武蔵ひとりを討つのに、仰山すぎる。たとえ、仕果しても、あれは大勢で討ったのだといわれてはおれの沽券にもかかわるからな」

「いや、時刻が来たら、われわれは立ち退きますから」

蓮華王院の長い御堂の廊架は、俗に三十三間堂ともよばれているところである。長い廊架は、矢を放つ距離といい、的場を置くところといい、弓を射るには絶好の場所だとされて、いつのころからともなく、射具をたずさえて来て、独りで練技を試している者がぼつぼつ増えていた。

――そんなことからふとこの場所を思いついて、こよいの試合場として、武蔵へいってやったのであるが、来てみると、弓以上、果し合いにはなおさら足場がよい。

何千坪かの雪の地域には、雑草や根笹の凸凹も見えず、きれいに淡雪が積っている。ところどころに、松の樹はあるが、それも密生した林ではなく、極めて疎らに、この寺院の風致を添えている程度なのである。

「――やあ」

先に来て、そこで火を焚いて待っていた門人が、伝七郎を迎えるとすぐ火のそばから立って、

「お寒かったでございましょう。まだ時刻はよほどあります。十分、お体を暖めて、御用意にか

かっても遅くはありません」
御池十郎左衛門と、植田良平のふたりだった。
良平の腰かけていたあとへ、伝七郎はだまって腰をおろした。支度はもう祇園神社のまえですっかり済まして来たのである。伝七郎は、焚火の焔に手をかざして、両手の指の節を、一本一本ぽきぽきと鳴らしながら揉んでいた。
「――ちと早すぎたかな」
煙に顔をいぶしながら、もうそろそろ殺気を帯びて来ている顔を顰め、
「いま来た途中に、腰かけ茶屋があったなあ」
「この雪で、もう戸を閉めておりましたが」
「たたき起せば起きるだろう。――誰かそこへ行って、酒を提げて来ないか」
「え、酒をですか」
「そうだ、酒がなくっちゃあ……とても寒いわ」
伝七郎はそういって、火を抱くようにかがみ込んだ。
朝でも晩でも、道場に出ている時でも、伝七郎の体から酒のにおいの消えたことがないことは知っているが、こん夜のような場合――やがて一族一門の浮沈を賭して当ろうとする敵を待つ今のわずかな間に、その酒が、伝七郎の戦闘力に、利となるか、不利となるかを、門弟たちは、いつもの酒とちがって、熟考せずにいられなかった。

四

この雪に、凍えた手肢をして、太刀を持つよりは、少しぐらいの酒ならば、体に容れたほうが、かえってよかろうと考える者のほうが多かった。

「それに、御舎弟が、ああいいだしたものを、その気持をこじらせるのは、なおよろしくない」

こういう尤もな意見もあって、門弟の中の二、三が駈け出して行って、間もなく酒を買って来た。

「やあ来たな、どんな味方よりも、以上の味方は、これだ」

焚火のぬくい灰にあたためた酒を、伝七郎は茶碗につがせ、こころよげに飲んでは、争気に満ちた息を吐く。

いつものように、量をたくさんに参られてはよくないがと、側にいてはらはらしている者もあったが、そんな心配までに及ばず、伝七郎は心得ていつもより少なくしか飲まなかった。自己の生命にかかわる大事を、すぐ前にひかえているので、豪放には装っていても、ここにいる誰よりも肚の底から緊張しているのは、やはり彼自身だった。

「――や、武蔵？」

不用意に、誰かがこう放った一声に、

「来たか」

焚火を囲んでいた面々が、腰を蹴られたように、一度にどっと立って、その袂やその裾から、火の粉の塵が雪の空へ赤く散った。

三十三間堂の長い建物の角に現われた黒い人影は、遠くから手をあげて、

「わしじゃ、わしじゃ」

と、断りながら近づいて来た。

袴を短くからげて、かいがいしい支度はしているが、腹から背はもう弓になりかけている老武士なのである。門弟たちはそれを見ると、源左衛門様だ、壬生の御老人だといい合って、ひそまり返った。

壬生の源左衛門というこの老武士は、先代吉岡拳法の実弟にあたる人で、つまり拳法の子の清十郎や、ここにいる伝七郎にとっては実の叔父にあたる者だった。

「おう、これは壬生の叔父上、どうしてこれへ」

伝七郎も、この人が今夜ここへ来るなどとは思ってもいなかったらしく、意外な態で迎えると、源左衛門は火のそばに来て、

「伝七郎、おぬしほんとに、やるのじゃなあ。……いや、おぬしのその姿を見て、ほっと安堵いたした」

「叔父上にも、一応ご相談にあがろうと思っていましたが」

「相談、なんの、相談などに及ぼうか。吉岡の名に、泥をぬられ、兄を片輪にされて、黙っているようだったら、わしが其方を責めに出向こうと思っていたくらいじゃ」

「ご安心ください。柔弱な兄とはちがうつもりですから」

「そこはわしも信頼しておる。そちが負けようとは思わんが、一言、励ましてくれようと思って、壬生から駈けつけて来たのじゃ。――だが伝七郎、あまり敵を軽視して臨むなよ、武蔵という者も、うわさを聞けば、なかなかな男らしい」

「心得ています」

「勝とう勝とうと焦心らぬがよいぞ。天命にまかせろ。万一のことがあったら、骨は源左衛門がひろってやる」
「ハハハハ」
伝七郎はわらって、
「叔父上、寒さ防けに」
と、酒の茶碗を出した。
源左衛門はだまって、それを一杯飲んでしまうと、門弟たちを見まわして、
「各〻は、何しに来ているのか。よもや、助太刀ではあるまいな。――助太刀でなかったら、もうこの場所から引き揚げたほうがよかろう。こう物々しくかたまっているのは、一人と一人の試合に何やらこっちに弱味があるようでいかん。勝っても、人の口がうるさいものだ。……さ、そろそろ時刻も近づいたろうから、わしと共に、どこか遠くに退いていることにしよう」

五

すぐ耳元で大きく鐘が鳴ったのは、もう、だいぶ前のような気がする――
あれは確かに戌の刻であった。そうすると、約束の戌の下刻は、もうやがて迫っているころだが――と思う。
(出遅れたな、武蔵は)
伝七郎は、白い夜を見まわしながら、ただ独り、燃え残りの焚火をかかえている。
壬生の源左衛門叔父の注意で、門弟たちはみな立ち去ってしまった。足痕だけが、その後の雪

に際だって黒く数えられる。
——ぽきっと、時々、凄じい音がした。三十三間堂の廂の氷柱が折れて落ちるのである。また何処かで、雪の重さに樹の枝が裂けるのであった。その度ごとに、伝七郎の眼は鷹のようにうごいた。
その鷹の影にも似た男がひとり、その時雪を蹴って、彼方の樹の間から敏速に、伝七郎のそばへ馳せて来た。
武蔵の行動を監視しつつ、宵のうちからここと聯絡をとって報告していた数名の中の最後の一人太田黒兵助だった。
今夜の大事が、もう眉を焦く所まで迫って来たことは、その兵助の顔つきだけでも、訊かないうちに分った。
足も地につかない様子で、喘いで来た息の弾みを、
「来ましたぞッ！」
と、そのまま告げた。
伝七郎は、これを聞く前に、疾く察して、火の側から立ち上がっていたのである。——そして、彼のことばを聞くとすぐ、
「来たか」
と、おうむ返しにいって、その足が無意識のように、燃え残りの焚火を踏みにじっていた。
「——六条柳町の編笠茶屋を出てから、雪がふるのに、武蔵め、牛のようにのその歩いておりましたが、たった今、祇園神社の石段をのぼって境内へはいりました。——拙者は、廻り道して

ここへ来ましたが、あののろい足つきでも、もう姿を見せるはずです、御用意を！」
「よしッ。……兵助」
「は」
「彼方へ行っておれ」
「皆は」
「知らん。その辺にいては、眼ざわりだ、立ち去れ」
「はッ……」
　といったが、兵助は、そこを外して去る気にはなれなかった。伝七郎の足が、雪泥の中へ、火をすっかり踏みつぶし、武者ぶるいしながら廂の下から出て行くのを見届けると、彼は反対に、御堂の床下へもぐって、闇の中に屈み込んでいた。
　床下にいると、外にはないと思っていた風が冷々と動いていた。太田黒兵助は、自分の膝を抱えこんだまま、骨まで冷えてゆく体がわかった。ガチガチと奥歯が鳴るのをどうしようもなかった。それは寒さのせいであると、自分の観念を強いてうなずかせながら、時々、尿でもつかえたように、腰の下から顔の先までぶるぶると身ぶるいを走らせていた。
（……はてなあ？）
　外は昼間よりもよく見えるのである。伝七郎の影は三十三間堂の下から約百歩ほど離れて、背のたかい一幹の松の根かたに足場を踏みしめ、武蔵のすがたが見えるのを、いまやおそしと待ち構えているのだ。
　――だが、兵助が胸で計っていた頃あいは、とうに過ぎたのに、武蔵はまだここへ来なかっ

た。宵のうちほどではないが、雪がまだチラチラとこぼれているし、寒さは肌に咬みつくようだし、火の気も酒の気もさめてくるし——伝七郎の焦々(いらいら)している態(さま)が、遠くからでもよく分るのであった。

——ざあッ、と突然伝七郎の神経を驚かしたものがあると思うと、それは、梢(こずえ)から滝のように落ちて来た雪に過ぎなかった。

六

もっとも、こういう場合の一瞬(ひととき)というものは、待つ方になると、わずかな間も、耐えきれない焦躁(しょうそう)になるのは勿論である。

伝七郎の気持も、太田黒兵助の気持も、その例に洩れない。殊に兵助は、自分のした報告に責任を感じてくるし、寒さは体から霜が立つようだし——もう、一瞬(ひととき)、もう一瞬と、その焦躁を抑えていても依然として武蔵の影は見えて来ないし——

たまらなくなって、彼は、

「どうしたのかなあ?」

床下から出て、彼方(かなた)に立っている伝七郎へ何か呼びかけた。

「兵助、まだいたのか」

伝七郎も同じ気もちでこう声を返した。どっちからともなく二人は接近していた。そしてすべてがただ真っ白な雪の夜を見廻して、

「……見えぬ!」

と、呻きに似た不審りを繰返していた。
「彼奴、逃げ失せたな」
伝七郎がつぶやくと、
「いや、そんなはずは……」
太田黒兵助はすぐ打消した。そして極力、自分の確かめて来たところをもって、自分で保証づけるように喋舌っていると——
「や？」
聞いている伝七郎の眼が急に横へ反れた。
——見ると、蓮華王院の庫裡のほうに、ポチと手燭の灯が揺らぎ出している。灯を持って来るのは一人の僧で、後から誰やら尾いてくる人影もわかる。
その二つの人影と、一点の小さな灯は、やがて、境の扉を開けて、三十三間堂の永い縁の端へ立つと、こう低い声で話していた。
「——夜分は、どこもかしこも、閉め切っておりますので、よう存じませぬが、たしか宵の頃、この辺りで、暖を取っていたお武家方がございましたから、それが、あなたの尋ねているお方達かもわかりませんが、もう、誰もいないようでございますな」
それは、僧の言葉だった。
それに対して、ていねいに、なにか礼をのべているのは、案内されて来た方の者で——
「いや、せっかくお休みのところを、お邪魔いたして申しわけありません。……あの彼方の樹の下に、二人ほど佇んでおるようですから、あの者が、蓮華王院で待つといってよこした当人かも

知れません」
「では、たずねて御覧なさい」
「ご案内は、もうここまでで結構です、どうぞお引取りくださるように」
「なにか、雪見でもなさろうという御会合で？」
「まあ、そんなものです」
と、一方は軽く笑う。
僧は手燭を消して、
「いわでもがなのことではありますが、もしこの廂のお近くで、さっきのように火でもお焚きになる場合は、どうぞ、後の残り火だけはご注意くださいますように」
「わかりました」
「では御免を」
僧は、そこの扉を閉めて、庫裡のほうへ立ち去ってしまう。
残っていた一方の者は、じっと伝七郎の方を見ながらしばらく佇んでいた。そこは廂の蔭で、ほかの雪明りが眼を刺すように強いために、そこの暗いのが、よけいに濃く感じられるのであった。
「誰？　兵助」
「庫裡の方から出てきたようですが？」
「寺の者ではないらしいぞ」
「はてな」

歩むともなく、二人は三十三間堂の縁のほうへ、二十歩ほど近づいて行った。

すると、御堂の端のほうに見えた黒い人影も位置を移し、長い縁の中程あたりまで来ると、その足をぴたりと止めた。そして結びかけていた革襷（かわだすき）の端を、左の袂のわきで、きびしく締めているような様子であった。その様子までを眼に受け取れる距離までは――何気なく進んで行った二人であったが、ぎくっと、足のほうが先に雪の中から抜けなくなってしまった。

そして、ふた息か三息、間をおいてから、

「――あっ、武蔵！」

伝七郎が大きくいった。

七

互いに正視し合って、

武蔵！

と伝七郎が最初の声を発した途端から、こう二人の立場は、すでに武蔵の方が、絶対に有利な地を占めていることをこの場合見のがすことはできない。

なぜ、というまでもなかろうが、一応、二人の対立している地歩を見るならば、武蔵は自分の身を、敵よりも何尺か高い縁の上に置いている。反対に伝七郎は、敵から眼の下に睥睨（へいげい）されている地上にある。

それのみでなく、武蔵はまた絶対に背後（うしろ）が安全だった。三十三間堂の長い壁を背にしているのであるから、たとえ、左右の横から挾撃しようとする者があっても、縁の高さが自（おのずか）ら一つの防

ぎをなしているし、後顧なく、一方の敵へ意力をそそぐことができる。
伝七郎の背後はといえば、無限の空地と雪風であった。かりに相手方の武蔵には、助太刀は来ていないと承知していても、その広い背中の空地を、決して無関心でいるわけにはゆかなかった。
だが、侍いなことには、彼のそばには太田黒兵助がいた。
「退けっ、退いていろっ、兵助——」
こう、袖を払うように、伝七郎がいったのは、むしろ兵助が下手な手出しをしてくれるよりも、遠く離れて、一人と一人との絶対的なこの地域を、見守っていてくれた方が力に思われたに違いないのである。
「よいか」
これは、武蔵の言葉だった。
水をかぶせるような静かないいかただったのである。
伝七郎は、ひと目見るとともに武蔵の顔に対しても、その足の先までを、
(こいつか)
という憎念で見ずにいられなかった。肉親の意趣もある。巷の取沙汰に比較されている忌々しさもある。また地方出の駈出し剣客がという蔑みも頭へ先に入っている。
「だまれっ」
刎ね返すように出た語気は、彼としては自然だった。
「——よいかとは、何がよいかというぞ。武蔵！　戌の下刻は、もう過ぎておる」

「下刻の鐘と、きっちり、同時にとは約束していない」

「詭弁を吐くなっ。こっちはとうに来て、この通り身支度して待ちぬいていた。——さっ、降りろ」

不利な立場のまま、無碍に進んでゆくほど、伝七郎も相手を軽んじてはいない。当然こういって敵を誘った。

「今——」

と、軽く答えておいて、武蔵はその間に、機を観ているような眼ざしだった。

機を観るといえば、伝七郎は武蔵のすがたを眼の前にしてから、満身の肉に戦いの生理を起していたが、武蔵のほうでは、彼の肉眼に自分を示す前から、とうに戦いを開始しているつもりで、戦いの中身を持って臨んで来ている。

証拠だてて、彼のその心事をいってみるならば、彼はまず、わざと道でもない寺院の中を通過していた。もう憩んでいる寺僧の世話までかけて、広い境内を歩かずに、この御堂の縁へ、いきなり建物伝いに来て立ったのでも分る。

祇園の石段をのぼった時、彼はもう多数の人間の足痕を雪の中に見たに違いない。あらゆる即智はそこで働いた。自分のうしろを尾行ていた者の影が自分から離れると、彼は、蓮華王院の裏地へ行くのに、わざとそこの表門へ入ってしまったのだった。

寺僧について、十分に、宵のうちからのこの附近の予備知識を得、そして茶ものみ、暖も取り、少し時刻が過ぎたのも承知しながら、唐突に、当の敵と面接するという策を取ったのである。

第一の機を、武蔵はこうして摑んだ。第二の機は、しきりと今、伝七郎の方から誘うのであった。その誘いに乗せて出るのもまた戦法だし、外らして自身から機を作るのもまた戦法である。勝敗の相のわかれ目は、ちょうど水に映っている月影に似ている。理智や力を過信して的確にそれを摑もうとすればかえって生命を月に溺らせてしまうに極っている。

八

「出遅れたうえ、まだ支度が整わぬのか。ここは、足場がわるい」
焦立つ伝七郎へ、武蔵は飽くまで落着きはらって、
「今参る」
と、いった。
怒れば、必ず敗れる端をなすことを、伝七郎も知らないではない。だが、まるで故意のような武蔵の態度を見ていると、そういうふだんの修得と感情がばらばらにならずにいられないのである。
「来いっ！　もっと広場のほうへ！　お互いに、名はいさぎよくしておきたい。姑息な振舞い、卑怯な立ち合い、そんなものへ、唾して生きてきた吉岡伝七郎だっ。――武蔵っ、仕合わぬまえに、怯気を抱くようでは、伝七郎の前へ立つ資格はないぞっ、降りろそこを！」
漸く彼が、呶鳴つづけ出すと、武蔵はニッと歯を少し見せた。
「なんの、吉岡伝七郎の如き、すでに去年の春、拙者が真二つに斬っている！　きょう再び斬れば、おん身を斬ることこれで二度目だ！」

「なにっ！　いつ、どこで」
「大和の国柳生の庄」
「大和の」
「綿屋という旅籠の風呂の中で」
「や、あの時？」
「どっちも、身に寸鉄も帯びていない風呂の中であったが、眼をもって、この男、斬れるかどうかを自分は心のうちで計っていた。そして、眼で斬った、見事に斬れたと思った。しかし、そちらの体には何の形も現さないから、気づきもせずにおったろうが、おん身が、剣で世に立つ者と傲語するならば、余人のまえでいうなら知らぬこと、この武蔵のまえでいうのは笑止だ」
「なにをいうかと思えば、愚にもつかぬ吐ざき言。だが、少しおもしろい、その独りよがりを醒ましてやろう。来いっ。彼方へ立とう」
「して伝七郎、道具は、木太刀か、真剣か」
「木太刀も持たずに参って何をいう。真剣は覚悟のうえで来たのと違うか」
「相手が木太刀を望みとあれば、相手の木太刀を奪って打つ」
「広言、やめろッ」
「では」
「おっ」
——伝七郎の踵は、雪の上に黒い斜線を一間半も描いて、さっと武蔵の通る空間を与えた。
——しかし武蔵は、縁の上を横へ二、三間つつつつと歩いてから雪の中へ降りていた。

ふたりは、御堂の縁からそう何十間も先までは歩いて行かなかった。そこまで行く間が伝七郎にはもう待ちきれないものになっていた。やにわに、相手へ重圧を加えるような一喝を浴びせると、彼の体格に均り合っている長刀が、いかにも軽いもののように、びゅっ――と微かな鳴りを発して、武蔵のあった位置を正確に薙ぎ払っていた。

だが、力点の正確さが、敵を両断する正確さとはあながちいえない。対象のうごき方は、刀の速度よりも、もっと迅かった。――いやそれ以上に迅速だったのは、その敵の肋骨の下から噴いて出た白刃であった。

九

きらっと、二すじの刀が、宇宙に閃めいたのを見て後は、降る雪の地へ落ちてくるさまは如何にものろいものに見えた。

けれど、その速度にも、楽器の音階のように、徐、破、急があった。風が加われば急になり、地の雪を捲いて旋風になると、破を起す。そしてまた、白鵞の毛が舞うような静かな雪景色に返って降った。

「…………」

「…………」

武蔵と伝七郎との、ふたりの刀も、お互いの刀が鞘を走ったと見えたその一瞬には、もうどっちかの肉体は、到底無事ではあり得ないと考えられるところまで迫り合い、同時に二つの刀の動き方にも複雑な光があったように見えたが、それが、ぱっとふたりの踵が雪煙を揚げ、後方へ離

れあうと——どちらの身もまだ健在であって、白雪の大地に、一滴しの血しおもこぼれていないことが、なんだかあり得ない奇蹟のようにしか思われなかった。

「…………」

「…………」

それきり、ふたすじの刀は、さっきから切っ先と切っ先との間に約九尺ほどな距離をおいたま、空間に固着しているのである。

伝七郎の眉毛に雪がたかっていた。その雪が解けると、露になって、眉毛からまつ毛の中へながれ込むらしいのである。ために時々、顔を顰めると、その顔筋肉が無数の瘤みたいに動き、そしては、くわっと大きな眼をひらき直していた。そこから飛び出しそうな眼孔は、まるで鉄を熔かしている炉の窓のようであり、それとともに唇は、下腹からしている呼吸を、極めて平調に通わせているかのように見せていても、実は鞴のような熱臭い火ッ気をもっていた。

（——過った！）

伝七郎は、敵とこういう対峙になるとすぐ、胸のなかでそう悔いていた。

（なぜ、きょうに限って、青眼につけてしまったか。いつものように頭高に振りかぶってしまわなかったか）

頻りと、その後悔が頭のなかを往来する。といっても人間のふだんにする思考のように脳だけで物事をのん気に判断していられる状態ではない。体じゅうの血管のうちを、どっどっと、音をたてて駈けている血がみな思考力を持ってそう感ずるのだった。頭の毛も、眉毛も、全身の毛髪はいうまでもなく、足の爪までが、生理的に動員されて、敵へ向ってそそけ立った戦闘の姿態を

示しているのだった。
こう刀を構えて持つのは――青眼身となって戦うのは――伝七郎は自分の不得手であることを知っていた。だから、肱を上げ、真っ向に持ち直そうと、先程から幾度となく、切っ先を上げかけたが、どうしても上げられなかった。
――武蔵の眼が、その機を、待っているからである。
その武蔵もまた、青眼に刀をぴたりと――やや肱をゆるめに構えていた。伝七郎の肱の屈曲しているところには、めりめりといいそうな力が見えるが、武蔵の肱には手で押せば下へも横へも動きそうな柔かさが見える。――そしてまた、伝七郎の刀が前にもいったように、時折、位置を改めようとして動いては止め動いては止めしているのと反対に、武蔵の手にある刀は、びくとも動かなかった。その細い刀背から鍔にかけて、微かに雪がつもるほど動かずにあった。

十

彼の破綻を祈る、彼の隙をさがす、彼の呼吸を計る、彼に勝とうとする、飽くまで勝とうとする。八幡、ここぞ生死のわかれ目と思う。
そういう意識が、脳裡にちらついている間は、相手の伝七郎がまるで巨きな巌のように見え、
(これは)
と、武蔵も、その豪壮な存在からうける一種の圧迫感を、はじめはどうしようもなかった。
(敵は、おれよりも上手だ)
正直に、武蔵は、そう思ったのである。

同じ負け目は、小柳生城のうちで柳生の四高弟に囲まれた時にもうけた。彼のその負け目に似た自覚というのは、柳生流とか吉岡流とかいう正法な剣に向ってみると、自分の剣がいかに野育ちの型も理もない我法であるかがよく分ることだった。

今――伝七郎の構えているさまを見ても、さすがに吉岡拳法というあれだけの先人が、一代を費やして工夫しただけのものが、単純のうちに複雑に、豪放なうちに賢密に、ひとつの整った剣のすがたを作していて、ただ力とか、精神とかいうだけのもので圧して行っても、決して破り得ないものがあった。

生半可、武蔵には、それが観えるだけに、手も、足も出ない心地がしてしまうのだった。で当然、武蔵は無謀になれなかった。

彼のひそかに自負している我法も野人ぶりも振舞えなかった。こんなはずはないと思うくらい、こよいの肱は伸びてゆかない。じっと、保守的に構えを持っているのが呼吸いっぱいであった。

その結果、心で払っても払っても、

(隙を)

と、眼に充血を来し、

(八幡)

と勝ちを祈り、

(勝たねば)

と、躍起な焦りが湧いて来て、心はいよいよ躁がしい。

多くの場合、たいがいな者が、ここで渦潮に巻込まれたように狼狽に墜ちて溺れるのであった。しかし武蔵は、なんの心機をつかむともなく、そのあぶない自分の昏迷からふと浮び上がっていた。これは彼が、一度も二度も、生死のさかい目を踏んで来た体験の賜物にほかならぬものであろう。——はっと眼を拭かれたように気が醒めていたのである。

「…………」

「…………」

依然として青眼と青眼との対峙のままだった。雪は武蔵の髪の毛に積り、伝七郎の肩にも積っていた。

「…………」

「…………」

巌のような敵はもう眼の前になかった。同時に、武蔵という自己もなくなっていた。そうなる前に必然、勝とうという気持すらどこかへ消え失せてしまっている武蔵であった。

伝七郎と自分との約九尺ほどな距離の空間をチラチラと静かに舞っている雪の白さ——その雪の心が自分の心かのように軽く、その空間が、自分の身のようにひろく、そして天地が自分か、自分が天地か、武蔵はあって、武蔵の身はなかった。

すると、いつのまにか、その雪の舞う空間を縮めて、伝七郎の足が前へ出ていた。そして刀の先に、彼の意思が、ピクとうごきかけた。

——ぎゃっッ！

武蔵の刀は後ろを払っていたのである。その刃は、彼の背後から這い寄って来た太田黒兵助の

頭を横に薙ぎ、ジャリッと、小豆袋でも斬ったような音をさせた。
大きな鬼燈みたいな頭が、武蔵の側を勢いよくよろけて、伝七郎の方へ泳いで行った。その歩いて行った死骸につづいて、武蔵の体も咄嗟に――敵の胸を蹴飛ばしたかと思われるほど高く跳んでいた。

十一

四方の静寂を劈いて「ア――あああっッ」と、亀裂のはいった声だった。伝七郎の口からである。満身から発した気合いが、途中でポッキと折れたように、宙へその一声が掠れて行ったと思うと、彼の巨きな体が、後ろへよろめき、どっ――と真っ白な雪しぶきに包まれた。
「まッ、まてッ」
大地へ伸びた体を無念そうに曲げ、雪の中へ顔を埋めながら、伝七郎がこう呻くようにいった時はもう、武蔵の影は、彼のそばにはいなかったのである。
俄然、それに答えたものは、遙か彼方で――
「おうっ」
「御舎弟の方だ」
「た、たいへんだ」
「みんな来いっ」
どどどどと、潮の駈けて来るように、雪を蹴って、黒い人影がここへ集まって来る。
いうまでもなく、遠く離れて、かなり楽観的に、勝負のつくのを待っていた親類の壬生源左衛

門やその他の門人たちだった。
「ヤ！　太田黒まで」
「御舎弟っ」
「伝七郎様っ」
呼んでも、手当しても、もういけないことはすぐ分った。
太田黒兵助の方は、右の耳から横へかけられた太刀が口の中まで斬れているし、伝七郎の方は、頭の頂上からやや斜めに鼻ばしらを少し外れて、眼の下の顴骨まで斬られている。
ともに、たった一太刀だった。
「……だ、だからわしが、いわんことではない。敵を侮るからこんなことになったのじゃ。……伝、伝七郎っ、これっ、これっ、伝七……」
壬生の源左衛門叔父は、甥のからだを抱いて、愚を知りながら、死骸に向って悔やんでいた。
いつのまにかその人々の踏みつけている雪はいちめん桃色に変っていた。――自分も死者の方にばかり気をとられていたが、壬生の源左老人は、ただうろうろと度を失っている他の者に腹が立って、
「相手はどうしたっ」
と、呶鳴りつけた。
その相手の所在を、他の者も気にとめてないわけではなかったが、いくらキョロキョロしても、武蔵の影は、もう自分達の視野からは見出せなかったので、
「――いない」

「――おりません」
痴呆のような返辞をすると、
「いない理があるかっ」
源左衛門は歯がみをしながら、
「わしらが駈け出すまで、たしかに突っ立っていた影がここに見えたのじゃ。まさか、翼のあるわけでもあるまい、一太刀、武蔵に酬わんでは、吉岡の一族として、わ、わしの面目が立たぬ」
すると、そこにかたまっている大勢の中から一人があッといって、指さした。
自分たちの仲間から発したあッという声であるのに、その衝動をうけて皆、どっと一歩ずつ後方へ身を退き、そして、指さした者の指先へじっと視線をそろえた。
「武蔵」
「オオあれか」
「うーむ……」
一瞬、なんともいえない寂寞の気が漲った。人のない天地の静かさよりも、人中の空気にふと湧いた寂寞のほうが不気味な霊魂をふくんでいた。鼓膜も頭の中も真空になって、物を見る眼が、物を映しているだけで、思考に容れることを忘れ果てたかのようになる。――
武蔵は、その時、伝七郎を倒した場所から最短距離の建物の廂の下に立っていたのである。
――それから。
相手方の様子を見つつ、壁を背にしたまま、徐々と横歩きにあるき、三十三間堂の西の端縁へのぼって、悠々とさいぜん立った所の縁の中ほどまで足を移していた。

そこから一応、
（襲るか？）
と、体の正面を、彼方にかたまっている群へ向けたが、その気色もないと見定めたのであろう、ふたたび歩き出して、縁の北の角まで行ったかと思うと、忽然、蓮華王院の横へと影を消してしまった。

今様六歌仙

一

「こちらの文のお返しに、白紙など遣こされて、なんとも小憎い一座ではある。このまま黙って引っ込んでいては、愈〻、あの公達輩をよい気にさせて置くようなもの。この上は、わしが行って直談合と出かけ、意地でも吉野太夫をこちらへ申しうけて来ねばならぬ」
遊びに年齢はないものだそうであるが、酔うと興の乗じたまま、踏み止まりのない灰屋紹由であった。こういい出すとどうしても、自分の思い通りにならないうちは、そのひたぶるな遊びの我ままが納まらないとみえる。
「案内しやい」
と、墨菊太夫の肩につかまって立ち上がり、側から光悦が、

「まあ、まあ」
と、引き止めても、
「いいや、わしが行って吉野を連れてまいる——旗本ども、あの方々の席へわしを案内しやれ、おん大将の御出馬に候ぞ、われと思わんものは、尾け、尾け」
危なかしくってはらはらさせられるが、放っておいても決して危なくないのが酔っぱらいである。しかしそれを、危なくないからといって、見ている世の中では面白くない。やはり危ながったり、危なそうに見せたりする中が、世の中の至妙でもあるし、遊戯の世界の滋味でもある。
わけてもまた、紹由老人のように、酢いも甘いも知り尽くし、遊びの裏も表も心得ぬいている客になると、同じ酔っぱらいでも、扱いいようで大いに扱い難い。遊ぶ心と、遊ばせる方の心とが蹌々、歩いている間も、不即不離、つまり阿吽の呼吸というものである。
「船ばし様、おあぶのうございまする」
と妓たちが庇えば、
「なんじゃ、馬鹿にするな。酔えば、足が、ひょろけるが、心は、ひょろけてはいないぞ」
と、むずかるし、
「では、おひとりでお歩き遊ばせ」
と離せば、廊下へ、ぺたと坐ってしまって、
「——すこし草臥れて候。わしを負ぶってくれい
と、いう。
いくら広いにしたところで、同じ家のべつな部屋へ行くのに、廊下続きでこうさんざん手間ど

らせて道中しているのも、紹由にいわせれば、これも遊びの一つというに違いない。
なんでも知らない顔をしながら、なんでも知っているこの酔客様は、途中でこんにゃくのようになって、妓たちを手古ずらせていたが、その寒厳枯骨ともいえるような細ッこい老軀の中には、なかなか利かない気性が潜んでいるらしく、さっき白紙の返書を遣こしたり、あちらの別室で、吉野太夫を独占して、得意げに遊んでいるらしい烏丸光広卿などの一座に対して、
（青くさい公達輩が、なんの猪口才な――）
と、常々の剛毅が、酒に交じって、胸でむらむらしていることも事実であった。
公卿といえば、武家も憚かる厄介者であったが、今の京都の大町人は、そんな者を少しも厄介には思っていない。打割ったところをいえば、お人の良いどうにでもなる――ただいつも位階ばかり高くて金のない階級というだけのものである。従って、金をもって適当な満足を与え、風雅をもって上品に交わり、位階を認めて誇りを持たせておけば、それで彼らは自分たちの指人形のようにうごくことを――この船ばし様は十分に知りつくしている。
「どこじゃ、かんがん様の遊んでござるお座敷は。……ここか、こちらか」
奥まったところの、花やかな灯の映している障子を撫でまわして、紹由がそこを開けようとすると、出合頭に、
「やあ、誰ぞと思えば」

二

こんな場所に似合わない僧の沢庵が、内からそこを開けて、顔を出した。

「あっ、ホウ?」
と、目をまろくし、かつ奇遇を欣び合って、紹由の方から、
「坊主、おまえもいたのか」
沢庵の首すじへ抱きつくと、沢庵も口まねして、
「おやじ、おぬしも来ていたのか」
と紹由の首を抱えこみ、出合頭の酔っぱらい同士が、恋人のように汚ない頬と頬とをこすり合い、
「達者か」
「達者じゃ」
「会いたかった」
「うれしい坊主め」
しまいには、ぽかぽか頭をたたいたり、一方がまた一方の鼻の頭を舐め出したり、何をやっているのか、酒飲みの気持は分らない。
今そこにいた沢庵が、次の部屋から出て行ったと思うと、廊下のあたりで、頻りと障子ががたがた鳴り、恋猫と恋猫とがじゃれているような鼻声が聞えるので、烏丸光広は、対い合っている近衛信尹と顔を見あわせ、
「ははあん、案の如く、うるさいのが、やって来たらしい」
そっと、苦笑をもらした。
光広はまだ若い、見るところ三十ぐらいな貴公子だった。裸にしても堂上人らしく白皙の美男

であるから、実際の年はもっとよけいかも分らない。眉は濃く、唇は朱く、才気煥発なところが眸に出ている。

(武家ばかりが人間のような世の中に、なんで麿を公卿に生ましめたか)

というのがこの人の口癖であって、優しい容貌のうちに烈しい気性を蔵し、武家政治の時流に、鬱勃たる不平を抱いているらしかった。

(頭脳がよくて若い公卿で、今の世態に悩みを持たぬ奴は、馬鹿である)

これも光広が、いって憚らない持論なのだ。それを換言するとつまり、

(武家は武門の一門を世職とするものだが、それが、政治の権を戟に翳し、右文左武の融和もつりあいもこのごろではあったものではない。公卿は節句のかざり物、人形でも済むことだけを任されて、曲げて被れぬ冠を載せられているのだ。――そんなところへ自分のような人間を生ませたのが神の過ちというもの、われ人臣たらんとすれば、今の世の中では、悩むか、飲むか二つしかない。――如かず、美人の膝を枕に、月を見、花を見、飲んで死のうか)

というような意味であるらしかった。

蔵人頭から右大弁に昇り、今も参議という現職にある朝臣であるが、そこでこの貴公子はさかんに六条柳町へ通ってくる。この世界にいる時だけ腹の立つのを忘れるというのである。

その若くて悩む仲間には、飛鳥井雅賢だの、徳大寺実久だの、花山院忠長だのというもっと溌刺としたのもあって、武家とちがって、各〻貧乏のくせにどう金の工面をしてくるのか、いつも扇屋に来ては、

(ここへ来ると、人間らしい心がしてくるぞ)

とばかり飲んで騒ぐことを例としていたが、その顔ぶれとすこし違って、今夜の彼のお連れは、寔におとなしやかな人品だった。

そのお連れである近衛信尹というのは、光広よりは年も十ほどは上であろう。どこか重々しい風丰があり、眉も秀ているが、豊かに浅黒いその頬に薄あばたのあるのが世間並にいえば瑕である。

けれどその薄あばたなら、鎌倉一の男、源実朝にもあったということだからこの人だけの瑕瑾ではない。殊にこの人が、前関白氏の長者という厳しい身分などをどこにも見せず、ただ余技の書道において聞えている近衛三藐院として、吉野太夫の側でにやにやしているところはかえってなかなか床しい薄あばたであった。

三

顔じゅうを笑靨にして、近衛信尹はその薄あばたを、吉野太夫の顔に向け、

「あの声は、紹由だの」

と、いった。

吉野の紅梅よりも濃い唇がおかしさを噛みこらえながら、

「あれ、ここへお見え遊ばしたら、どうしたらようございましょう」

困ったような眼元をする。

烏丸光広は、

「起つな」

と、吉野の裾を抑えて、次の間越しに、廊下の境へ、

「沢庵坊、沢庵坊、そんな所で何をしておらるるか。寒いぞ、そこを閉めて出るなら出ろ、はいるならはいれ」

と、わざといい放ってみる。

するとその沢庵が、

「まあ、はいれ」

と障子の外から紹由老人を引っぱり込み、光広と信尹の前へ来て、ぺたりと坐った。

「よう、これは、思いがけぬお連れではあるぞ。いよいよ、おもしろい」

灰屋紹由は、こういうと、さすがにいくら酔っていても、少しも崩れない薄い膝の角をそのまますずいと進めて、すぐ信尹の前へ手をさし出し、

「――お流れを」

と、辞儀した。

信尹はにやにや、

「船ばしの翁、いつも元気でよいのう」

「かんがん様のお連れが、お館とは露だに知らず……」

と、杯を返す手からもうこの古武士は、わざと酔いを誇張して酩酊した太郎冠者のように細い皺首を振りうごかした。

「……ゆ、ゆるされいお館。へ、平常の、ご無沙汰はご無沙汰、会った時は会った時、なんの……関白でお座ろうと、参議でござろうと……ハハハハ、のう沢庵坊」

と、またそばの坊主頭を脇へかかえ込み、信尹と光広の顔を指した。
「――世の中に、気の毒なものは、こ、このお公卿という人達じゃ。関白の、左大臣のと、よい名は貰うが、実はくれぬ。まだまだ町人が遙かましよ。……のう坊主、そう思わんかい」
沢庵も、この酔老人には、すこし辟易のていで、
「思う、思う」
と、彼の腕の中からやっと首を外して、自分の物にすると、
「これ、御坊からは、まだ戴いておらぬが」
と杯をせがむ。
そしてその杯を顔に乗せるように傾けて、また――
「なあ坊主、おぬしなどは狡い奴じゃぞ。――今の世の中で狡い人間は坊主、賢い者は町人、強い者は武家、おろかしき者は堂上方。……アハハハ、そじゃないか」
「そじゃ、そじゃ」
「好きなこともよう出来ず、さりとて政事からは戸閉めを喰い、せめて歌でも詠むか、書でも書くか。そこより他に力の出し場がないなどということが……アハハハハ、のう坊主、あろかいな」
飲んで騒ぐことなら光広も負けないし、雅談や酒の量なら信尹もおくれを取っていまいが、こういきなり捲し立てられたので、顔負けしたというか、さすがの二人も、この細ッこい闖入者のために、すっかり座興を攫われてしまった形で沈黙していた。
その図に乗って紹由は、

「太夫。……太夫はなんと思さるるな。たとえば、堂上方に惚れ召さるるか、それとも町人に惚れ召さるるか」

「ホ、ホ、ホ。まあ船ばし様が……」

「笑い事でない、真面目に女子の胸をたたいてみるのじゃ。ウウムそうか、いや読めた、やはり太夫も町人がよいというか。――さらばわしの部屋へ来い、さあ太夫は紹由が貰うて行く」

吉野太夫の手を自分の腕に納めて、この古武者、抜からぬ顔して起ちかけた。

四

光広はおどろいて、手の杯をこぼしながら下へ置き、

「戯れもほどこそあれ」

と、紹由の手を捥ぎ放して、吉野太夫を自分のそばへ抱え寄せた。

「なぜ、なぜ？」

紹由は、躍起となって、

「むりに連れて行くのではのうて、太夫が、来たそうな顔しているから連れて行くのじゃが。のう太夫」

間に挾まった吉野太夫は、ただ笑っているほかなかった。光広と紹由のふたりに左右の手を引っ張られて、

「まあ、なんとしようぞ」

と、困った顔をしていた。

ほん気な意地でも鞘当てでもないが、ほん気にも躍起にもなって困る者を困らせるのが遊びである。光広もなかなか肯かないし、紹由も決して退かない。そして吉野を両方の義理に挾んで、
「さあ太夫、どちらの座敷を勧めるか、この伊達引は、太夫の胸次第、太夫がなびきたい方へ靡くがよい」
と愈〻、彼女を困るような破目へ圧して、苛めにかかる。
「これはおもしろい」
と沢庵は、事の納まりをながめていた。いや眺めているばかりでなく、
「太夫、どっち へ随くのだ、どっちへ随くのだ」
と彼までが、側から気勢をケシかけて、この納まりを肴にして飲んでいた。
ただ温厚な近衛信尹だけが、さすがにお人柄を見せて、
「さてさて、意地の悪い客どもよな。それでは吉野も何れへともいえまいが、そう無理をいわずに、皆が仲よく一座してはどうじゃの」
と、助け舟を出し、
「そういえば、あちらの座敷には、光悦がただ一人で置き放しになっているというではないか。誰ぞ、光悦をここへ呼んで参れ」
と、ほかの女たちへいって、この場合を紛らせてしまおうとした。
紹由は、吉野のそばへ坐り込んでしまったまま、
「いやいや、呼びに行くには及ばない。わしが唯今、吉野を連れてあちらへ行く」
手を振って止めると、

「なんのなんの」
と、光広もまた、吉野をかかえて離そうとしないのである。
「小癪な公達めが」
と紹由は開き直って、酔いに燿いている眼と杯を突きつけて、光広へいった。
「ではいずれが、花の吉野へわけいるか。この女の眼の前で、酒戦ないたそう」
「酒戦とな。ことも可笑し」
光広はべつの大きな杯を高坏へ乗せて、ふたりの間へ置き、
「実盛どの、白髪を染めてござったか」
「なんのさ、骨細な公卿どのを相手にするに。——いざまいろう。勝負勝負」
「なんでまいるか。ただ交〻飲むだけでは、興もない」
「睨めっこ」
「やくたいもない」
「では貝合せ」
「あれは、汚い爺を相手にする遊戯びではない」
「憎いことを。しからば、じゃんけん！」
「よろしかろう。さあ」
「沢庵坊、行司行司」
「心得た」
ふたりは真顔になって、拳を闘わせた。一勝一敗のつくたびに、どっちかが、杯をのみ乾し、

その口惜しがりようを見て、みんなが笑い崩れるのだった。

吉野太夫はその間に、音もなく席を起って、松の位の裳を楚々と曳き、雪の廊下を奥ふかく姿を消してしまった。

五

これは相討ちとなるほかあるまい。どっちも酒にかけては一かどの巧者と強者、酒戦の勝負はいつ果つべしとも見えなかった。

吉野が去ると間もなく、

「わしも……」

急に思い立ったように、近衛信尹は館へ帰ってしまったし、行司の沢庵も眠くなったとみえ、無遠慮な欠伸を発してしまう。

それでもまだ二人は酒戦をやめない。勝手にやらせておいて沢庵も勝手に寝ころぶ。そして、近くにいた墨菊太夫の膝を見つけて、そこへ断りなしに頭をのせてしまう。

そのまま、うつらうつらしているのは快い気もちだったが、沢庵はふと、

城太郎とお通のことを思い出していた。

(淋しがっているだろうな、早く帰ってやりたいが)

その二人は、いま烏丸光広の館に世話されているのだった。伊勢の荒木田神主から届け物を頼まれて来て、城太郎の方は年暮から——お通はつい先頃から。

その先頃といえば。

いつぞや清水観音の音羽谷で、お通がお杉婆のために追われた晩――不意に沢庵があの場へお通を捜しに行ったというのにも、前からあんな不安を予知して、彼をそこに赴かせた理由のあったことなのである。

沢庵と烏丸光広とは、もう随分久しい交友であった。和歌に、禅に、酒に、悩みに、いわゆる道友の一人だった。

するとその友からこの間うち、

（どうだ、正月じゃないか、なにを好んで田舎の寺になどくすぶっていられるか。灘の銘酒、京の女、加茂の川千禽、都は恋しくないか。眠たいなら田舎で禅をなされ、生きた禅をなさるなら人中でなされ。その都を恋しく思ったら出て来られては如何）

と、そんな消息が来たので、沢庵はこの春上洛って来たのだった。

偶然、そこで彼は、城太郎少年を見かけた。館の内で毎日飽かずによく遊んでいる。光広に聴いてみると、しかじかという理。そこで城太郎を呼びよせ、詳しく聞いてみると、お通だけは元日の朝からお杉婆と共に婆の家へ行って、それきり便りもないし帰って来ないという事情がわかった。

（それは、とんでもないことだ）

沢庵はおどろいて、その日のうちに、お杉婆の宿を捜しに出かけ、三年坂の旅籠をやっと突きとめたのがもう夜のことで――それからいよいよ不安を感じ、旅籠の者に提燈を持たせて、清水堂へ捜しに出かけた理である。

あの晩、沢庵はお通を無事に連れて、烏丸の家へもどって来たが、お杉のために極度な恐怖を

経験させられたお通は、翌日から熱を病んで、今もって枕が上がらない。城太郎少年は枕元につき限りで、彼女の頭を水手拭で冷やしたり薬の番をしたりして、いじらしい程、看護に努めている――

「ふたりが、待っているだろうな」

だから沢庵は、なるべく早く帰ってやりたいと思っていたが、連れの光広は、帰るどころか、遊びはこれからだというように冴えている。

しかしさすがに、拳や酒戦も、やがて飽いて、勝負なしに今度は飲み始めたと思うと、膝つき合せて、なにか議論だった。

武家政治がどうとか、公卿の存在価値とか、町人と海外発展とか、問題は大きいらしい。

女の膝から、床ばしらへ移転して沢庵は眼をつぶって聞いている。眠っているのかと思うと、時々、ふたりの議論の端を耳にしてにやりと笑う。

そのうちに光広が、

「やっ、近衛どのは、いつの間に帰ってしもうたのか」

と、不平に醒め、紹由もまた、興ざめたように顔を革めて、

「それよりも、吉野がおらぬ」

と、いい出した。

「怪しからぬこと」

光広は、隅の方で居眠っていた禿のりん弥へ、

「吉野を呼んで来やい」

と、いいつけた。

りん弥は、眠たげな眼をまろくして、廊下を立って行った。そしてさっき光悦や紹由の通った座敷を何気なく覗くと、そこにたった一人、いつの間に戻って来たのか、武蔵が白い灯と顔を並べて、寂然と坐っていた。

六

「あれ、いつの間に。……ちっとも知らなかった、お帰りなさいませ」

りん弥の声に、武蔵が、

「今戻って来ました」

「さっきの裏口から？」

「うむ」

「どこへ行って来たんですか」

「廓外まで」

「いい人と、約束があったんでしょう、太夫様へいいつけて上げよう――」

ませた言葉に、武蔵は思わず笑って、

「皆様のすがたが見えぬが、皆様はどうなされたか」

「あちらで、かんがん様やお坊様と一緒になって、遊んでいらっしゃいます」

「光悦どのは」

「知りません」

「お帰りだろうか。光悦どのが帰られたら、拙者も帰りたいと思うが」
「いけません。ここへ来たら太夫様のおゆるしのないうちは帰られないんですよ。黙って帰ると、あなたも笑われますし、私も後で叱られます」
禿の冗談さえ、武蔵は、真顔になって聞いていた。そういうものかと信じているのである。
「ですから黙って帰っては嫌ですよ、私が来るまで、ここに待っていらっしゃい」
りん弥が出てゆくと、しばらく経って、そのりん弥から聞いたのであろう、沢庵がはいって来て、
「武蔵、どうした」
と、肩をたたいた。
「あっ？」
これはあっと驚くほどな出来事に違いない。さっきりん弥が、お坊様が来ているとはいったが、まさか沢庵であろうとは武蔵も思っていなかったのである。
「——しばらくでした」
座を辷って、武蔵が、両手をつかえると、沢庵はその手を握って、
「ここは遊びの里だ、あいさつはざっとにしよう。……光悦どのも共に来ているという話だが、光悦どのは見えないじゃないか」
「どこへ参られたやら？」
「捜して、一緒になろう。おぬしにはいろいろ話したいこともあるが、それは後にして」
いいながら、ふと沢庵が隣の襖を開けると、そこの炬燵布団へ小屏風を囲い、雪の夜を心ゆく

まで暖まりながら寝ている人がある。それが光悦だった。
あまり心地よげに寝ているので、揺り起すのも心なく思われたが、そっと顔を覗いているまに、光悦は自身から眼をさまし、沢庵と武蔵の顔を見くらべて、おや？と不審るような様子だった。
理を聞くと光悦も、
「あなたと、光広卿だけのお席なら、あちらへお邪魔してもよい」
と、打揃って、光広の席へもどって来た。
しかしもう光広も紹由も、遊びの興は尽きた態で、そろそろ歓楽の後の白けた寂しさが、誰の面にもただよいかけている。
酒もそうなるとほろ苦いし、唇だけがやたらに乾き、水を飲めば家が思い出されて来る。殊に、あれなり吉野太夫が姿を見せないのが、なんとしてももの足らない。
「戻ろうではないか」
「帰りましょう」
一人がいう時は、誰の気もちもそこに一致していた。なんの未練もないというよりは、これ以上、折角のよい気持が醒めるのを惧れるように、皆すぐ立った。
――すると。
禿のりん弥を先に立たせ、後から吉野太夫付きの引船（しんぞの称）二人、小走りに来て、一同の前に手をつかえ、
「お待たせいたしました。太夫様からのお言伝てには、漸々、お支度ができました程に、皆様を

お通しせよとのおことばにござりまする。お帰りもさることながら、雪の夜は更けても明るうございますし、このお寒さ、せめてお駕籠のうちも暖かにお戻り遊ばすよう、どうぞ、も少しの間、こちらでお飲しくださいませ」

と、思いがけない迎えである。

「はてな？」

——お待たせいたしましたとは何のことか、光広も紹由も、いっこう解せない顔つきで眼を見合わせた。

七

いちど興醒めた心は呼び戻しようもない気がする、それが遊びの世界であるがゆえに、よけいに気持の妥協がつかないのである。

（どうしたものか？）

迷っているらしい一同の顔いろを見ると、二人の引船はまた口をそろえていった。

「太夫様が仰っしゃるには、先刻からお席を外し、定めし情ない女子と皆様がお思いに違いない。けれどあのような困ったことはない。かんがん様の御意に任せれば、船ばし様のお心に反くし、船ばし様の仰せに従えば、かんがん様に済まないことになるし……。それゆえ黙ってお席を抜けて来たが、実は、おふた方ともにお顔の立つよう、こよいは改めて、吉野様が皆様をお客として迎え、自分のお部屋へお招きしたいという心組み。……どうぞそのお気持を酌んで上げて、もうしばらくお帰りをおのばし下さいませ」

こう聞いてみると、無碍に断って帰るのも、なんだか狭量に思われるだろうし、吉野が主人となって、自分たちを招くという心意気にも、べつな感興が唆られないこともない。
「参ってみようか」
「せっかく、太夫がそういうものを」
そこで、禿や引船に案内されて従いてゆくと、庭先へ鄙びた藁草履を五名分そろえる。やわらかな春の雪はその人々の藁草履で痕も残さず踏まれてゆく。
武蔵を除く以外の者は、すぐその趣向に、
（はは あ、招きは茶だな）
と、想像していた。
吉野が茶の道に嗜みのふかいことは今更のことではない。また、こういう後で一わんの薄茶も悪くないなどと思いながら行くと、やがて茶室の側も素通りして、どうやら裏庭のずっと奥の風情もない畑地まで来てしまった。
やや不安になって、
「これこれ、いったい麿たちをどこへ連れてゆくのじゃ。ここは桑畑ではないか」
光広が咎めた。
すると引船は、
「ホホホ、桑畑ではございませぬ。春の末には、毎年ここで皆様が床几でお遊びになる牡丹畑でございまする」
しかし、光広の不興げな顔は、寒さと併せて、いとど苦々しく、

「桑畑であろうと、牡丹畑であろうと、こう雪が降り積って、蕭条とした有様では同じことじゃ。吉野は麿たちに風邪を引かせる趣向か」
「おそれ入りました。その吉野様は先程から、そこでお待ちうけでございます。どうぞ、あれまでお徒歩いを」
見れば畑の隅に一軒の茅葺屋根が見える。この六条の里がまだ開けないうちからあったような純然たる百姓家だった。もちろん、後ろは冬木立に囲まれていて、扇屋の人工的な庭とは絶縁されているが、扇屋の地内であることは間違いない。
「さあ、こちらへ」
引船は、煤で黒くなっているそこの土間へはいって、一同を導き入れ、
「お越しでござりまする」
と奥へ告げる。
「ようこそ。——さあ、ご遠慮のう」
吉野の声が、障子の内で聞え、その障子に炉の火が赤々と映っていた。
「まるで都を遠く離れてでも来たような……」
と、人々は、土間先の壁にかけてある蓑笠など見まわしつつ、そも吉野太夫が、どんな亭主ぶりで款待すことやらと、順に部屋へはいって行った。

牡丹を焚く

一

浅黄無地の着物に、黒じゅすの帯をしめ、髪もつつましやかな女房髷に結い直し、薄化粧して、吉野は客を迎え入れた。
「ほう、これは」
「また、艶やかな」
と、一同は彼女のすがたを見ていった。
金屏銀燭のまえに、桃山刺繍のうちかけを着、玉虫色のくちびるを嫣然と誇示している時の吉野太夫よりも、この煤んだ百姓家の壁と炉のそばで、あっさりと浅黄木綿を着ている彼女のほうが、百倍も美しく見えたのであった。
「ウウム、これはまた、がらりと、気が変ってよい」
あまり物を賞めない紹由も、ちょっと毒舌を封じられた態である。敷物もわざと用いず、吉野はただ田舎炉のそばへ一同を招じて、
「ごらんの通りな山家のこと、何もおかまいはできませぬが、雪の夜の馳走には、賤の夫から富者貴顕に至るまで、火に勝る馳走はないかとぞんじまして、このように、焚火の支度だけは沢山

にしておきました。夜もすがら語り明そうとも、薪だけは、鉢の木を燻べずとも、尽きる気づかいはございませぬゆえ、お心やすくおあたり下さいまし」

と、いう。

なる程——

寒い所を歩かせて来てここで榾火にあたらせる。馳走というのはそういう趣向であったのかと光悦もうなずき、紹由や光広や沢庵も膝をくつろぎ、各〻が炉の榾火に手をかざしていると、

「さ、そちらのお方も」

と、吉野が少し席を頒けて、うしろにいる武蔵を眼で招いた。

四角な炉を、六人して囲むので、自然緩やかではあり得ない。

武蔵はさっきから、ひどく律義に畏まっていた。日本の民衆の中では今、太閤秀吉や大御所の名に次いで、初代吉野の嬌名は鳴りひびいていた。出雲の阿国よりも、高級な女性として敬愛を持っていたし、大坂城の淀君よりも、才色があって親しみもあるという点で、ずっと有名だった。

だから彼女に接する者は、買う客のほうが「買手共」と呼ばれ、才色を売る彼女のほうは「太夫様」と称されていた。風呂に入るにも七人の侍女に湯を汲ませ、爪を切るにも二人の引船を侍らせているという生活などもかねがね聞いていたことである。——けれど、そういう有名な女性を相手にして遊んでいる光悦や紹由や光広などの、ここにいる買手共は、いったいなにがこれで面白いのだろうか？　——武蔵には、いくら眺めていても、まるで分らなかった。

しかしその、面白そうでもない遊びのうちにも、客の作法とか、女性の礼儀とか、双方の心意

気とかいうようなものは、厳然とあるらしいので、まるで不勝手な武蔵は、いきおい固くなっているほかなく、殊に、脂粉の世界には初めて足を踏み入れたことでもあり、吉野の明眸にちらと射られても顔が熱くなって、胸の鼓動も怪しげに鳴るのだった。
「なぜ、あなただけ、そうご遠慮なさるのですか。ここへお出でなされませ」
吉野に幾度もいわれて、
「は。……では」
悒々と、武蔵は彼女のそばへ座を占め、一同に倣って、ぎごちなく両手を炉へかざした。
彼が自分のそばへ坐る機に、吉野は彼の袂の端をちらりと見ていたが、やがて人々が話に興じて紛れ出したところを見はからい、そっと懐紙を持って、武蔵の袂の端をそれで絞るように拭いていた。
「あ、恐れ入ります」
武蔵が澄ましていれば誰も気づかなかったのに、彼が、自分の袂をのぞいて、こう礼をいったので、皆の眼が、ふと吉野の手へ移った。
彼女の手に畳まれた懐紙には、べっとりと、赤いものが拭きとられていた。
光広は、眼をそばだてて、
「ヤ！　血ではないか」
と、口走った。
吉野はほほ笑んで、
「いいえ、緋牡丹の一片でございましょう」

と、澄ましていた。

二

各々が、一つずつ杯を持って、好む程度に、それを愛し合っていた。炉に燃える榾火は、炉をかこんでいる六名の面へ、やわらかな明滅となって揺らぎ、戸外の雪をしのびながら、その焔を見つめ合って、みな、黙思に耽っているのであった。

「…………」

榾の火が乏しくなると、吉野は傍らの炭籠のような物の中から、一尺ほどに揃えて切ってある細い薪を取って焚べ足した。

——ふと、そのうちに人々は、彼女の焚べている細い枯木が、ただの松薪や雑木のようでなく、まことによく燃える木であることに気づいた。いや、燃えのよいばかりでなく、その焔の色が、実に美しいのに見惚れてしまった。

（おや、この薪は）

と、誰かが注意はしていたが、誰もが皆黙っているのは、その焔の麗しさに恍惚と心を奪われていたからであろう。

わずか四、五本の細い薪で、部屋中は白昼色になっていた。

その薪から立つやわらかな焔は、ちょうど白牡丹の風に吹かれているようで、時折、紫金色の光と鮮紅な炎とが入り交じって、めらめらと燃え狂うのであった。

「太夫」

ついに、一人が口を開いて、
「そなたが焚べておるその薪のう——それはいったい何の木じゃ、ただの榾とも思えぬが？……」
光広が、こう訊ね出した時は、その光広も他の人々も、なにやら薫わしいものが、この温かい部屋いっぱいに立籠めているのを感じ出していたのである。それもたしかに、この木の燃える匂いらしかった。
「牡丹の樹でございます」
と、吉野はいった。
「え、牡丹？……」
これは誰しも意外らしかった。牡丹といえば草花のように思っているので、こんな薪になるほどな樹があろうかと疑えて来るのだった。吉野は、焚べかけた一枝を、光広の手にわたして、
「ご覧じませ」
と、いう。
光広は、それを紹由や光悦の眼にも示して、
「なるほど、これは牡丹の枝だ。……道理で……」
と、呻いた。
そこで吉野が説明していうには、この扇屋の囲いの中にある牡丹畑は、扇屋の建つよりもずっと以前からあるもので、百年以上も経った牡丹の古株がたくさんある。その古株から新しい花を咲かせるには、毎年、冬にかかるころ、虫の蝕いた古株を截って、新芽の育つように剪定してや

る。——薪はその時に出来るのであるが、もちろん、雑木のように沢山は出来ない。
これを短く切って炉に焚べてみると、炎はやわらかいし眼には美しいし、また、瞼にしみる煙もなく、薫々とよい香りさえする。さすがに花の王者といわれるだけあって、枯れ木となって薪にされても、凡の雑木とは、この通り違うところを見ると、質の真価というものは、植物でも人間でも争えないもので、生きている間の花は咲かせても、死してから後まで、この牡丹の薪ぐらいな真価を持っている人間がどれほどありましょうか？——
と、吉野は話し終って、
「そういう私なども、生きている間はおろか、ほんの、若いうちだけ見られて枯れて、後は香もない白骨になる花ですけれど……」
と、淋しげに微笑んだ。

三

牡丹の火は、白々と燃えさかり、炉辺の人々は、更ける夜を、つい忘れていた。
「なにもありませぬが、ここに灘の銘酒と、牡丹の薪だけは、夜が尽きても尽きないほどございますから」
という吉野のもてなしぶりに、人々はすっかり満足して、
「なにもないどころか、これは王者の奢りにも勝る」
と、どんな贅沢事にも飽いている灰屋紹由すらが、神妙に感嘆してしまう。
「その代りに、なんぞ、後の思い出となるように、これへ一筆ずつ、お残し下さいませ」

と吉野が、硯を寄せて、墨をおろしている間に、禿は次の部屋へ毛氈をのべ、そこへ唐紙を展げて行った。

「沢庵坊、太夫がせっかくの求めじゃ。なんぞ書いてつかわされい」

光広が、吉野に代って促すと沢庵はうなずきながら、

「まず、光悦どのから」

といった。

光悦は、黙って、紙の前へ膝をすすめ、牡丹の花を一輪描いた。

沢庵はその上に、

　色香なき身をば
　なにかは惜まし
　をしむ花さへ
　ちりてゆくよに

彼が歌を書いたので、光広はわざと詩を書いた。その詩は、

忙裏　山我ヲ看ル
閑中　我山ヲ看ル
相看レド相似ルニアラズ
忙ハ総テ閑ニ及バズ

という戴文公の詩であった。

吉野もすすめられて、沢庵の歌のすこし下へ、

咲きつつも
何やら花のさびしきは
散りなん後を
おもふ心か

と、素直に書いて筆を擱いた。
紹由と武蔵とは、黙って見ていただけである。悪強いして無理に筆を持たせる者などがいなかったのは、武蔵にとっては幸いであった。
そのうちに紹由は、次の間の床わきに、一面の琵琶が立てかけてあるのを見つけ、吉野に琵琶を所望した。彼女の弾じる一曲を聞いて、それを機に、今夜の散会としようではないかと提議する。
人々が、
「それこそ、是非に」
と求めると、吉野は悪びれぬ態で、すぐ琵琶を抱えた。それが、芸のあるを誇るという風でもないし、また芸がありながらひどく謙譲ぶるといったような嫌味でもなかった。いかにも素直なのである。
炉を離れて、次の間の仄暗い畳の中ほどに、彼女は、琵琶を抱いて坐った。炉辺の人々は、心をすまして、彼女の弾く平家の一節に、沈黙していた。
炉の炎が衰えて、暗くなりかけても、炉へ薪をくべ足すことを誰も皆忘れて聞き恍れていた。
四絃のこまやかな音階が突として、急調になり破調に変ってくるかと思うと、消えかけていた炉

の火もにわかに焔を上げて、人々の心を遠くから近くへ呼びもどした。

曲が終ると、吉野は、

「ふつつかな技を」

と、微笑しながら、琵琶を置いて、元の席へもどって来た。

それを機に、みんな炉を立って、帰りかけた。武蔵はもちろん、空虚から救われたように、ほっとした顔つきで、誰よりも先に、土間へ降りていた。

吉野は、彼を除いた以外の客へは皆、いちいち帰りの挨拶を交わしたが、武蔵にだけは、なにもいわなかった。

そして、他の人々に従いて、武蔵も一緒にそこから戻ろうとすると、吉野は、彼の袂をそっととらえて、

「武蔵さま、貴方は、ここへお泊りなさいませ。なんとのう、今夜はお帰し申しとうございませぬ」

とささやいた。

四

武蔵は、処女のように、顔を赤らめた。聞えない振りを装っても、どぎまぎして、答えに困っている様子が、側の人達の眼にも見えた。

「……ね、よろしいのでございましょう。このお方を、お泊め申しても」

吉野は、紹由へ向って、今度はそう訊いた。紹由は、

「よいともよいとも。たんと、可愛がってやって下され。わしらが、無下に連れ戻る筋合いはない。のう光悦どの」

武蔵はあわてて、吉野の手を振り払い、

「いや、私も、帰ります。光悦どのとご一緒に」

戸の外へ、無理に出ようとすると、どういう考えか、光悦までが、

「武蔵どの、まあそう仰っしゃらずに、今夜はここへお泊まりになって、明日、よい機にお引揚げになってはいかがですか。——太夫もせっかく、ああいって、心配しているのですから」

と一緒になって、彼一人を、ここへ残して行こうとするのである。

遊びの世界にも、女性というものにも、まったく初心な未経験者を一人ぼっち残して置いて、後で笑いの種にしようという、この大人達の計画的な悪洒落ではないかと、武蔵は邪推してみたが、吉野や光悦の真面目な顔を見ると、決して、そんな戯れごとども思えない。

もっとも、吉野と光悦以外の人達は、武蔵が困っている態を興がって、

「日本随一の果報者よ」

とか、

「わしが身代りになってもよいが——」

などと揶揄ったりしていたが、やがて、その人々の戯れ口も、裏垣根の門から駈け込んで来た一人の男のことばに、冗談口を塞がれて、

（さては）

と、今更のように気づいたことであった。

ここへ駈けて来た男は、吉野のいいつけを受けて、遊廓の外へ、様子を探りに行って来た扇屋の雇人であった。いつの間に、吉野がそんな周到な気くばりを働かせていたのかと人々は驚いていたが、光悦だけは、昼間から武蔵と行動を共にしていたし、また、吉野がさっき炉の側で、武蔵の袂についていていた血しおをそっと拭き除ってやっていた時に、すべてを、察知していたらしかった。

「ほかのお方はとも角、武蔵様だけは、迂かつに遊廓の外へ出られませぬぞ」

と、探って来たその男は、息を弾ませて、吉野太夫へも、他の人々へも、目撃して来た事実を、多少誇張しているのではないかと思われるくらいな口吻で告げるのであった。

「――もうこの遊廓の門は、一方口しか開いておりません。その総門を挾んで、編笠茶屋の辺にもあれから柳並木の物蔭にも、すごい身支度をしたお武家たちが、眼を光らせ、あっちこっちに五人、十人ぐらいずつ、黒々とかたまって立っています。……それがみんな四条の吉岡道場の門人だといって、あの近所の酒屋でも商人家でも、今になにが起るのかと、戸をおろして顫えているんで。……いや、もう大変なことですよ。なんでも遊廓から馬場の方にかけて、百名ぐらいは来ているだろうというううわさですぜ」

そう報告する男が、がちがちと奥歯を顫わせていうことであるから、話し半分として聞いても、事態の容易でないことは争えなかった。

「ご苦労だった。もうよいからお休み」

その男を退けると、吉野はまた武蔵へいった。

「今のようなことを聞けば、あなたはよけいに、卑怯者といわれたくないと思い、死んでも帰る

と仰っしゃるかも知れませんが、そんな逸り気はやめて下さいませ。こん夜卑怯者といわれてもあした卑怯者でなければよいではございませんか。まして今夜はお遊びに来たはずでございましょう。遊ぶ時は遊び限るのがむしろ男の余裕というものではございますまいか。――相手方はあなたの帰るのを待ちうけて、闇討ちにしようとしているので、それを避けたからといって、なんの名折れでもありませぬ。そこへ進んで打つかってゆくのは、かえって、思慮のない者といわれるばかりか、この遊廓でも迷惑をしますし、ご一緒に出れば、お連れの方々にも、巻きぞえを受けて、どんなお怪我のない限りもございませぬ。そこをお考え遊ばして、こん夜は、この吉野に、あなたのお体を預けてくださいませ。……吉野がきっとお預かりいたしましたほどに、皆様には途中お気をつけて、お引揚げ下さいますように」

断絃

一

もうこの世界でも起きている青楼はないらしい。ばったりと絃歌の音もやんでしまった。丑満の告げはさっき鳴ったように思う。一同が引揚げてからでもやや一刻余りは経つ……

そのまま、夜明けを待つつもりなのか、武蔵は、ぽつねんと、土間の上がり框に腰をかけていた。

を焚べていた。
　吉野は、客がいた時も、去ってしまった今も、同じように同じ位置に坐って、炉へ、牡丹の木
――ただ一人、擒人にでもなっているようにである。
「そこでは、お寒うございましょうに。炉へお寄りなされませ」
　この言葉は、彼女の口から幾度も繰返されていわれたが、武蔵はその都度、
「お関いなく、先へお寝み下さい。夜が明け次第に、拙者は自由に帰りますから」
と、固辞するばかりで、吉野の顔をよく見ないのである。
　二人きりになると、吉野もまたなんとなく羞恥み勝ちになって、口も重くなった。異性を異性
と感じるようでは傾城の勤めは出来まいが――などという考えは、安女郎の世界だけを知って、
松の位の太夫というものの育ちも躾も知らない低い買手どもの常識である。
　とはいえ、朝に夕べに、異性を見ている吉野と、武蔵とでは、比較にならない程な相違はあ
る。実際の年齢からいっても、吉野のほうが、武蔵より一つか二つ上かも知れないが、情痴の見
聞や、それを感じたり弁えたりしていることでは、当然、彼女のほうが遙かに年上の姉といえ
る。――しかし、そうした彼女にしても、たった二人きりな深夜の相手が、自分の顔を見るのも
眩そうに、動悸を抑えて、じっとそこに固くなっていると、自分もともに処女心に返って、相手
の者と同じような初心な動悸を覚えるのだった。
　事情を知らない引船と禿は、さっきここを出て行く前に、次の部屋へ、大名の姫君でも臥せる
ような豪奢な夜の具を敷いて行った。繻子枕に下がっている金の鈴が、ほの暗い閨の気配のうち
に光っていた。――それもまた、ふたりの寛ぎをかえって邪魔していた。

ときおり、屋根の雪や梢の雪が落ちて、どさっと、地響きが耳を驚かせた。塀の上から人間でも跳び降りたように、その音は大きく聞えるのであった。

「……？」

吉野は、そっと武蔵を見た。――武蔵の影はその度に、針鼠のように戦気で膨らむかと見えた。眸は鷹のように澄みきっている。神経は、髪の毛の先まで働いているのだ。何物にもあれ、そんな時、彼の体に触れるものはみな斬れてしまわずにはいないであろうと思われた。

「…………」

「…………」

吉野は、なにかしら、ぞっとして来た。夜明け近くの寒さは骨の髄まで沁みる。しかしそれとはちがう戦慄である。

そういう戦慄と、異性へ搏つ動悸と、ふたつの血の音が、沈黙の底を、交〻に駆けていた。そのふたりの間に、牡丹の火はあくまで燃えつづけているのである。そして――彼女がその火の上にかけた釜の口から、やがて松風が沸りだすと、吉野の心は、いつもの落着きに返って、静かに、茶の点前にかかっていた。

「もう程なく夜も明けましょう……武蔵様。いっぷくあがって、此方で、手なりとお焙りなされませ」

二

「ありがとう」

言葉だけで、ちょっと会釈したまま、武蔵は依然と、背を向けていた。
「……どうぞ」
と勧める方の吉野も、これ以上は、諄くも当るので、ついにはまた黙ってしまうほかはない。せっかく、心をこめて立てた茶も、帛紗のうえで冷えてしまう。──吉野は、ふと、腹を立てたのか、それとも、よしなき田舎者に、無用のことをと考えたのか帛紗を引いて、茶碗の茶を、傍らの湯こぼしへ捨ててしまった。
──そしてじっと、愍れむような眼を武蔵へ向けた。相変らず武蔵の姿は、背中から見ても身体じゅうを鉄の鎧で固めているように、一分の隙も見えなかった。
「もし、武蔵さま」
「なんですか」
「あなたはそうやって、誰に備えているのですか」
「誰にではない、自身の油断を誡めている」
「敵には」
「元よりのこと」
「それでは、もしここへ、吉岡様の門人衆が、大勢して、どっと襲せて来た時には、あなたは立ちどころに、斬られてしまうに違いない。わたくしにはそう思えてなりませぬ。なんというお気の毒なお方であろ」
「……？」
「武蔵さま。女のわたくしには、兵法などという道は分りませぬが、宵の頃から、あなたの所作

や眼ざしを窺っていると、今にも斬られて死ぬ人のように見えてならないのです。いわば、あなたの面には死相が満ちているといってよいかも知れません。いったい、武者修行とか、兵法者とかいって世に立ってゆくお方が、大勢の刃を前に控えながら、そんなことでよいものでございましょうか。そんなことでも人に勝てるものでございまするか」

詰問るように、吉野が、こう畳みかけて、言葉のうえで彼を愍殺したばかりでなく、その小心さを蔑むように微笑んでいったので、

「なに」

武蔵は、土間から脚を上げて、彼女の坐っている炉前にぴたと坐り直した。

「吉野どの、この武蔵を未熟者だと笑うたな」

「お怒りなされましたか」

「いうた者が女だ。怒りもせぬが、拙者の所作が、今にも斬られる人間に見えてならぬとはどういう理か」

怒らぬといいながらも、武蔵の眼は、決して、生やさしい光ではなかった。こうして夜明けを待っていても、自分をつつむ吉岡門の呪咀や、策や刃ものを磨している気配は、全身に感じている武蔵であった。それは何も、吉野が探りにやって知らせてくれないでも、その前から予め彼自身は覚悟に持っていたことである。

蓮華王院の境内から、あのまま他へ姿をかくすことも考えないでもなかったが、それでは、連れの光悦へ非礼に当るし、また禿のりん弥へ、帰って来るといった言葉が嘘になる。同時に、吉岡方の仕返しを怖れて姿をかくしたと、沙汰されては心外とも考えたりして、再び扇屋へ戻っ

て、なんのこともなかったように、彼の人々と同席していたのだった。それは武蔵として、かなり苦痛な辛抱でもあったし、自分の余裕を示していたつもりであったのに、なんで吉野は、その間の自分の挙止をながめて、未熟だと笑うのか、死相が面に見えるような――と罵るのか。

傾城の戯れ口ならば咎めるまでもないが、なにか心得があっていうことならば、これも聞き捨てにならないことと彼は思う。たとえ今、この家を包む剣の林の中であっても、開き直って、その理を問い究めて見なければならないと、思わず真率な眼を輝かせて、武蔵は強く詰問ったのであった。

三

ただの眼ではない、そのまま刀の先へつけてもいい眼が、じいっと吉野の白い顔を正視して、彼女の答えを待っているのである。

「――戯れか！」

容易に開かない唇へ、武蔵がこう少し激しかかると吉野は、消していた笑靨をまたちらと見せ、

「なんの――」

嬌やかに、頭を振って、

「かりそめにも、兵法者の武蔵さまへ、今のような言葉、なんで戯れ言に申しましょうか」

「では、聴かせい。どうして拙者の身が、そなたの眼には、すぐ敵に斬られそうなと、そんな脆い未熟な体に見えるのか。――その理を」

「それほどお訊ねならば、申してみましょう。武蔵さま、あなたは先刻、吉野が皆様へのお慰みに弾いた琵琶の音を聴いておいで遊ばしましたか？」
「琵琶を。あれと拙者の身と、なんの関わりがある」
「お訊ねしたのが愚かでした。始終何ものかへ、張り緊めていたあなたのお耳には、あの一曲のうちに奏でられた複雑かな音の種々も、恐らくお聴き分けはなかったかも知れませぬ」
「いや、聴いていた。それほど、うつつにはおらぬ」
「では、あの――大絃、中絃、清絃、遊絃のわずか四つしかない絃から、どうしてあのように強い調子や、緩やかな調子や、種々な音色が、自由自在に鳴り出るのでしょうか。そこまでお聴き分けなさいましたか」
「要らぬことであろう。拙者はただ、そなたの語る平曲の熊野を聴いていただけのこと、それ以上なにを聴こう」
「仰せの通りです。それでよいのでございますが、わたくしは今ここで琵琶を一箇の人間として喩えてみたいのでございます。――で、ざっとお考えなされても、わずか四つの絃と板の胴とから、あのように数多い音が鳴り出るというのは、不思議なことでございませぬか。その千変万化の音階を、譜の名で申し上げるよりも、あなたもご存じでございましょう、白楽天の『琵琶行』という詩のうちに、琵琶の音いろがよく形容されてありました。――それは」
　吉野は、細い眉をちょっとひそめながら、詩を歌う節でもなく、そうかといって、ただの言葉でもない低声で、
　　大絃は嘈々　急雨の如く

小絃は切々　私語の如し
嘈々切々　錯雑に弾ずれば
大珠小珠　玉盤に落つ
間関たる鶯語　花底に滑か
幽咽　泉流　水　灘を下る
水泉冷渋　絃凝絶し
凝絶して通ぜず　声暫し歇む
別に幽愁　暗恨の生ずる有
此時声なきは　声あるに勝る
銀缾乍ち破れて　水漿　迸り
鉄騎突出して　刀槍鳴る
曲終って撥をおさめ　心に当てて画す
四絃一声　裂帛のごとし

「——このように一面の琵琶が複雑な音を生みまする。わたくしは禿の頃から、琵琶の体が、不思議で不思議でなりませんでした。そしてついには、自分で琵琶を壊し、また自分で琵琶を作ってみたりするうちに、おろかなわたくしにも、とうとう琵琶の体の裡にある琵琶の心を見つけました」

そこで言葉を切ると、吉野はそっと立って、さっき弾いた琵琶をかかえて来て再びそこへ坐った。海老尾を軽く持って、武蔵と自分の間に、それを立てて眺めやりながら、

「ふしぎな音色も、この板の体を割って、琵琶の心を覗いてみるとなんのふしぎでもないことがわかりまする。それをあなたへお目にかけましょう」

薙刀の折れでもあるような細い鉈が、彼女の嫋やかな手に振上げられた。あっと、武蔵が息を嚥む間に、はやその鉈の刃は、琵琶の角へ深く入っていた。袈裟板のあたりから桑胴の下まで、丁々と、三打ち四打ち、血の出るような刃音だった。武蔵は自分の骨へ鉈を加えられたような痛みを覚えた。

しかし、吉野は惜し気もなく、見る間に琵琶の体を縦に裂いてしまっていた。

四

「ご覧じませ」

吉野は、鉈をうしろへかくすと、もうさり気ない微笑みを泛べて武蔵へいった。

生々しい木肌を剝出して、裂かれた琵琶の胴は胴の中の構造を、明らさまに燈の下に晒している。

「……？」

武蔵は、それと吉野の面とを見較べて、この女性のどこに、今のような烈しい気性があるのかと疑った。武蔵の頭脳にはまだ今の鉈の音が消えさらないで、どこかが痛いように疼いているのに、吉野の頰は紅くもなっていなかった。

「この通り、琵琶の中は、空虚も同じでございましょうが。では、あの種々な音の変化はどこから起るのかと思いますと、この胴の中に架してある横木ひとつでございまする。この横木こそ、

琵琶の体を持ち支えている骨であり、臓でもあり、心でもありまする。——なれど、この横木とても、ただ頑丈に真っ直に、胴を張り緊めているだけでは、なんの曲もございませぬ。その変化を生むために横木には、このようにわざと抑揚の波を削りつけてあるのでございまする。——ところが、それでもまだ真の音色というものは出てまいりません。真の音色はどこからといえば——この横木の両端の力を、程よく削ぎ取ってある弛みから生れてくるのでございまする。——わたくしが、粗末ながらこの一面の琵琶を砕いて、あなたに分っていただきたいと思う点は——つまりわたくし達人間の生きてゆく心構えも、この琵琶と似たものではなかろうかと思うことでござりまする」

「…………」

武蔵の眸は、琵琶の胴からうごかなかった。

「それくらいなこと誰でも分りきっていることのようで、実はなかなか琵琶の横木ほども、お肚に据えていられないのが人間でございますまいか。——四絃に一撥打てば、刀槍も鳴り、雲も裂けるような、あの強い調子を生む胴の裡には、こうした横木の弛みと緊まりとが、程よく加減されてあるのを見て、わたくしは或る時、これを人の日常として、沁々、思い当ったことがあったのでございまする。……そのことを、ふと、今宵のあなたの身の上に寄せて考え合わせてみると……ああ、これは危ういお人、張り緊まっているだけで、弛みといっては、微塵もない。……もしこういう琵琶があったとして、それへ撥を当てるとしたら、音の自由とか変化はもとよりなく、無理に弾けば、きっと絃は断れ、胴は裂けてしまうであろうに……、こうわたくしは、失礼ながらあなたのご様子を見て、密にお案じ申していたわけなのでござりまする。決して、ただ悪

しざまに申したり、戯れ口を弄んだ次第ではありませぬ。どうぞ、烏滸がましい女の取越し苦労と、お聞き流し下さいませ」

——鶏の声が遠くでしていた。

戸の隙まから、雪のために強い朝の陽がもう射していたのである。

白い木屑と断れた四絃の残骸を見つめたまま、武蔵は、鶏の声も耳に覚えなかった。戸の隙まから陽の光がさしていたのにも気づかなかった。

「……お。いつの間にか」

吉野は、夜明けを惜しむように炉の火へ焚木を足そうとしたが、牡丹の木はもうなかった。

戸を開ける物音や、小禽のさえずりや、朝の気配が遠い世間のようにきこえる。

けれど吉野は、いつまでも、ここの雨戸を開けようとはしない。牡丹の木はなくっても、彼女の血はまだ温かだった。

禿や引船も、彼女が呼ばないうちは、ここの戸を無断で開けて入ってくるはずもなかった。

春を病む人

一

あわただしく解け去った春の雪であった。おとといの降りはもう痕かたもない。急につよく感

じられる陽に、今日は綿の物は肌から皆捨ててしまいたくなった。温い風に騎って、春はいっさんに駈けつけて来たかのように、すべての植物の芽を鮮らかに膨らませていた。
「たのもう。物もうす」
背まで泥濘の刎ねを上げている若い旅の禅坊主だった。
烏丸家の玄関に立ち、さっきから、大声でこう申し入れていたが、出て来る者がないので、雑掌部屋の外へ廻り、そこの窓から背伸びして覗いていると、
「なんだい？　お坊さん」
後ろからいう少年があった。
禅坊主は振向いたが、
（お前こそ何者だ？）
と問いたげな眼をして、その奇態な風態の子供を見まもった。
烏丸光広卿の館の中に、どうしてこんな童がいるのか、その不調和に眼をみはったのであろう。禅坊主は変な顔したまま、じろじろと城太郎の姿ばかり見ていて物をいわないのである。
相変らず長い木剣を腰に横たえ、なにを入れているのか、懐中を大きく膨らませて、その上を城太郎は手で抑えながら、
「お坊さん、お施米をもらうなら台所の方へ廻らなければだめだよ。裏門を知らないのかい」
と、いった。
「お施米。――そんな物をいただきに来たのじゃない」
若い禅坊主は、自分の胸にかけている文筥を眼で示し、

「わしは、泉州の南宗寺の者だが、このお館へ来ている宗彭沢庵どのへ、急な御書面をお届けするために出て来たのだ。おまえは、お台所へ出入りの小僧か」
「おいらか、おいらはここに泊っている者だよ。沢庵様と同じお客様なんだ」
「ほうそうか、然らば沢庵どのへ告げてくれぬか。――御国元の但馬から寺中へ宛てて、なにか、火急なお手紙がまいりましたゆえ、南宗寺の者が持って伺いましたと」
「じゃあ待ッといで。今、沢庵さんを、呼んで来てやるから」
城太郎は玄関へ飛び上がった。汚い踵の痕が式台にべたべた残る。そこの衝立の脚に躓いた弾みに、彼が手で抑えていたふところの中から、小さい蜜柑が幾つも転がり出した。
あわてて、蜜柑を掻きあつめ、城太郎は往来を飛ぶように奥へ駈けて行った。ややしばらく経って彼はまたそこへ戻って来て、
「いないよ」
と、待っている南宗寺の使いへいった。
「いるかと思ったら、きょうは、朝から大徳寺へ行ったんだとさ」
「お帰りは分りませぬか」
「もう帰って来るだろ」
「では、待たせて置いてもらいます。どこかお邪魔にならないお部屋はありませんか」
「あるよ」
城太郎は外へ出て来た。この館のことならなんでも弁えているように、心得顔して先に歩き、
「お坊さん、この中で待っているといいよ。ここの中なら邪魔にならないから」

と、牛小屋へ案内した。

藁だの、牛車の輪だの、牛の糞だのが、いっぱいに散らかっている。南宗寺の使いは驚いた顔したが、城太郎はもう客を置いて彼方へ駈け出していた。

広い邸内を庭づたいに走り、「西の屋」の陽あたりのよい一間を覗いて、

「――お通さん、蜜柑買って来たよ」

と、さけんだ。

二

薬を服んでいるし、手当も十分なはずなのに、どうしたのか、こんどの熱症はさがらない。

従って、食慾がなかった。

自分の面へ手が触れるたびに、お通は、

（ああ、こんなに痩せて）

と、ふと驚く。

病気というような病気は自分でもないと信じているし、見舞ってくれた烏丸家の医師も、心配はないと保証していたが、どうしてこう痩せてしまうのかしら――そこについ神経質な悩みと熱症がからむ。しきりに、唇が乾くので、

（蜜柑が喰べたい）

と、ふと洩らしたところ、この数日来、なんにも喰べないでいる彼女の容態をひどく心配していた城太郎は、

（蜜柑——）

と、問い返すと、早速、それを取りに、先刻ここを出て行ったのであった。

台所の役人に聞いたところが、蜜柑などはお館にもないという。それから外へ出て、青物店だの食べ物屋を見て歩いたが、どこにも蜜柑はなかった。

京極の原に、市が立っていた。彼はそこへも行って、

（蜜柑はないか、蜜柑はないか）

と、捜し歩いたが、絹糸だの、木綿だの、油だの、毛皮だの、そんな店ばかり出ていて、蜜柑など一つだって見つからなかった。

城太郎は、どうかして、彼女の喰べたいという蜜柑を手に入れたいと思った。よその屋敷の塀の上に稀々、その蜜柑があったと思って、盗んでもほしい気がして寄って見ると、それは橙であったり、喰べられない花梨の実であった。

京都の町を、半分も捜してあるいた。すると、あるお社の拝殿にその蜜柑が見つかった。芋だの人参だのといっしょに、三方に載って、神前に上がっていたのである。城太郎は蜜柑だけ懐中に詰めこんで逃げて来たのだった。うしろから神様が、

（泥棒、泥棒）

と追いかけて来るような気持がした。城太郎は、それが怖くなって、

（私は喰べませんから、罰をあてないでください）

と、烏丸家の門の中へ逃げ込むまで、胸の中で謝っていた。

けれど、お通には、そんなことは話せない。枕元へ坐って、懐中の蜜柑を出して一つずつなら

べて見せ、そのうちの一個を取ってさっそく、
「お通さん、うまそうだぜ、喰べてごらん」
皮を剝いて、彼女の手に持たせてやると、お通は、なにかつよい感情に衝かれたとみえ、顔を横にかくしたまま、蜜柑は喰べようともしないのであった。
「どうしたのさ」
城太郎は、その顔をのぞきこんだ。
厭うように、お通は、よけいに枕へ顔を埋めてしまい、
「……どうもしやしない。どうもしやしない」
といった。
城太郎は、舌打ちして、
「また、泣虫が始まったね。歓ぶかと思って蜜柑を買って来たら、泣いちまうんだもの——つまらねえなあ」
「ごめんよ。城太さん」
「喰べないの」
「……ええ後で」
「剝いたのだけ喰べてみなよ。ね……喰べてみれば、きっと、美味しいよ」
「美味しいでしょう、城太さんの気持だけでも。……だけど喰べ物を見ると、もう唇へ入れる気にならないんです。……勿体ないけれど」
「泣くからさ。なにがそんなに悲しいの」

「城太さんが、あんまり親切にしてくれるから、欣しくって」
「泣いちゃ厭だなあ、おいらも泣きたくなっちまわあ」
「もう泣かない……もう泣かない……。かんにんしてね」
「じゃ、それ喰べてくれる。なにか喰べないと、死んじまうぜ」
「わたし、後でいただきます。城太さんお喰べ」
「おいらは、喰べない」
神さまの眼を恐れて、城太郎はそういいながら生唾をのんだ。

三

「いつも、城太さん、蜜柑は好きじゃないの？」
「好きだけれど」
「どうして、きょうは、喰べないの」
「どうしてでも」
「わたしが喰べないから？」
「え。……ああ」
「じゃあ、わたしも喰べるから……城太さんも、おあがり」
お通は、顔を仰向けに直して、細い指で、蜜柑のふくろの繊維を除っている。城太郎は、困った顔して、
「ほんとはね、お通さん、おいら、途中でもう、たくさん喰べて来たんだよ」

「……そう」
乾いている唇へ蜜柑の一ふさを含みながら、お通はうつつのようにいった。
「沢庵さんは？」
「きょうは、大徳寺へ行ったんだって」
「おととい、沢庵さんは、よその家で、武蔵様に会ったんですってね」
「アア。聞いた？」
「え。……その時、沢庵さんは、わたしがここにいることを、武蔵様へ話したかしら」
「話したろ、きっと」
「そのうちに、武蔵様をここへ呼んでやると、沢庵さんは、わたしにおっしゃったけれど、城太さんには、なんにもいっていなかった？」
「おいらには、なんにもそんなことはいわないよ」
「……忘れているのかしら」
「帰って来たら、そういってみようか」
「ええ」
と、彼女は初めて、ニコと、枕の上から笑みを向けて、
「……だけど、訊くならわたしがいないところでね」
「お通さんの前で訊いちゃいけないの」
「きまりが悪いから」
「そんなことないさ」

「でも、沢庵さんは、わたしの病気を、武蔵病だなんていうんだもの」
「アラ、いつの間にか、喰べちゃったぞ」
「なに、蜜柑」
「もう一つ喰べない」
「もう、たくさん、美味しかったわ」
「きっと、これから、なんでも食べられるよ。こんな時に、武蔵様が来れば、きっと、すぐ起きられてしまえるんだがな」
「城太さんまで、そんなことをいって」
城太郎とこんな話をしているうちは、熱症も体の痛さも忘れている彼女であった。
そこへ、烏丸家の小侍が、
「城太どの、いますか」
と、縁の外からいう。
「はい、おります」
答えると、
「沢庵どのが、あちらでお呼びです。すぐおいでなさい」
と告げて去った。
「おや、沢庵さん、帰って来たのかしら」
「行ってごらんなさい」
「お通さん、さびしくない」

「いいえ」
「じゃあ、用がすんだら、すぐ来るからね」
枕元を、立ちかけると、
「城太さん……あのこと、忘れずに、訊いてね」
「あのことって？」
「もう忘れたの」
「あ、武蔵様が、いつここへ来るのかって、それを催促することだね」
お通の痩せている頬に、紅い血がかすかにさした。その顔を夜具の襟で半分かくしながら、
「いいこと、忘れてはだめですよ、きっとね、きっと訊いてね」
と、念を押した。

四

沢庵は光広の居間へ来て、光広と何か話している折だった。
そこの襖(ふすま)を開けて、
「沢庵さん、なにか用？」
城太郎が後ろに立つと、
「まあ、坐りなさい」
と沢庵がいい、光広は、城太郎の不作法を寛(ゆる)している眼元で、にやにや眺めていた。
側へ坐るとすぐ、城太郎は沢庵へ向っていった。

「あのね、沢庵さんとこへ、泉州の南宗寺から、沢庵さんみたいな坊さんが、急用の使いに来て待ってるよ。呼んで来てあげようか」
「いや、そのことなら、今聞いた」
「もう会ったの」
「ひどい小僧だと、あの使いがこぼしていたぞ」
「どうして」
「はるばる来た者を、牛小屋へ案内して、ここで待っておれといったまま、捨てておいたということじゃないか」
「でもあの人が、自分から、どこか邪魔にならないところへ置いてくれといったからさ」
光広は、膝を揺(ゆ)すって、
「ハハハハハ、牛小屋へ入れておいたのか、それは酷(ひど)い」
と、笑った。
しかし、すぐ真顔に返って、
「では御坊には、泉州へ戻らずに、ここからすぐ但馬(たじま)へ御発足あるか」
と、沢庵へ向って訊く。
沢庵はうなずいて、なにぶん、気がかりな書面の内容であるから、ぜひそうしたいと答え、支度といってもべつだんない身でもあるし、明日(あした)といわずに、今すぐお別れ申したいという。
ふたりの話の様子を、城太郎は不審(いぶか)って、
「沢庵さん、旅へ立つの」

「急に国元へ行かねばならぬことになってな」
「なんの用？」
「故郷にいる老母が寝ついて、今度はだいぶ重態いという気がかりな報らせだから」
「沢庵さんにも、おっ母さんがあったの」
「わしだって、木の股から生れた子ではないよ」
「今度はいつ帰って来るつもり」
「母の容子次第で」
「すると……困ったなあ……沢庵さんがいなくなっちゃうと」
と、城太郎はそこで、お通の気持を思い遣ったり、また彼女と、自分の行く先なども考え出して、心細くなったものか、
「じゃもう、沢庵さんとは会えなくなるの？」
「そんなことはない。またきっと会える。おまえ達二人のことは、お館へもようお頼みしてあるから、お通さんも、くよくよせずに、早く体を丈夫にするよう、おまえも勇気をつけてやってくれ。あの病人は薬よりも、心の力がほしいのだ」
「それが、おいらの力では駄目なんだよ。武蔵様が来てくれないと癒らないぜ」
「困った病人だのう。おまえも飛んでもない者と、この世の道連れになったものだ」
「おとといの晩、沢庵さんは、どこかで武蔵様に会ったんだろ」
「ウム……」
光広と顔を見あわせて、沢庵は苦笑をながした。どこでと、突っ込んで場所を訊かれては困り

そうな顔つきであったが、城太郎の質問は、そういう枝葉には触れず、
「武蔵様は、いつここへ来るの。沢庵さんが、武蔵様をここへ呼んでやるといったもんだから、お通さんは、毎日、そればかり待ってるじゃないか。ねえ沢庵さん、おいらのお師匠さまは一体、今どこにいるのさ」
その住所さえ分れば、今すぐにでも、自分で迎えに行きたそうな城太郎の質問であった。
「ウム……あの武蔵のことか」
あいまいに、こういったが、沢庵もその武蔵とお通とを会わせてやろうという、親切を忘れてしまっているわけではさらさらない。今日もそれを心にかけて、大徳寺の帰り途に光悦の家へ立寄り、武蔵の在否を訊ねてみたところ、光悦が困った顔していうには、どういうものかおとといの晩以来武蔵はいまだに扇屋から戻って来ない。母の妙秀尼も案じるので早く帰してくれるように、今も吉野太夫へ手紙を遣わして、頼んでやったところです――という彼の話なのである。

五

「ホ。……では武蔵とやらいうあの夜の男は、あれきり吉野太夫の許から帰って来ぬのか」
光広は聞いて眼をみはった。
半ばは、意外なこととして、半ばは軽い嫉妬も手伝って、大仰にそういったのである。
沢庵は城太郎のてまえ、多くをいわなかったが、ただ、
「あれもやはり、平凡な、つまらん人間でしかないとみえる。とかく若いうち天才らしく見える者ほど、行末当てにならないものだ」

「したが、吉野も変りものじゃなあ。——どこがようて、あんな穢い武骨者に」
「吉野にせよ、お通にせよ、女の気心のみは沢庵にも解しかねる。わしの眼からは皆ひとしい病人としか思えぬが、武蔵にもそろそろ人間の春が訪れて来たのでござろう。……これからがほんとの修行、危ないのは剣よりは女子の手だが、他人の力でどうなるものではなし、抛っておくしかあるまいて」
　独り言のように呟いてから、沢庵はふと旅の空へ心を急ぎ、光広へ向って、改めて別れを告げた上、なお当分の間ではあるが、病中のお通と、城太郎の身とをくれぐれも館に託して、それから間もなく烏丸家の門を飄然と出て行った。旅を朝立つものと決めているのは、普通の旅行者のことであって、沢庵には朝立ちも夕立ちもさしたる問題ではないらしい。今もすでに、陽脚は西にうすずいて、往来の人影にも、のろく通る牛車にも、虹いろの暮靄が映していた。
　沢庵さん、沢庵さん、と頻りに後から呼びかけて追って来る者がある。——城太郎だなと沢庵は困ったような顔つきを振り向ける。城太郎は息をきって、彼の袂をとらえ、懸命に訴えた。
「後生だから沢庵さん、もいちど帰って、お通さんになんとかいっておくれよ。お通さんがまた泣き出しちまって、おいらには、どうしていいか分らないんだもの」
「おまえ、話したのか。——武蔵のことを」
「だって、訊くから」
「そしたら、お通さんが、泣きだしたというのか」
「ことによると、お通さんは、死んでしまうかも知れないぜ」
「どうして」

「死にたそうな顔しているもの。——こんなことといったよ。——もいちど会って死にたい、もういちど会ってから死にたいッて」
「じゃあ、死ぬ気づかいない。抛(ほ)っとけ、抛っとけ」
「沢庵さん、吉野太夫って、どこにいる人」
「そんなこと訊いて、どうするつもりじゃ」
「お師匠さまは、そこにいるんじゃないか。さっき、お館さまと沢庵さんが、話していたろ」
「おまえは、そんなことまで、お通さんに喋ったのか」
「ああ」
「それではあの泣虫さんが、死にそうなことを口走るわけじゃ。わしが戻ってみたところで、遽(にわか)にお通さんの病気を癒(なお)してやる思案もないから、わしがこういったと、告げなさい」
「なんというの」
「御飯をお喰べって」
「なんだ、そんなことなら、おいらが一日に百遍もいってら」
「そうか。それはお前のいう言葉が、そのまま、お通さんにとっては無二の名言なのだが、それさえ耳に通らない病人ならば、仕方がないから、なにもかも正直にいって聞かせるのだな」
「どういう風に」
「武蔵は、吉野という傾城(けいせい)にうつつをぬかし、きょうで三日も扇屋から帰って来ぬという。それを見ても、武蔵がお通さんを少しも想っていないことがわかろう。そんな男を慕うて、どうする気じゃと、よく、泣虫のお馬鹿さんにいうてやるがよい」

聞くも忌々しげに、城太郎は強くかぶりを振った。
「そんなこと、あるもんか。おいらのお師匠さまは、そんな武士じゃない。そんなことをいったら、お通さんは、ほんとに自分で死んじまうぞ。なんだい沢庵坊主め、おまえこそ大馬鹿だ、大馬鹿三太郎だっ」

六

「叱られたな。ハハハ、怒ったのか、城太郎」
「おいらのお師匠さまのこと悪くいうからさ。お通さんのことを馬鹿だなんていうからさ」
「おまえ可愛い奴だ」
頭を撫でてやると、城太郎は、その頭をうごかして、沢庵の手を振り落し、
「もういいよ。沢庵坊主なんか、なにも頼まないから。おいら一人で武蔵様を捜して来て、お通さんに会わせてやるからいい」
「知ってるか」
「なにをよ」
「武蔵のいる処を」
「知らなくたって、捜せば知れらい。よけいな心配するな」
「小癪なことをいっても、おまえには、吉野太夫の家はなかなか分らぬぞ。教えてやろうか」
「頼まない、頼まない」
「そうぽんぽん当るな城太郎。わしじゃとて、お通さんの仇じゃない、武蔵を憎む理由もない。

それどころか、どうかして、あのふたりが二人とも、よい生涯を完うしてくれるように蔭で祈っている者だ」
「じゃあどうして意地悪をするんだい」
「おまえには、意地悪と見えるのか。そうかも知れんな。だが、武蔵もお通さんも、今のところ、どっちもまあ病人のようなものだ。体の病を癒すのが医者で、心の病を治すのが坊主ということになっているが、その心の病のうちでもお通さんのは重態だ、武蔵のほうは、抛っておけばどうにかなろうが、お通さんの方はわしにも今のところではどうにもならん。だから匙を投げていうのだよ——武蔵のような男に、片想いしてどうするんだ、さらりと思い切って、御飯をたんと喰べ直せとな。——そういうよりほかないじゃないか」
「だからいいよ、くそ坊主の汝なんかに、なにも頼むといやしねえや」
「わしの言葉が、嘘だと思ったら、六条柳町の扇屋へゆき、そこで武蔵が、どうしているか、見届けて来い。そして見たままの事実を、お通さんに話してやれ。いちどは歎きかなしむだろうが、それで眼が醒めれば結構じゃ」
城太郎は耳の穴へ、指で栓をして、
「うるさい、うるさい、どん栗坊主」
「なんじゃ、わしの後を追いかけて来たくせに」
「坊主坊主、お布施はないぞ、お布施ほしけれや、唄うたえ」
沢庵の背へ、こう謡口調で罵りながら、城太郎は耳をふさいだまま、遠くなってゆく姿を見送っていた。

しかし、沢庵の影が、彼方の辻の横へかくれると城太郎の眼には、涙がせりあがって来て、それがぼろぼろと溢れ落ちるまで、ぼんやり佇んでいた。

あわてて肱を曲げ、涙の顔を横にこすると、彼は、迷っている犬の子が、急になにか思い出したように往来を見まわして、

「おばさん！」

被衣して通りかかった女房風の女のそばへ駈け寄った。

そして、いきなり、

「六条柳町ってどこ」

と訊ねた。

びっくりしたように女は、

「遊廓でしょう」

「遊廓って何？」

「まあ」

「何するとこ」

「嫌な子だね！」

睨みつけて、その女は、通り過ぎてしまった。

なんでそうされたのか、城太郎はそんな不審にたじろいではいない。懲りもせず次々に、六条柳町への道と、そこの扇屋という家を訊いて歩いた。

伽羅の君

一

爛漫と、楼に灯は入ったが、まだ三筋の柳町に、買手どもの影は見えない宵の口であった。
扇屋の若い者は、何気なく入口の人影を見て愕ッとした。大暖簾のあいだから首を入れ、家の中をキョロキョロ覗いている二つの眼に驚いたのである。暖簾の裾に汚い草履と木剣の先が見えたので、なにか途端に、勘ちがいをしたものらしく、あわてて他の男達をよび立てようとすると、
「おじさん」
と城太郎がはいって来て、いきなりこう訊ねた。
「ここの楼に、宮本武蔵様が来てるだろ。武蔵様は、おいらのお師匠さまだから、城太郎が来たっていえば分るんだけれど、取次いでくれないか。それでなければ、ここへ呼んでくれないか」
扇屋の若い者は、子供と分ってほっとしたような顔をした。けれど、先に愕ッとした驚きの反動がむかっと、その顔に筋を立てて、
「なんだ汝は。もの貰いか。風の子か。——武蔵様なんて、そんな者は、いねえいねえ、宵の口から暖簾先へ、うす汚ねえ風体してはいって来やがって、ササ出て行け出て行け」

襟がみを抓んで、外へ持って行こうとすると、城太郎は、虎河豚のように勃然と怒って、
「なにするんだ、おいらは、お師匠様に会いに来たんだぞ」
「ばか野郎、汝の師匠だかなんだか知らねえが、その武蔵という人間のために、おとといから大迷惑をしているところだ。今朝も、今し方も、吉岡道場の使いが来て、それにもいってやった通り、もう武蔵はここにはとっくにいねえのだ」
「いないなら、大人しく、いないといえば分るじゃないか。なんだって、おいらの襟くびを掴むんだ」
「暖簾へ首を突っ込んで、気持のわるい眼で中を覗いていやがるから、おれはまた、吉岡道場の廻し者が来たかと思って、ひやりとしたじゃねえか。忌々しい小僧ッ子奴が」
「びっくりしたのは、そっちの勝手じゃないか、武蔵様は、何時頃、そしてどこへ帰ったのか、教えてくれ」
「こいつ、さんざん人に悪たいをついていながら、今度は教えてくれなんて、虫のいいことを吐かしやがる。そんな番をしているか」
「知らなきゃいいから、おいらの襟首を離せ」
「ただは離さねえ、こうして離してやる」
耳たぶを強く持って、一廻り振廻して暖簾の外へ突き放そうとすると、城太郎は、
「痛い、痛い、痛い」
さけびながら腰を落し、下から木剣を抜いて、若い男の顎をふいに撲りつけた。
「あっ、このチビ」

前歯を折られて、真っ赤に染まった顎を抑えながら、彼を暖簾の外まで追いかけてゆくと、うろたえた城太郎は、
「誰か来てくれーッ。このおじさんがいけないよっ」
往来へ、こう大声で、危急を訴えながら、持っていた木剣は、その悲鳴とは反対に、いつか小柳生城で猛犬の太郎を擲り殺したような力で、振り向きざま、ぐわんと男の脳天を打っていた。
みみずの鳴いたような、細い呻きを鼻血といっしょに洩らして、若い男は柳の樹の下へヘロヘロと仆れた。
――と、向う側の格子先で見ていた客引き女が、軒ならびの格子へ向ってさけんだ。
「あらっ、あらっ、あの木刀を持った小僧が、扇屋の若い者を殺して逃げたっ」
すると、夜中のように人影のなかった往来に、わらわらと駈け出す者の影がみだれて、
「人殺し――」
「人が殺された」
と、血なまぐさい声が宵の風にながれた。

二

喧嘩沙汰は年中のことだし、血なまぐさいものを、秘密裡にまた迅速に、処理してしまうことにもこの遊廓の者は馴れていた。
「どこへ逃げた？」
「どんな小僧か」

と、血相の恐い男たちが、捜し廻っていたのも一瞬のことで、程なく、編笠すがたや伊達すがたして、灯に群れる虫のように、ぞろぞろと、ぞめきに流れ込んで来た買手どもは、もう紅燈の下に、そんな事件が、半刻前に行われたという噂すら知らなかった。
三筋の往来は、更けるほど雑閙してきたが、裏は、真っ暗な横町だの、田だの原だのが、しいんとしていた。
どこに隠れていたか、城太郎は頃あいを見すまして、暗い路地から犬の子みたいに這い出した。そしていっさんに暗い方へ向って駈けた。
そのまま、ここの闇は世間の闇へつづいているのかと単純に思っていたのである。ところが、一丈もある柵へ彼は突き当ってしまった。その柵は、この六条柳町を全部、城郭のように堅固にとり囲んでいる。先を尖らした焼丸太が結いまわしてあって、いくらそれに沿って歩いてみても、外へ出られる木戸も隙間もなかった。
少し歩くと、明るい町尻の往来へ出てしまうので、城太郎はまた暗いほうへもどって来た。すると、彼の挙動に注意しながら、後から尾いて来た女が、
「童。……童」
白い手で招いた。
最初――城太郎は疑わしげな眼を光らして、しばらく、闇の中に立ちどまっていたが、やがてのそのそ戻って来て、
「おいらのことかい」
女の白い顔に、害意のないことを確かめると、彼はまた一歩、近づいて行きながら、

「なんだい？」
と、いった。
女はやさしく、
「おまえかい、夕方、扇屋の入口へ来て、武蔵様に会わせてくれといっていたという子は」
「あ、そうだ」
「城太郎というんでしょう」
「うん」
「じゃあ、そっと、武蔵様に会わせてあげるからこちらへおいで」
「ど、どこへ」
と、今度は、城太郎が尻ごみしてしまう。そこで女が、彼の安心がゆくように説明してやると、城太郎は、
「じゃあおばさんは、吉野太夫っていう人の召使いなの」
地獄で仏に会ったような顔を見せ、初めて心をゆるしたように従いて行った。
その引船のことばによると、夕方の騒ぎを耳にすると、吉野太夫はいたく心配して、もし捕まったら、自分が口をきいて助けてやるからすぐ知らせて来るように――もしまた、どこかに潜んでいるのを見つけたら、そっと、裏庭の木戸から、例の田舎の間へ、導き入れて、武蔵に会わせてやるようにという吩咐をうけて来たのだという。
「もう、心配おしでない。吉野様がお声をかけて下さりさえすれば、この廓で通らぬことはないのだから」

「おばさん、おいらのお師匠様はほんとにいるんだろうね」
「いないものを、なんでおまえを捜して、こんなところへ連れて来ましょう」
「いったいこんなところでなにしてるんだろ?」
「なにしていらっしゃるか。……それもう、そこに見える田舎家の内においでになるから、戸の隙間からのぞいてごらん。……では、わたしは彼方のお座敷がいそがしいから」
引船は彼方の庭の植込みへ、忍びやかに、影をかくした。

三

ほんとかなあ?
ほんとにいるのかしら。
どうも城太郎には、素直に信じられないらしいのである。
あれ程、捜しに捜しぬいていた師の武蔵が、今、自分の立っているすぐ眼の前の小屋の中にいる――それがどうも彼には余り簡単すぎて受けとり難い。
では諦めて、止すかと思えば、それどころか、その田舎家を繞り歩いて、しきりともう、中を覗き得る窓をさがしている城太郎なのでもある。
家の横に、窓はあった。ただし彼の背丈では寸法がちと足らない。そこで城太郎は、植込みの間から石をころがして来てそれへ乗ってみた。――竹の櫺子にやっと鼻が届く。
「……ア、お師匠様だ」
覗き見した行為に顧みて、彼は、声をのんでしまったが、そこからでも手を伸ばしたいような

懐しい人の姿に、城太郎は久し振りで出会った。

炉のそばに、武蔵は、手枕をかってうたた寝していた。

「――暢気だなあ」

と、呆れ果てたような丸い眼が、そのまま、窓の竹格子に、貼り付いていた。

快げに昼寝している武蔵のからだの上には、誰がそっと被けて行ったのか、桃山刺繍の重そうな裲襠が着せてあった。又、彼の身に着けている小袖も、常のごつごつした地味なものとは違い、伊達者の好みそうな大柄の着物を着ていた。

少し離れて、一枚の朱い毛氈が敷いてあり、画筆だの、硯だの、紙だのが散らかっている。その反古のうちには、手習いしたような茄子の絵や、鶏の半身などが見えた。

「こんな所で、絵なんぞ描いていたんだぜ。お通さんの病気を知らないでさ」

城太郎は、ふと、憤りに似たものを胸に抱いた。武蔵のからだに被けてある女の裲襠が気に喰わないのである。又、武蔵の着ている派手な着物に嫌厭がわくのであった。彼にも、そこらに漂っている艶めいたものの匂いは分っている。

この正月、五条大橋で彼が見つけた時も、武蔵は、若い娘に縋られて、往来中で泣かれていた。今見れば、又この態だし、

(どうかしているぞ、この頃、おいらのお師匠さまは)

と、大人の慨嘆然たりという顔つきに似たようなほろ苦さが、彼の幼い心にも、込み上げて来ずにいられないものらしいのである。

それからふと、

（よし、驚かしてやれ）
と、悪戯心が、忌々しさを唆って来て、なにか、思いついたらしく、そっと石の上から脚を下そうとすると、
「城太郎、誰と来た？」
武蔵の声である。
「え？」
又、覗いてみると、眠っていた人は、うす眼を開いて、笑っていた。
「………」
返辞よりも先に城太郎は表の戸口へ駈け廻って、そこを開けるや否や、中へ入って武蔵の肩に抱きついていた。
「お師匠さま！」
「おう……来たか」
仰向いたまま、肱を伸ばして、武蔵は彼の埃くさい頭を胸へ抱えこみ、
「どうして分った？……。沢庵坊にでも訊いて来たか。しばらくだったなあ」
むっくりと、武蔵は彼の首を抱いたまま身を起した。久しく忘れていた懐中の温みに城太郎は、狆がじゃれるように、いつまでも、その首を武蔵の膝から離そうともしなかった。

四

――今、お通さんは病の床についている。そのお通さんは、どんなに、どんなに、お師匠さま

に会いたがっているか知れない。

かわいそうだ！

お通さんは、お師匠さまのあなたに、会えばいいっていうんだ。それだけなんだ。

この正月の元日、五条の大橋でよそながら出会うことは出会ったが、お師匠さまが変ちくりんな女と仲がよさそうに話したり泣かれたりしていたので、お通さんはすっかり怒ってしまい、蓋を閉めた蝸牛のように、いくら手を引っ張ったって、出て来やしない。

むりもないや。

おいらだって、あの時、なんだかむしゃくしゃして、癪にさわったもの。

でも、そんなことはもういいから、これからすぐに、烏丸のお館まで来てください。そして、お通さんに、来たよといってやってください。それだけでも、お通さんの病気はきっと癒ってしまうに違いありませんから。

——以上の言葉は、城太郎が、未熟な弁を懸命にふるって、武蔵へうったえた沢山の口数のあらましである。

「……うん。……うん」

武蔵は何度もうなずいていう。

「そうか、……そうだったのか」

と、同じように。

そして肝腎かなめな——ではお通に会おうということは、なぜか、口を結んでいわないのである。

頼みに頼み、訴えに訴えぬいても、武蔵が、巌みたいに、こちらのいうことを肯いてくれないと、城太郎はそれ以上いいようもなくなって、なんだか、武蔵という人が、あんなに好きだったお師匠さまが、急に嫌な奴にみえてきた。

（喧嘩してやろうか）

と、城太郎は、肚のなかで思ったほどだった。

だが、さすがに、武蔵へ向って、悪たい口は叩けないとみえ、彼は顔の表現をもって、武蔵の反省を求めていた。酢を舐めたような口をして、いつまでも、面を膨ませていた。

彼が黙りこむと、武蔵は画手本を見ながら、描きかけの絵へ筆をとり始めた。城太郎は、彼が習っている茄子の絵を睨みつけ、

（下手クソ！）

と、心で罵っていた。

その画にも倦んだらしく、武蔵が筆を洗い出したので、もういっぺん頼んでみようかと、城太郎が唇を舐めてなにかいいかけると、飛石を拾って来る木履の音がして、

「お客さま。洗濯物が乾きましたから持ってまいりました」

と、さっきの引船が、きちんと畳みつけた袷と羽織の一襲ねを抱えて来て、彼の前におく。

「ありがとう」

武蔵は入念に、洗えて来た衣服の袖や裾を調べて、

「きれいに落ちましたな」

「人間の血というものは、洗っても洗っても、なかなか落ちないものでございますね」

「これでよい。……時に吉野どのは」
「こよいも、お客方の席が、あちらにもこちらにもという有様で、わずかなお隙もございませぬ」
「思いがけないお世話になったが、こうしていると、ひとり吉野どのへ気づかいを煩わすばかりでなく、扇屋の内緒へも、迷惑のかさむばかり。……こよいの夜更けを待って、そっとここを立ち去りますゆえどうぞ、そう伝えておいて下さい。くれぐれも、よろしゅうお礼を」

城太郎は顔つきを直して、やはりお師匠様は好い人だと思った。肚の中では、お通さんのところへ行ってやろうと、とうに決めていたに違いない。

そう独り決めして、にこにこしていると、武蔵は、引船が立ち去るとすぐ、小袖羽織のその一襲ねを、城太郎の前へ出していった。
「きょうは、よいところへ来てくれたな。この着物は、いつぞやこの遊廓へ来る折、本阿弥様の御老母が、わしに着せてくれた着物。つまり借り着じゃ。これを光悦どののお邸へお返しに行って、わしの元の着物を持って来てくれぬか。城太郎、よい子だから、一走り行って来てくれい」

五

「はい、畏りました」
と、城太郎は神妙である。

この使いさえ済めば、武蔵はここを出て、お通さんの所へ来てくれるものと思い、それを楽しみに、

「じゃあ、行って来ます」
　先方へ返す小袖羽織を風呂敷につつみ、べつに、武蔵から光悦へ宛てて書いた一通もその間へ挟んで背中へ負いかけていると、そこへ夜食を運んで来た以前の引船が、
（オヤ、どこへ）
　と、眼をみはって武蔵からその理を聞くと、
「まあ、飛んでもないこと」と、固く止めた。
　なぜならば――
　と引船が武蔵へ話す。
　この子は夕方に、扇屋の店先で、店の若い者を、がらにもない木刀で撲りつけ、打ちどころが悪かったとみえて、その男は床についてうんうん唸り通している。
　遊廓の喧嘩だから騒ぎはそれきりで済んでいるし、吉野様からお内緒へも若い衆へも、そっと、内済にと口をきいてはあるが、その子がやたらに、宮本武蔵の弟子だと威張りちらしたので、誰の口からともなく、武蔵はまだ扇屋の奥にかくれているという噂が宵からひろがり、それが遊廓の総門の外に、先ごろから網を張っている吉岡方の者へも聞えているらしい。
「……はははあ」
　と、武蔵は初めて、そんな事件を知ったように、城太郎の姿を見直す。
　城太郎は、隠していたことが武蔵にわかって、面目ないように、頭を掻き、だんだん隅へ退がって、小さくなっている。
「だのに、そこへ今、ひょこひょことそんな物を背負って総門から行ってご覧――どうなるか」

と、引船はまた、それについて外部のもようを武蔵に告げるのであった。

――何分にも、おとといから昨日、今日と、三日に亙って、吉岡方の者が、あなたの身を尾け狙っていることはたいへんなもので、吉野様やお内緒でも、それを心痛している。

光悦様もおとといの夜、ここから帰る折にくれぐれも頼んで行かれたことだし、扇屋としても、そういう危地にあるあなたを、追い出すようなことはできない。殊に吉野様は細心な気づかいをして、あなたの身を庇っている。

……しかし。

困ったことは、吉岡方の者が執念深く、この遊廓の出入りに見張をつけていることで、店へも昨日から、何度も吉岡門下の者というのが来て武蔵を匿っているだろうとか、うるさく探りに来るので、それは態よく追い払ってはいるが、先方の疑惑は、なかなか解くべくもなく、

(扇屋から出て来たら)

と、その機会を、手に唾して待っていることは知れている。

よくは分らないが一人のあなたを討つために、吉岡方の者は、まるで戦のような物々しい段取をして、幾重にも見張を立て、どんなことをしても、今度は殺してしまうといっているそうです――とも引船はいって、

「ですから、もう四、五日、じっとここに隠れておいで遊ばした方がよかろうと、吉野様もお内緒も心配していらっしゃいます。そのうちには、吉岡の衆も飽いてしまって、見張を退くでございましょうし……」

武蔵と城太郎の二人へ、夕飯の給仕をしながらも、あれやこれや親切に引船はいってくれた

が、武蔵は好意だけを謝して、
「思うところもありますから」
と、今夜ここを立つ意思は翻さなかった。
で——光悦の家へ遣る使いの件だけは、引船の忠告を容れて、それからすぐ、扇屋の若い者を走らせてやることにした。

六

使いは間もなく帰って来た。光悦からの返辞には、
折もあらばまた会い候わん、長き短き人の世の道、たのみ参らすにつけお身大事にいそしみ給われとのみ、よそながら祈り申されてこそ候え

月　日　　　　光　悦

武　蔵　ど　の

と書いてあった。短文ではあるが光悦の気持はよく酌み取れる。また武蔵が、今の身辺の累を、あの平和な母子の生活におよぼすまいとして、わざと、彼の家へ立ち寄らないでいるこちらの気持も、十分理解してくれているようであった。
「そしてこれは、先日あなた様が光悦様のお家へ脱いでおいた以前のお小袖だそうで」
と、使いの男は、こちらから届けた羽織小袖とひき換えに、武蔵が前から着ていた古い着物と袴とを持って帰り、
「本阿弥のお老母様からも、くれぐれもよろしくと仰せられました」

と、口上を伝えて、扇屋の母屋へ退がって行った。

包みを解いて、以前の古い着物を見ると、武蔵はなつかしかった。あのやさしい気持の妙秀尼が着せてくれた小洒張した衣裳よりも、この扇屋で借着している伊達な袷よりも、雨露に汚れた一着の木綿着物のほうが、彼には、自分の肌にぴったりした物のように思われた。これこそ、修行中の行衣であり、これ以上の必要を少しも感じないのであった。

綻びてもいたし、雨露や汗にも汚れていたはず、さだめし穢いにおいが畳まれていたであろうと思いながら、袖を通し袴を着けてみると、意外にも折目が、ぴんとついていて、あの襤褸にひとしい古小袖が、生れ代ったように、仕立て直してあった。

「老母というものはよいものだ。自分にも母があったら」

武蔵はふと孤愁に囚われて、これから生きて行こうとする生涯を、心の中で遙かに描いてみる。

すでに父母はない。自分を容れない故山に、わびしい独りの姉があるばかりである。

彼は、しばらく沈湎と燈に俯向いていた。ここも、三日の仮の宿だった。

「さ、立とうか」

持ち馴れた刀を手に寄せ、固く締めた帯と肋骨のあいだへぎゅっと差し込むと、彼のふとした寂しさはもう強い意思の外へ弾き出されていた。その刀こそ父母であり妻であり兄弟であるとしよう――と、そうかねがね心に誓っていたところへ彼の心は返っていた。

「行くの。――お師匠さま」

城太郎は先にそこを出て、欣しそうに今夜の星を見た。

（これから烏丸様のお館まで行けば、ずいぶん遅くなるけれど、いくら夜が更けたって、お通さんはきっと、寝ずに待っているにちがいない。――どんなにびっくりするだろうな、きっと、あんまり欣しがって、また泣いちまうかも知れないぞ）

雪の晩からこっち、毎晩、空は美しかった。城太郎は、これから武蔵を連れて行って、お通に歓んでもらうことのみを空想していた。星を仰ぐと、その星のまたたきまでが、自分とともに、歓んでくれているように思える。

「城太郎、おまえは、裏木戸からはいって来たのか」

「え。裏だか表だか知らないけれど、さっきの女のひとと一緒に、そこの門から」

「では、先へ出て、待っていてくれ」

「お師匠さまは」

「ちょっと、吉野どのに挨拶を申して、すぐ行くから」

「じゃあ、外へ出て、待っているよ」

そんなわずかな間も、彼のそばを離れるのは、多少不安がないでもなかったが、今夜の城太郎はもう、なにを命ぜられても、至って素直になりきっていた。

七

この三日ほどを、この隠れ家のうちで、武蔵は、われながら、愚に返ってよく遊んだと思う。

例えていうならば、今日までの自分の心神や肉体という物は、ちょうど、緊りつめている厚氷のようなものであったと思う。

月にも情を閉じ、花にも耳をふさぎ、太陽にも胸をひらかず、ただ冷たく凝結していた自分というものが、顧みられる。

そうした精進一途な自分のすがたにも、彼は、正しさを信じているが、同時に、狭くて小さい一個の頑固者にすぎないものが――自分となることを彼はおそれかけた。

沢庵からずっと前に、

（おまえの強さは、獣の強さと変りがない）

といわれたり、また奥蔵院の日観からも、

（もっと弱くなれ）

と忠告されたりしたことを思いあわせると、武蔵はこの先ともに、この二、三日のような悠暢な日を持つことが、自分には大事であると考えた。

そういう意味で、今、ここの扇屋の牡丹畑を去るにつけても、彼は無益な日を費したとは少しも思わなかった。むしろ、余りに緊りきっている生命へ、暢々と、天然放縦のわがままを与えて、酒ものみ、転寝もし、書も読み、画筆も弄び、欠伸もしたりして、存分に過ごした日が得難い貴重な日であったと感謝されるのだった。

（――その礼を、吉野どのに一言いいたいが）

と、武蔵は、扇屋の庭に佇みながら、彼方の花やかな灯影を見ていた。けれど奥深い座敷の方には変らない「買手共」の猥歌や三絃が満ちていて、吉野にこっそり会って行く術もない。

（ではここから）

と武蔵は、胸のうちで、別れを告げ、また三日にわたるあいだの彼女の好意にも、心から礼を

告げてそこを去った。

——裏木戸から外へ出て、待たせておいた城太郎の影へ、手をあげて、

「さ、行こうぞ」

呼びかけると、その後ろから、城太郎とはべつに、小走りに追いかけて来た者がある。

禿のりん弥であった。

りん弥は、武蔵の手へ、

「これ、太夫様から——」

となにか渡して、すぐ木戸の中へ駈けこんでしまった。

小さく結んだ一片の紙きれである。色紙ほどな懐紙であった。開いて、文字へ眼のゆく前に、ほのかな伽羅の移り香がする。

　ちぎりてはちる夜々のあだ花の数々よりも、樹の間過ぎ行く月のおん影こそ忘れ得ざらめ

しみじみ、語ろういとまもなく雲間のおわかれ、よその杯に、嘆けばと、人はわらい候わめど、ただ一筆のみを

よしの

「お師匠さま、それ、誰から来たてがみ」

「誰からでもない」

「女の人」

「知らん」

「なんと書いてあるの」
「そんなこと、訊かなくてもよい」
武蔵が畳みかけると、城太郎は背のびをして、
「いいにおいがする、伽羅みたいなにおいだなあ」
と、覗いていう。
伽羅のかおりは、城太郎の鼻にもわかるものとみえる。

門

一

さて、扇屋は出て来たが、まだ遊廓の内である。どうしたらこの囲いから無事に世間へ出られるだろうか。
城太郎は案じて、
「お師匠さま、そっちへ行くと、総門の方へ出ちまいますよ。総門の外には、吉岡の者が見張っているから危いって扇屋の人もいっていた」
「うむ」
「だから、他から出ましょう」

「夜は、総門以外の口は、みな閉まっているそうではないか」
「柵を越えて逃げれば――」
「逃げたといわれては武蔵の名折れになる。恥も外聞もなく、逃げさえすればよいと思う位なら、なんのこんな所から出てしまうのは易いが、それがわしには出来ないことだから、静かに折を待っていたのだ。――やはり総門から手を振って出て行こう」
「そうですか」
と城太郎はやや不安な顔色を見せたが、「恥」を重んじない者は、たとえ生きていても無価値な人間として扱われてしまう武士社会の鉄則は、彼にもよく分っているから、反対はできなかった。
「――だが、城太郎」
「え、なんです」
「おまえは子供だから、なにもわしの通りに行動する必要はない。わしは総門から出て行くが、おまえは先に遊廓の外へ出て、どこかに身を避けて、わしを待っているがいい」
「お師匠様が総門から手を振って出て行くのに、おいら一人、どこから外へ出て行くの」
「そこの柵を越えるのだ」
「おいらだけ？」
「そうじゃ」
「いやだ」
「なぜ」

「なぜって、たった今、お師匠さまがいったくせに。——卑怯者といわれるだろう」
「おまえには、誰も、そんなことをいいはせぬ。吉岡方で相手としているのは、この武蔵一名で、そちなどは、数のうちにはいっていない」
「じゃあ、どこで待ってたらいいの」
「柳の馬場の辺りで」
「きっと来る？」
「うん、必ず行く」
「また、おいらに黙って、どこかへ行ってしまうんじゃない？」
——武蔵は顔を横に振って、
「おまえに、嘘は教えぬ。さ、人通りのないうちに、はやく越えろ」
城太郎は、辺りを見まわして、暗い柵の下へ駈け寄った。けれど、焼丸太の柵は、彼の背丈の三倍も高かった。
（だめだ、おいらにゃ、とても越えられそうもないや）
自信のない眼で、城太郎は柵の高さを見上げていた。すると武蔵は、どこからか、一俵の炭俵をさげて来て、柵の下においた。
そんな物を踏台にしたって駄目だといわないばかりに、城太郎は武蔵のすることを見ていた。
武蔵は、柵の間から外を窺って、しばらく、じっとなにか考えている。
「…………」
「お師匠様、誰か柵の外にいるんですか」

「この辺、柵の外は、蘆がいちめんに生えている。蘆の原だから水溜りがあるかも知れぬ、気をつけて跳び降りろよ」
「水なんかいいけれど、高くって、上まで手が届かない」
「総門のみでなく、柵の外部にも、要所要所には、吉岡の見張がいるものと思わなければならぬ。外が暗いから、それに用意をして跳び下りぬと、不意に、どんな者が、闇から刀を薙ぎつけて来るかも知れないのだ。――だから、わしが背丈を貸して上げてやるから、柵の上で一応体を止めて、よく下を見定めてから跳ぶのだぞ」
「はい」
「わしが下から、炭俵を外へ抛ってやるから、その炭俵を見て、なにも変ったことがなかったら跳ぶがよい」
　と城太郎の体を、肩ぐるまに乗せて立った。

二

「届くか、城太郎」
「まだ、まだ」
「では、わしの両方の肩に足をのせて、立ってみろ」
「でも、草履だから」
「かまわぬ、土足のままでよい」
　肩車の上の城太郎は、脚をかわして、いわれた通り、武蔵の肩のうえに両足をのせて立った。

「こんどは、届いたであろう」
「まだです」
「やッかいな奴だの。身を弾ませて、柵の横木まで跳びつけぬか」
「できないや」
「仕方がない、それでは、わしの両掌に足をのせろ」
「だいじょうぶ？」
「五人や十人乗っても大事はない。さ、よいか」
城太郎の足の裏に、自分の両掌を踏ませて、武蔵は、鼎を差し上げるように、ぐっと自分の頭上より高く彼の体を上げた。
「――ア、届いた、届いた」
城太郎は、柵の上に取り付いた。武蔵は、先刻の炭俵を片手に持ち、外の闇へぼうんと抛った。
炭俵は、どさっと、蘆の中へ落ちた。――なんの異状もないと見えて、その後から城太郎が跳び降りた。
「なんだ、水溜りも、なにもありやしない。お師匠様、ここは、ただの原ッぱだぜ」
「気をつけて行け」
「じゃあ、柳の馬場で」
城太郎の跫音は、闇の遠くへ、遠ざかって行った。
その跫音の聞きとれなくなるまで、武蔵は、柵の隙間へ顔を寄せてじっと立っていた。

──そして彼の行った先に安心すると、初めて身軽そうに、足を早めだした。

それまでの薄暗い遊廓裏の道を捨てて、三筋の中でもいちばん繁華な総門の通りへ出て来ると、そこをぞめき歩いている人影の中に、彼のすがたも、一個の嫖れ男のように紛れてしまう。

しかし──笠も被らずに、そのままの身装で、一歩、総門を踏み出すと、

「あっ、武蔵！」

と、そこらに潜んでいた無数の眼が、むしろ意外のように、一斉に、彼の姿へ向って光った。

総門の両側には、莚がこいの駕屋の溜りがある。そこにも、二、三名の侍が、股火をしながら、総門の出入りを睨んでいた。

そのほか、編笠茶屋の床几だの、向い側の飲食店などにも、一組ずつ見張りが屯していたし、その中から四、五名の者が交代して、総門の際に立ちはだかり、廓内から出てくる頭巾だの編笠の顔はいちいち無遠慮にのぞき込み、中を隠した駕が来れば、駕を止めて、その覆いの中を検めていた。

三日も前からのことである。

吉岡方の者は、武蔵が、あの雪の夜以来、ここから外へ出ていないことを確実につき止めていた。扇屋へ向けて、懸合いもしたし、探りもやってみたが、扇屋では、そんな客はいないというのみで取りあわない。

吉野太夫が彼の身を匿まっているらしいという見当も、全然つかないわけではなかった。けれど今この風流の別世界に限らず、貴顕から民間にまで人気のある吉野太夫へ、武士が徒党して、争いを仕掛けてゆくということも外聞の上から考えられた。

で——遠巻きに、持久戦の策をとって、武蔵が、廓内から出て来るのを厳しく見張っていたのであるが、その折には必ず当の武蔵が姿を変えて出て来るとか、覆駕のうちに隠れて遁れるとか、でなければ、柵を越えて他から脱出するに違いないと極めて、その用意にはおさおさ怠りない備えを立てていたのだった。

ところが、平然と、在りのままな姿を灯に曝して、その武蔵が総門を出て来たので、彼等はむしろ悩っとして、いきなりその前へ立ち塞がるものもなかった。

三

遮るもののない以上、武蔵の方で立ち止る理由もない。

大股な彼の足が、もう編笠茶屋の前も過ぎて、百歩も先をぐんぐんと歩いて行く頃になって、

「やるなッ——」

と、吉岡方の中から一人が叫んだようであった。

すると、声に合せて、

「やるなっ」

「やるな！」

同じ言葉を投げながら、どやどやと彼の後から前の方へと八、九名の影が駈け廻り、

「——武蔵待てッ」

と、ここに初めて、正面から激突をあげてきた。

——と、武蔵は、

「何かっ？」
と相手の耳へ不意と感じるような強さで答え、その答えとともに身を横へずっと退いて、道端の小屋を背にして突っ立った。
小屋の横に、巨きな材木が枕木に横たわっているし、辺りに大鋸屑が積もっているなどから見ても、これは木挽職人の寝小屋らしかった。
物音に、
「喧嘩か」
と、中から戸を開けかけた木挽の男は、外の景色をひと目見ると、
「わっ」
あわてて戸を閉め、内側に心張り棒をかって、それなり布団でも被ってしまったのか、しいんとして、中に人がいるとも思わせない。
吉岡方のものは、野犬が野犬を募るように、指笛を鳴らしたり、呼号をあげたりして、見る間にここへわらわらと集まって来た。こういう折の人数は、二十人が四十人にも、四十人が七十人にも、多く見えるものであるが、正確にかぞえても、三十人以下ではなかった。
真っ黒に、武蔵を取りまいた。
いや、その武蔵が、背中の一方を木挽小屋につけているので、その小屋もろとも、取り囲んだという形である。
「…………」
武蔵は、三面の敵の頭数を、じっと眼で読みながら、この状態が、どう変化してかかって来る

か――それをじっと見ているような眸であった。
　三十人の人間がかたまれば、それは三十人の心理ではない、一団はやはり一個の心理である。その心理が微妙な動きを取って来る機先を観てしまうことは、そう難しいことではなかった。
　案の如く、いきなり単独で、武蔵へ斬りつけて来るようなものはない。集合体の当然な姿勢として、多数が一つ個性にかたまるまでのしばらくの間は、ただがやがやと立ち騒いで、武蔵を遠巻きにしながら口々に罵り、中には、市井のならずものみたいに、
「……野郎」
　とか、また、単に、
「青二才奴」
　とか呻いて、自分たち個々の弱さを、徒らに示すに過ぎない虚勢のまま、ややしばらく、桶のように円くなって、武蔵を囲んでいた。
　最初から一個の意思と行動を持っている武蔵のほうは、その間、わずかな間にしろ、彼らよりは十分な余裕を持っていた。大勢の顔の中で、どれとどれが手強いか、どの辺が脆いか、ぴかぴか光る眼つきを拾って、およそ心に備えておく余地すらあった。
「拙者に、待てといわれたのは誰だ。いかにも、拙者は武蔵だが」
　彼が、見渡していうと、
「われわれだ。ここにいる一同が呼びとめたのだ」
「では、吉岡の御門下か」
「いうまでもなかろう」

「御用事とは」
「それも、改めて、ここでいう必要もないと思う。――武蔵、支度はいいか」

四

「支度？」
ちらと唇が歪む。
鉄の桶みたいに、彼を囲んでいる殺気は、彼の白い歯から洩れた冷笑に、ふと毛穴の緊まるようなものに面を吹かれた。
武蔵は、語気を揚げて、すぐいいつづけた。
「武士の支度は、寝る間にも出来ておること、いつでも参られい。理も非もない喧嘩仕かけに、人間らしい口数や、武士らしい刀作法は、事可笑しい。――だが、待て、一言聞いておきたい。各〻はこの武蔵を、暗殺したいか、正当に討ちたいか」
「…………」
「意趣遺恨で来たか、試合の仕返しで来たか。それを訊こう」
「…………」
言葉のうちにでも、勿論、武蔵の眼――またその体に斬り込める隙が見出せたなら、囲りの刃は穴から水の噴くように、彼の虚へ向って衝いて出るはずであるが、そういう者もなく、数珠のような沈黙に縛られている大勢のうちから、
「いわずとも知れたこと！」

と、大喝して、武蔵のことばに答えた者がある。
ぎらっと、武蔵はその顔へ眸を射向けた。年輩、態度、この中では、吉岡方の然るべき者らしく思える。
それは、高弟中の御池十郎左衛門だった。十郎左衛門は、自分がまず、初太刀の皮膜を切ろうとするものらしく、ズズと、摺り足に身をすすめて、
「師の清十郎敗れ、つづいて御舎弟の伝七郎様を討たれ、なんのかんばせあって、われわれ吉岡門の遺弟が、汝を無事に生かしておけるかっ。——不幸、汝のために、吉岡門の名は泥池にまみれたれど、恩顧の遺弟数百、誓って師の御無念をはらさいではおかぬ。意趣遺恨のという狼藉ではない、師の寃をそそぎ奉る遺弟の弔い合戦だわ。武蔵っ、不愍だが、汝の首はわれわれが申しうけたぞ」
「おお、武士らしい挨拶を承った。そういう趣意とあれば、武蔵の一命、或はさし上げぬ限りもない。しかし、師弟の情誼を口にし、武道の寃を雪ごうという考えなれば、なぜ、伝七郎殿の如く、また清十郎殿の如く、堂々と、この武蔵へすじみち立てて正当な試合に及ばれぬか」
「だまれっ！　汝こそ、今日まで居所をくらまして、われわれの眼がなくば、他国へ逃げのびようといたしながら」
「卑劣者は、人の心事も卑劣に邪推する、武蔵は、かくの通り、逃げもかくれもしておらぬ」
「見つかったればこそであろうが」
「なんの、姿を晦ます心なら、これしきの場所、どこからでも」
「しからば、吉岡門の者が、あのまま、汝を無事に通すと心得ていたか」

「いずれ、各〻から挨拶はあるものと存じていた。しかし、かような繁華の町中で、人を騒がせ、野獣か、無頼者のような、理不尽な争いを演じては、われら、一個の名ばかりか、武士という者すべての恥さらし。各〻の申さるる師弟の名分も、却って、世の笑いぐさではあるまいか、師へ対しても恥のうわ塗りではござるまいか。——さもあらばあれ、師家は絶滅、吉岡道場は離散、この上、恥も外聞もあろうかと、武門を捨てた気とあらばなにをかいおう、武蔵五体と両刀のつづく限りは、相手になる、死人の山を築いてみせる」

「なにをッ」

十郎左衛門ではない。十郎左衛門の横あいから一人が、こう肱の弦を切りかけると、どこかで、

「——板倉が来るぞっ」

呶鳴った者がある。

五

その頃、板倉といえば、怖い役人という代名詞になっていた。

大路打たすは
誰が栗毛ぞ
伊賀の四郎左か
みなにげる
だの、

伊賀どのはそも
千手観音か天目天か
あまた目付に
百与力

などと、童戯の群れまで謡っているのは、みなその板倉伊賀守勝重のことだった。
今の京都の繁昌は、特殊な発達と、変則な好景気に浮わついていた。それはこの都府が、政治的にも、戦略的にも、日本の分れ目を握っていて、重要な作用を持っているからである。
だから、全国中でも、ここがいちばん文化も進歩していたが、思想的に観ると、最も市政に厄介な土地でもあった。
室町時代の初めから、土着の市民は殆ど、武家の殻をすてて町人になり、そしてただ保守的だった。今では、徳川か、豊臣か、そのどっちかの色を持った武士が、互いにこの分水嶺に拠って、次の時代を、虎視眈々と窺っている。
その上、素姓も知れない、またなんで生計を立てているのか分らないような武家が、ずいぶん郎党や一門を養って相当に根を張っている。
また、今に、徳川、豊臣の二つの勢力が、当然、なにかおっぱじめるに違いないから――犬も歩けば棒にあたるを空頼みにして、蟻のように、うようよしている牢人もたくさんある。
その牢人と組んで、博奕、ゆすり、かたり、誘拐を職業にして立とうとする無頼者も殖えるし、飲食店や売女もそれに灯をつける。いつの世の中にも多い耽溺主義者だの、刹那主義的な人間も、信長の謡った「――人生五十年、化転の夢にくらぶれば」を、たった一つの真理と奉じ

て、一生懸命に、酒と女と刹那の享楽で、早死を心懸けている。
それだけならいいが、そういう虚無的な人間も、いっぱしな政治観や社会観を放言し、そして、徳川とも豊臣とも色分けつかない偽装をもって、その時々の世情によって、狡く泳いで、うまい蔓でもあったら摑もうとしているから、ここの市政は並大抵な奉行ではまず睨みがきかない。
そこで徳川家康の眼鑑で、京都所司代にもって来たのが、板倉勝重だった。
慶長六年以来、与力三十騎、同心百名を付せられて、この勝重が、京都の睨み役に任命された時、ちょっとした話が伝わっている。
家康から、辞令をうけた時、勝重はすぐ命を拝さず、
(邸にもどって、一応、妻とよく相談してから、お答え仕ります)
帰邸すると、勝重は妻に向い、任官の沙汰を告げていうには、
(古来から顕職の栄位に擢んでられて、却ってために、家を亡ぼし、身を害した者が史上にも多い。その因を思うに、みな、門閥と内室のわずらいから起っておる。だから誰よりもおまえの心に相談するのだが、おまえは、わしが所司代となっても、市尹たるわしのすることには、一切口出ししないと誓うなら、任官しようと思うが)
すると妻は、つつしんで誓った。
(なんで婦女子が左様な口出しを致しましょう)
翌る朝、登城するとて、勝重が衣服を着ると、下着の襟を折って着ていた。妻が見て、それを直そうとすると、

（おまえはもう誓いを忘れているではないか）

と叱り、ふたたび妻を堅く誓わしめてから、はじめて家康の命を拝したというのである。

この覚悟で就職した勝重なので、彼のすがたは公明だった。同時に峻厳でもあった。——恐い役人を上に持つことは、嫌がりそうなものだが、事実その後の市民は、彼を父のようにあがめ、家の上に、父がいるように安心した。

さて、話はわき道へそれたが、今、

（板倉が来るぞ）

と、うしろで呶鳴った人間は誰だろうか。勿論、吉岡方の者はすべて、武蔵と対しているので、そんな言葉を徒らに放つはずはない。

六

——板倉が来るぞ。

は当然、

——板倉の手先が来るぞ。

という意味に受取れたのである。

役人にでしゃばられては厄介な場合だった。けれど、こういう盛り場には、極まって見廻りが歩いている。それが、何事かと見て、駈けつけて来たものかも知れない。

それにしても、今の掛声は誰だろう。味方の者でなければ、往来の者の注意か？

——と、御池十郎左衛門はじめ、吉岡門下の眼が、思わず声の方へふと外れると、

「待て、待て」
押分けて、武蔵と吉岡門下のあいだへ、自ら立ち塞がった若衆姿の侍がある。
「や？」
「お身は」
意外な眼を光らせて、自分へ集まる吉岡門下の大勢の眼と、武蔵の眼へ、その前髪は、
(わしだ！　この顔は、双方とも前から記憶があるであろうが！)
そういわないばかりに傲然と自己を誇示して、佐々木小次郎はいうのだった。
「今、総門の前で駕をおりると斬合だという往来の声。よもやと思いのほか、かねがね、こんな事件も起ろうかと案じていた各〻ではないか。――わしは吉岡の味方でもないし、なおさら、武蔵の味方でもない。――だが、武士であり剣客である以上は、武門のために、武士総体のために、敢て各〻方にいう資格がある」
前髪の風采に似あわない雄弁だった。そしてその口吻といい、人を睥睨する眼といい、飽くまで傲岸そのものだった。
「――そこで、双方に問うが、もしここへ、板倉殿の手の者でも来て、巷を騒がす不逞の狼藉と見なされ、始末書でも取られたら、双方共よい恥さらしではあるまいか。役人の手をわずらわせば、この態は、ただの喧嘩沙汰としか扱われぬぞ。――場所もわるい――時もわるい――武士たる各〻が、社会の秩序をみだすような所業をなせば、武士総体の恥になる。わしは、武士を代表して双方にいう。止せ、ここでは止せ。剣のうえの解決は、剣の作法に従って、改めて時や場所を選んでなすべきではないか」

彼の演舌に圧倒されて、吉岡方の者はみな黙りこんでしまった形であった。御池十郎左衛門は、小次郎がいい終ると、その言葉じりをすぐ取って、
「よしっ」
と強くいった。
「いかにも、道理はその通りに違いない。——だが小次郎、必ずその他日まで、武蔵が逃げ失せぬという保証を貴公はするか」
「してもよいが」
「あいまいでは承諾できぬ」
「だが、武蔵も生き物だし」
「逃がす気だな」
「ばかをいえっ」
小次郎は叱咤して、
「左様な片手落ちをなせば、貴公等の遺恨はわしへかかるではないか。それ程まで、この男を庇ってやらなければならない友誼も理由もわしにはない。……だが武蔵とても、この期になってまさか逃げもすまい。もし、京都から姿を晦ましたら、京都中に高札を建てて汚名を曝してやればよかろう」
「いや、それだけでは、承知できぬ。——必ず、他日の果し合いまでおん身が武蔵の身を預かると保証するなら、一応、今夜のところは別れてもよいが」
「——待て、武蔵の腹を糺してみるから」

小次郎はくるりと振向いた。さっきから、自分の背を射るように見ている武蔵のひとみを正面に睨め返しながら、彼は、自分を押し出すように、ずっと胸を寄せて行った。

七

「…………」
「…………」
口のうごく前に双方の烈しい眼であった。猛獣が猛獣を見た時のような沈黙であった。
このふたりは、先天的に合わない性格の持主とみえる。お互いが認めているものを、お互いに怖れ合っていた。若い自負心と自負心とが、触れるとすぐ摩擦を起そうとするのであった。
で——それは、五条大橋の時もまた今も同じ心理が竦み合いになりかけた。言葉を交わすまえに、眸と眸とが、もう小次郎の感情と、同時に武蔵の感情とを、完全にいい尽し、余すところなく無言の意思が闘っているのである。
——でも、一言はあった。
やがて小次郎の方からである。
「武蔵、どうだ」
「どうだとは」
「今、吉岡側のほうへ、わしが談合したような条件で」
「承知した」
「いいな」

「ただし、其許の条件には、異存がある」
「この小次郎に、身を預けるということの不満か」
「清十郎どの、ならびに伝七郎どのと、二度の試合にも、武蔵は、みじんも卑怯は致しておらぬ。なんで残余の遺弟たちに、かく名乗りかけられて、卑怯な背を見せようか」
「ウム、堂々たるものだ。その広言を、きっと聞き取っておこう。――然らば武蔵、望みの日取は」
「日も場所も、相手方の希望にまかせておく」
「それも潔い。――して、今日以後、おぬしはどこに居所を決めておるか」
「さだまる住居はない」
「住居がわからなくては、果し合いの牒状が遣せぬ」
「ここで、お決め下さらば、違約なくその時刻に、お出会い申す」
「ウム」
小次郎は頷いて後へ退がった。そして御池十郎左衛門や門下の者と、しばらく話し合っていたが、やがてまた一人離れて来て、武蔵へ、
「相手方は、明後日の朝――寅の下刻というが」
「心得申した」
「場所は、叡山道、一乗寺山のふもと、藪之郷下り松。――あの下り松を出会いの場所とする」
「一乗寺村の下り松とな、よろしい、わかった」
「吉岡方、名目人は、清十郎、伝七郎の二人の叔父にあたる壬生源左衛門の一子、源次郎を立て

る。源次郎は吉岡家の跡目相続人でもあれば、その者を立てるが、まだ年端もゆかぬ少年ゆえ、門弟何名かが、介添として立合いにつくということ……それも念のため申しておくぞ」

相互の約束を取り決めると、小次郎はそこの木挽小屋の戸をたたき、中へはいって行って、戦いている二人の木挽に命じた。

「そこらに、なんぞ不用な板片れがあろう。高札に建てるのじゃ、程よくひいて、六尺ほどの棒杭に打ちつけてくれい」

木挽が板をひいて出すと、小次郎は吉岡の者を走らせて、どこからか筆墨を取り寄せ、達筆を揮って、それへ果し合いの主旨を書いた。

相互に神文を取交わすより、これを往来に建てることは、絶対な約束を天下へ公約することになる。

吉岡側の手で、それが最も人目につきやすい辻へ打ち建てられるのを見届けて、武蔵は他人事のように、柳の馬場のほうへ足を早めて立ち去った。

八

ぽつねんと、柳の馬場に、武蔵が来るのを待っていた城太郎は、

「遅いなあ」

幾度か、嘆息して、広い闇を見まわしていた。

駕の灯りが駈けてゆく。

酔っぱらいの唄がよろけてゆく。

「――おそいぞ、ほんとに」
もしや？　という不安が彼にもないではない。城太郎は突然、柳町のほうへ駈け出した。
すると、彼方から、
「これ、どこへゆく」
「あ、お師匠さま、あまり遅いから見に行こうと思ったんです」
「そうか。あぶなく行き違うところだったな」
「総門の外に、吉岡の者が、沢山いたろ」
「いたよ」
「なにかしなかったか？」
「ああ何もしなかった」
「お師匠様を捕まえようとしなかったの」
「ウム、しなかった」
「そうかなあ」
城太郎は、武蔵の顔を覗き上げて、その顔いろを読むようにまた訊いた。
「じゃあ、なんでもなかったんだね」
「ウム」
「お師匠様、そっちじゃないよ。烏丸様へ行く道は、こっちへ曲るんだよ」
「あ、そうか」
「お師匠様も、早くお通さんに会いたいでしょう」

「会いたいなあ」
「お通さんも、きっと、びっくりするぜ」
「城太郎」
「なに」
「おまえとわしと、初めて会った木賃宿なあ。あれは、何町であったかのう？」
「北野のかい」
「そうそう、北野の裏町だったな」
「烏丸様のお館は立派だぜ。あんな木賃宿みたいじゃないよ」
「ハハハハ、木賃宿とは、較べものにはなるまい」
「もう表門は閉まっているけれども、裏の下部門をたたけば開けてくれるからね。お師匠様を連れて来たっていうと、きっと、光広様も出て来るかも知れないよ。それからねお師匠様、あの沢庵坊主ね、あいつ、とても意地わるだぜ。おいら癪に障っちまった。お師匠様のことを、あんな者は抛ッとけばいいんだっていうのさ。そして、お師匠様のいるところをちゃんと知っているくせに、なかなか教えてくれなかったんだぜ」
武蔵の無口を知りぬいているので、いくら武蔵が黙然と聞いていても、城太郎は独りで勝手にお饒舌りを休めない。
やがて、烏丸家の下部門がそこに見えると、
「お師匠様あそこだよ」
指さして、ふいに立ち止まった武蔵の眼へ、教えるように、

「あの塀の上に、ぽっと明りが映してるだろ。あそこが北の屋で、ちょうど、お通さんが寝ている部屋があの辺なんだぜ。……あの灯りは、お通さんが起きて待っている灯りかも知れないね」
「…………」
「さ、お師匠様、はやくはいろう、今おいらが、門を叩いて門番さんを起すからね」
そこへ向って、駈け出そうとすると、武蔵は城太郎の手首をぐっと握って、
「まだ早い」
「どうしてさ、お師匠様」
「わしは、お館へははいらぬ。お通さんへは、おまえからよう く言伝をしてもらいたい」
「え、なんだって。……じゃあお師匠様は、なにしにここまで来たのさ」
「おまえを送って来たまでだ」

九

ひそかに万一の変化をおそれて、敏感になっていた童心に、そのおそれていた予感が、ふいに事実となって、大きく映って見えたのであろう。
城太郎は、途端に、
「いけない、いけない、いけない」
絶叫に近い声を出し、
「だめだよ、お師匠様。——来なくっちゃだめだよ！」
武蔵の腕を懸命に引ッぱって、もうすぐそこの門の内にいるお通の枕元まで、どうしても連れ

て行こうとする。
「躁ぐな」
武蔵は、夜気のうちにしんとしている烏丸家の邸内を憚って、
「まあ、よう聞け。わしのいうことを」
「聞かない聞かない！　お師匠様はさっき、おいらと一緒に行くといったじゃないか」
「だから、ここまで、おまえと共に来たではないか」
「門の前までといやしないじゃないか。おいらはお通さんに会うことをいってたんだ。お師匠様が弟子に嘘を教えていいのかい」
「城太郎、そう猛らずに、まあわしの言葉を落ちついて聞けよ。この武蔵にはまた、近いうちに、生死の知れぬ日が迫っておるのだ」
「侍はいつも、朝に生れて夕べに死ぬる覚悟を勉強しているのだって、お師匠様は口癖にいってるじゃないか。それなら、そんなこと、今始まったことでもないだろ」
「そうだ、自分で常にいい馴れている言葉も、そうしてお前の口からいわれると、かえって教えられる気持がする。——今度という今度こそは、武蔵も覚悟のとおり、九死のうち一生も覚束なかろう。それゆえ、なおさらお通さんには会わぬ方がよいのだ」
「なぜ。なぜ！　お師匠様」
「それはお前に話してもわからぬ。お前も今に大きくなってみると分る」
「ほんとに……ほんとにお師匠様は、近いうちに、死ぬようなことがあるの」
「お通さんへはいうなよ。……病気なそうじゃが、体を堅固にして、ゆく末よい道を選んでたもれ

と……なあ城太郎……そうわしがいって行ったと申して、今のようなことは、聞かさぬがよいぞ」
「嫌だ。嫌だ。おいらはいうよ！　そんなこと、お通さんに黙っていられるもんか。——なんでもいいからお師匠様、来ておくれよ」
「わからぬ奴！」
武蔵が振り離すと、
「でも、……お師匠様」
城太郎は泣き出してしまい、
「でも！　……でも！　……それじゃあ、お通さんが、あんまり可哀そうだ……。お通さんに……今日のこと話したら、お通さんは、よけいに病気がわるくなっちまうに極ってら」
「——だからこういってくれ。所詮兵法修行のうちは、会うたとて、お互いの不為。多艱に克ち、忍苦を求め、自分を百難の谷そこへ捨ててみねば、その修行に光はついて来ないのだ。……なあ城太郎、お前もまた、その道を今に踏んで行かねば一人前の兵法者にはなれまいぞ」
「…………」
泣きじゃくっている城太郎の姿を見れば、武蔵はまた可憐しくもなって、その頭をふところへ抱き寄せ、
「いつ果てるか知れないのが兵法者の常、おまえも、わしが亡い後は、よい師を捜せよ。お通さんにも、このまま会わぬ方が、行末になってみれば、あの人の倖せになり、武蔵の気持も、その時には、よく分ってくる筈だ。……おお、そこの塀の内に映している明りが、お通さんのいる部屋か。……お通さんも寂しかろう。さ、はやくおまえも戻って眠るがいい」

十

　無茶はいうが、城太郎にも、武蔵の苦衷の半分ぐらいは、なんとなく分っているらしいのである。泣きじゃくりながらも、拗ねた背中を向けているのは、一頃よりは物の理解が少しついてきた証拠で、お通さんには可哀そうだし、お師匠様にはこれ以上の無理もいえないし――と立ち往生している童心の嗚咽が拗ねて見えるのだった。

「じゃあ、お師匠様」

　手放しの泣き顔を、不意と、武蔵へ振向けると、最後の一縷へ縋りつくように、

「――修行がすんだら、その時は、お通さんとも仲よく会うの。え、え。お師匠様の修行が、もうこれでいいと、いう時が来たら」

「それはもう、そうなればなあ……」

「それは何日？」

「何日ともいえぬ」

「二年？」

「……………」

「三年？」

「修行の道には果てがない」

「じゃあ、一生涯もお通さんと会わないつもり」

「わしに天稟があれば、道に達する日もあろうが、わしに素質がなければ、生涯かかってもまだ

このままの鈍物でいるかも知れん。――それになによりは、目前に死を期していることがある。――死んで行く人間がなんで、これから花も咲こう実も成ろうとする若い女子と、ゆくすえの約束などを誓えよう」

武蔵が思わずその点まで口を辷らすと、城太郎には、そこの要点はまだよく理解し難いものと見え、すこし怪訝そうに、

「だから、……お師匠様、そんな約束なんかしないことにして、ただお通さんと会えばいいじゃないか」

と、したり顔にいう。

武蔵は城太郎に対して、いえばいう程、自身のうちに矛盾を感じ、迷いを覚えて、苦しくなった。

「そうはゆかないのだ。お通さんも若い女子、武蔵も若い男。しかも、おまえにいうのも恥ずかしいが、会えばわしはお通さんの涙に負けてしまう。きっと、お通さんの涙に今の堅い決心を崩されてしまう……」

柳生の庄で、お通の姿を見ながら逃げて去ったあの時の回避と――今夜の彼の気持とでは、同じ形にあらわれても、武蔵の心の内面には、大きな相違を自覚していた。

花田橋の時でも、柳生谷の時でも――以前はただ、青雲にあこがれる壮気と覇気――また潔癖に似た驀しぐらな道心が、火が水を弾くように、女性の情を反撥したに過ぎなかったが、今の武蔵には、元来の野性が、徐々と智育されてくるにつれて、そこから一面の弱さも当然に覚えて来つつあった。

またと生れ得ない世に生れてきた生命の尊さを知っただけでも、それだけ恐さを知って来たのである。剣に生きる人間以外に、種々に生きる道を辿っている人生の視野を知っただけでも、それだけ、独りよがりの自負心を削がれているのである。「女」というものについても武蔵は、その魅力を、吉野に見ているし、自分という実体の中からも多分に「女」に持つ人間のあらゆる惑情を知りかけている――で今の武蔵は、その対象を恐れるよりも、自分の心を恐れるのだった。――殊にその対象の人がお通である場合において、彼には、それに克てそうな自信もないし――また、彼女の一生というものを考えずに、彼女を考えることもできなかった。

しくしくと泣いている城太郎に、

（わかったか……）

と、武蔵のことばが耳のそばに聞えていたので、城太郎は肱で顔を抑えていたが、ふとその泣き顔を上げると、もう彼の前には靄のこめた厚い闇しか見えなかった。

「――あッ、お師匠様っ」

ばたばたと城太郎は、長い築地の角まで走って行った。

十一

大声あげて、城太郎は叫ぼうとしたが、叫んでも無駄なことが分っているので、彼は、わっと泣きながら、築地に顔を押し当てた。

「…………」

いいことと信じてやった幼い一心が、大人の思慮によって覆されると、それに服従はして

も、理窟は分っても、口惜しくて口惜しくてたまらないらしいのである。泣くだけ泣いて、声がつぶれると、肩で波打ちながら、まだしゃくりあげていた。

——と。

館のお下婢の女でもあろうか、今、どこからともなく戻って来て、下部門の外に佇んだ人影がある。ふと、暗がりの嗚咽が耳にふれたのであろう、被衣のひさしを向けて、弱々と近づいて来ながら——

「……城太さん？」

疑うように呼んだ。

「……城太さんじゃないの？」

ふた声目に、城太郎は、ぎょっとしたような顔を向け、

「あっ、お通さん？」

「まあ、なにを泣いているんです——！そんなところで」

「お通さんこそ、病人のくせに、どうして外へなんか」

「どうしてって、おまえくらい人を心配させる者はない。わたしにも、お館の人へも、なにもいわずに、いったい、今までどこを歩いていたんです……。灯りが点いても帰って来ないし、御門が閉まっても姿が見えないし、どんなに心配したか知れません」

「じゃあ、おいらを捜しに出ていたの」

「もしやなにか、間違いでもあったのではないかと、寝ているにも寝ていられなくなって」

「ばかだなあ、病人のくせに。またこの後、熱が出たらどうするんだい。さあ、はやく寝床へ引

っ込みなよ」
「それよりなんでお前は泣いていたの」
「後でいうよ」
「いいえ、凡事ではないらしい。さ、事情をお話し」
「寝てから話すからさ、お通さんこそ、はやく寝てくれよ。明日また、うんうん唸っても、おいら知らないぜ」
「じゃあ、部屋へはいって寝ますから、ちょいとだけ話しておくれ。……おまえ沢庵様の後を追いかけて行ったのでしょう」
「ああ……」
「その沢庵様から、武蔵様のいらっしゃる所をきいておいた?」
「あんな情け知らずの坊さんは、おいら嫌いだ」
「じゃあ、武蔵様の居所は、とうとう分らずじまいですか」
「ううん」
「分ったの」
「そんなこといいから、寝ようよ、寝ようよ。——後で話すからさ!」
「なぜ、わたしに隠すんですか。そんな意地悪をするなら、わたしは寝ずにここにいるからいい」
「……ちぇッ」
城太郎は、もいちど泣き直したいように、眉を顰めながら、お通の手を引っ張って、

「――この病人も、あのお師匠様も、どうしてそう、おいらを困らすんだろうなあ。……お通さんの頭にまた、冷たい手拭を当ててからでないと話せないことなんだよ。さ、おはいりよ！　はいらなければ、おいらが担いで行って寝床の中へ押しこむよ」

片手にお通の手をつかみ、片手で下部門の戸をどんどん叩きながら、癇癪まぎれに、城太郎は呶鳴った。

「門番さん！　門番さん！　病人が寝床から外へ抜け出しているじゃないか。――開けとくれよ。はやく開けないと病人が冷えちまうよ！」

明日待酒

一

額に汗をにじませ、酒も少し手伝っているらしい顔色をして、本位田又八は、五条から三年坂へ傍見もせず駈けて来た。

例の旅籠屋である。石ころの多い坂の途中から、汚い長屋門の下を駈けぬけ、畑の奥の離屋まで来ると、

「おふくろ」

と、部屋のうちを覗き、

「――なあんだ、また昼寝か」
　と舌打ちして呟いた。
　井戸端で一息つき、ついでに手足も洗って上がって来たが、老母はまだ眼もさまさず、どこが鼻か唇かわからないほど、手枕に顔を押し潰して鼾をかいているので、
「……てえっ、まるで泥棒猫みたいに、暇さえあると、寝てばかりいやがる」
　よく眠っていると思っていた老母は、その声にうす目をあいて、
「なんじゃあ？」
　と起き上がってきた。
「おや、知ってたのか」
「親をつかまえて、なにをいうぞ。こうして、寝て置くのがわしの養生じゃ」
「養生はいいが、おれが少し落着いていると、若いくせに元気がないの、やれその暇に手懸りを探って来いのと、びしびし叱りつけながら、自分だけ昼寝しているのはなんぼ親でも勝手すぎようぜ」
「まあゆるせ、ずいぶん気だけは達者なつもりでも、体は年に勝てぬとみえる。――それにいつぞやの夜、おぬしと二人して、お通を討ち損ねてから、ひどう落胆してのう、あの晩、沢庵坊めに抑えられたこの腕の根が、いまだに痛んでならぬのじゃ」
「おれが元気になるかと思えば、おふくろが弱音を吐くし、おふくろが強くなるかと思えば、おれの根気がはぐれてしまうし、これじゃあ、いたちごっこだ」
「なんの、今日はわしも骨休めに一日寝ていたが、まだおぬしに弱音を聞かせるほど、年は老ら

ぬ。――して又八、なんぞ世間で、お通の行先とか、武蔵の様子とか、耳よりな話は聞かなんだか」
「いやもう、聞くまいとしても、えらい噂だぞ。知らないのは、昼寝しているおふくろぐらいなものだろう」
「やっ、えらい噂とは」
お杉は膝をつき寄せて来て、
「なんじゃ？　又八」
「武蔵がまた、吉岡方と、三度目の試合をするというのだ」
「ほ、どこで何日」
「遊廓の総門前にその高札が建ててあったが、場所はただ一乗寺村とだけで、詳しくは書いてない。――日は明日の夜明け方となっていた」
「……又八」
「なんだい」
「汝れは、その高札を、遊廓の総門のわきで見たのか」
「ウム、大変な人だかりさ」
「さては昼間から、そのような場所で、のめのめと遊んでいたのじゃろうが」
「と、とんでもねえ」
慌てて手を振りながら、
「それどころか、稀に酒ぐらい少し飲むが、おれは生れ代ったように、あれ以来、武蔵とお通の

消息を探り歩いているじゃねえか。そうおふくろに邪推されちゃ情けなくなる」

ふとお杉は、不愍を増して、

「又八、機嫌なおせ、今のは、ばばの冗談じゃ。汝れの心が定まって、元のような極道もせぬことは、ようこの老母も見ているわいの。——したがさて、武蔵と吉岡の衆との果し合いが明日の夜明けとは急なことじゃな」

「寅の下刻というから、夜明けもまだ薄暗いうちだなあ」

「おぬし、吉岡の門人衆のうちに、知っている者があるといったの」

「ないこともないが……そうかといって、あまりいいことで知られているわけでもねえからなあ、なにか、用かい」

「わしを伴れて、その吉岡の四条道場とやらへ案内してほしい。——直ぐにじゃ、汝れも支度したがよい」

二

年寄りのせっかちというものはひどく勝手である。悠々閑と、今まで昼寝していた自分のことは棚へあげ、

「又八、早うせんか」

と、人の落ちつきに、眉をしかめて、当って来る。

又八は、身支度もせず、けろりとして、

「なんだい慌てて、軒に火でもついたように、——第一、吉岡道場へ行って、いったいどうする

つもりなのだ、おふくろの量見は」
「知れたこと、母子して、お願いしてみるのじゃわ」
「なにを……」
「明日の夜明け、吉岡の門弟衆が武蔵を討つというたであろが、その果し合いの人数のうちへ、わしら母子も加えていただき、及ばずながら力を協せて、武蔵めに、一太刀なりと、恨まにゃならぬ」
「アハハハハ、アハハハハ、……冗談じゃねえぞ、おふくろ」
「なにを笑うぞ」
「あまり暢気なことをいってるからよ」
「それは、汝れのことじゃ」
「おれが暢気か、おふくろが暢気か、まア街へ出て、世間の噂をちっと聞いて来るがいい。――吉岡方は、先に清十郎を敗られ、伝七郎を討たれ、今度という今度こそは、最後の弔い合戦だ。破れかぶれも手伝って、血の逆った連中ばかりが、もう滅亡したも同様な四条道場に首をあつめ、この上は、多少の外聞にかかわろうとも、なんでも武蔵を打ち殺してしまえ、師匠の讐を弟子が打つ分には、敢て、尋常な手段や作法にこだわっている必要はない――と公然、今度こそは大勢しても武蔵を討つと、言明しているのだ」
「ホウ……そうか」
聞くだけでも耳が娯むように、お杉は眼をほそめて、
「それでは、いかな武蔵めも、こんどはなぶり斬りに遭うじゃろう」

「いや、そこはどうなるか分らない。多分、武蔵の方でも、助太刀を狩りあつめ、吉岡方が大勢ならば、彼も多勢で迎えるだろうし、さてそうなれば喧嘩は本物、戦のような騒ぎになるのじゃないかときょうの京都は、その噂で持ちきりなのだ。――そんな騒動の中へ、ヨボヨボなおふくろが助太刀にまいりましたなどと行って見たところで、誰も相手にするものか」
「ウーム……それやそうじゃろうが、じゃといって、わしら母子が、これまで尾け狙うてきた武蔵が、他人の手で討たれるのを、黙って見ていてよいものか」
「だから、俺はこう思うんだ。あしたの夜明けごろまでに一乗寺村まで行っていれば、果し合いのある場所も、その様子もきっと分る。――そこで、武蔵が吉岡の者に討たれたら、その場へ行って、母子して両手をつき、武蔵とおれ達のいきさつを詳しく述べて、死骸に一太刀恨ませてもらう。その上、武蔵の髪の毛なり、片袖なりを貰って、かくの通り、武蔵を討ち取ったと故郷の衆に話せば、それでおれ達の顔は立つじゃねえか」
「なる程……。汝れの考えも智慧らしいが、そうするより他はあるまいの」
坐り直してお杉はまた、
「そうじゃ、それでも故郷への面目は立つわけじゃ。……後はお通ひとり、武蔵さえ亡ければ、お通は木から落ちた猿も同様、見つけ次第、成敗するに手間暇はかからぬ」
独り言に、うなずいて、やっと年寄りのせっかちも、そこで落ちつくところに落ちついたらしい。
又八は、醒めた酒を思い出したように、
「さあ、そう極めたら、今夜の丑満ごろまでは、ゆっくり骨を休めて置かなければならねえ。

……おふくろ、少し早いが、晩飯の一本を、今から酎けて貰おうか」
「酒か。……ム、帳場へいうて来やい。前祝いに、わしも少し飲もう程に」
「どれ……」
と、億劫そうに、手を膝にかけて起ちかけたと思うと、又八は、なにを見たのか、あっと横の小窓へ大きな眼をみはった。

三

ちらと、白い顔が窓の外に見えたのであった。又八がびっくりしたのは、単にそれが若い女であったというだけではない。
「やっ、朱実じゃねえか」
彼は窓へ駈けよった。
逃げそびれた小猫のように、朱実は木蔭に立ち竦んでいた。
「……まあ又八さんだったの」
彼女もびっくりしたような眼をそこにみはって。
そして、伊吹山のころから今もまだ、帯か袂か、どこかに付けているらしい鈴が、顫えるように彼女の身動きとともに鳴った。
「どうしたのだ、こんなところへ、どうして不意に来たのか」
「……でも、わたしここの旅籠に、もうずっと前から泊っていたんですもの」
「ふウム……、そいつあちっとも知らなかった。じゃあ、お甲と一緒にか」

「いいえ」
「一人で？」
「ええ」
「お甲とはもう一緒にいないのか」
「祇園藤次を知っているでしょう」
「ウム」
「藤次とふたりで、去年の暮、世帯をたたんで他国へ逐電してしまったんです。わたしはその前からお養母さんとは別れて……」
鈴の音がかすかに顫えて鳴る。見れば袂を顔に押し当てて、朱実はいつの間にか泣いているのだった。木蔭の光線の青いせいか、それの襟あしといい細い手といい、又八の記憶にある朱実とはひどく違って来たように思われる。伊吹山の家や、よもぎの寮で、朝夕見ていたような処女の艶はどこにもない。
「――誰じゃあ？　又八」
と、うしろでお杉がいぶかって訊ねた。
又八は振顧って、
「おふくろにも、いつか話したことがあるだろう。あの……お甲の養女さ」
「その養女が、なんでわしらの話を窓の外で立ち聞きなどしていたのじゃ」
「なにもそう悪く取らなくてもいいやな。この旅籠に泊り合せていたのだから、何気なく立ち寄ってみたまでのことだろう。……なあ朱実」

「え、そうなんです。まさか、ここに又八さんがいようなんて、夢にもあたし知らなかった。……ただ、いつぞや、ここへ迷れて来た時に、お通という人は見かけたけれど」
「お通はもういない。おめえ、お通となにか話したのか」
「なにも深い話はしなかったけれど、後で思い出しました。——あの人が、又八さんをお故郷で待っていた許嫁のお通さんなのでしょう」
「……ム、まあ、以前は、そんなわけでもあったんだが」
「又八さんもお養母さんのために……」
「おめえはその後、まだ、独り身かい。だいぶ様子が変ったが」
「わたしも、あのお養母さんのためには、ずいぶん辛い思いを忍んで来ました。それでも育ててもらった恩義があるので、じっと辛抱して来たんですけれど、去年の暮、我慢のならないことがあって、住吉へ遊びに行った出先から、独りで逃げてしまったんですの」
「あのお甲には、おれもおめえも、これからという若い出ばなを滅茶滅茶にされたようなものだ……。畜生め、その代りにゃあ今に、碌な死にざまはしやしねえから見ているがいい」
「……でも、これから先、あたしどうしたらいいのかしら？」
「おれだって、これから先の道は真っ暗だ……。あいつにいった意地もあるから、どうかして、見返してやりてえと思っているが……。あアあ……思うばかりで」
　窓越しに、同じ運命を託ち合っていると、お杉はさっきから一人で旅包みを拵えていたが、舌うちして、
「又八、又八。用でもない人間と、なにをぶつぶついうているのじゃ。こよい限りでこの旅籠も

立つのじゃないか、汝が身も少し手伝うて身仕舞でもしておかぬか」

なにかまだ話したそうな様子であったが、お杉に気がねして、朱実は、

「じゃあ又八さん、後でまた」

悄々と、立ち去った。

四

程なく――

ここの離屋には灯りが点る。

夜食の膳には、誂えた酒がつき、酌み交わしている母子の間へ、勘定書が盆に載っている。旅籠の手代だの、亭主だの、交る交る別れの挨拶に来て、

「いよいよ今夜のお立ちだそうでございますなあ。長い御逗留にも、なんのおかまいも申しあげませんで。……どうぞこれにお懲りなく、また京都へお越しの折にはぜひとも」

「はい、はい。またお世話になろうも知れませぬ。年暮から初春を越して、思わず三月越しになりましたのう」

「なんだかこう、お名残り惜しゅうございますな」

「ご亭主、お別れじゃ、一盞あげましょう」

「おそれいりまする。……ところで御隠居様、これからお故郷元へお帰りで？」

「いえいえ、まだ故郷へは何日帰れることやら」

「夜中に、お立ちだと伺いましたが、どうしてまたそんな時刻に」

「急にちと大事が起りましてのう。……そうじゃ、お宅に、一乗寺村の割絵図があるまいか」
「一乗寺村といえば、白河からまだずんと端れで、もう叡山に近い淋しい山里。あんな所へ、夜明け前にお出でなされても……」
亭主のいう腰を折って、又八が横から、
「なんでもよいから、その一乗寺村へ行く道筋を、巻紙の端にでも書いておいておくれ」
「承知いたしました。ちょうど一乗寺村から来ている雇人がおりますゆえ、それに聞いて分りよく絵図にして参りましょう。したが、一乗寺村というても広うござりまするが」
又八は少し酔っていた。やたらに鄭重振る亭主の話がうるさそうに、
「行く先のことなんざ心配しなくともいい。道順だけ訊いているのだ」
「おそれ入りました。――では、悠々、お支度を遊ばして」
揉手しながら、亭主は縁へ退りかけた。
ばたばたと、母屋から離屋の周りを、そのとき、旅籠の雇人たちが三、四名駈けていた。亭主のすがたをここに見ると、一人の番頭が、あわてていった。
「旦那、この辺へ逃げて来ませんでしたか」
「なんじゃ。……なにが？」
「あの――この間から奥に一人で泊っていた娘っ子で」
「えっ、逃げたって」
「夕方までは、慥に、姿が見えたんですが……どうも部屋の様子が」
「いないのか」

「へい」
「阿呆どもが」
煮え湯を飲んだように亭主の顔は変った。客の部屋の閾際で揉手をしている時とは別人のように口汚く、
「逃げられてから騒いだとて、後の祭りじゃ。――あの娘の様子といい、初手から事情のあるのは知れきっている。――それを七日も八日も泊めてから、お前らは初めて一文なしと気がついたのであろうが。――そんなことで、宿屋商売が立ってゆかれるか」
「相済みません。つい、処女な娘と思って――まったく一杯食ってしまったんで」
「帳場の立て替えや、旅籠代の倒れは仕方がないが、なにか、相宿のお客様の物でも紛失していないか、それを先に調べて来なさい。エエ忌々しいやつめ」
舌打ちして、亭主も戸外の闇へ、眼いろを研いだ。

五

夜半を待ちながら、母子はなんべんか銚子を代えた。
お杉は、自分だけ先に、飯茶碗をとって、
「又八、おぬしも、もう酒はよくはないか」
「これだけ」
と、手酌で酌いで
「飯はたくさんだ」

「湯漬けでも食べておかぬと、体にわるいぞよ」
前の畑や、路地口を、雇人の提燈がしきりと出入りしていた。お杉はそこから見て、
「まだ捕まらぬとみえる」
と、つぶやいた。そして、
「関り合いになってはつまらぬゆえ、亭主の前では黙っていたが、旅籠代を払わずに逃げた娘というのは、昼間、汝れと窓口で話していたあの朱実じゃないのか」
「そうかもしれねえ」
「お甲に育てられた養女では、碌な者であろうはずはないが、あのようなものと出会うても、この後は口など交わしなさるなよ」
「……だがあの女も、考えれば、可哀そうなものさ」
「他人に不愍をかけるもよいが、旅籠代の尻ぬぐいなどさせられては堪らぬ。ここを発つまで、知らぬ顔していやい」
「…………」
又八は、べつなことを考え出しているらしく、髪の根をつかみながら、横になって、
「忌々しい阿女だなあ。思い出すと、彼女の面が天井に見えてくる。……おれを過らした生涯の仇は、武蔵でもねえ、お通でもねえ、あのお甲だ」
お杉は聞き咎めて、
「なにをいうぞ。お甲などという女を討ったところで、故郷の衆が、誉めもせぬし、家名の面目も立ちはせぬがな」

「……ああ、世の中が面倒くさくなった」
旅籠の亭主が、その時、縁先から提燈と顔を見せていった。
「御隠居さま。ちょうど丑の刻が鳴りましたが」
「どれ……発ちましょうか」
「もう出かけるのか」
又八は、伸びをして、
「亭主、さっきの食い逃げ娘は、捕まったかい」
「いや、あれ限りでございますよ。縹緻が踏めるので、万一、旅籠代や立替えが取れなくても、住み込ませる口はあると安心していたところ、先手を打たれてしまいましたわい」
縁先へ出て、草鞋の緒をしめながら、又八は振返った。
「オイ、おふくろ、なにをしているんだい？……。おれを急きたてておいては何日も自分がまごまごしていやがる」
「まあ待たぬかい、気忙しない。……のう又八、あれは汝が身に預けたであろうか」
「なにを」
「この旅包みの側へおいたわしの巾着じゃ。――宿の払いは、胴巻のお金で払い、当座の路銀をその巾着に入れておいたのじゃが」
「そんな物、おれは知らねえよ」
「ヤ、又八、来てみやい。この旅包みに、又八様として、なにやら紙片れが結いつけてあるぞ。……なんじゃと？……まアいけ図々しやな、元の御縁に免じて、拝借してゆく罪をゆるしてく

れと書いてあるわ」
「ふうん……じゃあ朱実が攫って行ったのだろう」
「盗んで、罪をゆるしてくれもないものじゃ。……これ御亭主、客の盗難は、宿主も責めを負わずばなりますまい。なんとして下さるのじゃ」
「へえ……それでは御隠居様には、あの食い逃げ娘を、前からご存じでございましたので。……ならば、手前どもで踏み倒された勘定や立替えのほうを先に、なんとかしていただきたいものでございますが」
亭主がいうと、お杉は、眼を白黒しながら、あわてて顔を横に振った。
「な、なにを仰っしゃる、あんな盗ッ人娘に知る辺はない。ささ、又八、まごまごしていると鶏が啼きだすぞ、出ましょうわい、出ましょうわい」

必殺の地

一

――まだ月がある。
朝といっても恐ろしく早いのだ。自分たちの影法師が白い道の上に、黒々と重なって動くのが、なんだか不思議に見える。

「案外だなあ」
「ウム、だいぶ見えない顔がある。百四、五十人は集まると思っていたが」
「この分では、半分かな」
「やがて後から見える壬生源左衛門殿や、御子息や、あの親類がたを入れて、まあ六、七十人だろうな」
「吉岡家も廃ったなあ。やはり清十郎様、伝七郎様の二つの柱がもう抜けてしまったのだ。大廈の覆るとはこのことか」
影法師の一かたまりが囁いていると、彼方の石垣の崩れに腰かけている一群が、
「気の弱いことをいうな。盛衰はこの世の常だ」
と、誰か呶鳴るようにこっちへ向っていう。また、べつな一団が、
「来ない奴は来ないにしておけばいいじゃないか。道場を閉じたからには、めいめい自活の道を考える奴もあろう。将来の損得を思慮する人間もあるだろう。当り前のことだ。——その中で、あくまで、意地と義気に生きようとする遺弟だけがここに自と集まるのだ」
「百の二百のという人数はかえって邪魔になる。討つべき相手はたった一人ではないか」
「アハハハ。誰かまた、強がっているわい。蓮華王院の時はどうした。そこにいる連中、あの折、居合せながら、みすみす武蔵の姿を見送っていたのじゃないか」
叡山、一乗寺山、如意ケ岳、すぐ背後の山は皆、まだ動かない雲の懐に深く眠っている。
ここは俗称藪之郷下り松、一乗寺址の田舎道と山道の追分で、辻は三つ股にわかれている。
朝の月を貫いてひょろ長い一本松が傘枝をひろげていた。一乗寺山の裾野地ともいえる山の真

下なので、道はすべて傾斜している上に石ころが多く、雨降りの時は流れになる水のない河の跡が幾すじも露出している。

下り松を中心に、吉岡道場の面々は、月夜蟹のようにさっきからその辺りを占めて、

「この街道が三つに分れているので、武蔵がどこから来るかそれが考えものだ。同勢をすべて三手に分けて、途中に伏せ、下り松には名目人の源次郎様に、壬生の源左どの、その他、旗本格として御池十郎左、植田良平殿など、古参方が十名ほどひかえておられたらよろしかろう」

地形を案じていう者があると、また一人が、

「いや、ここの足場は狭隘だから、あまり一ヵ所に人数をかためておいてはかえって不利だろう。それよりも、もっと距離をおいて、武蔵の通り道にかくれ、いちど、武蔵の姿をやり過してから、前と背と、いちどに起って、ふくろ包みにすれば万討ちもらすことはあるまい」

と、一説を立てる。

人数の多数から自とわきあがる意気は天をも衝くように見えた。離れたり集まったりする影法師には皆、長やかな刀の鐺か、横たえている槍の影が串刺しになっていた。そしてその中には、一人の卑怯者らしいものもなかった。

「――来た、来た」

まだ十分に時刻は早いと分っていながら、彼方から一人が叫んで来ると、すぐに、ぎくっと肌のうぶ毛が凍るような心地して、影法師は皆しいんと黙りこくった。

「源次郎様だ」

「駕でござったな」

「なんといっても、まだお年若だからな」
人々の眼の向いた方に――遠く提燈の灯が三つ四つ――その提燈よりも明るい月の下を叡山颪しに吹かれながら、ちらちら近づいて来るのが見えた。

二

「やあ、揃ったな、各〻」
駕を捨てたのは老人だった。次の駕からまだ十三、四歳の少年が降りた。
少年も老人も、白鉢巻をして、高く股立をかかげていた。壬生の源左衛門父子である。
「これ、源次郎」
老人は、子へいい聞かせた。
「そちはこの下り松のところに立っておればよい。松の根元から動くでないぞ」
源次郎は黙ってうなずいた。
その頭を撫でながら、
「きょうの果し合いは、そちが名目人になっているが、戦いは、他の門弟衆がやる。おまえはまだ幼いからじっとここに控えていればよいのじゃ」
源次郎はこっくりして、正直にすぐ松の根元へ行き、五月人形のように凜々しく立った。
「まだよい、まだちと早い、夜明けまでにはだいぶ間があるでな」
腰を探って、がん首の大きな太閤張りの煙管を抜き、
「火はないか」

と、まず味方に余裕のあるところを示すつもりで見まわすと、
「壬生の御老台、火打石はいくらもあるが、その前に、人数を手分けしておいてはどうか」
御池十郎左衛門が前へ出ていう。
「それも一理あるな」
たとえ血脈の間がらとはいえ、幼少の子を果し合いの名目人に提供して惜しまないほどの好々爺である。一も二もなく他説に従って、
「――では早速、備え立てして敵を待とう。しかし、この人数をどう分けるというのか」
「この下り松を中心とし、三方の街道へ、各〻約二十間ばかりの距離をおいて、道の両側に潜んでいることとする」
「して、ここには」
「源次郎様のそばには、拙者、また御老台、その他十名ほどの者がいて、護るばかりでなく、三道のどこからか、武蔵が来たとの合図が起ったら、すぐそれへ合体して一挙に彼を葬ってしまう」
「待たっしゃい」
老人らしく、熟っくりと考えこんで、
「――幾ヵ所にも分割してしまうことになるなら、武蔵が、どの道から来るかわからぬが、真っ先に彼へぶつかる人数は、およそ二十名ぐらいにしか当るまい」
「それだけが、一斉に取り巻いているうちには」
「いや、そうでないぞ。武蔵にも、何名かの加勢がついて来るに極まっている。それのみでな

く、いつぞやの雪の夜、伝七郎との勝負の果てに、あの蓮華王院での退きようを見ても、武蔵という奴、剣も鋭いかしらんが、退きも上手じゃ。いわゆる逃げ上手という兵法を知った奴じゃ。だから、手薄なところで、素ばやく三、四名に傷を負わせ、さっと引き揚げて――後に一乗寺址においては、吉岡の遺弟七十余名を相手に、われ一人にて勝ったりと、世間へいい触らすかもわからぬて」

「いや、そうはいわさぬ」

「――というたところで後となれば水掛論。武蔵の方に、何名助太刀がついて来ても、世間は彼の名の一つしかいわぬ。その一人の名と大勢の名とでは、世間は相違なく、大勢らしい方を憎む」

「わかり申した。つまり今度という今度こそは、断じて、武蔵を生かして逃がすようなことがあってはならぬということでしょう」

「そうじゃ」

「仰っしゃるまでもなく、万が一にも、ふたたび武蔵を逃がすような失策を生じたら、後でどう弁解しても、われわれの汚名はもう拭われますまい。ですから今暁は、ただ一つに彼奴を討ち殺すのを目的とし、そのためには、手段も選ばない所存でござる。死人に口なし、殺してしまえば、世間はわれわれの宣ぶる言を信じて聞くしかないのですから」

　御池十郎左衛門はそういって、辺りに群れを作っている人々のうちを見廻して、四、五人の名を呼びあげた。

三

半弓を携えた門人が三名、鉄砲を持った門人が一名、
御池十郎左衛門は、
と、前へ進んだ。
「お呼びですか」
「ウム」
と頷いたのみで、源左老人へ向っていった。
「御老台、実は、こういう用意までいたしているのでござる。もう御懸念は去りましたろう」
「ヤ、飛び道具」
「どこか、小高い場所か、樹の上に伏せておいて」
「醜い仕方と、世間の評がうるさくはないか」
「世評よりは武蔵を斃すことが第一だ。勝ちさえすれば世評も作れる。敗れたら真実を云っても、世間は泣き言としか聞いてくれまい」
「よし、そこまで、腹をすえてやる儀なら、異存はない。たとい武蔵に、五人や六人の加勢がついて来ても、飛び道具があればよも討ち洩らしもいたすまい。……では評議に手間取っているうちに、不意を衝かれてもなるまいぞ、采配はまかせる。すぐ配備配備」
老人が、合点すると、
「では、潜め」

一同の頭の上へ、十郎左衛門が叱咤をながした。
三方の街道は、敵の出ばなを挫き、同時に、前後を挾撃するという戦法の下にかくれている前衛であり、下り松は、本陣という形でここには十名ほどの中堅が残る。
蘆間の雁のように、黒い影法師は駈け別れ、藪に沈み、樹蔭に隠れ、田の畦に腹這いになった。
また、その辺りの地を相して、高い樹の上に、半弓を負ってスルスルと登って行った影法師もある。
鉄砲を持った男は、下り松の梢によじ登り、月明りを気にしながら、自分の影をかくすのに苦心をしていた。
枯れ松葉や木の皮が、ぱらぱらこぼれて来た。下に立っていた飾り人形のような源次郎少年は、襟くびへ手をやりながら身ぶるいをした。
見咎めた源左老人が、
「なんじゃ、顫えているのか。臆病者めが」
「背中へ松葉がはいったんです。なんにも怖くなどありません」
「それならよいが、おぬしにもよい経験というものだ。やがて斬合が始まるから、よく見ておくのだぞ」
すると、三方道のいちばん東にあたる修学院道の方で、突然、
(馬鹿ッ！)
と、大きな声が聞え、ざざざッ――とその辺の藪が鳴り騒いだ。

潜んでいた人間のうごきが方々でいるところを明らかにした。飾り人形の源次郎は、
「恐いッ」
と、口走って、源左老人の腰へしがみついた。
「来たのだ！」
御池十郎左衛門はすぐ気配の立ったほうへ向って駈け出した。――しかし駈けてゆくうちに、変だな？　という気持がした。
案の定、待ち設けていた敵ではなかったのである。いつぞや六条柳町の総門の前で、双方のあいだに立って口をきいたあの前髪若衆、佐々木小次郎がそこに突っ立って、
「眼はないのか、戦う前から眼が上がっていられるな。わしを武蔵と間違えて突ッかかるような浮き腰では心ぼそい。わしは、今朝の試合の見届け人として来たのだ。立会人へ、藪から棒に――いや藪から槍を突きつける馬鹿者があるか」
と、例の大人びた高慢顔で、そこらの吉岡門人を叱りつけているのだった。

四

しかし、此方も気の立っている折ではあるし、小次郎のそうした態度に、不審を抱く者もあって、
（こいつ、臭いぞ）
（武蔵に助太刀を頼まれて、先に様子を見に来たのかも知れぬ）
吉岡方の者は囁いて、手出しは一応控えたものの、彼のまわりを解こうとはしないのであった。

そこへ十郎左衛門が駈けつけて来たので、小次郎のひとみはすぐ衆を捨てて、割り込んで来た十郎左衛門へ喰ってかかり、

「立会人として今暁これまでまいったるに、吉岡衆はわしをも敵と見てかかった。これはそもそも貴所のお指図でありまするか。しかるとせば、不肖ながら、佐々木小次郎も、久しく伝家の物干竿に生血の磨ぎを怠っていたところで――勿怪の倖せといいたいのだ。武蔵に助太刀する縁故はさらにないが、自分の面目上、相手となっても差しつかえないが、ご返答を聞こう！」

威猛高な獅子吼である。

こうした高飛車な物腰は、なんぞというと、この小次郎の常套的な態度であるが、その姿や前髪の優しげなところだけ見ていた者は、ちょっと、度胆を抜かれてしまう。

――だが、御池十郎左衛門は、その手は喰わないという顔つきで、

「ハハハハ、これはひどい御立腹だな。しかし、今暁の試合に、貴公を立会人として、誰が頼んだか。――当吉岡一門の者としては依頼した覚えがないが、それとも武蔵からお頼みをうけて来られたか」

「だまんなさい。いつぞや六条の往来に、高札を立てた折、確と、わしから双方へいいおいた」

「成程、あの時貴公はいった。――自分が立会人に立つとか立たぬとか。――だがその折、武蔵も貴公に頼むとはいわなかったし、当方でもお願い申すといったつもりはない。要するに、貴公一人が事好みに、出る幕でもない幕へ、独りで役を買って出たのでござろう。そういうおせッ介者は世間によくあるものだて」

「いうたな」

小次郎の激発は、もう虚勢ではなかった。

「――帰れっ」

十郎左衛門はさらにいって、

「見世物ではないっ」

と、唾するように苦りきった。

「……ウム」

息を引くように、青ざめた面をうなずかせて、小次郎はすぐ身を翻した。

「――見ておれ、うぬら」

彼が元の道のほうへ駈け出して行こうとすると、ちょうどそのとき、十郎左衛門より一足遅れてここへ来た壬生の源左老人が、

「お若いの、小次郎殿とやら、待ちなされ」

と、あわてて後ろから呼び止めた。

「わしに、用はあるまい。いまの一言、後で眼にもの見せてくれるから待っておれ」

「まあ、そういわないで、しばらく、しばらく」

老人はそういって、息巻きながら立ち去ろうとしかけた小次郎の前に廻って、

「此方は、清十郎の叔父にあたる者でござる。おてまえ様の儀は、予て、清十郎からも、頼母しき御仁なりと承っておりました。どういう行き違いか、門弟どもの卒爾は、この老人に免じて勘弁して下さるよう」

「そうご挨拶をされると恐縮します。四条道場には、以前、清十郎殿との好誼もあるので、助太

刀とまでは行かずとも、十分好意をもっているつもりなのに……余りといえば、雑言を吐くので」

「ご尤もじゃ、御立腹は尤もじゃ。したが、唯今のことは、まあお聞き流しの上、どうぞ、清十郎、伝七郎ふたりのために、何分、御加担をおねがい申す」

如才なく、源左老人は、この精悍な慢心青年を、いい気持にさせて、宥めぬいた。

五

これだけの備えがある以上、小次郎一人の助太刀など頼るにも当らない。けれど、この若者の口から白分たちの卑怯な戦法が吹聴されてはと、それを源左老人はおそれたにちがいない。

「なにとぞ、水に流して」

と、懇ろな謝りように、小次郎は前の怒りようとは、打って変って、

「いや御老人、そう年上のあなたから何遍も頭を下げられると、若輩の小次郎はどうしてよいか分らなくなる。まずお手を上げてくだされい」

案外、あっさり機嫌を直して――それと共に、吉岡方の者へ、例の流暢な弁舌で、こう激励の辞を述べ、そして、武蔵のことを、口を極めて罵り出した。

「わしは元より、清十郎殿とは御懇意だったし、武蔵には、さっきもいうた通り、なんの由縁もない人間です。――さすれば人情としても、知らぬ武蔵よりは、御縁故のある吉岡衆に勝たせたいと思うのが当然でござろう。――しかるになんたる不覚です、二度までの敗北とは。四条道場は離散、吉岡家は瓦滅。……嗚呼、見てはいられません。古来、兵家の試合多しといえども、こ

んな悲惨事は見たことも聞いたこともない。――室町家御指南役ともあろう大家が、名もなき一介の田舎剣士のために、かかる悲運に立ち至ろうとはです」

小次郎は耳を紅くしているかと思われるような語気で演舌するのだった。源左老人を始め皆彼の熱力のある舌に魅せられて黙ってしまった。そして、これほど好意を持たれている小次郎に対してなんであんな暴言を吐いたかと、十郎左衛門などはありあり悔いている顔つきであった。

そういう空気を見わたすと、小次郎はわが独壇場のように、いよいよ舌に熱を加えて、

「わしも将来は、兵法をもって一家を成そうとする者なので、単なる好奇心からではなく、努めて試合、真剣勝負などの際は弥次馬に交じって出かけます。傍観者となっているのもよい勉強になるからでござる。――けれどおよそ今日まで、貴所方(きしょがた)と武蔵との試合ほど傍(はた)で見ていて焦々(いらいら)するものはなかった。――蓮華王院の時でも、また蓮台寺野でも、お付添もいたろうに、なぜ武蔵を無事に逃がしたのでござるか。師を討たれながら、武蔵をして、洛内(らくない)を横行させて、だまっておられる各〻の気もちがわしには分りません」

乾いた唇(くち)を舐(な)めてさらに、

「なるほど、渡り者の兵法者としては、武蔵はたしかに強い、驚くべき烈しい男にはちがいない。それはこの小次郎も、一、二度出会ってよく分っておる。――で実は、よけいなおせっかいに似たことだが、いったい彼奴(きゃつ)の素姓生国はどういう者かと、先頃来、いろいろ調べてみたのです。もっとも、それには実は、彼を十七歳の頃から知っている或る女に出会ったのが、手がかりの緒口(いとぐち)となったのですが」

――と、朱実の名は隠して、

「その女から訊き、また諸方いろいろ詮索してみたところ、彼奴の生い立ちは、作州の郷士の小せがれで、関ケ原の役から帰国後、村で乱暴を働き、遂に国元を追われて諸方を流浪してきたという、取るに足らない人物なのです。けれど、あの剣は、天性とでもいうか、野獣の強さとでもいうか、そういう命知らずなので、無茶に道理が負ける喩えで、かえって、正法の剣が不覚をとるものとわしは思う。――故にです。武蔵を討つのに、尋常にかかっては敗れる、猛獣は罠に弄して獲るしかないように、奇策を用いねばまたいたされますぞ。その辺のこと、十分、敵を観てお考えなされておるかの」

源左老人が、好意を謝して、そこに抜かりのないことを説明すると、小次郎はうなずいて、なおいった。

「そこまで行き届いておれば万が一にも、討ち洩らしはあるまいが、まだ念のために、もう一度、突っ込んだ策があってもいいと思う」

六

「――策？」

源左老人は、小次郎の賢しらな顔つきを見直して、

「なんの、これ以上、策も備えも要りませぬ。ご好意はありがたいが」

いうと、小次郎はやや執こい。

「いやそうでないぞ御老人、武蔵がのめのめと、ここまで正直にやって参れば、それは各〻の術中にかかったも同様、もはや遁れる術はなかろうが、万一、ここにかような備えがあることを

未然に知って、道を交わしてしまったらそれまででは ありませぬか」
「そしたら、笑うてくれるまでのこと――。京の辻々へ、武蔵逃亡と、高札に掲げて、天下へ笑い者にしてやるわさ」
「貴所方の名分は、成程、それでも半分は立つだろうが、武蔵もまた、世間へ出て、各〻の卑劣を誇張して訴えましょう。さすれば、それで師の怨恨をそそいだ事にはならぬ。――断じて、武蔵をここで刺殺してしまわねば意味がない。その武蔵を、きっと殺してしまうためには、この必殺の地へどうしても彼奴が来るように、誘いの策が要るとわしは思うが」
「はて、そんな策が、あろうかな?」
「ある」
小次郎はいった。
いかにも自信のある口吻で、
「ある! 策はいくらでも……」
と、声を落して、ふと、常の傲岸な顔には見せない狎れ易い眸をして、源左老人の耳へ口をよせ、
「……な。……どうです」
と、ささやいた。
「……ム、む、成程」
老人はしきりと頷いて、今度はそのまま御池十郎左衛門の耳へ顔をよせて計った。

おととい の夜半、ここの木賃宿を叩いて、久しぶりの訪れに、木賃の老爺を驚かせた宮本武蔵は、一夜を明かすと、鞍馬寺へ行って来ると断って出かけたまま、きのうは一日姿を見せなかった。

(晩には)

と、老爺は雑炊を温めなどして待っていたが、その晩も帰らず、やがて翌る日のたそがれ近くに帰って来たかと思うと、

(鞍馬みやげじゃ)

と、包に入った長芋を老爺にくれた。

それから、もうひとつの方は、近所の店で求めて来た品らしく、一巻の奈良晒布を出して、これで肌着と腹巻と下紐とを急に縫ってもらいたいという。

木賃の老爺は、すぐそれを持って、お針のできる近所の娘の家へ頼みにゆき、帰りの足も無駄をせず、酒屋から酒をさげて来て、山芋汁を肴に、夜半を世間ばなしに費していると、そこへちょうど、頼んでやった肌着や腹巻もできて来た。

それを、枕元において、武蔵は眠りに就いたのであったが、ふと老爺が真夜中に眼をさましてみると、裏手の井戸ばたで、誰かさかんに水を浴びているような音がする。何気なく覗いてみると、武蔵はもう寝床をぬけて、月の光の下に沐浴を済まし、宵にできた真っ白な晒布の肌着を着、腹巻をしめ、その上に、いつもの衣服を纏っているのであった。

まだ月もそう西へは傾っていない。――今頃からそんな支度をしてどこへ？　と老爺がいぶかって問うと、いや、先頃から洛中洛内を見、きのうは鞍馬にも登って、もうこの京都にも少し飽

いた気がするので、これから暁の路をかけて、月の叡山に登ってゆき、志賀の湖の日の出を拝んで、それを鹿島立ちに、江戸表へ下向してみようと思い立った。――そう思い立つと、眼が冴えてしまい、おまえを起すのも気の毒と思ったから、旅籠賃や酒代も、枕元に包んで置いてある。少ないが、あれを納めてくれ。また、三年後か四年後か、京都へ出たらおまえの家へ泊りに来よう。

――武蔵はそう答えて、

「おやじ、後を閉めておいてくれよ」

もうすたすたと、横の畑道から廻って、牛糞の多い北野の往来へ出て行くのだった。

老爺が、名残惜しげに、小さい窓から見送っていると、武蔵は、十歩ほど往来をあるくと、布緒の草鞋の緒を、ちょっと締め直していた。

月一つ

一

つかの間であったが熟く眠ったと思う。頭脳の裡はこよいの夜空のように冴え、澄み切ったそのものと、この身とが、恰も、ひとつ物のようにすら見えて、一歩一歩なにものかの中へ、身は溶け入ってゆくのかと思う。

「ゆるりと歩もう」

武蔵は、意識的に、大股な足癖を惜しんで——

「……さて、人間の世をながめるのも、今夜かぎりとなったな」

なんの詠嘆でもない、悲嘆でもない、そう痛切なる感慨では決してなかった。ふと——しかしなんらの虚飾もない心の底から——ふっとのぼった呟きであった。

まだ、一乗寺址下り松までは、だいぶ距離があるし、時刻も夜半を過ぎたばかりなので、死というものが、顔の前まで切実に感じられて来ないのだろうか。

きのう一日、鞍馬の奥の院へ行って、松籟の中に、黙って坐りこんで降りて来たのであったが、無相無身になってみようと努力したその時のほうが、どうしても、死というものから離れられなくて、結局、なんのために坐禅などしに山へのぼったのかと、浅ましくさえ覚えた。

それに反して、今夜の清々しさは、どういうものだろうと、彼はわれを疑う。——宵に、木賃のおやじと少し含んでみた酒が、適度にまわって、熟睡して、醒めた肉体に井戸水を浴び、新しい晒布の肌着でひき緊まっているこの体というものが、どう思ってみても今死ぬものとは思われない。

（——そうだ、腫んだ足を引き摺って、伊勢の宮の裏山へ登った時——あの晩の星もきれいだったな。あれは、冱寒の冬だったが、今ごろならば、氷花の樹々にも、もう山桜のつぼみが膨らんでいる時分）

考えようともしないそんなことが頭脳のうちに描き出され、考えようとする行く先の必死の問題にはなんの知性もわいて来ない。

あまりにも、覚悟し切ってしまった、その死に対して、彼の知性はもう間に合いもしない――死の意義、死の苦痛、死後の先などと百歳まで生きてみても、解決しそうもないそんな問題に、今更、焦躁する愚を熄めてしまったのかも知れない。

こんな深夜なのに、道のどこからともなく、笙に和してひちりきの音が冷々とながれていた。そこらの小路の公卿屋敷らしい。吹奏の律調の厳かな裡にも哀調があるところから察すると、酒興に更けている公卿たちのすさびとも思われない。柩をかこんで暁を待つ通夜の人々や、榊の前の白い灯がふと武蔵の眼に泛かぶ――

「――自分より一足先に死んでいる人がある」

あしたは、死出の山で、その人とも、どこかで知己になりそうな気がして、微笑まれる。

通夜のひちりきは、歩いているうち、もう余程さっきから耳には聞えていたのかもしれない。――その笙やひちりきの音から伊勢の宮の稚児の館が憶い出され、腫んだ足をひき摺って登った鷲ケ岳の樹々の氷花が、ふと考え出されたのであろう。

はて？　――と武蔵は、自分の爽やかな頭脳をそこで疑って見ざるを得なかった。――このすずやかな心地は、実に、一歩一歩、死地へ足を向けている体から来るところの――自分でも意識しない極度な恐怖のうつつではあるまいかと。

そう、自分に訊ねて、ぴたと自己の足を大地に踏み止めてみた時、道はすでに相国寺の大路端れに出ていて、半町ほど先には、ひろい川面の水が銀鱗を立てて、水に近い館の築地にまでその明るい光をぎらぎら映していた。

――と、その築地の角に、人影が一つ黒く、じっと立ってこっちを見ていた。

二

武蔵は足を止めた。

先に見せた人影は、反対にこっちへ歩き出して来る。その影に従いて、もひとつ小さい影が月の道を転がって来る。近づいてから、それはその男の連れている犬だとわかった。

「………」

手足の先にまでこめていた或る力を急に抜いて、武蔵は無言のまますれちがった。

犬を連れた通行人は、通り過ぎてから遽に振向いて声をかけた。

「お武家さま。お武家さま」

「……わしか」

四、五間を隔てたまま、

「さようでございます」

腰のひくい凡下だ。職人袴に烏帽子を被っている。

「なんだな？」

「ひょんなお訊ねをいたしますが、この道筋に、明々と点して起きていたおやしきはございませぬかな」

「さ。気がつかずにまいったが、なかったように思う」

「はて、それでは、この道筋でもないかしらて？」

「なにをさがしておるのか」

「人の死んだ家でございます」
「それならあった」
「お、お見かけなさいましたか」
「この深夜だが、笙やひちりきの音がもれていた。そこではないか、半町ほど先だった」
「違いございません。先に神官方が、お通夜に行っておりますはずで」
「通夜にまいるのか」
「てまえは鳥部山の柩造りでございまするが、うかつにも、吉田山の松尾様と合点して、吉田山へお訪ねいたしましたところ、もう二月も前にお移りになったのだそうで……いやもう、夜は更けて問う家とてはございませぬし、この辺りも知れ難いところでございますなあ」
「吉田山の松尾？　――元吉田山にいてこの辺りへひき移って来た家と申すか」
「そうと知らなかったので、とんだ無駄足をいたしましてな。いや、ありがとう存じました」
「待て待て」
　武蔵は二、三歩出て、
「近衛家の用人を勤めていた松尾要人の家へゆくのか」
「その松尾様が、たった十日ほどわずろうて、お亡くなりなされました」
「主人が」
「へい」
「…………」
　――そうか。と呻くようにいったまま、武蔵はもう歩いていた。柩屋も反対な方へ歩いてい

た。取り残された小犬が、あわてて後から転がってゆく。
「……死んだか」
口の裡でいってみた。
しかし武蔵はそれ以上なんの感傷も抱かなかった。――死んだか。実に、そう思うだけだった。自己の死すら感傷になれないのである。いわんや、他人をや。爪に灯をともすように、生涯いじいじ小金を蓄えて死んで行った酷薄なる叔母の良人――
それよりは、武蔵はむしろ、飢えと寒さにふるえた元日の朝、加茂川の凍った水のほとりで焼いて喰べた餅のにおいの方が今ふと思い出された。
(美味かったな)
と思う。
良人にわかれて独りで暮す叔母を思う。
すぐ彼の足は、上加茂の流れの岸に立っていた。河をへだてて、満目に三十六峰が黒々と空からせまる。
その山の一つ一つが、皆、武蔵に対して敵意を示しているように見えた。
――じっと、そこに立ち尽していることややしばらくの後、武蔵は、
「ウム」
と、独り頷いた。
河原へ向って、堤の上から降りて行く。そこには、鎖のように小舟を繋いだ舟橋が架かっていた。

三

上京の方面から叡山——志賀山越えの方角へ渡ろうとすれば、どうしても、この一路へかかることになる。

「おおう……いっ」

武蔵の影が、加茂の舟橋の中ごろまで渡って来た時である。こう呼ばわる声がする。

淙々と瀬の水の戯れは、月の白い限りの天地を占めて独り楽しんでいる。上流から下流まで、ここは奥丹波の風の通路のように冷々と夜気が流れている。——誰が誰をよぶのか、どこに声の主がいるのか、遽かに知るには余りに天地が潤い。

「おオーい」

またしても呼び抜く。

武蔵は、二度足を止めたが、もう心にかけず、糺の中の洲を越えて対岸へ跳び移ってしまった。

と、一条白河のほうから河原づたいに、手をあげながら駈けて来るものがある。見たようなと思った眼に誤りはなかった。佐々木小次郎なのである。

「やあ」

近づきながらこう親しそうに小次郎は声をかけた。そして、武蔵の姿をじっと見、また舟橋のほうを見渡してから、

「お一人か」

といった。
武蔵は頷いて、
「一人です」
と、当然のようにいう。
挨拶が少し前後している。それから小次郎は改めていった。
「いつぞやの夜は失礼いたした。不行届な扱いを受けて下すって、有難くぞんじています」
「いやその折はどうも」
「さて、――これから約束の場所へ赴かれるのか」
「はい」
「お一人で？」
諄いと、承知しながら、小次郎はたずねた。
「一人です」
武蔵の返辞も、前と同じであったのが、かえって、小次郎の耳にはよく聞えた。
「ふふむ……そうですか。しかし武蔵どの、貴所はこの間、この小次郎が誌して六条へ建てたあの公約の高札表を、なにか、読みちがえてはおられぬか」
「いいやべつに」
「でもあの高札文には、この前の清十郎とそこ許との試合のように一名と一名に限るとは書いてないのでござるぞ」
「わかっております」

「――吉岡方の名目人は幼少のただ名だけのもの。あとは一門遺弟となっている。遺弟といえば、十人も遺弟、百人も遺弟、千人も……であるが、その点抜かられたな」
「なぜですか」
「吉岡の遺弟のうちでも、弱腰なものは逃げたり、不参らしく見ゆるが、骨のある門人は、こぞって、藪之郷いったいに備え、下り松を中心に、貴所の来るのを待ちかまえている態に見ゆる」
「小次郎殿には、すでにそこをお見届けでございますか」
「念のために。――そして今、こは相手方の武蔵どのにとって一大事なりと思慮いたしたので、一乗寺址から急いで引っ返してまいり、およそこの舟橋が貴所の通路ではないかと計って、お待ち申していたのでありまする。――高札表を認めた立会人の務めでもござれば」
「ご苦労に思います」
「右様なわけでござるが、それでも貴所は、一人で行くおつもりか。――それとも、他の助人たちは、べつな道をとって行かれたか」
「自分一名のほか、もう一名、自分とともに歩いてまいりました」
「え。どこへ」
　武蔵は、地上のわが影法師を指さして、
「ここに」
　といった。
　笑う歯が月に白かった。

四

冗談などいいそうもない武蔵が、ニコッと笑って不意に戯れをいったので、小次郎は、ちょっとまごつきながら、
「いや、冗談ごとではありませぬぞ、武蔵どの」
よけい真面目づくると、
「拙者も、冗談はいいませぬ」
「でも、影法師と二人づれなどとは、人を小馬鹿にしたおことばではないか」
「しからば――」
武蔵は、小次郎以上、きっと真面目な態を示して、
「親鸞聖人の申されたことばとやらに――念仏行者は常に二人づれなり、弥陀と二人づれなり。とあったように覚えておるが、あれも冗談ごとでしょうか」
「……………」
「何様、ただ、形のうえより観ずれば、吉岡衆はさだめし大勢でござろうし、この武蔵は、見らるる如くただの一名。勝負にはならぬと小次郎殿も、拙者を案じて賜わるのであろうが、乞う、お案じくださるな」
武蔵の信念は、言葉のひびきからも脈を搏って、
「彼が十人の多勢を擁するゆえ、われも十人の勢をもって当ろうとすれば、彼は二十人の備えを立てて打ってくるに違いない。彼二十人なれば、われも二十人の勢をもって当らんとすれば、彼

はまた三十名、四十名を呼号して集まるでしょう。さすれば、世間を騒がすことも甚だしく、多くの負傷なども出して、治世の掟を紊すばかりか、それが剣の道に益するところはいずれもない。百害あって一益なしです」
「なるほど、だが武蔵どの、みすみす負けと分っている戦をするのは、兵法にないと思うが」
「ある場合もありましょう」
「ない！　それでは兵法ではない、無法というものだ、滅茶だ」
「では、兵法にはないが、拙者の場合だけには、あるとしておこう」
「外れている」
「……ハハハハハ」
武蔵はもう答えない。
しかし、小次郎は熄まない。
「そんな兵法に外れている戦の仕方をなぜなさるのじゃ。なぜもっと、活路をお取りなさらぬのだ」
「活路は、今歩いている、この道こそ、拙者にとっては活路です」
「冥途の道でなくば、倖いだが――」
「或はもう、今越えたのが三途の川、今踏んでゆく道が一里塚、行くての丘は針の山かもしれません。――しかし、自分を生かす活路はこの一筋よりほかにあろうとも思われぬ」
「死神にとりつかれたようなことを仰っしゃる」
「なんであろうとよい。生きて死ぬる者もある。死んで生きる者もある」

「不愍な……」

独り語のように小次郎が嘲笑うと武蔵は、立ち止まって、

「小次郎どの——この街道は真っ直何処へ通じますな」

「花ノ木村から一乗寺藪之郷——すなわち、貴所の死場所の下り松を経て——これから叡山の雲母坂へ通っております。それゆえ、雲母坂道ともいう裏街道」

「下り松まで、道程は」

「ここからは、はや半里余り、ゆるゆる歩いて行かれても、時刻の余裕はまだ十分」

「では、後刻また」

武蔵がふいに、横道へ曲りかけると、

「ヤ、道がちがう。武蔵どの、そう行っては方角が違う」

あわてて小次郎は注意した。

五

武蔵はうなずいた。小次郎の注意に対して、素直にうなずいた。

しかし見ていると、曲った道をそのままなお歩いてゆく様子なので、小次郎はもいちど、

「道が違いますぞ」

声をかけると、

「はあ」

と、分っているような返辞。

並木のすぐ後ろで、窪地の傾斜に沿い、だんだん畑がある、茅ぶき屋根が見える。その低い方へ武蔵は降りてゆくのである。雑木の隙間から後ろ姿が見える。――月を仰いでぽつねんと立っている姿がわかる。

小次郎は、独りで苦笑を頬に流しながら、

「……なんだ、小用か」

呟いて、彼も月を仰ぐ。

「だいぶ西へ傾いて来たなあ。……この月がかくれる頃には、何人かの人命も消えてゆくのだ」

彼の好奇心は頻りといろいろな予想を描く。

武蔵がなぶり殺しにされることは、結局においては確実だが、あの男のことである、仆れるまでに何人の敵を斬るか。

「そこが見ものだ」

と、彼は思う。そして今からそれを予想してみるだけでも、ぞくぞくして来て、肌は総毛だち、血は全身を駆けて待ち遠しがる。

「滅多に遭い難いものにわしは遭った。蓮台寺野の折も、次の時も、実見できなかったが、今暁は見られる。……はてな、武蔵はまだか？」

ちょっと、低地の道を覗いてみたが、まだ戻って来る影は見えない。小次郎は立っていてもつまらないので、木の根に腰をおろした。

そしてまた、密かに空想を楽しんでいる――

「あの落ちつき澄ましている様子では、まったく死を決しているらしいから、かなりなところま

で戦うだろう。なるべく、斬って斬って斬りまくってくれたほうが見ごたえがあっていい。……だが、吉岡のほうでは飛道具の備えまでしているといったな。……飛道具でどんと一発やられてしまっては、万事終ってしまう。……はて、それでは面白くないぞ。そうだ、そのことだけは、武蔵に耳打ちしておいてやろう」

だいぶ待った。

夜霧が腰に冷たくなる。小次郎は身を起して、

「武蔵どの」

呼んでみたのである。

おかしいぞ？　――と今頃になって思ってみることが、彼自身にもとたんに不安と焦りを呼び起していた。――タタタタタと小次郎は低地へ降りて行った。

「武蔵どの」

崖下の農家は真っ暗な竹むらに囲まれていて、どこかで水車の音がするが、その流れさえよく見えない。

「しまッた！」

水を飛んで、小次郎は向う側の崖の上へすぐ出てみた。人影らしいものは見あたらない。白河あたりの寺院の屋根、森、眠っている大文字山、如意ケ岳、一乗寺山、叡山――広い大根畑。

それから月が一つ。

「しまったッ。卑怯者め」

小次郎は武蔵が逃げたなと直覚した。あの落ちつきすましていた様子もそのせいであったかと

今にして思う。道理で余りいうことも出来過ぎていた。
「そうだ、早く」
小次郎は身を翻（ひるがえ）して、元の道へ出た。そこにも、武蔵の影はない。彼の足は宙をとんで駈け出した。――勿論、一乗寺下り松へ真っ直に。

木魂（こだま）

一

――遠く遠く、見ているまに駈け去って小さくなって行く佐々木小次郎の影を見送って、武蔵は思わずにたりと笑った。
たった今、その小次郎が立っていた所に、武蔵は立っているのである。なぜ、彼があんなにも捜したのに知れなかったのかを考えてみると、小次郎は居場所を捨てて他を捜したが、武蔵はかえってその小次郎のいたすぐ後ろの樹蔭に来ていたからであった。
――しかし、なにしろまずこれでよかった。と武蔵は思う。
他人の死に興味をもち、他人が鮮血を賭けてする生霊（しょうりょう）のやむなき大悲願事をふところ手で――後学のためとかなんとかいって――虫のよい傍観者に廻り、その上、双方へ恩着せがましく、いい子になっていようという横着者。

（その手は食わない）

武蔵は、おかしくなった。

頻りと敵の侮れぬことを告げ、こちらへ対して助太刀の有無を訊いたのは、そういったら武蔵が膝を屈して武士の情けに一臂の力を貸してたまわらぬか——とでもいうかと思っていたかしらぬが、武蔵は、その言葉にも乗らなかった。

（生きよう。勝とう）

と思えば助太刀もほしくなるかも知れぬが、武蔵には、勝てる気もない、明日の後まで、生きようとも思われない——いやありのままにいえばそんな自信はなかったという方が正しかろう。

ひそかに、彼がここへ来るまでのあいだに探り得たところでも、今暁の敵は百数十名にものぼるらしく察しられた。あらゆる方法の下に、自分を害さずば熄まない状態にあることも頷けたのである。——なんで生きる工夫に焦ってみる余地があろう。

けれど武蔵は、その中でもかつて沢庵のいった——

（真に生命を愛する者こそ、真の勇者である）

という言葉を決して忘失してしまっているわけではない。

（この生命！）

そしてまた、

（二度と生れ難いこの人生！）

を、今も、ひしと五体のうちに抱きしめているのであった。

だが。

──生命を愛する。

ということは、単に無為飽食を守っているということとはたいへんに意味が違う。だらだら長生きを考えるということではさらさらない。いかにしてこの二度と抱きしめることのできない生命との余儀なきわかれにも、そのいのちに意義あらしめるか──価値あらしめるか──捨てるまでも、鏘然とこの世に意義ある生命の光芒を曳くか。

問題はそこにある。何千年何万年という悠久な日月の流れの中に人間一生の七十年や八十年は、まるで一瞬でしかない。たとえ二十歳を出ずに死んでも、人類の上に悠久な光を持った生命こそ、ほんとの長命というものであろう。またほんとに生命を愛したものというべきである。

人間のすべての事業は、創業の時が大事で難しいとされているが、生命だけは、終る時、捨てる時が最もむずかしい。──それによって、その全生涯が定まるし、また、泡沫になるか、永久の光芒になるか、生命の長短も決まるからである。

けれど、そういうふうな生命の愛しようも、町人には自ら町人の生命の持ち方があり、侍には侍の持ち方がある。武蔵の今の場合には、当然、さむらいの道に立っていかによくこの生命の捨て際を、侍らしくするかにあることはいうまでもない。

二

さて──

これから一乗寺藪之郷下り松の目的地へ行こうとするならば、武蔵の前には、ここに三つの道筋があった。

その一つは今、佐々木小次郎の駈けて行った雲母越え叡山道。

これは最も近い。

そして一乗寺村までは、道も坦々としていて、まず本道といっていい。すこし迂回にはなるが、田中の里から曲って高野川に沿い、大宮大原道をすすみ、修学院のほうへ出て下り松に至る——という道取りがその第二。

もう一つは、今、彼の立っている所から東へ真っ直に、志賀山越えの裏街道をとり、白河の上流から瓜生山の麓をあるいて、薬師堂の辺りからそこへ行き着くという道も選べる——

そのいずれから行くも、下り松の追分は、ちょうど谷川の合流点のような場所に当っているので、距離にしても、そう大差はない。

だがこれを——将にこれから、そこに雲集している大軍にぶつかって行こうとする寡兵にも似ている武蔵の身にとると——兵法からみると——大差がある。生涯のこと、ここの一歩から、分れ目を持つことになる。

——道は三つ。

——どう行こうか。

当然、武蔵はそこで慎重に考えそうなものであったが、ひらりとやがて身軽に動き出した彼の影には、そんな重苦しげな迷いの影は従いていない。

——翻——翻——翻と木の間や小川や崖や畑を跳ぶように越えて、月の下を見えつ隠れつ足早に、行きたい方へ歩いている。

では、三道のうち、いずれを選んだかというと、彼の足は、一乗寺方面とは反対な方角へ向い

ていた。三つの道のいずれも選ばなかったのである。その辺りはまだ里ではあったが、狭い小道を通ったり畑を横切ったりして、一体、どこを目ざして歩いて行くのかちょっと気が知れない。なんのためか、わざわざ神楽ケ岡のすそを越え、後一条帝の御陵の裏へ出る——この辺り、ふかい竹藪だった。竹の密林を抜けるともう山気のある川が月光を裂いて里へ走っている。——大文字山の北の肩が、もう彼の上へ、のしかかって来るように近かった。

「…………」

黙々と、武蔵は、山ふところの闇へ向って登ってゆく。

今、通って来た右側の樹立の奥に見えた築地と屋根が、東山殿の銀閣寺であったらしい。ふと、振顧ると、そこの泉が棗形の鏡のように眼の下に見えたのである。

さらに、もう一息、山道を登ってゆくと、東山殿の泉は、余りに近すぎて足元の木蔭にかくれ、加茂川の白い蜒りがずっと眼の下へ寄っている。

下京から上京まで、両手をひろげて抱えきれるような展望だった。ここからは、遙かに、

(一乗寺下り松はあの辺り——)

と、指さして、ほぼ遠く察することもできる。

大文字山、志賀山、瓜生山、一乗寺山——と三十六峰の中腹を横に這って叡山の方へすすめば、ここからそう時を費さずに、目的の一乗寺下り松のちょうど真後ろへ、山の上から望むこともできるのだった。

武蔵の考えは、その戦法は——もう疾くから胸に決まっていたものらしい。彼は桶狭間の信長に思い合わせ、鵯越えの故智に倣って、あの当然に選ばなければならないはずの三道のいずれ

をも捨てて、まるで方角ちがいな、歩くにも難儀なこの山道の中腹まで登って来たに違いない。

「……やっ、お武家」

こんな所で人声は思いがけなかった。不意に、道の上から人の跫音がしたと思うと、彼の前に、狩衣の裾をくくり上げて、手に松明を持った公卿屋敷の奉公人らしい男が立って武蔵の顔を燻すように、松明の火を突き出した。

三

公卿侍の顔は、自分の持ち歩いている松明の油煙で、鼻の穴まで黒く煤けてい、狩衣も夜露や泥でひどく汚れている。

「や？　……」

と、行き合った最初に、なにか驚いたような声を出したので、不審に思って、武蔵がじっとその顔を凝視すると、急に少し恐れを抱いたように、

「……あの、あなた様は」

と、ひどく低く頭を下げ、

「もしや、宮本武蔵殿と仰せられはいたしませぬか」

と、問う。

武蔵の眼が、ぎらっと松明の赤い光の中に光った。——当然な警戒だったのはいうまでもない。

「……宮本殿でございましょうな」

重ねて、その男は訊ねたが、恐いのだ、武蔵の黙っている形相の中には、人間のなかでは滅多にみつけないものがあったに極まっているから――そう訊きながらも、男の体は浮腰になっていた。
「誰だ？　おん身は」
「はい」
「何者だ？」
「はい……烏丸家のものにござりますが」
「なに、烏丸家の……。わしは武蔵だが、烏丸家の御家来が、今頃、こんな山路へなにしに？」
「ア。……ではやはり宮本殿でござりますな」
いうと、その男は、後も見ずに山を駈け下ってしまった。松明の火が、赤い尾をひいて、見る間に、麓へ沈んで行った。
武蔵は、なにかはっと思い当ったように、足を早め出して、山伝いに、志賀山街道を横切り、どこまでも山の腹を、横へ横へと、急いで行った。
――一方。
慌て者の松明は、一目散に、銀閣寺のわきまで駈け降りて来た。
そして、片手を口にかざして、
「オオイ、内蔵殿、内蔵殿」
と、同僚の名を呼ばわっていると、その同僚とはちがうが、やはり烏丸家の内に、ここ永らく泊っている城太郎少年が、

「なんだアい——小父さん——」
と、二町も先の西方寺門前あたりから遠く返辞が聞えてくる。
「城太郎かあ——」
「そうだアい」
「はやく来ウいっ——」
すると、また遠くから、
「行かれないよーっ……。お通さんが、ここまでやっと来たけれど、もう歩けないッて、ここへ仆れちまったから、行かれないよーっ」
烏丸家の奉公人は、
（ちぇっ……）
舌打ちを洩らしたが、前よりも高い声を張りあげて、
「はやく来ないと、武蔵殿がもう遠くへ去ってしまうぞっ。——早く来いっ、たった今そこで、武蔵殿をわしが見つけた！」
「……」
すると今度は、返辞がして来ないのである。
——と思ううちに、彼方から二つの人影が、縒れ合うように一つになって急いで来る。病人のお通を援けて来る城太郎であった。
「おお」
松明を振って、男は早くと急き立てて見せる。いたましや、そうでなくてさえ、喘ぎ喘ぎ駈け

てくる病人の息は、遠くから聞えるほどだった。
近づくほどに、お通の顔は月よりも血の気がないものに見えた。痩せ細った手足に旅装いを着けているのがあまりにも無理に見える。しかし、松明のそばまで来ると、その頬は、急に紅くなっていた。
「ほ、ほんとですか。……今仰っしゃったのは」
「ほんとだとも、たった今だ」
と、力をこめて話し、
「はやく、追って行けば会える。はやく行け早く！」
城太郎は、まごまごして、
「どっちへさ、どっちへさ。ただ早く行けじゃ分らないじゃないか」
病人と慌て者のあいだに立って一人で癇癪を起してしまう。

四

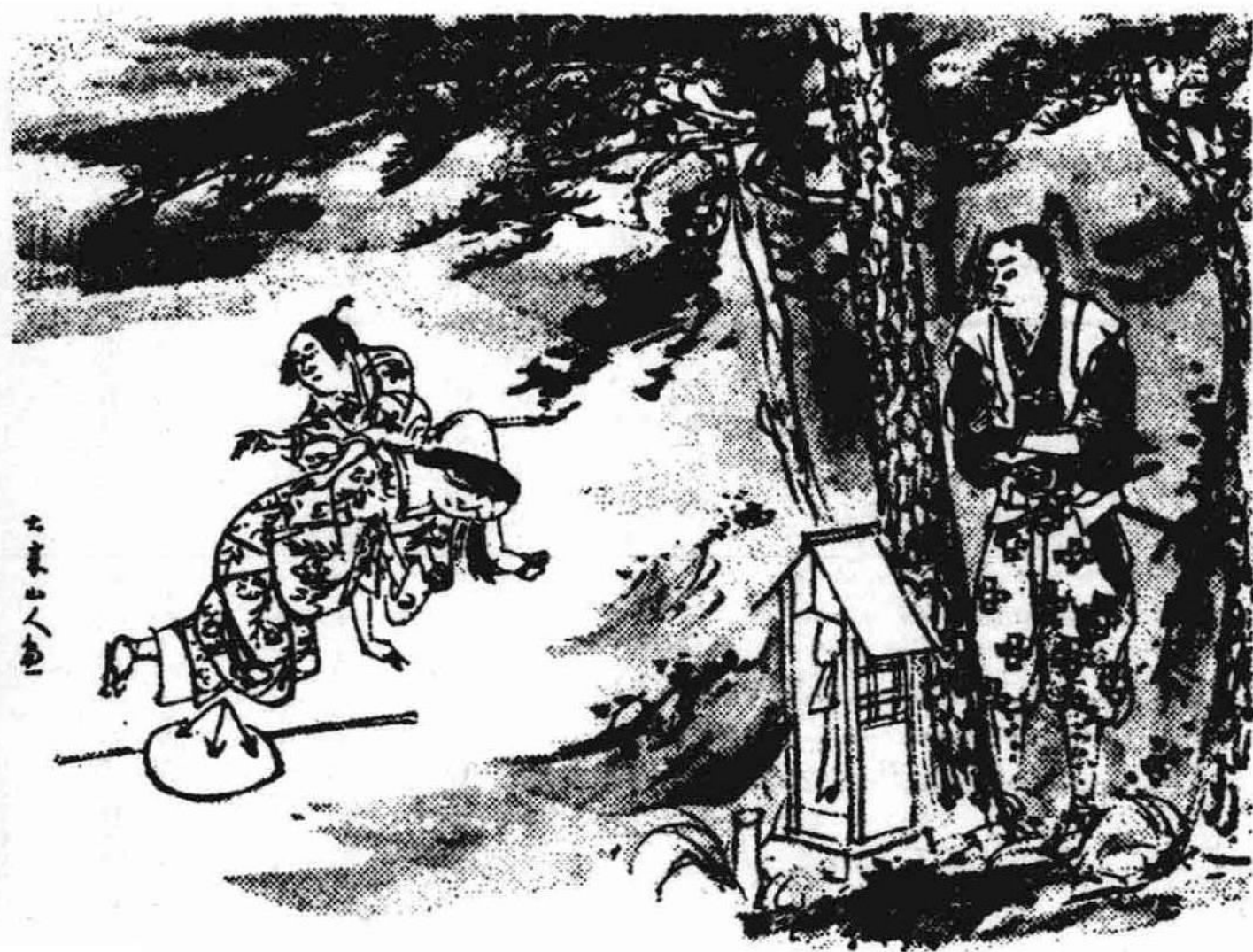
お通の体があれから急に快くなっているという理はないから、お通がここまで歩いて来たのは、よくよく悲壮な覚悟でなければなるまい。
恐らく、いつぞやの晩、館の病褥にはいってから、城太郎に詳しい話を聞き、
（武蔵様が死を決しておいでになるなら、わたしも病を養って、こうして生き長らえる効いもない）
といい出したことから始まり、やがてはまた、

（死ぬ前に一目でも）
という病人の一念になって、それまで水手拭を当てていた頭の髪を結び、病褥にいたわっていた痩せた足に草鞋をつけ、誰が止めようと意見しようと耳を藉さず、とうとう烏丸家の門から蹌ろ這い出たものではあるまいか。
さて、そうまでの一心を見ては、止めだてした烏丸家の人々も、
（捨てては措けぬし）
と、能う限りこの病人の——ことによったらこの世の中の最後の望みになるかも知れぬ——希望を遂げさせてやりたいと、共々、気を揉んだり騒いだりしたであろうことも想像がつく。
或は、光広卿の耳へも入って、この儚き恋愛の末期に対して、よそながらお館の指図があったものかとも思われる。
とに角、彼女の弱い足取りをもって、この銀閣寺下の仏眼寺の門前へかかるまでには、烏丸家の御内人たちが、およそ武蔵の影のさしそうな方角へは、八方に手分けをして、尋ね求めていたらしいのである。
果し合いの場所は一乗寺とだけ分って、広い一乗寺村のどの辺かは明白でない。それにまた、武蔵が果し合いの場所に立ってしまってからでは追いつかないことなので、捜す者も、おそらく一乗寺方面へ通う道には、皆一人か二人ずつ奔走して、足を擂粉木にしていたものであろう。
しかしその効いはあって、武蔵は見つかったのであるから、後は、加勢の者の力よりは、お通の一心の如何によるほかはない。
たった今、如意ケ岳の中途から、志賀山越えを横切って、北の沢へ降りて行ったという——そ

れだけを聞けば、彼女ももうその先まで、他人の力を頼ってはいなかった。
「だいじょうぶ？　お通さん、だいじょうぶかい？」
側についてはらはらして行く城太郎とも口もきかない。
いや、きけないのである。
死を覚悟して、無理無体に歩ませてゆく病軀であった。口は渇いてしまう。鼻腔はあらい呼吸につかれる。そして蒼白な額に、髪の根から冷たい汗さえながれていた。
「お通さん、この道だ、この道から横へ横へと、山の腹を縫ってゆけば、自然に叡山の方へ出てしまう。……もう登りはないから楽だよ、どこか、少しそこらで休んだらどう？」
「…………」
お通は黙ってかぶりを振った。一本の杖の両端を二人して持ち合いながら――永い人生の艱苦をこの一刻の道に縮めてしまうような喘ぎとたたかいながら、懸命に、およそ二十町余りも山ばかり歩いた。
「お師匠様アッ。……武蔵さまアッ……」
時折、城太郎がありッたけな声を絞って、行く手の方へ向って、こう呼んでくれるのが、お通にとってはなによりの力だった。
だが遂に、その力も尽きたように、お通は、
「城……城太さん」
なにか、いいかけたと思うと、彼の引っ張っていた杖の先を離して、沢の石ころや草叢の中に、蹌りと、音もなく俯つ伏してしまった。

削ったように細い両手の指が、口と鼻を抑えたまま、肩で戦慄しているので、
「ヤ！　血、血でも吐いたんじゃないか。……お通さん！　……お通さん……」
城太郎も泣き声出して、彼女の薄い胸を抱き起した。

五

かすかにお通は顔を横に振った。地に俯つ伏したままにである。
「どうしたの。どうしたのさ」
おろおろと、城太郎は彼女の背中を撫でていたわりながら、
「苦しいの」
「…………」
「そうだ、水かい、お通さん、水が欲しかないかね」
「…………」
お通はうなずいて見せた。
「待っといで！」
辺りを見まわして、城太郎は突っ立った。山と山の間のゆるい沢道である。水音は方々の草や木を潜って、ここにある、ここにある、と彼に教えているように聞える。
だが、そう遠くまで駈けなくても、すぐ後ろに草の根や石塊の下から湧いている泉がある。城太郎は踞み込んで、両手に水を掬おうとした。
「…………」

水はよくよく澄んでいて、沢蟹の影も見えるくらいだった。月はもう傾いているので、この水には宿っていなかったが、鮮やかな月の雲は、空を仰いで直かに見るよりも、水に映っている空のほうが一倍美しく見えた。

病人に掬って持って行くよりも、城太郎はふと、自分が先に飲みたくなったのであろう、五、六歩位置を移して、今度は水際に膝をつき、家鴨のように水面へ首を伸ばしたが、

「……あッ？」

大きく叫んだまま、彼の眼はなにものかに吸いつけられ、河童頭の毛はそそけ立って、じーっと、栗の実みたいに、五体をかたく竦めてしまった。

「……？」

水の向う岸から五、六本の樹の影が、縞目のように映っていた。その樹の端に人影が見えたのである。水に映っている武蔵の影を彼の眼は見たのである。

「…………」

吃驚したことは勿論、吃驚したに違いないが、水面に映っている武蔵の影だけでは、城太郎はまだほんとに――物の現実に向って吃驚したのではなかった。

ふいに、物の怪の悪戯が、思いつめている心の武蔵の影を藉りて、さっと、通り抜けて行ったような――そんな驚きであったのである。

怖々と、彼はその驚きの眼を水面から向う側の木蔭へ上げてみた。こんどはほんとに仰天したのだった。

武蔵はそこに立っていた。

「おッ、お師匠様っ」

静かな水面の持っていた月雲の空は、とたんに真っ黒に乱れ濁ってしまった。水の縁を通って行けばよいのに、城太郎はいきなり飛び込んで水の中を駈け渡り、ばしゃばしゃッと顔まで濡らして武蔵の体へ飛びついて行ったのであった。

「いたっ、いたっ」

捕まえた者を引ったてるように、武蔵の手を、彼は夢中になって引っ張った。

「待て」

武蔵は顔をそ向けて、ふと瞼に指を当てながら、

「あぶない、あぶない。すこし待て、城太郎」

「いやだっ、もう離さない」

「安心せい、おまえの声が遙かに聞えたから、待っていたのだ。わしよりも、早くお通さんに水を持って行ってやれ」

「ア、濁ってしまった」

「向うにもよい水が流れている。それ、これを持って行け」

腰の竹筒を渡してやると、城太郎はなに思ったか、手を引っ込めて、武蔵の顔をじっと見、

「お師匠様。……お師匠様の手で汲んで行っておやりよ」

六

「……そうか」

吩咐けに従うように、武蔵は素直に頷いた。自分で竹筒に水を掬い、お通の側へ持って行った。
そして彼女の背を抱え、手ずから水を飲ませてやると、城太郎は傍らから、
「お通さん、武蔵様だよ、武蔵様だよ、……分る？　分る？」
と、ともどもいたわりを籠めていう。
お通は喉へ水を落すと、幾分か胸がらくになったように、ほっと気のついたように息をついた。しかし、体は武蔵の手に凭れたままうっとりと眸はまだ遠くを見ていた。
「おいらじゃないんだぜ、お通さん、お通さんを抱いているのは、お師匠さまなんだよ」
城太郎がそう繰返すと、お通は遠くを見ている眸に、湯のような涙をいっぱいにたぎらせ、見るまに、その眼は、ぎやまん玉の曇りにも似て、やがて頬を下るふたすじの白珠とはふりこぼれると、
（……分っています）
と、いうように頷いた。
「ああ、よかった」
城太郎は無性に欣しくなってしまい、わけもなく満足して、
「お通さん、これでいいだろう。もう、これで気がすんだろう。……お師匠様、お通さんね、あれから、どうしても、もいちど武蔵様に会うんだといって、病人のくせに、いうこと肯かないんだよ。こんなこと度々やると死んじまうに極まっているから、お師匠様からよくそういっておくれよ、おいらのいうことなんか肯かないんだもの」

「そうか」
武蔵は、彼女を抱えたまま、
「みんなわしが悪いのだ。わしの悪いところも詫び、またお通さんの悪いところもよくいって、体を丈夫にするように今話すから……城太郎」
「なに？」
「おまえは、ちょっと……しばらくの間、どこかへ離れていてくれぬか」
城太郎は、そう聞くと、
「どうして？」
と、口を尖らし、
「どうしてさ。どうしておいらがここにいちゃいけないの」
と、不平なようでもあり、不審にも考えるらしく、動こうとはしないのであった。
武蔵も、それにはふと困ったらしい様子に見えた。すると、お通が頼むように、
「城太郎さん……そんなこといわないで、ちょっと、あっちへ行っていてください。……ね、後生ですから」
武蔵には口を尖らした城太郎もお通にそういわれると、理窟もなにもなくなって、
「じゃあ……おいら、仕方がないからこの上に登っているとすらあ。用が済んだら呼んでおくれ」
崖の杣道を見上げて、城太郎はがさがさと攀じ登って行った。
漸く、少し元気を回復したらしく、お通は起って、鹿のように登って行く城太郎の影を見送

り、
「――城太さん、城太さん。そんなに遠くへ行かなくってもいいのですよ」
そういったが、聞えたのか聞えないのか、城太郎はもう返辞もしない。
お通もまた、なにも今、そんな心にもないことをいって、武蔵に背を向けている必要もなかろうに――やはり城太郎という者が一枚抜けて、二人きりになったと思うと、遽に胸がつまって、なにからいい出していいのか、急に自分の体が持て余されて来るのであろう。
羞恥みは、健康な時よりも、病んでいる場合のほうが、生理的にも、強いものかもしれない。

七

いや、羞恥は、お通ばかりではない。武蔵も横を向いていた。
一方は背を向けて俯向き、一方は横を向いて空を仰いだまま……これが幾年も幾年も、会わんとしては会い難かった二人の、稀々、許された一瞬の寄り添いだった。
「………」
どういおう。
武蔵にはその言葉が見つからない。
どんな言葉をもっていっても、自分の心を現わすには足りないからであった。
すさび吹く千年杉の真っ暗な一夜――あの夜明けからのことを、武蔵は瞬間に胸にえがくことができる。眼には見て来なかったが、それからの五年あまりの彼女の歩いて来た道を――又一途に通して来た清純な気持を――武蔵は決して受け取っていないのではない、感じていないわけで

はない。
多岐な、複雑な、彼女の生活と、身に燃え現わされた純愛の炎と、唖のように無表情で、灰のように冷たく人には見せて来た自分の情熱の埋火と——いずれが強くいずれが苦しかったかといえば、武蔵は独り心の裡で、
(おれこそ)
と、いつも思う。今もまた、そう思うのだった。
——だが、そういうわがことよりも弥まして、このお通の可憐しく、そして不愍でならないと思われるのは、男でさえ、片荷には重すぎる悩みを、女の身で、生活に克ちつつ、恋一つを生命として負い通して来た——その強さと健気さにある。
(もう……一瞬の間だ)
武蔵は、月の位置を見ている。自分の生きている間の時間を思わずにいられない。月はもう残月となっていた。いつのまにか、ずっと西に傾いて、光も白っぽく、夜明けはやがて近いのである。
その月と共に、死の山へ落ちてゆく寸前の自分である。今こそお通に向って、たった一言でも、真実をいいたい。またそれがこの女に対して酬ゆる最大な良心でもあるし——と武蔵は思う。
真実。
しかし、いえないのだった。
胸にはいっぱいに持っている真実が、その真実をいおうとするほど、口には出て来ないで、徒らにただ、空を見、あらぬ方を見てしまう。

「…………」

同じように、お通もただ地を見つめて、地に涙をそそいでいるしかなかった。——ここへ来るまでには彼女の胸にも、七堂伽藍も焼き包んでしまうような、恋以外には真理も神仏も利害もない、また、男の世界でいう意地も外聞もない——ただ恋のみの熱情があったのである。その熱情をもって武蔵をうごかし、その涙をもって二人きりで、浮世の外に住むことも出来ないことはないと信念していたのであった。

けれど——会ってみると、なにもいえない彼女だった。そんな熾烈な望みはおろか会わない間の辛さ、世路にまよう身のかなしさ、武蔵の情無いこと——なに一つとしていえないのだった。胸先まで突き上げてくるそれらの感情を、ふと思い切っていおうとすれば、ただ唇が顫いてしまうだけで、よけいに胸はつまり涙は眼をふさいで、もし、武蔵もそこにいない桜月夜の下でもあるならば、わッ……と大声あげて、嬰児のように泣き転び、せめてこの世にいない母にでも訴える気もちで、心の済むまで、泣き明かしていたいと思うほどだった。

「…………」

どうしたものだろう。お通もいわず武蔵もいわず、こうしている間に時刻は徒らに過ぎてしまう。

——はや暁に近いせいか、間の抜けた啼き声をこぼして、帰る雁が六、七羽、山の背を越えて行った。

八

「雁が……」

武蔵はつぶやいた。この場合にそぐわない、取ってつけたような――と知りながら、

「お通さん、帰る雁が啼いてゆくなあ」

といった。

それを機に、

「武蔵さま」

と、お通もいった。

眸と眸が、初めてお互いを見合った。秋や春には雁の渡る故郷の山が二人の心に憶い出された。

あの頃は、単純だった。

お通がいつも仲よくしていたのは又八で、武蔵は乱暴だから嫌いだといっていた。武蔵が悪たれをいうと、お通も負けないで罵った。――そうした幼い頃の七宝寺の山が瞼に見える。吉野川の河原が憶い出される。

しかし、そんな追憶に耽っていると、また、徒らにこの二度とないこの世での尊い瞬間を、沈黙の裡に過ごしてしまいそうなので、武蔵からやがてまたいった。

「お通さん。そなたは今、体が悪いということだが、体はどうだね？」

「なんでもありません」

「もう快い方なのか」

「それよりも、あなたは、これから、一乗寺の址とやらで、死ぬお覚悟でございましょう」

「……う、む」
「あなたが、斬り死にあそばしたら、わたくしも生きていないつもりです。そのせいか、体の悪いことなど、忘れたように、なんともございません」
「…………」
武蔵は、そういうお通の顔の冴えを見て、自分の覚悟のほどが、いまだこの一女性にすら及ばない心地がした。
今の肚をすえるまでには、さんざん生死の問題に苦悩したり、日常の修養だの、さむらいとしての鍛錬だのを積んで来て、やっとこの覚悟になり得るまでになって来たと思うのである。――だのに、女は、そういう鍛錬も苦悩も経ずに、いきなりなんらの惑いもなく、
（――わたくしも生きていないつもりです）
と、すずやかにいう。
武蔵が、じっとその眼を見ているに、彼女のことばが、決して一瞬の興奮や嘘でないことはわかる。むしろ楽しんで自分の死に従いて、共に死のうとしている気持すらかがやいている。どんな覚悟のよい侍でも及ばないほど静かな眸で死を見ているのである。
武蔵は愧じ、かつ疑った。
（どうして女は、こうなれるのであろうか）
同時に彼は当惑と、そして彼女の一生のために恐れて、自分までが乱れた。
「ばっ、ばかなっ！」
突然、彼は自分の口から吐いた自分の声に驚いた程、激越な感情の上に自分を乗せていってい

た。

「わしの死には、意義があるのだ。剣に生きる人間が剣で死ぬのは本望であるばかりでなく、乱脈なさむらい道のために、進んで卑怯な敵を迎えて死ぬのだ。その後からそなたがともに死ぬ――その気持はうれしいが、それがなんの役に立とうか。虫のように哀れに生きて、虫のように儚(はかな)く死んでどうするのか」

――見ればお通はふたたび大地に伏して泣いている様子なので、武蔵は、自分のことばのあまりに激し過ぎていたのに気づき、膝を折って、声を落し、

「だが、お通さん。……考えてみると、わしは知らず識らず、そなたに嘘をついてきた。千年杉の時から、花田橋の時から、欺(あざむ)く気持ではなくても、形はそうなって来てしまった。そして酷(むご)い冷たい態(さま)を装(よそお)って来た。わしはもう一刻後には死ぬ身だ。お通さん、今いう言葉は嘘ではない。わしはそなたが好きだ。一日でも思わぬ日のなかったほど好きだった。……なにもかも捨ててともに暮して終りたいとどれほど思い悩んだかしれない。――そなた以上好きな、剣というものがなかったら」

九

ことばを休めて、

「お通さん!」

とさらに、ことばに力をこめ直して、武蔵はなおいった。

いつも無口で無表情な彼がめずらしく感情の中に没し切って、

「鳥将に死なんとするやだ。将に死なんとしているこの武蔵だ。お通さん、わしの今いう言葉には微塵、嘘も衒いもないことを信じてくれ。――羞恥も見得もなくわしはいう。今日まで、お通さんのことを思うと、昼もうつつな日があった。夜も寝ぐるしくて熱い熱い夢ばかりに悩まされ、気の狂いそうな晩もあった。お寺に寝ても野に伏しても、お通さんの夢はつき纏い、しまいには薄い藁ぶとんをお通さんのつもりで抱きしめて歯がみをして夜を明かした晩すらある。それほどわしはお通さんに囚われていた。無性にお通さんには恋していた。――けれど。――けれどそんな時でも人知れず剣を抜いて見ていると、狂おしい血も水のように澄んでしまい、お通さんの影も、霧のようにわしの脳裡から薄れてしまう……」

「…………」

お通はなにかいおうとした。蔓草の白い花みたいに、嗚咽していた面をあげたが、武蔵の顔が、恐ろしいほど真面目な熱情に硬ばっているのを見ると、息づまって、再び地へ顔を打ち伏せてしまった。

「――そしてまた、わしは剣の道へ、身も心も打ち込んで行ったのだ。お通さん、この境が、武蔵の本心だった。つまり恋慕と精進の道のふた筋に足かけて、迷いに迷い、悩みに悩みながら、今日までどうやら剣の方へ身を引き摺って来た武蔵だった。――だからわしは、誰より自分をよく知っている。わしは偉い男でも天才でもなんでもない。ただお通さんよりも、剣の方が少し好きなのだ。恋には死にきれないが、剣の道にはいつ死んでもいい気がするだけなのだ」

なにもかも正直に――少しの嘘もなく、武蔵は自分の本心を――心の奥底まで、今こそいってしまおうとするのであったが、徒らに、言葉の美飾と、感情の顫えのみが勝ってしまって、まだ

まだ、正直にいいきれないものが、胸につかえているようでならなかった。
「だから、人は知らないが、お通さん、武蔵という男は、そんな男なのだ。もっと、露骨にいえば、そなたのことを考え出して、ふと囚われている時は、五体も焦かれる気がするが、心が、剣の道に醒めると、お通さんの事なんか、頭の隅へすぐ片づけてしまう。いや、心の隅にも失くなってしまう。この体、この心の、どこをさがしたって、お通さんの存在などは芥子粒ほどでもなくなってしまうのだ。――また、その時が、武蔵はいちばん楽しくて生きがいのある男となって歩いていたのだ。――わかったろう、お通さん。そういうわしに向って、お通さんは、心も体もすべてを賭して、今日まで一人で苦しんで来ている。すまないと心では思っても、どうしようもない。……それが自分なのだから」
――不意に、お通の細い手は、武蔵の逞しい手頸を摑んだ。
もう眼は泣いていなかった。
「……知ってます！　そ、そんなことぐらい……そういう貴方であるぐらいなこと……し、しらないで……知らないで恋をしてはまいりませぬ」
「さすれば、わしがいうまでもなく、この武蔵と共に死のうなどという考えはつまらぬことと分っておろうが。わしという人間は、こうしているわずかな一瞬こそ、なにも思わず、そなたに心も身も与えているが――一歩別れて、そなたの側を離れれば、そなたの事など、おくれ毛一筋ほどにも心に懸けていない人間。――そういう男に縋って男の死を追って、鈴虫のように死んではつまらぬことではないか。女には女の生きる道がある。女の生きがいはほかにもある。――お通さん、これがお別れのわしのことばだ。……では、もう時刻もないから――」

武蔵は、彼女の手をそっと解いて、立ち上がった。

十

解かれた手は、またすぐその袂を追って、
「武蔵様、待って」
と、かたく縋った。
さっきから彼女にも、いいたいものが胸いっぱいに閊えていた。
武蔵が、
（虫のように生きて、虫のように死ぬ女の恋には、死の意義がない）
といったことばや、
（一歩、おまえから離れれば、わしはおまえのことなど、頭の隅にも置いていない男だ）
といったような言葉にも、お通は決して、そんなふうに武蔵を見て、穿き違えた恋をしているのではないことをいいたかったが、なんとしても、
（もう二度と会えなくなるのだ）
と思うさし迫った感情に克てなかった。それ以外のなにもいえなかったと、理性することもできなかった。――で今、
「……待って」
といって、袂を引き留めたものの、やはりお通も、不可抗力なものでただ纏綿と泣くだけの女性をしか示すことが出来なかったのである。

しかし、いおうとすることのいえない――弱さの美しさ――単純なる複雑さ――に対して、武蔵も乱れずにいられなかった。彼の恐れている自分の性格の中の最も大きな弱点が、今、暴風のなかの根の弱い木みたいに揺すぶられていた。ともすればここまで持ち続けて来た「道への節操」も、地崩れのように、彼女の涙とともに泥になってなだれてしまいそうな気持がする。その気持を彼は恐怖する。

「わかったか」

武蔵が、ただいう言葉のためにそういうと、

「わかりました」

お通は微かに――

「けれど、わたくしはやはり、あなたがお死にになれば、後から死にます。男のあなたが、欣んで死ぬる以上に、女のわたくしにも、死の意味が抱いて逝かれるのでございます。けっして虫のように――また一時の悲しみに溺れて死ぬのではございません。ですから、それだけはお通の心にまかせておいて下さいませ」

乱れずにいった。

そして、もう一言、

「あなたは、わたくしのような者でも、心のうちだけでも、妻としてゆるして下さいますでしょうね。もう、それだけでわたくしは、すべての望みが満ち足りました。……この気持、大きな歓び、それはわたくしだけの持っていられる幸福です。あなたはわたくしを、不幸にしたくないからと仰っしゃいましたが、わたくしは決して、不幸に敗れて死ぬのではございません。――わた

くしを見る世の中の人達が、皆わたくしを不幸だといっても、わたくし自身は、ちっとも、そんな不幸ではないのでございます――むしろ、ああなんといっていいだろう、死の夜明けが、楽しみで待ち遠で、朝の小鳥の音の中に死んで行く身が――花嫁のようにいそいそ待たれてなりません」

長くものをいうと、息が喘れるのであろう。彼女は自分の胸を抱きしめて、そして、夢みるように幸福な眼をあげた。

残んの月はまだ白々としていて少し樹々に霧は立ち初めたが、夜明けにはまだ間があった。

――すると。

ふと彼女の眸を上げた崖の上の方で、

「キャーッ！」

突然、樹々の眠りをさまして翔ける怪鳥のように、一声、女の鋭い悲鳴がつんざいた。

たしかに女の絶叫だった。

さっき城太郎が、その崖の道を上へ登って行ったはずではあるが、その城太郎の声では決してなかった。

十一

凡事とも思われない。

誰の叫びか。また、何事が起ったのか。

われを呼び醒まされたように、お通は眼をやって、霧のかかっている峰の頂を仰いでいたが、

その機に武蔵は、つと彼女の側を離れ、

（おさらば）

ともいわず――彼方の死地へさして行く足を大股に急ぎかけていた。

「あっ、もう……」

お通が十歩追うと、武蔵も十歩駈けて、そして振顧った。

「お通さん、よく分った。――だが犬死をしてはならないぞ。不幸に追い詰められて、死の谷間へ辷り落ちて行くような、弱い死に方をしてはならないぞ。も一度その体を健康に戻してから、健康な心でよく考えてみるといい。わしだってこれから無駄に生命を捨てに急ぐわけじゃない。永遠の生をつかむために一時、死のかたちを取るだけのことだ。――わしのあとに従いて死んでくれるよりは、お通さん！　生き残って永い眼で見ていてくれ、武蔵の体は土になっても、武蔵はきっと生きているから！」

いい続けた息のまま、武蔵はもう一言、

「いいか、お通さん！　わしの後に従いて来るつもりで、見当ちがいな方へ一人で行ってしまうなよ。わしの死んだという形を見て、武蔵を冥途に捜しても、武蔵は冥途には行っていない。武蔵がいるところは、百年後でも千年後でも、この国の人間の中だ、この国の剣の中だ。他にはいない」

いい捨てると、もう、お通の次のことばが届かない方まで、彼の姿は遠ざかっていた。

「…………」

茫然とお通は残っていた。遠く去ってゆく武蔵の影は、自分の胸から抜け出した自分自体であ

るような心地だった。——別れという悲しみは、二つのものの離散から生じる感情なので、お通の今の気持には、別れの悲しみというような、そんなべつべつな意識の悲しみは持てなかった。ただ、大きな生死の濤に拐って行かれようとしている彼身此身の、ひとつ魂にふと戦慄の眼をふさぐだけだった。

——ざ、ざ、ざ、ざ

とその時、崖の上から、土ころが彼女の足元まで崩れて来た。すると、その土音を追いかけるように、

「——わあっ」

と城太郎が、木や草を掻分けて飛び下りて来た。

「まあっ！」

お通でさえ、愕っとした。

なぜならば、城太郎少年は、奈良の観世の後家からもらった鬼女の笑仮面を、こんどは烏丸家へ帰らないものと思って大事にふところへ所持して出かけて来たらしく、見ると今、その仮面を顔に被って、

「ああ、驚いた！」

と、ふいに眼の前へ立って、両手を挙げたからである。

「なんですっ？　城太さん」

お通が問うと、

「なんだか、おいらも知らないけど、お通さんにも聞えたろ。キャーッっていった女の声がさ」

「城太さんは、それを被って、どこにいたの」
「この崖をずっと登って行ったら、そこにもこの位な道があってね、その道のもっと上の方に、ちょうど坐りいい巨きな岩があったから、そこに腰かけて、ぽかんと、お月様の落ちて行くのを見ていたのさ」
「それを被って？」
「うん、……なぜっていえば、そこいらでやたらに、狐が啼いたり、狸だか狢だか知れない奴がゴソゴソするから、仮面を被って威張っていたら寄りつけまいと思ったからさ。――するとね、どこかでふいにキャーッという声がしたんだ。なんだろうあの声は。まるで針の山からきた木魂みたいな声だったぜ」

はぐれた雁

一

東山から大文字の麓あたりまではたしかに方角はついていたが、いつのまにか道を間違えていたとみえ、一乗寺村へ出るにはすこし山へ入り過ぎていた。
「これさ、なぜそうせかせか急ぐのじゃ。待たぬかよ。又八、又八」
先へ行く息子の足に遅れがちになると、お杉婆は、意地も我慢もなくなったように後から喘い

でいう。
聞えよがしに、舌打ちして、
「なんだ口ほどもない。宿を立つ時、なんといっておれを叱りとばしたか」
待ってやらないわけにもゆかないので、又八はその度ごとに、足を止めて待ちはするが、こんな時とばかり、後からやっと追いついて来る老母を頭からやりこめた。
「なにをそう不機嫌にわしへ当りちらすのじゃ、汝が身のように、生みの親のいうことを、いちいち根に持って遺恨がましゅう当る者がどこにあろうぞ」
皺の中の汗を拭いて、ほっと一息休もうとすると、又八の若い足は、立っている方が辛いので、もう直ぐ先へ歩き出すのだった。
「これ待たぬか。少し休んで行こうぞよ」
「よく休むなあ、夜が明けてしまうぜ」
「なんの、まだ朝まではだいぶある。常ならば、これしきの山道、苦にもせぬが、この二、三日は風邪気味か体が気懈うて歩くと息が喘れてならぬ。悪い折にぶつかったものよ」
「まだ負け惜しみをいってるぜ。だから途中で、居酒屋をたたき起して、人が折角親切に休ませてやろうとすれば、そんな時には、自分が飲みたくねえものだから、やれ時刻が遅れるの、さア出かけようのと、おれがおちおちと酒も飲まねえうちに立ってしまうしよ。いくら親でも、おふくろぐれえ交際い難い人間はねえぜ」
「ははあ、ではあの居酒屋で、汝が身に酒を飲ませなかったというて、それを、まだ怒っているのか」

「いいよ、もう」
「わがままも程にしたがよい、大事をひかえて行く途中だぞよ」
「といったところでなにもおれたち母子が刃の中へ飛びこむわけじゃなし、勝負のついた後で吉岡方のものに頼み、武蔵の死骸へ一太刀恨んで、手出しのできねえ死骸から、髪の毛でも貰って故郷の土産にしようというだけのものじゃねえか、大事も大変もあるものか」
「ままよいわ、ここで汝が身と、母子喧嘩をしてみても始まるまいでの」
歩き出すと――又八はぶつぶつ独り語に、
「ああ、ばかばかしいな。他人の殺した死骸から証を貰って、これでめでたく本懐を達してござ いと故郷へ帰って披露する。故郷の奴らは、どうせあの山国、他へ出たことのない人間ばかり、本気になって目出度がることだろうが……嫌だなあ、またあの山国で暮すのは、考え出してもぶるぶるだ」
灘の酒だの都の女だの、又八の知った都会生活のあらゆるものが彼に未練をささやいてやまなかった。まして彼にはまだそれ以上の執着がこの都会にある。あわよくば、武蔵の歩いた道以外の道を見つけ、とんとん拍子に立身して、まだ不足な物質の世界の体験にその身を飽満させて、人間の生れがいをそこに自覚してみたいという――彼らしい希望さえまだ決して捨ててはいない。
(ああ嫌だ。ここから見てさえ町中が恋しい)
いつの間にやらまた、お杉婆はだいぶ後に取り残されていた。宿を立つ前から体が懈い懈いといっていたが、まったく幾らか体の調子が悪いのかも知れない。とうとう我を折ったように、

「又八、少し負うてくれぬか。後生だによって、少し負うてくれい」
と、いった。
又八は、顔を顰めた。
面を膨らませたまま、返辞もせずに待っていたのである。すると、お杉婆も彼もぎょっとしたように耳を欹てた。――先に城太郎も驚き、お通も聞いた、あの針の山の悲鳴に似た女の叫びを、この母子も聞いたのであった。

二

どこともわからない、たった一声したきりの悲鳴だった。次の悲鳴がしたら声の方角も的確に知れよう。――それを待つもののように、又八も婆も、じっと空虚な顔して、疑惑の中に立ちすくんでいた。
「……あっ？」
突然、お杉婆がこういったのは、その不審な悲鳴がまた聞えたのではなく、なに思ったか、又八が不意に、崖の角につかまって、そこから谷へ降りて行こうとする様子を見たからであった。
「ど、どこへ行くのじゃ」
あわてて、咎めると、
「この下の沢だ」
もう崖道へ身を沈めかけながら又八がいう。
「おふくろ、ちょっと、そこに待っていてくれ。――見て来るから」

「阿呆」
お杉婆は、つい、いつもの口癖を出して、
「なにを捜しに行くのじゃ、何を？　……」
「なにをッて、今、聞えたじゃねえか、女の悲鳴が」
「そんなもの尋ねてどうする気かよ。――あれっ、阿呆、止めいというに、止めいというに」
上から婆が喚いているまに、又八は耳もかさず、木の根にすがりながら深い沢へ降りてしまった。
「ばっ、ばか者っ」
と月へ罵っている老母のすがたを、又八は深い沢の底から、木の間越しに見上げていた。
「――待ってろようっ、そこで」
下から呶鳴ったが、その声がお杉には届いて行かないほど、彼の降りて来た崖は深かった。
「はてな？」
又八はすこし後悔した。たしかにさっきの悲鳴はこの沢の辺りのように思われたが、もし違っていると、無駄骨を折ることになる。
――しかし月の光も届かないほどなこの沢も、よく眼を働かしてみると小道がある。山といっても元よりこの辺の山なのでそう深かろうはずはない。それに京都から志賀の坂本や大津へ通う近道でもあるので、どこへ降りても市人の踏んだ足の痕が必ずついている。
さらさらと小さな滝や瀬になって落ちてゆく水に従いて、又八は歩いて行った。すると、その流れを横断して左右の山の中腹へ亙っている一筋の道があった。彼が発見したのは、ちょうどそ

の道筋にあたっている渓流の側であった。

石魚突きの寝泊りする石魚小屋かも知れない。ほんの人間ひとり入れるぐらいなほッ建小屋がそこにある。——その小屋の後ろに這い屈まっている人間の白い顔と手とをちらと見たのである。

「……女だ？」

又八は、岩の蔭にかくれた。さっきの悲鳴も、女のであればこそ彼は猟奇な興奮に駆られたのである。男の声であったら最初からこんな沢へ降りては来ないだろう。——それが今、その正体を窺ってみると、確かに女で、しかも若いらしい。

——何をしているのか？

と最初は疑っていたが、見ていると、疑いはすぐ解けた。女は、流れのそばへ這い寄って、白い掌に水を掬って、唇へ移しているのであった。

三

びくっと、女は鋭感に振り顧った。又八の跫音を、昆虫のように体で感じて、すぐ起ちかけそうな眼であった。

「——おやっ？」

又八が、声を放つと、

「あっ？」

女も同じように驚いていった。しかしそれは、恐怖から救われたような声だった。

「朱実じゃねえか」
「……あ、あ」
そこの谷川で飲んだ水が、やっと今、胸へ下がったように、朱実は大きく息をついた。
けれどまだ何処かおどおどしているその肩をつかまえて、
「どうしたんだ朱実」
又八は、彼女の脚から顔を見上げて、
「おめえも、旅支度だな、旅へ立つにしても、こんな所を今頃――なにしに歩いているのだ」
「又八さん。あなたのおっ母さんは？」
「おふくろか、おふくろは、この谷間の上に待たせてある」
「怒っていたでしょう」
「あ、路銀のことか」
「わたしは急に、旅立ちしなければならなくなったのです。けれど、旅籠の借銭も払えないし、路用のお金もないので、悪い事と知りながら、おばばさんの荷物と一緒にあった紙入れを、つい出来心で、黙って、持って来てしまった。……又八さん、堪忍してください。そして、わたしを見逃して下さい。きっと後で返しますから」
さめざめと泣き声の裡に、朱実が謝るのを、又八はむしろ意外な顔して、
「おい、おい。なにをそう謝るのだ。……アア分った。俺とおふくろが二人して、おめえを捕まえるために、ここへ追いかけて来たと勘違いしているんじゃねえか」
「でも、わたしは、出来心にしろ他人様のお金を盗って逃げたんですから、捕まれば、泥棒とい

われても仕方がありませんもの」
「それやあ、俺のおふくろの云い草だ。俺にとれば、あれぐらいな金、おめえが真実困っているならこっちからやりたいくらいだ。なんとも思っちゃいねえから、そんな心配はしないがいい。――それよりはなんのために、急に旅支度して、こんな所を今頃歩いているのか」
「旅籠(はたご)の離れで、あなたがおっ母さんに話していた事を、ふと、蔭で聞いていたものですから」
「フーム、すると、武蔵と吉岡勢との、きょうの果し合いの一件だな」
「……ええ」
「それで急に、一乗寺村へ行くつもりでやって来たのか」
「…………」
朱実は答えなかった。
一つ家に暮していた頃から、朱実が胸に秘(かく)していたものは何か、それは又八もよく知っていた。――で彼は、深くは問わずに、
「そうそう」
急に言葉を変えて、
「今し方、この辺で、キャーッという悲鳴が聞えたが、あれはもしや、おめえの声ではなかったか」
と、この沢へ降りて来た目的に返って、そう訊くと、
「エ。わたしでした」
朱実はうなずいた。

そしてまだなにか、恐怖の夢でも見ているように、この沢の窪から突兀と空に黒く見えている山の肩を振り仰いだ。

四

そこでその事実を、彼女自身が話すところによると、こうである。

——つい今し方のこと。

彼女が、この沢の渓流を越え、そしてここからも見える眼の前の——突兀とした岩山の中腹までかかって行くと、ちょうどその山肌の肋骨の辺りになる岩頭に、世にも怖ろしい妖怪が腰かけていて、月を眺めていたというのである。

真面目には聞かれない話のようだが、朱実は真面目になって、

「遠くから見たんですけれど、体は侏儒みたいに小さいくせに、顔はといえば、大人並の女なのです。そして顔は、白いのを通り越して何ともいえない色を帯び、唇は耳までキュッと裂けていて、しかも、私の方を見て、ニヤリと笑ったような気がしたんです。——思わずその時、私はキャッと叫んでしまったものでしょう。無我夢中でした。気がついた時は、この沢に辷り落ちていたんです」

と、いう。

いかにも恐かったように、朱実がそう話すので、又八は、笑うまいとしながらもつい、

「ハハハハハ。なアんだ」

と、揶揄して、

「伊吹山のふもとで育ったおめえが、恐いなんていうと、化け物のほうで顔負けするだろう。燐の燃えている戦場を歩いて、死骸の太刀や鎧を剝いだことさえあるじゃねえか」
「でも、あの頃は、恐いこともなにも知らなかった子供ですもの」
「まんざら子供でもなかったらしいぜ。その頃のことを、いまだに胸に想って、忘れ切れずにいるのを見ても」
「それやあ、初めて知った恋ですもの。……だけどもう、私はあの人を、諦めてはいるんですよ」
「じゃあなぜ、一乗寺村へなど出かけて行くのか」
「そこの気持が自分にも分らないんです。ただ、ひょっとしたら武蔵様に会えやしないかと思って」
「無駄なこった」
ひどくそこで、又八は言葉に力をこめ、万に一つも勝目のない武蔵の立場と、相手方の情勢とをいって聞かせた。
すでに清十郎から小次郎と――幾人かの男性を通って、処女であったきのうの自分が、もう思い出のものになっている彼女には、武蔵を考えたり想ったりすることも、もう処女であった頃のように、未来の花を夢想して考えることはできなくなっていた。肉体的にその資格を失った自分を冷たく諦観して、死にはぐれ、生きはぐれながら、次の道をさがしている迷える雁の一羽に似ていた。
だから彼女は、又八から、武蔵が今刻々、死の危機へ近づいている様子を如実に聞いても、泣

くほどな気持にはなって来なかった。――ではなぜ、こんなところまで、恋々と彷徨ってきたかと訊かれれば、その矛盾も説明することのできない彼女であった。
「…………」
行くての方角を失ったような眸をして、朱実は、又八のことばを、夢うつつに聞いていた。又八は、その横顔を黙って見ていた。――なにかしら彼女の彷徨っている所と、自分の彷徨っている所とが、似ているように思われてならない。
（この女は道づれを捜している――）
そう見える白い横顔だった。
又八は、ふいに、彼女の肩を抱えた。そして顔を押しつけるようにして、
「朱実。江戸へ逃げないか……」
と、囁いた。

五

朱実は、息をのんだ。
疑うように、又八の眼をじっと見つめ、
「え。……江戸へ？」
ふと、自分に返って、現実の境遇を見直すように反問した。
彼女の肩へ廻している手に、又八はそっと力をこめて、
「なにも江戸表とは限らないが、人の噂に聞けば、関東の江戸表こそこれからの日本の覇府にな

るだろうという話だ。今までの大坂や京都はもう古い都とされ、新幕府の江戸城を繞って、新しい町がどしどし建っているそうだ。——そういう土地へ行って逸早く割り込めばきっとなにかうまい仕事があるだろう。おめえも俺も、いわば群からはぐれた迷い雁だ。……行かないか。……行ってみないか。……え、朱実」

囁かれている彼女の顔がだんだん熱心に聞いていた。又八はなお口を極めて、世の中の広さや、自分たちの若い生命を称えて、

「面白く暮すんだ、したいことをして送るんだ。それでなけれや生れた甲斐はない。もっと俺たちは図太い肚を持とうじゃねえか。線の太い世渡りをしなけりゃあ嘘だ。生半可、正直に、善良にと、量見を良くしようとするほど、却って運命ッて奴は、人を弄ったり皮肉ったり、ベソを掻くようなことばかり仕向けて来やがって、碌な道は拓けて来やしねえ。……え、朱実、おめえだってそうじゃねえか。お甲っていう女にしろ、清十郎という男にしろ、そんな者の餌になって、食われているから悪いのだ。食う人間にならなけれやあ、この世は強く生きちゃ行かれねえぜ」

「…………」

朱実は心を動かされた。よもぎの寮という家から離れ離れに世間へ巣立って、自分はその世間に虐まれて来ただけであるが、さすがに又八は男だけあって、以前よりもどこか慥りしたところが人間に出来てきたように思われた。

けれど、彼女の頭のどこかに、まだ捨て難い幻影がちらちらしていた、それは武蔵の影であった。焼けた家の焼跡へ行って灰でも眺めてみたいとする——愚かな執着にそれは似ていた。

「嫌か」

「………」
　黙って、朱実はかぶりを振った。
「じゃあ、行こう。嫌でなければ――」
「だけど、又八さん、おっ母さんは、どうするつもり？」
「ア。おふくろか」
　又八は、彼方を見上げて、
「おふくろは、武蔵の遺物さえ手に入れれば、一人で故郷へ帰って行くさ。あのまま姥捨山のようなところに置き去りを食ったと知ったら、一時はかんかんに怒るだろうが、なあに今に俺が出世してやればそれで埋め合せはつく。――そう極ったら、急ごうぜ」
　意気込んで、先へ歩いて見せると、朱実はまだなにか躊躇って、
「又八さん、ほかの道を行きましょう、その道は」
と、竦んでいう。
「なぜ」
「でも、その道を登って行くとまた、あの山の肩に」
「アハハハ。口が耳まで裂けている侏儒が出るというのか。俺がついているから大丈夫だ。……アッいけねえ。お婆の奴が彼方で呼んでやがる。侏儒の妖怪よりゃあ、おふくろの方がよっぽど怖いぞ。朱実、見つかると大変だ、早く来いっ」
　――駈け上って行く二つの影が岩山の中腹ふかく隠れ去った頃、待ちくたびれたお杉婆の声が谷間の上で、

「せがれようっ……又八ようっ……」
空しく彷徨い歩いていた。

生死一路

一

チチ、チチチ、チチ……
畷の大藪に風が立ちそめて来た。風につれて、小禽が立つ。しかしまだその鳥影も見えぬほど朝は暗いのである。
前に懲りているので、佐々木小次郎は、
「わしだぞ。立会人の小次郎なるぞ」
こう断りながら、大息を喘って、雲母越えの十町畷を魔のように駈け、下り松の辻までやがて来た。
跫音に、
「や、小次郎殿か」
四方に潜んでいた吉岡勢は、まったく痺れの切れたような顔をして、彼の周囲をすぐ真っ黒に取り囲んだ。

「まだ見えませぬかの、武蔵奴は――」
壬生の源左老人の問いに、
「いや、出会った」
と、小次郎は語尾を上げ、その言葉に衝かれ、さっと自分へあつまる視線のひらめきを冷たく見廻しつつ、
「出会ったが、武蔵の奴、どう思ったか、高野川から五、六町ほど連れ立って歩くうちに、不意に姿を消してしもうたのです」
いいも終らず、
「さては、逃げたなっ」
これは御池十郎左衛門だった。
「いや！」
と、その動揺めきを抑えて、小次郎はいいつづけるのだった。
「落着き澄ました彼の容子、また、わしにいった言葉のふしや、その他を考え合せてみるに、姿は消したが、どうも、あのまま逃げ去ったものとも考えられぬ。――思うに、この小次郎に知られては具合のわるい奇策を用いるため、わしを撒いたものと思われる。油断は決してなりませぬぞ」
「奇策。――奇策とは？」
無数の顔が、彼を囲んで、彼の一言半句も聞き洩らすまいとするように犇めいた。
「おおかた武蔵の助太刀のものたちが、どこかに屯していて、彼を待ち合せ、それと合してここ

へ襲せて来るつもりではないかと思う」
「ウウム。……それはありそうなことじゃ」
源左老人が呻くと、
「しからば、ここへ来るのも、もう間はないな」
十郎左衛門は、そういうと、持ち場を離れたり、樹の上から降りて集まって来た味方へ、
「戻れ戻れ。備えを崩しているところへ、武蔵方が不意に虚を衝いて来ようものなら、出鼻に不覚を取ってしまう。どれほどの助太刀を率き具して参るかはしらぬが、いずれ多寡の知れたもの。手筈を過たず討ち取ってしまえ」
「そうだ」
各〻も、気づいて、
「待ちくたびれて、心に弛みの起る時が油断だ」
「部署につけ」
「おう、抜かるな」
いい交わしながらばらばらと分れて、再び、藪の中や樹蔭や、また、飛道具を携えて梢の上へ影をかくした。
小次郎はふと、下り松の根方に、藁人形のように立っている源次郎少年を見て、
「眠いか」
と訊いた。
源次郎は強く、

「ううん」
首で否定して見せた。
その頭を撫でてやりながら小次郎は、
「では寒いのか、唇の色が紫いろしているではないか。其許は吉岡方の名目人で、つまりきょうの果し合いの総大将だからの、確乎していなければいかんぞ。もうすこしの辛抱、も少し経つと、面白いものが見られるからな。……どれ、わしもどこか地の利のよいところで」
と、いい捨ててそこを立ち去った。

二

——一方、思い合せると、ちょうどその時刻。
志賀山と瓜生山の間ノ沢あたりで、お通から別れ去った宮本武蔵は、
（ちと遅くなった！）
と、その遅刻した差を取り戻そうとするかのように、急に脚を早め出していた。
下り松での出会は、寅の下刻と約してある。この頃の日の出はおよそ卯の刻過ぎであるからまだ暗いうちなのだ。場所が叡山道で三道の辻に当っているし、夜が白めば、当然往来人もあるからその点なども時間に考慮されていることはいうまでもない。
（お、北山御房の屋根だな）
武蔵は、脚を止めた。そして自分の今踏んでいる山道のすぐ真下に見える伽藍をのぞいて、
（近い！）

と感じた。
そこから下り松の辻まではもう七、八町しかない。北野の裏町から歩き出した距離も遂にここまでちぢまった。この間に月も彼とともに歩いていた。山の端にかくれたのか朝の月影はもう見えなかった。——しかし、三十六峰の懐に重たく眠り臥している白雲の群れが、遽に、漠々と活動を起して天に上昇しはじめたのを見ても、天地は寂とした暁闇のうちにすでに「偉大なる日課」へかかっていることが分る。
その偉大なる日課のまっ先に、もう幾つか呼吸する間に、自分の死が、一片の雲よりも淡く、その気象の中から消されてゆくのか——と武蔵は雲を仰いで思う。
雲の抱く巨きな万象の上から見れば、一匹の蝶の死も一個の人間の死も、なんらの変りもないほどなものでしかない。——けれど人類の持つ天地から観れば、一個の死は、人類全体の生に関ってゆくのだ。人類の永遠な生に対して、よい暗示か、悪い暗示かを、地上へ描いてゆくことになる。
（よく死のう）
と、武蔵はここまで来た。
（いかによく死ぬか？）
に彼の最大の最後の目的はあるのだった。
——ふと水音が耳につく。
一気に、ここまで脚を早めて来たので、彼は渇きを思い出した。岩の根へ屈んで水をすすった。水のうまさが舌に滲みる。彼は自分で、

（おれの精神は紊れてない）
ということをそれでも知った。そして直前の死そのものへ対して、少しも卑屈を感じない自己をすずやかに思った。今こそ、自分の胆は踵にこもっているという感。
――だが、足を止めて、一息つくとすぐ、なにかしら後ろで自分を呼ぶものがあった。お通の声である。また、城太郎の声である。
（元より気のせいだ）
そう彼は知っている。
（取り乱して、後を追って来るような女ではない。わかり過ぎるほど、自分の心もわかっている女だけに――）
ということも彼は知っている。
けれどそのお通が後ろから声をふり絞って来るような気持が、なんとしても頭から払えなかった。
ここまで駈けて来る間にも、ともすると振向いてみた。今も、足を止めるとすぐ、意識のうちに、
（もしや？）
と、耳はそれへ傾いてしまう。
時刻に遅れることは、約束を違えたといわれるのみでなく、彼として、戦う上に損である。無数の敵の中へ、単騎で斬り入るには、ちょうど月も落ち、夜もまだ明けきらないという、暁闇の一瞬こそ彼にとって利がある。勿論、武蔵もその考えで脚を急いで来たのであるが、また一つに

は、うしろ髪を引くようなお通のあらぬ声や姿を、心から振り捨てるためにも、ここまで眼をつぶるような気持で急いで来たものであろう。

三

外敵はこれを粉砕するも易し、心の敵は敗るよしなし。——武蔵はふとこの言葉に思い当って、

（くそっ、こんなことで）

と、心に鞭を加え、

（女々しい！）

お通のことなど、塵ほども胸に止めまいとした。

さっき袂を振り切る時、そのお通に向っても、いったばかりではないかと恥じる。

（男が男の使命に向って、挺身する時は、恋など、頭の隅にもおいていないのだ——）と。

そういいつつ今、果たして自分の頭の中から、お通のことは捨て切っているのだろうか？

（なんたる未練だっ）

心の中から、お通の幻影を蹴とばして、そしてそれから遁れ去るように、彼はまた、驀しぐらに駈けていた。

——と、眼の下の大竹藪からさらにずっと山裾へかけて展けている樹林や畑や畷を縫って、一筋の白い道が見えた。

「おっ！」

すでに近い。——一乗寺下り松の辻は近い。その一筋の道を眼で辿ってゆくと、およそ二町ほど先の所で、他の二筋の道と結び合っている。乳いろの霧の微粒が静かにうごいてゆく空に、傘枝を高くひろげた目印の松が、もう武蔵の目にも見えたのである。

——はっと、彼は地へ膝をついた。背にも、前にも、いやこの山の樹木すら、すべて敵かのように、彼の五体は闘志のかたまりとなった。

岩の蔭、樹の蔭と、蜥蜴のように素迅く身を移しつつ、下り松の真上に当る高地まで来たのであった。

（ウム、いるな！）

そこからは更に近々と、辻にかたまっている人影までが幽かに読まれた。ちょうど松の根元を中心にして、十人ほどの一塊りが、霧の下にじっと槍を立てている——

どうっ——と山巓からふき颪してくる暁闇の大気が、武蔵のからだへ雨かとばかり雫を落し、松のこずえや大竹藪を潮騒のように山裾へ翔けてゆく。

霧の下り松は、その傘枝を震わせて、なにか予感を、天地へ告げているようだった。

眼に見えた敵の数はわずかであるが、武蔵は、満山満地がみな敵の居場所に感じられた。すでに死界の中に来ている肌心地だった。手の甲まで鳥肌になっていた。呼吸はおそろしく深く静かに、足の指の爪までがもう戦闘しているのである。ジリジリと、一歩一歩にすすむ足の指が、掌の指にも劣らない力で、岩の間を攀じ登っていた。

——すぐ眼の前に、古い砦の址ででもあるような石垣があった。彼は岩山の腹を伝わって、その小高い地域へ出た。

見ると、麓の下り松のほうへむかって、石の鳥居がある。周囲は喬木と防風林でかこまれていた。
「オ。……御社だ」
彼は、拝殿の前へ駈けて行くなりそこへひざまずいた。何神社とも思わず無意識にべたと両手をついていた。折も折、心魂のおののきを彼も禁じ得なかった。――真っ暗な拝殿のうちに、一穂の御明しは消えなんとしながら消えもせず、颯々と風の中にゆらいでいた。
「――八大神社」
彼は、拝殿の額を仰いで、大きな力を味方にもったような気がした。
「そうだ！」
ここから真下の敵へ逆落しに斬り入ってゆく自分の背には神があるとする強味――神こそはいつも正しきものに味方し給うものという強味――むかし信長が桶狭間へ駈けてゆく途中でも熱田の宮へぬかずいたことなども思い合わされて、なんとなく欣しい吉瑞！
彼は、御手洗の水で口漱いだ。さらにもう一杓子含んで、刀の柄糸へきりを吹き、わらじの緒にもきりを吹いた。
手ばやく革襷をかけ、鬢止の鉢巻を木綿で締めた。そして足を踏み馴らしながら神前に戻って、拝殿の鰐口へ手をかけた。

四

――手をかけて。

(いや！ 待て)

と武蔵は、手を離した。

縒り合せた紅白の色も分らぬほど古びている木綿の綱――鰐口の鈴から垂れている一条の綱――

(恃め、これに縋れ)

といわないばかりな。

しかし、武蔵は自分の胸に、

(自分は今、ここへ、なにを願おうとしたのか)

をたずねてみて、はっと、手を竦めてしまったのであった。

(もう宇宙と同心同体になっているはずの自分ではないか！)

と思う。

(ここへ来るまでに――いや常々から、朝に生きては夕に死ぬる身と、死に習い死に習いしていた身ではないか)

と、われを叱る。

それが今、計らずも、平常の鍛錬を、ここぞと思う間際に当って、一穂の明りを仰ぐと、なにか、暗夜に光でも見つけたように、欣しげに心は揺れ、手はわれを忘れて、この鰐口の鈴を振り鳴らそうとしている。

さむらいの味方は他力ではない。死こそ常々の味方である。いつでもすずやかに、きれいに潔く、はっと死ねるという嗜みは、どんなに習っても、習いぬいても、容易に習いきれる修行

でないことは勿論だが、ゆうべの月から今朝まで歩いて来た己れの身こそ、それを体得し切ったものと、心ひそかに、自分を誇ってさえいたのに——と、武蔵は石の如く神前に突っ立ったまま、じっと慚愧の首を垂れて、口惜し涙が頬を下ってくるのも覚えぬもののように、

(過った！)

と、悔いを心に噛み、

(——自分では、玲瓏な身になり切っていたつもりでも、まだ五体のどこかには、生きたいとする血もうずいていたに違いない。お通のことやら、故郷の姉のことやらが——そして藁をもつかみたいとする恃みが——ああ、無念な！　われを忘れて鰐口の綱へ手を差し伸べさせたのだ。——この期になって神の力を恃もうとしていた)

お通には泣かなかった涙を、武蔵は滂沱と頬にながして、わが身に、わが心に、わが修行に、万恨の無念を持つのであった。

(——無意識であったのだ、恃もうとする気持も、祈ろうとする言葉も考えずに、ふと鰐口の綱を振ろうとした。——だが、無意識だから、なおいけないのだ！)

叱っても叱っても、叱りきれない慚愧なのである。自分が口惜しいのだ。こんな浅い修行をして来たきょうまでの日々であったかと思うと、

(愚鈍め)

憐むべき自分の素質を考えるほかなかった。

すでに空身。なにを恃みなにを願うことがあろう。戦わぬ前に心の一端から敗れを生じかけたのだ。そんなことで、なにがさむらいらしい一生涯の完成か。

だが――武蔵はまた卒然と、
「有難いっ」とも思った。
真実、神を感じた。まだ幸いにも、戦いには入っていない。一歩前だ。悔いは同時に改め得ることだった。それを知らしめてくれたものこそ神だとおもう。
彼は、神を信じる。しかし、「さむらいの道」には、たのむ神などというものは無い。神をも超えた絶対の道だと思う。さむらいのいただく神とは、神を恃むことではなく、また人間を誇ることでもない。神は無いともいえないが、恃むべきものではなく、さりとて自己という人間も、いとも弱い小さいあわれなもの――と観ずるもののあわれのほかではない。
「…………」
武蔵は、一歩退って、両手をあわせた。――しかし、その手は鰐口の綱へかけた手とは違ったものであった。
そしてすぐ、八大神社の境内から、細い急坂を駈け下りて行った。坂を降りきった山裾の傾斜に下り松の辻はあった。

五

のめるような急坂だった。豪雨の日でもあればそのまま滝となるような道に、洗い出された石ころが脆い土にすがっている。
武蔵が、一気に駈け下りてゆくと、石ころや土が、彼の踵を追いかけて静寂を破った。
「あ！」

なにものかが目に触れたのであろう、武蔵は突然、体を鞠にして、草の中へ転がった。

草はまだ朝露を一滴もこぼしていない。膝も胸も水びたしになってしまう。かがみ込んだ野兎のように、武蔵の眼は下り松の梢を凝視する。

足数にしても、そこまではもう何十歩と眼でも測ることができよう。そして下り松の辻の位置はこの坂下よりさらに幾分か低地になっているため、その梢も比較的低く見られる。

――武蔵は見た。

樹の上に潜んでいる人影を。

しかもその男は飛道具を持っているらしい。それも半弓ではない、鉄砲らしいのだ。

（卑怯な！）

と、憤ってまた、

（一人の敵に）

と、憫れみもしたが、さりとて予期していないことではなかった。これ位な用意は当然あるものと心構えには入れていたことである。吉岡方でもまた、まさか自分がただ一名でここへ臨むものとは考えていないに違いない。そうすると飛道具の備えもある方がむしろ賢いことだし、それも一挺や二挺ではないものと見なければなるまい。

だが、彼の位置からは、下り松の梢だけにしか発見できなかった。飛道具の者が皆、樹の上に潜んでいるものという見解を持つのも早計であり危険である。半弓ならば岩のかげや低地にもかくれていようし、鉄砲ならば、この山腹から撃っても中たる。

しかし、たった一つ武蔵にとって有利だったのは、樹の上の男も、樹の下の一かたまりも、み

なこっちに背を向けていることだった。追分から三方へ道がわかれているだけに、彼らは背後の山を忘れていた。
這うように武蔵は徐々と身をすすめた。刀のこじりの高さよりも頭の方を低くして出て行った。そして遽に小走りになり、ツ、ツ、ツ、ツ、ツ――と巨松の幹へ近づきかけると、二十間ほどてまえで、
「――あッ」
梢の男が、ふと、その影を発見して、
「武蔵だっ！」
と、叫んだ。
天空からその声が響いたにも関わらず、武蔵はまだ、同じ姿勢のまま十間は確かに駈けた。
彼は、その秒間だけは、決して弾が来ないということを、胸の裡で計っていた。なぜならば、梢の上の人間は、枝に跨がって、三道の方へ銃口を向けながら見張っていたからである。樹の上なので、身の位置も直さなければならない、また小枝に邪げられて、銃身もすぐには向けられまい。
――こう計って、その秒間だけは安全と思っていた。
「なにッ――？」
「どこへっ」
これは、下り松の下を本陣として立ち並んでいた十名ほどの異口同音だった。
次の瞬間には、また、

「後ろだい」
と、宙の男がいった。
喉の引ッ裂けそうな声でわめいたのである。その時はもう梢の上であわてて持ち直した銃口が、武蔵の頭へ正確に向いていた。
松の細かい葉を通って、火縄の火がチラ――とこぼれた。武蔵の肱が大きな円を描いたのはその咄嗟であった。手の裡に握られていた石は唸りをあげて、線香ほどに見える火縄の光へぴゅっと飛んで行った。
――みりっと樹の小枝の裂ける響きと、あッと其処でいった叫びとが一つになって、霧の上から地面へ一個の物体を勢いよく抛り出した。勿論それは人間である。

六

「――オおっ」
「武蔵っ」
「武蔵だっ」
後ろに眼を持たない人間である限り、この驚きは当然に見えた。
三道それぞれな所に、水も漏らさぬ前衛の備えを固めていただけに、なんの予報もなく、この中核部で、いきなり武蔵の姿を迎えようなどとは、夢想だにもしていなかった吉岡方の狼狽も無理ではない。
わずか十名に足らないそこの人数ではあったが、不意に大地を震り上げられたかの如く、味方

同士、腰の鞘と鞘をぶつけ合い、また、持ち直す槍の柄に味方の者の足もとを躓かせ、また或る者は不必要なほど遠くへ横ッ跳びに身を交わし、そしてまだ驚き足らないように、

「こ、小橋っ」

「御池っ」

と朋友の名を、無用な高声で呼び合ったり、

「抜かるなっ！」

と自分の心胆さえ定まらないのに他を誡めたり、

「な、な、なにをッ」

「く、くッ！……」

言葉にならない言葉の切れ端を歯の根から力み出したりして、どうにかぎらぎら抜きつれた刀と槍の幾筋とが、武蔵へ向って半円を備えかけたかと見えた時、当の武蔵は、

「約定によって、生国美作の郷士宮本無二斎の一子武蔵、試合に出て参りました。名目人源次郎どのはいずれにおわすか。前の清十郎殿や伝七郎殿のごとき御不覚あるなよっ。ご幼少とのことゆえ助人は何十人たりとも存意のまま認めおく。ただし武蔵はかくの如く唯一名にて参ったり。一人一人かからるるとも、総がかりに来られるともそれも勝手。いでやっ！」

と、凛々、こういい放つ。

正しく挨拶されたのも彼らにはまた意外だった。礼儀に対して礼儀を取らない恥は骨身にこたえたらしいが、平常のそれとは違って、この場合のそれは十分な余裕というものからでなければ生れて来ない。口の唾さえ途端に渇いている舌では、

「遅いぞッ、武蔵っ」
「怯れたかっ」
ぐらいなことしかいえなかった。
にも関わらず、武蔵が、唯一名にて参ったりという言葉だけは確かに受け取って、そうだ相手は一名なのだと、急に強味が甦ってきたらしくも見える。けれど源左老人や、御池十郎左衛門らの老巧は、そういう裏を考えて、それをもってかえって武蔵の奇策となし、畢竟武蔵の助太刀はどこか附近に姿をかくしているものと疑心暗鬼の眼ざしが忙しない。
――びゅっ！
どこかで弦音がした。
武蔵の抜きはなった刀の刃風のようにもそれが聞えて、彼の顔へ向って飛んで来た一本の矢は、同時にパッと二つになって、肩のうしろと刀の切ッ先へきれいに落ちた。
――と見えた視線はもうそこへ置き残され、武蔵の体は髪を逆立てた獅子のように、松の幹に隠れていたそこの蔭のものへ向って一足跳びに躍っていた。
「キャッ。怖いっ！」
立っておれと吩咐けられた通りに、最初からそこに立っていた源次郎少年は、悲鳴をあげて、松の幹へ抱きついた。
その叫びに、父の源左老人が、自分が真二つに割られたような声で、わあーッと彼方で跳び上がったと思うと、武蔵の刀によって描かれた一閃が、どう斬り下げられたのか、松の皮二尺あまりを薄板のように削ぎ、その皮といっしょに前髪の幼い首を血しおの下に斬り落していた。

霧風

一

まるで夜叉の行為にひとしい。

最初から重大視していた目的物でもあるかのように、武蔵はなにものも措いて真っ先に、源次郎少年を斬ってしまったのだ。

酸鼻とも残忍ともいいようがない。敵とはいえ、物の数ではない少年ではないか。

それを斃したからといって先の勢力が微塵も減殺されるわけでもない。いや、かえって吉岡一門の者を極度に怒らせ、全体の戦闘力を狂瀾のように激昂させるにはなによりも役立ったろう。

わけても源左老人は、哭くかのような形相を作り、

「――しゃあッ、よくもッ」

顔中から喚きを発し、老いの腕には少し重げに見える大刀を頭の上に振りかぶったまま、武蔵のからだへ打つかるような勢いで向って来た。

一尺ほど――武蔵の右足が退がったと思うと、その足につれ体も両手も右へ斜めになり、源次郎少年の首すじを通って返ったばかりの切ッ先がすぐ、

「喝ッ」

刎ねて——ぴゅん——とばかり源左老人の下りかけた肱と顔とを摺り上げた。

「ウウふっ」

誰の唸きとも分らない。

なぜならば武蔵の後ろから槍を突き出した者が、同時に前へよろめき出し、源左老人と折重なって朱となったし、なお眼を移す遑もなく、武蔵の正面にはすでにまた次にとびかかった四人目の者が——これはちょうど彼の重心点へ踏み出したとみえ、肋骨まで断ち割られて、首も手もだらんと下げたまま、二、三歩ほど生命のない胴を支えて足だけで歩いていたし——

「出会えッ」

「此処だっ」

後の六、七名は時々、絶叫をふり絞って味方へ急を告げた。だが如何せん三道へわかれている味方は皆、本陣とは相当な距離をおいて潜伏しているので、まだ極めて秒間に過ぎないここの異変を少しも知らず、また彼らの必死なさけびも、松風や大竹藪の戦ぎにまぎれて、むなしく宙へ消えてしまう。

保元、平治の昔から、平家の落人たちが近江越えにさまようた昔から、また親鸞や、叡山の大衆が都へ往来した昔から——何百年という間をこの辻に根を張って来た下り松は今、思いがけない人間の生血を土中に吸って喊呼して歓ぶのか、啾々と憂いて樹心が哭くのか、その巨幹を梢の先まで戦慄させ、煙のような霧風を呼ぶたびに、傘下の剣と人影へ、冷たい雫をばらばらと降らせた。

——一個の死者と三名の傷負いは、息一つする間にこの緊りつめた圏内から無視されてしまっ

たのだ。相互がハッと呼吸を改めたせつなには、武蔵は自分の背を下り松の幹へひたッと貼りつけていた。ふた抱えもある松の幹は絶好な背の守りかに見える。しかし武蔵はそこに長く膠着していることはかえって不利としているらしい。眼ざしは、けわしく刀のみねから七つの敵の顔をひきつけながら次の地の利を案じていた。

梢の声――雲の声――藪の声――草の声――あらゆるものが戦ぎ戦いている風の中に、その時、

(下り松へ行けっ！)

何者かが、遙かから、声をからして教えていた。

近くの小高い丘の上だ。手頃なところを選んで、そこの岩に腰をかけていた佐々木小次郎が、いつのまにか岩の上に突っ起ち、三道の藪や木蔭に沈んでいる吉岡勢へ向って、

(わういッ、おおういっ。――下り松だっ、下り松へ出会えっ！)

二

鉄砲の音だった、その時、人々は強い音波に耳を蓋された。

旁〻小次郎の声も、大勢のうちの誰かには聞えたはずである。

――素破っ。

動揺めいた大竹藪や、木蔭や岩蔭や、あらゆる物蔭から蚊の湧くように躍り出した三道の伏勢が、

「ヤ、ヤ？」

「既にっ」

「追分、追分」
「出し抜かれているぞッ」
道の三方から各〻、二十名以上の人が、地へ臨んで集まる奔流のように疾駆し出した。
武蔵は今――鉄砲の轟音と同時に、下り松の幹をくるっと自分の背でこするように動いた。弾は彼の顔から少し外れて樹の幹へぶすんと中たった。――そしてその前に槍と刀を交ぜて七本の切ッ先を揃えたまま対峙していた、七名も、ズズズズズと彼の動きに釣られて樹の幹を廻ってゆく。
――と。いきなり武蔵は、七人の左の端にいた男へ、青眼の剣を向けたままだッと駈け出した。その男はしかも吉岡十剣の中の一人だった小橋蔵人であったが、余りにも迅い恐ろしい彼の勢いに、
「――あ、あッ」
浮き声をあげて、思わず、片脚立ちに身を捻じ交わすと、武蔵は、空間を突きながら、そのままタタタタッ――と果てしなくなお駈け出して行く。
武蔵の背を見て、
「やるなッ」
と、追い縋り、飛びかかり、一斉に斬り浴びせようとした刹那、彼らの結合はばらばらになり、彼らの個体もでたらめに構えを失っていた。
武蔵の体が、分銅のように刎ね返って、真っ先に追って来た御池十郎左衛門の横を撲った。十郎左衛門は、直感に、

（彼の詭策）

と覚って、追い足にふくみを持っていたので、武蔵の刀は、彼の反り返った胸先を横へ掠めたに過ぎない。

けれど武蔵の刀は、世の常の術者が振り込むように、一振一刀――つまり斬り損じた刀の力がそれなり空間へ失われて、また二の太刀を持ち直して斬り込むというような――そんな速度ののろいものではなかったのである。

彼は、師というものに就かなかったために、その修行の上で、損もし苦しみもしたろうが、師を持たないために、益もあった。

それはなにかといえば、既成の流派の形に鋳込まれなかったことである。彼の剣法には従って形も約束も、また極意も何もない。六合の空間へ彼が描き出した想像力と実行力とが結びあって生れた無名無形の剣なのである。

例えばこの際――彼が下り松の決闘で御池十郎左衛門を斬った時の刀法などでもしかりで、十郎左衛門はさすがに吉岡の高足だけに、武蔵が逃げると見せて振り返りざま払った刀は、確かに交わし得ていたのである。――それが京流にせよ、神陰流にせよ、何流でもこれまでの既成剣法ならばそれで十分外し得たといっていい。

ところが、武蔵独自の剣はそうでなかった。彼の刀には必ず刎ね返りがある。右へ斬ってゆく刀は同時にすぐ左へ刎ね返ってくる原動力をふくんでいるのだった。ゆえに彼の剣が空間に描く光をよく気をつけてみると、必ず、その迅い光は松葉のように一根二針の筋をひいて走ってはすぐ返して敵を刎ね上げている。

わっ……とさけぶ間に、その燕尾の如く刎ね返った切ッ先に中たって、御池十郎左衛門の顔は、破れた鬼燈のように染まった。

三

京流吉岡の伝統を負って立つべき十剣のうちの、小橋蔵人がまず先に斃れてしまい、今また御池十郎左衛門ともあろうほどの者が、つづいて大地へ俯ッ伏した。

物の数には入れるわけにはゆかないが、彼らの命旗とする、名目人の源次郎少年を加えると、すでにここの半数は、武蔵の刀に中たって序戦の贄に曝され、惨たる血をここ一面に撒いてしまった。

——その時、十郎左衛門を斬った切ッ先の余勢をもって、彼らの乱れた虚につけ入ってゆけば、武蔵はさらに、幾つかの敵首をつかみ、ここでの大勢を決することができたにちがいない。

だが彼はなに思ったか、驀しぐらに三本道の一方へ駈けた。

逃げるかと思えば、翻っているし、向って来たなと構えを持ち直せば、地へ腹を摺ってゆく燕のように、武蔵の影はもう忽ち眼前にない。

「くそッ」

残った半数は歯がみをし、

「武蔵ッ」

「醜いぞッ」

「卑怯ッ」

「勝負はまだだぞ」
と吼え——そして追った。
彼らの眼孔は、皆顔から飛び出しそうに光っていた。夥しい血しおを見、血のにおいに吹かれて、彼らは酒蔵へ入ったように血に酔っていた。血の中に立つと、勇者は常よりも冷静になるし、怯者はその反対になる。——武蔵の背を見て追いかけてゆく躍起な血相というものは、さながら血の池の鬼だった。
「行ったぞッ」
「逃がすなッ！」
そんな叫びを聞き捨てながら、武蔵は、最初の戦端を切った丁字形の辻を捨て、三道のうちでいちばん道幅のせまい修学院道へ向って駈け込んで行ったのである。
——当然そこからは今、下り松の変を知って、慌てふためいて駈けつけて来た吉岡勢の一団がある。ものの二十間とも駈けないうちに、武蔵はその先頭とぶつかって、後から追って来るものとの間に挟まってしまわなければならないはず。
二つの勢いは、その藪道でぶつかった。味方は味方の雄々しい姿を見ただけだった。
「や。むむ武蔵はッ」
「来ないッ」
「いや、そんなはずはないが」
「でも——」
押問答をしている間に、

「ここだッ」
武蔵がいった。
路傍の岩の蔭からおどり出て、武蔵は、彼らの列が通り越して来た道の中央に立っていた。
――来いッ。といわんばかりな第二の準備が彼のからだにできていた。愕然と、それへ動きかける吉岡勢は、道幅の狭さに出鼻から全体の力に集中を欠いてしまった。
人間の腕の長さと刀の長さとを加えて、体を中心に円を描くとなると、その狭い道幅では、二人の味方が並ぶのさえ危険である。のみならず、武蔵の前に立った者は、ダダダダッと踵を鳴らして後へ退がって来たし、後方の者は、争って前へ押して来るため、大勢という力の自体が、咄嗟に混乱を起して、味方は味方の足手纏いとなるばかりだった。

四

――だが、衆の力というものはもとよりそう脆いものではない。
一度は武蔵の敏速と、彼の剝き出しなたましいの圧倒に、
「ひッ、退くなっ」
腰も踵も、浮いて見えたが、
「多寡が唯一人」
と、衆が衆の力を自覚し、その強味を負って、先頭の二、三名が、
「うぬっ」
「おれが仕止めるっ」

身を挺して行くと、後ろの者もそれを見てはいなかった。わっという喊声だけでも、一個の武蔵よりは遥かに強い。

怒濤へ向って泳ごうとするように、武蔵は闘いつつ後へ後へと押されるのみで、敵を斬るより身を防ぐに急だった。

手許へのめり込んで来て、斬れば斬れる敵すら措いてジリジリ退って行く。

この場合、二人や三人の敵を斬っても、相手は総体の力からいえば、なんの痛痒も感じないばかりでなく、間髪を過れば、槍が伸びてくるからである。――太刀の切ッ先には、およそ「間」を取っていることができるが、大勢の中にいて、穂先を縮めている槍には「間」を察している遑がない。

吉岡方は、勢いに乗った。

タタタタッ――と武蔵の踵は後退がりに引くばかりなので、ここぞと飽くまで押したのである。武蔵の顔はすでに蒼白なのだ。どう見ても呼吸をしている顔ではない。木の根につまずくか、一すじの縄でもその足にからめばもんどり打ってしまうことは確かだと思う。しかし、死相をおびている人間の手許へはいって、死出の道づれになるのは誰も嫌だった。そのためにわッわッと刀や槍で押してゆきながらも、無数のそれが皆、武蔵の胸、小手、膝などへわずか二、三寸ずつ切ッ先の寸伸びが足りなかった。

「あッ――?」

不意にまた、彼らは眼前の武蔵を見失って、そこの狭い道幅とたった一人の相手には、余剰すぎる大勢の力を持て余して、自ら揉み返した。

――といってもべつに武蔵が、足に風を起して駈けたわけでも、樹の上に跳び上がったわけでもない。ただ、彼がたった一跳び、その道から藪の中へ身を反らしたに過ぎないのである。

土のやわらかい孟宗竹の密林だった。青い縞目を縫って飛ぶ鳥影のような武蔵の姿に、チカッと、金色の光が刎ねた。朝の太陽がいつのまにか叡山連峰の山間から、つと真っ紅な櫛形の角をあらわしているのだった。

「待てッ。武蔵」

「醜し！」

「背を見せる法やあるっ」

思い思いに、大勢は竹と竹のあいだを駈けた。武蔵はもう藪の外れの小川を跳びこえている。そして一丈ほどな崖を跳び上がり、二つ三つそこで呼吸をやすめている様子。

崖の上はゆるい傾斜を持っている山裾の原だった。彼は一望に夜明けを見た。下り松の辻はすぐ下であり、その辻には、吉岡方の逸れた人数が四、五十名もいて、彼が今、小高いところに立った姿を見つけると、一斉にわッとここへ寄せて来た。

今の人数の三倍に殖えたものが、真っ黒にこの山裾の原に集まった。吉岡方の全勢力である。一人一人手を繋げば、大きな剣の環をもって、この原を包んでしまうこともできるほどな人数なのである。一剣、燦々と、針のように小さく、じっと青眼にすえたまま、武蔵は遠く立って待っていた。

五

どこかで駄馬が嘶いた。里にも山にも、もう往来はあるはずの時刻。

ことにこの辺りは、朝の早い法師たちが、叡山から下りて来るし、叡山へ上って行くし、夜さえ明ければ、木履を穿いて、肩をいからして歩く僧侶の姿を見ない日はない。

そういう僧侶らしい者だの、木樵だの、百姓だのが、

「斬合だっ」

「どこで」

「どこで」

人が騒ぎ出すと、里の鶏や馬までが騒ぎ立てた。

八大神社の上にも一群かたまって見ていた。絶えず流れている霧は、山とともに、その見物人の影を、白く塗りつぶしてしまったかと思うと、またすぐ視野を展いて見せた。

――その一瞬の間に武蔵のすがたは見る影もなく変っていた。鬢止めに締めている額の布は、汗と血で、桃色に滲んでいた。髪は崩れてその血と汗に貼りついて見える。ために、彼の形相は、たださえ恐ろしくなっているところへ、魔王の隈を描いたように、世にもあるまじき物凄さに見えるのだった。

「………」

さすがに、呼吸も全身でつき始めてきた。黒革胴のような肋骨が大きな波を打つ。袴はやぶれ、膝の関節を一太刀斬られていた。その傷口から柘榴の胚子みたいな白いものが見えている。破れた肉の下から骨が出ているのである。

小手にも一箇所かすり傷を負っていた。さしたる傷ではないらしいが、滴る血しおが胸から小

刀の帯前まで朱に染めているので、さながら満身が纐纈染になってしまい、墓場の下から起ち上がった人間でもあるかの如く、見る者の眼を掩わしめた。

——いや、それよりも酸鼻なのは、彼の刀に中たって、処々に唸いたり、這ったりしている傷負いや死人だ。その山裾の原へ彼が駈け上がり、七十名もの人間が、どっと彼へ襲撃して行ったと思う途端にもう四、五名が斃れていた。

吉岡方の傷負いが斃れている位置は、決して一所にまとまっていなかった。彼方に一名、此方に一名、距たっている。それを見ても武蔵の位置が絶えず動いて、この広い原をいっぱいに足場を取り、大勢の敵をして、その力を集結させる遑のないように闘っていることがわかる。

——といっても武蔵の行動には、いつでも一定の原則があった。それは、敵の隊伍の横へ当たらないことだった。努めて敵の展開してくる横隊の正面を避け、その群の角へ角へと廻って、電瞬に薙ぎつける——末端の角を斬る——

だから、武蔵の位置からは、敵はいつでも、先刻の狭い道を押して来たように、縦隊の端から見ているわけだった。同時に、七十人でも百人でも、彼の戦法からすれば、わずか末端の二、三名だけが当面の対手であるにすぎない。

しかし、いかに飛鳥の敏速があっても、彼にも稀々破綻が生じるし、敵も彼のためにそう乗ぜられてばかりはいない。どっと、無数が無数の働きをして、同時に前後から喚きかかる秒間も起る。

その時が、武蔵の危機だった。

また、武蔵の全能が、無我無想のうちに、高度な熱と力を発する時だった。

彼の手にはいつか、二つの剣が持たれていた。右手の大刀は血ぬられて柄糸も拳も血漿で鮮紅に染まり、左の小剣はまだ切ッ先がすこし脂に曇っているだけで、まだ幾人かの人間の骨に耐え得る光をしていた。

だが武蔵は、二刀を持って敵と闘いながらも、まだ二刀を使っているという意識などは全然ないのである。

六

浪と燕のようなものだ。

浪は燕を搏ち、燕は浪を蹴って、すぐ他へ翻ってしまう。

一瞬でも、静止はないが、双方の刃の下に仆れて、ばたッと大地に足掻く人間のすがたが眸に映るたびに吉岡方の大勢が、

「——あッ」

なんとはなく息をひいたり、

「——ウウム」

と、唸きを合せたり、気が眩んでくるような精神を醒まそうとするように、

「…………」

ず、ず、ずーとただ土に草鞋をずり合う音だけをさせて、武蔵を包囲しようとして来る。

——と、武蔵は。

ほっと、その間に呼吸をつく。

左剣は、前へかまえて、いつも敵の眼につけ、右手の大刀は横へひらいて、肩から腕――切ッ先まで、緩やかな水平に持ち――これは敵の眼の外にあそばせておくというような形。

大小二剣の尺と、両腕をいっぱいにひろげた尺とを合わせると、彼の爛々たる双眸を中心として、かなり広い幅になる。

敵が、正面を嫌って、

（――右）

と窺ってくれば、すぐ体ぐるみ右へ寄って、その敵を牽制し、

（左！）

と、直感すれば、ぱっと左剣が伸びて、その者を、二つの剣の中へかかえてしまう。

武蔵がそうして前へ突き向けている短い左剣には、磁石のような魔力があった。その先へかかった敵は、ちょうどモチ竿にとまった蜻蛉のように、退く間も交わす間もなかった。――あっというううちに長い右剣が唸ってきて、一颯のもとに、一個の人間を、びゅッと、血しおの花火にしてしまった。後に、ずっと後年にである。武蔵のこういう戦法を「二刀流の多敵の構え」と人が称んだ。しかし――今この場合の武蔵は、まったく無自覚でしていることだった。無我無思のうちに全能の人間力が、より以上の必要に迫られた結果、常には習慣で忘れていた左の手の能力を、われともなく、極度にまで有用に働かすことを、必然に呼びおこされていたに過ぎない。

けれど、剣法家としての彼は、まだ至って幼稚だったものといってよい。何流だの、何の形だのと、理論づけたり、体系づけている間などが今日まであろうわけはない。彼の運命からでもあったが、彼が信じて疑わずに通って来た道は、なんでも実践だった。事実に当って知ることだっ

た。——理論はそれから後、寝ながらでも考えられるとして来たのである。
それとはあべこべに、吉岡方の十剣の人々を始め、末輩のちょこちょこしている人間まで、皆、京八流の理論は頭につめこんでいて理論だけでは、一家の風を備えたものも少なくない。けれど、恃む師もなく、山野の危難と、生死の巷を修行の床として、おぼろげながらも、剣の何物かを知らんとし、道に学ぶためには、いつでも死身となる稽古をして来た武蔵とは、根本からその心がまえも鍛えも違っている。——そういう吉岡方の人々の常識から見ると、もう呼吸もあらく、顔色もなく、満身朱になりながらも、まだ、二本の刀を持ち、触れれば何物も一颯の血けむりとしてしまいそうな、武蔵の阿修羅そのままな姿が、なにか、不可思議なものに見えてきた。気は晦み、眼は汗にかすんで、味方の血に戸惑うてくるにつれ、武蔵の姿が、いよいよ、捉え難くなり、しまいには、なにか真っ赤な妖怪と闘っているような疲労と焦りが全体に見えた。

七

——逃げろうっ。
——一人の方っ……
——逃げろ、逃げちまえっ。
山がいう。
里の樹々がいう。
また、白い雲がいう。
足を止めた往来の者や、附近の百姓たちが、遙かに、重囲の中の武蔵を見て、その危なさに気

を揉むのあまり、どこからともなく、われを忘れてあげた声であった。
たとえ地軸が裂け、天を覆す雷があっても、武蔵の耳に、そんな声の届くわけもない。
彼の身は、彼の心力だけにうごいている。眼に見える彼の体は、仮の相でしかなくなっている。
おそろしい心力が、身をもたましいをも、まったく焼き尽くしていた。武蔵は今や、肉体ではなくて、燃え熾っている生命の炎だった。
――と、突然！
わあっッと、三十六峰がいちどに谺をあげた。山崩れのような喊声なのだ。それは遠く離れて見ていた人間も、武蔵の前にひしめいていた吉岡勢も、同様に大地から跳び上がって、その体の弾みから思わず出した声だった。
――た、た、た、たッ。
武蔵が、不意に、山裾から里へ向って、野猪のように駈け出したからである。
もちろん。
七十名からの吉岡勢は、それに手を束ねていたわけではない。
「それッ！」
真っ黒になって、武蔵へ追いすがり、追いつきざま、五、六名が、
「――かっッ」
「今になって！」
組まんとするばかり打つかって行くと、武蔵は身を伏せ、

「ちいイッ」
右刀で、彼らの脛を薙いだ。そして敵の一名が、
「こんな奴ッ」
上から撲り落してきた槍を、カーン、宙へ刎ねとばすと共に、乱れ髪の一すじ一すじまでが、皆、敵へ向って闘って行くかのように逆立って、
「――ちッ、ちッ、ちいっ」
右剣左剣、右剣左剣――と交〻に火となり水と走って、食いしばっている武蔵の歯まで、口を飛び出して噛みついて来そうに見えた。
――わあっ、逃げたっ。
遠い所の動揺めきは、吉岡方のうろたえを同時に嗤ったように響いた。武蔵の影は、とたんにもう原の西側の端れから青い麦畑にとび降りていたのである。
すぐ後から、
「返せッ」
「待てッ」
どうっと、続いて人数の一部がそこを降りたと思うと、そこでまた、思わず耳を掩うような絶鳴が二声ほど走った。崖の下にへばりついていた武蔵が、自分に倣って向う見ずに飛んだ者を、下で待ち伏せていたように斬ったのである。
――びゅっ。
――ぶすんっ。

麦畑の真ん中へ、二本の槍が飛んできて、土へ深く突っ立った。吉岡方の者が、上から投げつけた槍である。しかし、武蔵の姿は泥の塊り（かたまり）のように山畑を駈けて跳び、またたく間に彼らとは、約半町ほどな距離をつくってしまった。

「里の方だ」

「街道の方へ逃げた」

という声が頻りと多かったが、武蔵は山畑の畝（うね）を辿って、その人々の手分けして駈けまわるさまを時々、山の方から振返って見ていた。

やっと、その頃。

朝陽（あさひ）はいつもの朝らしく草の根にまで映（さ）してきた。

今や、武蔵は吉岡一門の敵である。清十郎の弟、伝七郎が武蔵に叩きつけた果し状！　雪の舞い、血の散る蓮華王院……。つづいて吉岡一門をあげての第二の遺恨試合。一乗寺下り松に吉岡門下の精鋭七十余人がどっと一人の武蔵を襲う……。「一回一回原稿の出来上るまでは、主人の気迫が反映して、私どもまで緊張につつまれる毎日」だった、と夫人当時の著者を回想するが、「風の巻」のした緊迫感は、行間にあふれている。

定価480円

ISBN4-06-142051-8 C0193 ¥480E (1)